

福翁自伝

福翁自伝

福澤諭吉

青空文庫

慶應義塾の社中にては、西洋の学者に往々自から伝記を記すの例あるを以て、兼てより福澤先生自伝の著述を希望して、親しく之を勧めたるものありしかども、先生の平生甚だ多忙にして執筆の閑を得ずその儘に経過したりしに、一昨年の秋、或る外国人の需に応じて維新前後の実歴談を述べたる折、風ふと思ひ立ち、幼時より老後に至る経歴の概略を速記者に口授して筆記せしめ、自から校正を加え、福翁自伝と題して、昨年七月より本年二月までの時事新報に掲載したり。本来この筆記は單に記憶に存したる事實を思い出するまゝに語りしものなれば、恰も一場の談話にして、固より事の詳細を悉くしたるに非ず。左れば先生の考かんがえにては、新

聞紙上に掲載を終りたる後、更らに自から筆を執てその遺漏を補い、又後人の参考の為めにとて、幕政の当時親しく見聞したる事実に拠り、我国開国の次第より幕末外交の始末を記述して別に一編と為し、自伝の後に付するの計画にして、既にその腹案も成りたりしに、昨年九月中、遽に大患に罹りてその事を果すを得ず。誠に遺憾なれども、今後先生の病いよく全癒の上は、兼ての腹案を筆記せしめて世に公にし、以て今日の遺憾を償うことあるべし。

明治三十二年六月

時事新報社

石河幹明 記

幼少の時

福澤諭吉の父は豊前中津奥平藩の士族福澤百助、母は同藩士族、橋本浜右衛門の長女、名を於順と申し、父の身分はヤツト藩主に定式の謁見が出来ると云うのですから足軽よりは数等宜しいけれども士族中の下級、今日で云えば先ず判任官の家でしよう。藩で云う元締役を勤めて大阪にある中津藩の倉屋敷に長く勤番して居ました。夫れゆえ家内残らず大阪に引越しして居て、私共は皆大阪で生れたのです。兄弟五人、総領の兄の次に女の子が三人、私は末子。私の生れたのは天保五年十二

月十二日、父四十三歳、母三十一歳の時の誕生です。ソレカラ天保七年六月、父が不幸にして病死。跡に遺るは母一人に子供五人、兄は十一歳、私は数え年で三つ。斯くなれば大阪にも居られず、兄弟残らず母に連れられて藩地の中津に帰りました。

兄弟五人中津の風に合わず扱中津に歸てから私の覚えて居ることを申せば、私共の兄弟五人はドウシテも中津人と一所に混和することが出来ない、その出来ないと云うのは深い由縁も何もないが、従兄弟が沢山ある、父方の従兄弟もあれば母方の従兄弟もある。マア何十人と云う従兄弟がある。又近所の小供も幾許もある、あるけれどもその者等とゴチャクチヤになることは出来ぬ。第一言葉が可笑しい。私の兄弟は皆大阪言葉で、中津の人があ

「そうじやちこ」と云う所を、私共は「そうでおます」なんと云うような訳けで、お互に可笑しいから先ず話が少ない。夫れから又母は素もと中津生われであるが、長く大阪に居たから大阪の風ふうに慣それて、小供の髪の塩梅式あんばいしき、着物の塩梅式、一切大阪風の着物より外ほかにない。有合ありあいの着物を着せるから自然中津の風とは違わなければならぬ。着物が違たがい言葉が違うと云う外には何も原因はないが、子供の事だから何だか人ひとなか中に出るのを気恥かしいようと思おもつて、自然、内に引込んで兄弟同士遊んで居ると云うような風でした。

儒教主義の教育夫れから最もう一つ之に加えると、私の父は学者であつた。普あたりまえ通の漢学者であつて、大阪の藩邸に在勤してその

仕事は何かというと、大阪の金持、加島屋、鴻ノ池というような者に交際して藩債の事を司^{つかさ}どる役であるが、元来父はコンナ事が不平で堪^{たま}らない。金銭なんぞ取扱うよりも読書一偏の学者になつて居たいといふ考^{かんがえ}であるに、存じ掛もなく算盤^{そろばん}を執^{とつ}て金の数を数えなければならぬとか、藩^{はんしやく}借^{けが}延期の談判をしなければならぬとか云^いう仕事で、今の洋学者とは大に違つて、昔の学者は錢を見るも汚れる^{けが}と云うて居た純粹の学者が、純粹の俗事に当ると云う訳^{わけ}であるから、不平も無理はない。ダカラ子供を育てるのも全く宗教主義で育てたものであろうと思うその一例を申せば、斯^こう云うことがある。私は勿論^{もちろん}幼少だから手習^{てならい}どころの話でないが、最^もう十歳ばかりになる兄と七、八歳になる姉などが手習

をするには、倉屋敷くらやしきの中に手習の師匠があつて、其家そ_こには町ち_{ょう}家の小供も来る。其處そ_こでイロハニホヘトを教えるのは宜しいが、大阪の事だから九々の声を教える。二二が四、二三が六。これは当然あたりまえの話であるが、その事を父が聞いて、怪しからぬ事を教える。幼少の小供に勘定の事を知らせると云うのは以いての外よ_ろだ。斯こう云う処に小供は遺や_つて置かれぬ。何を教えるか知れぬ。早速取返せと云いつて取返した事があると云うことは、後に母に聞きました。何でも大変喧やかましい人物であつたことは推察のちが出来る。その書遺こしたものなどを見れば眞実正しゆうみよう銘の漢儒おくろうで、殊に堀河ほりかわの伊藤東涯いとうとうがい先生が大信心だいしんじんで、誠意誠心、屋漏おくろうに愧はじずという事許りばか心掛こころがけたものと思われるから、その遺風おのづは自から私の

家には存して居なければならぬ。一母五子、他人を交えず世間の附合^{つきあい}は少く、明ても暮れても唯母の話を聞く許り、父は死んでも生きてるような者です。ソコデ中津に居て、言葉が違着物が違うと同時に、私共の兄弟は自然に一団体を成して、言わず語らずの間に高尚に構え、中津人は俗物であると思って、骨肉の従兄弟に對してさえ、心の中には何となく之を目下に見下して居て、夫等の者のすることは一切咎^{とがめ}もせぬ、多勢に無勢、咎^{とがめだて}立^{あき}をしようとも及ぶ話でないと諦^{あき}らめて居ながら、心の底には丸で歯牙^{しが}に掛けずに、云わば人を馬鹿にして居たようなものです。今でも覚えて居るが、私が少年の時から家に居て、能く饒舌^{しゃべ}りもし、飛び廻^{まわ}り刎^はね廻^{まわ}りして、至極活潑^{じょくぱつ}にてありながら、木に登る

ことが不得手で、水を泳ぐことが皆無出来ぬと云うのも、兎角同藩中の子弟と打解けて遊ぶことが出来ずに孤立した所為でしよう。厳ならずして家風正し今申す通り私共の兄弟は、幼少のとき中津の人と言語風俗を殊にして、他人の知らぬ処に随分淋しい思いをしましたが、その淋しい間にも家風は至極正しい。嚴重な父があるでもないが、母子睦じく暮して兄弟喧嘩など唯の一度もしたことがない。のみか、仮初にも俗な卑陋な事はしられないものだと育てられて、別段に教える者もない、母も決して喧しい六かしい人でないのに、自然に爾うなつたのは、矢張り父の遺風と母の感化力でしよう。その事実に現われたことを申せば、鳴物など的一条で、三味線とか何とか云うものを、聞こうとも思わなければ

れば何とも思わぬ。斯様なものは全体私なんぞの聞くべきものでない、矧や玩ぶべき者でないと云う考を持て居るから、遂ぞ芝居見物など念頭に浮んだこともない。例えば、夏になると中津に芝居がある。祭の時には七日も芝居を興行して、田舎役者が芸をするその時には、藩から布令が出る。芝居は何日の間あるが、藩士たるものは決して立寄ることは相成らぬ、住吉の社の石垣より以外に行くことならぬと云うその布令の文面は、甚だ嚴重なようにあるが、唯一片の御布令だけの事であるから、俗士族は脇差を一本挿して頬冠りをして颯々と芝居の矢来を破て這入る。若しそれを咎めれば却て叱り飛ばすと云うから、誰も怖がつて咎める者はない。町の者は金を払て行くに、士族は忍姿で

却て威張いばつて只這ただほいつ入いりて觀みる。然るに中以下俗士族ぞくしそくの多い中で、その芝居しばゐに行かぬのは凡およそ私のところ一軒位ぐらゐでしよう。決して行かない。此處ここから先さきは行くことはならぬと云いえば、一足ひとあしでも行かぬ、どんな事ことがあつても。私の母めのめは女めのながらも遂ついぞ一ひと口くちでも芝居しばゐの事を子供こどもに云いわづず、兄おへも亦また行いこうと云いわづず、家いえ内うち中なか一寸すこでも話はながない。夏なつ、暑うつい時の事ことであるから涼すずみには行く。併しかしその近くで芝居しばゐをして居ゐるからと云いて見みようともしない、どんな芝居しばゐを遣やつて居ゐるとも噂うわにもしない、平氣ひんきで居ゐると云いうような家風でした。

成長せいりゅうの上うへ、坊主ぼうぶにする前ぜん申しんす通り、亡父ぼうふは俗吏ぞくりを勤めるのが不本意ふほんぎであつたに違たがない。左されば中津なかつを蹴飛けとばして外ほかに出でれば宜いい。

所が決してソンナ氣はなかつた様子だ。如何なる事にも不平を呑の
んで、チャント 小 祿に安んじて居たのは、時勢の為めに進退
不自由なりし故でしよう。私は今でも独り氣の毒で殘念に思いま
す。例えは父の生前に斯う云う事がある。今から推察すれば父の
胸 算に、福澤の家は総領に相続させる積りで宜しい、所が子
供の五人目に私が生れた、その生れた時は大きな療せた骨 太な
子で、産婆の申すに、この子は乳さえ沢山呑ませれば必ず見事
に育つと云うのを聞いて、父が大層喜んで、是れは好い子だ、こ
の子が段々成長して十か十一になれば寺に遣て坊主にすると、毎
度母に語つたそうです。その事を母が又私に話して、アノ時阿父
さんは何故坊主にすると仰つしやつたか合点が行かぬが、今御

存命なればお前は寺の坊様になつてゐる筈じやと、何かの話の端には母が爾う申して居ましたが、私が成年の後その父の言葉を推察するに、中津は封建制度でチャント物を箱の中に詰めたように秩序が立て居て、何百年経ても一寸とも動かぬと云う有様、家老の家に生れた者は家老になり、足軽の家に生れた者は足軽になり、先祖代々、家老は家老、足軽は足軽、その間に挟まつて居る者も同様、何年経ても一寸とも変化と云うものがない。ソコデ私の父の身になつて考えて見れば、到底どんな事をしたつて名を成すことは出来ない、世間を見れば茲に坊主と云うものが一つある、何でもない魚屋の息子が大僧正になつたと云うような者がいくら幾人もある話、それゆえに父が私を坊主にすると云たのは、その

意味であろうと推察したことは間違いなかろう。

門閥制度は親の敵如斯なことを思えば、父の生涯、四十五年のその間、封建制度に束縛せられて何事も出来ず、空しく不平を呑んで世を去りたること遺憾なれ。又初生児の行末を謀り、之を坊主にしても名を成さしめんとまでに決心したるその心中の苦しさ、その愛情の深さ、私は毎度この事を思出し、封建の門閥制度を憤ると共に、亡父の心事を察してひとり泣くことがあります。私のために門閥制度は親の敵で御座る。

年十四、五歳にして始めて読書に志す私は坊主にならなかつた。

坊主にならずに家に居たのであるから学問をすべき筈である。所が誰も世話の為人がない。私の兄だからと云て兄弟の長少僅か十

一しか違わぬので、その間は皆女の子、母も亦たつた一人で、下女下男を置くと云うことの出来る家ではなし、母が一人で飯を焚いたりお菜を拵えたりして五人の小供の世話をしなければならぬから、中々教育の世話などは存じ掛けもない。云わばヤリ放しである。藩の風で幼少の時から論語を続むとか大学を読む位の事は遣らぬことはないけれども、奨励する者とては一人もない。殊に誰だつて本を読むことの好きな子供はない。私一人本が嫌いと云うこともなかろう、天下の小供みな嫌いだろう。私は甚だ嫌いであつたから休でばかり居て何もしない。手習もしなければ本も読まない。根つから何にもせずに居た所が、十四か十五になつて見ると、近処に知て居る者は皆な本を読んで居るのに、自分ひとり読ま

ぬと云うのは外がいぶん聞おもつが悪いとか恥かしいとか思おもつたのでしよう。夫そ

れから自分で本当に読む気になつて、田舎の塾へ行ゆきはじ始めました。

どうも十四、五になつて始めて学ぶのだから甚だきまりが悪い。

外ほかの者は詩しきよう経しょきょうを読むの書しょきょう経しょきょうを読むのと云うのに、私は孟子もうしの素読うぎゅうをすると云う次第である。所が茲ここに奇きな事は、その塾で蒙求かいどく

とか孟子とか論語とかの会かい読講義じょぎをすると云うことになると、私は天稟てんりん、少し文才ぶさいがあつたのか知らん、能よく其の意味そを解げして、朝の素読に教えて呉くれれた人と、昼からになつて蒙求などの会読うぎゅうをすれば、必ず私がその先生に勝つ。先生は文字を読むばかりでその意味は受受けとり取とりの悪い書生だから、之これを相手に会読の勝敗なら訳わけはない。

左伝通読十一偏その中、塾も二度か三度か更えた事があるが、最も多く漢書を習たのは、白石と云う先生である。其処に四、五年ばかり通学して漢書を学び、その意味を解することは何の苦労もなく存外早く上達しました。白石の塾に居て漢書は如何なるものを読だと申すと、經書を専らにして論語、孟子は勿論、すべて經義の研究を勉め、殊に先生が好きと見えて詩經に書經と云うものは本当に講義をして貰て善く読みました。ソレカラ蒙求、世説、左伝、戦国策、老子、莊子と云うようなものも能く講義を聞き、その先きは私獨りの勉強、歴史は史記を始め前後漢書、晋書、五代史、元明史略と云うようなものも読み、殊に私は左伝が得意で、大概の書生は左伝十五巻の内三、四巻で仕舞う

のを、私は全部通読、凡そ十一度^たび読返して、面白い処は暗記して居た。夫れで一ト通り漢学者の前座ぐらいになつて居たが、一体の学流は龜井風^{かめいぶう}で、私の先生は龜井が大信心^{だいしんじん}で、余り詩を作ることなどは教えずに寧ろ冷笑して居た。広瀬淡窓^{ひろせたんそう}などの事は、彼奴は発句師^{ほつくし}、俳諧師で、詩の題さえ出来ない、書くことになると漢文が書けぬ、何でもない奴だと云て居られました。先生が爾^そう云えば門弟^{もんてい}子も亦爾^{また}う云う気になるのが不思議だ。淡窓ばかりでない、頼山陽^{らいさんよう}なども甚だ信じない、誠に目下^{めした}に見下^{みくだ}して居て、「何だ粗末な文章、山陽^{さんよう}などの書いたものが文章と云われるなら誰でも文章の出来ぬ者はあるまい。仮令^{たと}い舌足らずで吃了^{どもつ}所が意味は通ずると云うようなものだなんて 大造^{たいそう}な剣幕で、先

生から爾うそおしえこ込まれたから、私共も山陽外史の事をば軽く見て居ました。白石先生ばかりでない。私の父が又その通りで、父が大阪に居るとき山陽先生は京都に居り、是非交際しなければならぬ筈であるに一寸とも付合わぬ。野田笛浦と云う人が父の親友で、野田先生はどんな人か知らない、けれども山陽を疎外して笛浦を親しむと云えば、笛浦先生は浮氣でない学者と云うような意味でしたか、筑前の亀井先生なども朱子学を取らずに經義に一説を立てたと云うから、その流りゆうを汲む人々は何だか山陽流を面白く思わぬのでしよう。

手端器用なり以上は学問の話しだすが、尚お此の外に申せば、私は旧藩士族の小供に較べて見ると手の先きの器用な奴やつで、物の工

夫をするような事が得意でした。例えば井戸に物が墜ちたと云え
 ば、如何云う塩梅にして之を揚げるとか、簾笥の錠が明かぬと
 云えば、釘の尖などを色々に上げて遂に見事に之を明けるとか云
 う工風をして面白がつて居る。又た障子を張ることも器用で、自
 家の障子は勿論、親類へ雇われて張りに行くこともある。兎に
 角に何をするにも手先が器用でマメだから、自分にも面白かつた
 のでしよう。ソレカラ段々年を取るに従て仕事も多くなつて、固
 より貧士族のことであるから、自分で色々工風して、下駄の鼻
 緒もたてれば雪駄の剥れたのも縫うと云うことは私の引受けで、
 自分のばかりでない、母のものも兄弟のものも繕うて遣る。或は
 置針を買って来て畳の表を附け替え、又或は竹を割つて桶の籠

を入れるような事から、その外ほか、戸の破れ屋根の漏もりを繕うまで
 当あたりまえ前まへの仕事で、皆私が一人でして居ました。ソレカラ進んで
 本当の内職を始めて、下駄を拵こしらえたこともあれば、刀剣の細工を
 したこともある。刀の身みを磨とぐことは知らぬが、鞘さやを塗り柄つかを巻
 き、その他、金物かなものの細工は田舎ながらドウヤラコウヤラ形だけ
 は出来る。今でも私の塗ぬつた虫喰むしきいぬ塗りの脇差わきざしの鞘が宅に一本あ
 るが、随分不器用なものです。都てコンナ事は近きんじよ処に内職をす
 る士族があつてその人に習いました。

鋸のこ鑪くわに驚く金物かなもの細工をするに鑪くわは第一の道具で、是れも手製に
 作つて、その製作には随分苦心して居た所が、その後のち、年経としへて私
 が江戸に来て先まへず大に驚いたことがある、と申すは只ただの鑪くわは鋼鉄はがね

を斯うして斯う遣れば私の手にもヲシく出来るが、鋸鑪ばかりは六かしい。ソコデ江戸に這入たとき、今思えば芝の田町、処も覚えて居る、江戸に這入て往来の右側の家で、小僧が鋸の鑪の目を叩て居る。皮を鑪の下に敷いて鑿で刻んで颯々と出来る様子だから、私は立留て之を見て、心の中で扱々大都会なる哉、途方もない事が出来るもの哉、自分等は夢にも思わぬ、鋸の鑪を拵えようと云うことは全く考えたこともない、然るに小供がアノ通り遣て居るとは、途方もない工芸の進んだ場所だと思って、江戸に這入たその日に感心したことがあると云うような訳けで、少年の時から読書の外は俗な事ばかりして俗な事ばかり考えて居て、少年を取ても兎角手先きの細工事が面白くて、動もすれば鉋だの

鑿のみだの買あつて、何か作つて見よう、繕うて見ようと思うその物は皆な俗な物ばかり、所謂美術と云う思想は少しもない。平生万事至極殺風景で、衣服住居などに一切頓着せず、如何下着かソレモ構わぬ。況して流行の縞模様など考えて見たこともない程の不風流なれども、何か私に得意があるかと云えば、刀と剣の揃えとなれば、是れは善く出来たとか、小道具の作柄釣り合が如何とか云う考はある。是れは田舎ながら手に少し覚えのある芸から自然に養うた意匠でしょう。

青天白日に徳利夫れから私が世間に無頓着と云うことは少年から持て生れた性質、周囲の事情に一寸とも感じない。藩の小士族

などは酒、油、醤油などを買うときは、自分自から町に使に行かなければならぬ。所がその頃の士族一般の風として、頬冠をして宵出掛けに行く。私は頬冠は大嫌いだ。生れてからしたことはない。物を買うに何だ、銭を遣て買うに少しも構うことはないと云う気で、顔も頭も丸出しで、士族だから大小は挾ますが、徳利を提て、夜は扱置き白昼公然、町の店に行く。銭は家の銭だ、盗んだ銭じやないぞと云うような氣位で、却て藩中者の頬冠をして見栄をするのを可笑しく思たのは少年の血氣、自分ひとり自惚て居たのでしよう。ソレカラ又家に客を招く時に、大根や牛蒡を煮て喫せると云うことに就て、必要があるから母の指図に従て働て居た。所で私は客などがウヂヤ／＼酒を呑むのは大嫌い。俗な奴等だ、

呑むなら早く呑で帰て仕舞えば宜いと思うのに、中々帰らぬ。家は狭くて居處もない。仕方ないから客の呑でる間は、私は押入の中に這入て寝て居る。何時でも客をする時には、客の来る迄は働く、けれども夕方になると、自分も酒が好だから颯々と酒を呑で飯を喰て押入に這入て仕舞い、客が帰た跡で押入から出て、何時も寝る処に寝直すのが常例でした。

夫れから私の兄は年を取て居て色々の朋友がある。時勢論などをして居たのを聞たこともある、けれども私は夫れに就て喙を容れるような地位でない。只追使れる許り。その時、中津の人気は如何かと云えれば、学者は拳て水戸の御隠居様、即ち烈公の事と、越前の春嶽様の話が多い。学者は水戸の老公と云

い、俗では水戸の御隠居様と云う。御三家の事だから譜代大名の家来は大変に崇めて、仮初にも隠居などゝ呼棄にする者は一
人もない。水戸の御隠居様、水戸の老公と尊称して、天下一の人
物のように話して居たから、私も左様思て居ました。ソレカラ江
川太郎左衛門も幕府の旗本だから、江川様と蔭でも屹と様付
にして、之も中々評判が高い。或時兄などの話に、江川太郎左
衛門と云う人は近世の英雄で、寒中袷一枚着て居ると云うような
話をして居るのを、私が側から一寸と聞いて、何にその位の事は誰
でも出来ると云うような気になつて、ソレカラ私は誰にも相談せ
ずに、毎晩搔巻一枚着て敷蒲団も敷かず畳の上に寝ること
を始めた。スルト母は之を見て、何の真似か、ソンナ事をすると

風邪を引くと云いつて、頻りに止めるけれども、トウく聴かずとに一
冬とふゆ通やつしたことがあるが、是れも十五、六歳の頃こ、唯ただ人に負けぬ
氣で遣やつたので身体からだも丈夫かうじやうであつたと思われる。

兄弟問答又當時世間一般の事であるが、學問と云えれば漢学ばかり、
私の兄も勿論漢学いっぽう一方の人で、只他の学者と違うのは、豊後ぶんご
の帆足万里先生ほあしばんりの流りゆうを汲んで、数学を学んで居ました。帆足先生
と云えれば中々大儒だいじゆでありながら数学を悦び、先生の説に、鉄砲
と算盤そろばんは士流の重んずべきものである、その算盤を小役人こやくにん
任せ、鉄砲を足輕あしがるに任せて置くと云うのは大間違いと云うその
説が中津に流行して、士族中の有志者は数学に心を寄せる人が多
い。兄も矢張り先輩に倣うて算盤そろばんの高尚な所まで進んだ様子で

す。この辺は世間の儒者と少し違うようだが、その他は所謂孝悌忠信で、純粹の漢学者に相違ない。或時兄が私に問を掛け、「お前は是れから先き何になる積りかと云うから、私が答えて、「左様さ、先ず日本一の大金持になつて思うさま金を使うて見ようと思いますと云うと、兄が苦い顔して叱つたから、私が返問して、「兄さんは如何なさると尋ねると、眞面目に、「死に至るまで孝悌忠信と唯一言で、私は「ヘーイと云た切りそのまゝになつた事があるが、先ず兄はソンナ人物で、又妙な処もある。或時私に向て、「乃公は総領で家督をして居るが、如何かして六かしい家の養子になつて見たい。何とも云われない頑固な、ゴク喧しい養父母に事えて見たい。決して風波を起させないと云

うのは、畢竟 ^{ひつきょう} 養父母と養子との間柄 ^{あいだがら} の悪いのは養子の方の不行届 ^{ふゆきどき} だと説を極めてたのでしよう。所が私は正反対で、「養子は忌 ^{いや} な事だ、大嫌いだ。親でもない人を誰が親にして事える者があるかと云うような調子で、折々は互に説 ^{ちがつ} が違て居ました。これは私の十六、七の頃 ^{これ} と思います。

母も亦 ^{また} 随分妙な事を悦んで、世間並 ^{せけんなみ} には少し変わつて居たようです。一体下等社会の者に附合 ^{つきあ} うことが数寄 ^{すき} で、出入りの百姓町人は無論 ^{むろん} 、穢多 ^{えつた} でも乞食でも、颶々 ^{さつさつ} と近づけて、軽蔑もしなければ忌 ^{いや} がりもせず言葉など至極 ^{しじく} 丁寧でした。又宗教に就て、近処の老婦人達のように普通の信心はないように見える。例えば家は真宗でありながら説法も聞かず、「私は寺に参詣して阿弥陀

様を拝むこと許りは可笑しくてキマリが悪くて出来ぬと常に私共に云いながら、毎月米を袋に入れて寺に持て行って墓参りは欠かしたことはない（その袋は今でも大事に保存してある）。阿弥陀様は拝まぬが坊主には懇意が多い。旦那寺の和尚は勿論、又私が漢学塾に修業して、その塾中に諸国諸宗の書生坊主が居て、毎度私處に遊びに来れば、母は悦んで之を取持て馳走でもすると云うような風で、コンナ所を見れば唯仏法が嫌いでもないようです。兎に角に慈悲心はあつたに違ひない。

乞食の虱をとる茲に誠に穢い奇談があるから話しましよう。中津に一人の女乞食があつて、馬鹿のような狂者のような至極の難渋者で、自分の名か、人の付けたのか、チエ／＼と云て、毎

日市中を貰て廻わる。所が此奴が穢いとも臭いとも云いようのない女で、着物はボロく、髪はボウく、その髪に虱がウヤくして居るのが見える。母が毎度の事で天気の好い日などには、おチ工此方に這入て来いと云て、表の庭に呼込んで土間の草の上に坐らせて、自分は櫛掛けに身構えをして乞食の虱狩を始めて、私は加勢に呼び出される。拾うように取れる虱を取ては庭石の上に置き、マサカ爪で潰すことは出来ぬから、私を側に置いて、この石の上の石を石で潰せと申して、私は小さい手ごろな石を以て構えて居る。母が一疋取て台石の上に置くと私はコツリと打つ潰すと云う役目で、五十も百も先ずその時に取れる丈け取て仕舞い、ソレカラ母も私も着物を払うて糠で手を洗うて、乞食には

虱を取らせて呉れた褒美に飯を遺ると云う極りで、是れは母の樂みでしたらうが、私は穢なくて穢なくて堪らぬ。今思出しても胸が悪いようです。

反故を踏みお札を踏む又私の十二、三歳の頃と思う。兄が何か反古を揃えて居る処を、私がドタバタ踏んで通つた所が兄が大喝一声、コリヤ待てと酷く叱り付けて、「お前は眼が見えぬか、之を見なさい、何と書いてある、奥平大膳大夫と御名があるではないかと大造な権幕だから、「ア、左様で御在ましたか、私は知らなんだと云うと、「知らんと云ても眼があれば見える筈」いや、御名を足で踏むとは如何云う心得である、臣子の道はと、何か六かしい事を並べて厳しく叱るから謝らずには居られぬ。

「私が誠に悪う御在ましたから堪かんにん忍おじぎして下さいと御辞儀おじぎをして謝つたけれども、心の中では謝りも何もせぬ。」何の事だろう、殿様の頭でも踏みはしなかろう、名の書いてある紙を踏んだからツて構うことはなきそななものだと甚だ不平で、ソレカラ子供心にひとり思案して、兄にいさんの云うように殿様の名の書いてある反古を踏んで悪いと云え巴、神様の名のある御札おふだを踏んだら如何どうぞうと思て、人の見ぬ処で御札を踏んで見た所が何ともない。「ウム何ともない、コリヤ面白い、今度は之を洗手場ちようすばに持もつて行いて遣やろうと、一步を進めて便所に試みて、その時は如何どうかあろうかと少し怖かつたが、後あとで何ともない。「ソリヤ見たことか、兄さんいが余計な、あんな事を云わんでも宜いのじやと独り発明したよう

なものだが、是れ許りは母にも云われず姉にも云われず、云えば屹と叱られるから、一人で窃と黙つて居ました。

稻荷様の神体を見るソレカラ一つも二つも年を取れば自から度胸も好くなつたと見えて、年寄などの話にする神罰冥罰などと云うことは大嘘だと独り自から信じ切て、今度は一つ稻荷様を見て遣ろうと云う野心を起して、私の養子になつて居た叔父様の家の稻荷の社の中には何が這入て居るか知らぬと明けて見たら、石が這入て居るから、その石を打擲つて仕舞て代りの石を拾うて入れて置き、又隣家の下村と云う屋敷の稻荷様を明けて見れば、神体は何か木の札で、之も取て棄てゝ仕舞い平氣な顔して居ると、間もなく初午になつて、幟を立てたり大鼓を叩いたり

御神酒おみきを上げてワイ／＼して居るから、私は可笑おかしい。「馬鹿め、乃公おれの入れて置いた石に御神酒を上げて拝んでるとは面白いと、ひとり嬉しがつて居たと云うような訳わけで、幼少の時から神様が怖いだの仏様が有難ありがたいだの云うことは一寸ちよいともない。ト 簆うらないまじな詛まじない一切不信仰きつねたぬきで、狐きつね狸たぬきが付くと云うようなことは初めから馬鹿にして少しも信じない。小供ながらも精神は誠にカラリとしたものでした。或時に大阪から妙な女めうじょが来たことがあるその女と云うのは、私共が大阪に居る時に邸やしきに出入でいりをする上荷頭うわにかしらの伝法寺屋松右衛門んぽうじやまつえもんと云うものゝ娘で、年の頃三十位ぐらいでもあつたかと思う。その女が中津に来て、お稻荷様いなりさまを使うことを知て居ると吹ふい聴ちようするその次第は、誰にでも御幣ごへいを持たして置いて何か祈る

と、その人に稻荷様が憑拏くとか何とか云て、頻りに私の家に来て法螺を吹て居る。夫れからその時に私は十五、六の時だと思う。「ソリヤ面白い、遣て貰おう、乃公がその御幣を持とう、持て居る御幣が動き出すと云うのは面白い、サア持たして呉れると云うと、その女がつく／＼と私を見て居て、「坊さんはイケマヘンと云うから、私は承知しない。「今誰にでもと云たじやないか、サア遣て見せろと、酷くその女を弱らして面白かつた事がある。門閥の不平ソレカラ私が幼少の時から中津に居て、始終不平で堪らぬと云うのは無理でない。一体中津の藩風と云うものは、士族の間に門閥制度がチヤンと定まつて居て、その門閥の堅い事は啻に藩の公用に就てのみならず、今日私の交際上、小供の交際

に至るまで、貴賤上下の區別を成して、上士族の子弟が私の家の
 ような下士族の者に向ては丸で言葉が違う。私などが上士族に対
 して、アナタが如何なすつて、斯うなすつてと云えば、先方では
 貴様が爾う為やつて、斯う為やれと云うような風で、万事その通
 りで、何でもない只小供の戯れの遊びにも門閥が付て廻るから、
 如何しても不平がなくては居られない。その癖今之貴様とか何と
 か云う上士族の子弟と学校に行って、読書会 読と云うような事に
 なれば、何時でも此方が勝つ。学問ばかりでない、腕力でも負け
 はしない。夫れがその交際、朋友互に交つて遊ぶ 小供遊の
 間にも、ちゃんと門閥と云うものを持って 横風至極だから、小供
 心に腹が立て堪らぬ。

下執事の文字に叱かられる況して大人同士、藩の御用を勤めて居る人々に貴賤の区別は中々喧ましいことで、私が覚えて居るが、或時私の兄が家老の処に手紙を遣て、少し学者風でその表書に何々様下執事と書いて遣たら大に叱られ、下執事とは何の事だ、御取次衆と認めて来いと云て、手紙を突返して来た。私は之を見ても側から独り立腹して泣たことがある。馬鹿々々しい、こんな処に誰が居るものか、如何したつて是れはモウ出るより外に仕様がないと、始終心の中に思て居ました。ソレカラ私も次第に成長して、少年ながらも少しは世の中の事が分るようになる中に、私の従兄弟などにも随分一人や二人は学者がある。能く書を読む男がある。固より下士族の仲間だから、兄なぞと話のとき

には藩風が善くないとか何とかいろいろ不平を洩らして居るのを聞いて、私は始終ソレを止めて居ました。「よしなさい、馬鹿々々しい。この中津に居る限りは、そんな愚論をしても役に立つものでない。不平があれば出て仕舞しまうが宜い、出なければ不平を云わぬが宜よいと、毎度止とめて居たことがあるが、是れはマア私の生付うまれつきの性質とでも云うようなものでしよう。

喜怒色に顕わさず或時あるとき私が何か漢書を読む中に、喜怨色いろあらわに顕さずと云う一句を讀よんで、その時にハツト思おおいて大に自分で安心あんしんけつ決定じょうしたことがある。「是れはドウモ金言きんげんだと思いい、始終忘ほれぬようにして独りこの教おしえを守り、ソコデ誰いつが何と云いて賞ほめて呉くれても、唯表面ただうわべに程ほどよく受けて心の中には決して喜ばぬ。又何と

軽蔑されても決して怒らない。どんな事があつても怒つた事はない。
 矮や朋輩同士で喧嘩をしたと云うことは只ただの一度もない。ツ
 イゾ人と掴合つかみあつたの、打つたの、打たれたのと云うことは一寸
 ともない。是れは少年の時ばかりでない。少年の時分から老年の
 今日に至るまで、私の手は怒いかりに乗じて人の身体からだに触れたことはな
 い。所が先年二十何年前、塾の書生に何とも仕方しかたのない放蕩者が
 あつて、私が多年衣食を授けて世話をやして遣るにも拘わらず、再
 三再四の不埒ふらち、或るときそのものが何処どこに何をしたか夜中酒に
 酔よつて生意氣な風ふうをして帰かえつて來たゆえ、貴様は今夜寝ることはなら
 ぬ、起きてチャント正座して居ろと申もうしわ渡おいでして置すこして、少して行
 て見ればグウ／＼鼾いびきをして居る。この不埒者ふらちものめと云て、その

肩の処をつらまえて引起して、目の醒めてるのを尚おグン／＼ゆたぶつて遣たことがある。その時跡で独り考えて、「コリヤ悪い事をした、乃公は生涯、人に向て此方から腕力を仕掛けたようなことはなかつたに、今夜は気に済まぬ事をしたと思って、何だか坊主が戒律でも破たような心地がして、今に忘れることは出来ません。その癖私は少年の時から能く饒舌り、人並よりかくちかずの多い程に饒舌つて、爾うして何でも為ることは甲斐々々しく遣て、決して人に負けないけれども、書生流儀の議論と云うことをしてしない。似合い議論すればと云ても、ほんとうに顔を赧めて如何あつても勝たなければならぬと云う議論をしたことはない。何か議論を始めて、ひどく相手の者が躍起となつて来れば、此方

はスラリと流して仕舞う。「彼の馬鹿が何を馬鹿を云て居るのだ
と斯う思て、頓と深く立入ると云うことは決して遣らなかつた。
ソレでモウ自分的一身は何処に行て如何な辛苦も厭わぬ、唯この
中津に居ないで如何かして出て行きたいものだと、独り夫ればか
り祈つて居た処が、どうと長崎に行くことが出来ました。

長崎遊学

それから長崎に出掛けた。頃は安政元年二月、即ち私の年二十
一歳（正味十九歳三箇月）の時である。その時分には中津の藩
地に横文字を読む者がないのみならず、横文字を見たものもなか

つた。都会の地には洋学と云うものは百年も前からありながら、中津は田舎の事であるから、原書は扱置き、横文字を見たことがなかつた。所がその頃は丁度ペルリの来た時で、亞米利加の軍艦が江戸に來たと云うことは田舎でも皆知て、同時に砲術と云うことが大変喧しくなつて来て、ソコデ砲術を学ぶものは皆和蘭流に就て学ぶので、その時私の兄が申すに、「和蘭の砲術を取調べるには如何しても原書を読まなければならぬと云うから、私には分らぬ。^{わか}」「原書とは何の事ですと兄に質問すると、兄の答に、

「原書と云うは、和蘭出版の横文字の書だ。今、日本に翻訳書と云うものがあつて、西洋の事を書いてあるけれども、眞實に事を調べるにはその大本^{おおもと}の蘭文の書を読まなければならぬ。夫れに

就ては貴様はその原書を読む気はないかと云う。所が私は素と漢書を学んで居るとき、同年輩の朋友の中では何時も出来が好くて、読書講義に苦労がなかつたから、自分にも自然頼たのみにする氣があつたと思われる。「人の読むものなら横文字でも何でも読みましょ」と、ソコデ兄弟の相談は出来て、その時丁度兄が長崎に行く序に任せ、兄の供をして参りました。長崎に落付き、始めて横文字のabcと云うものを習うたが、今では日本国中到る処に、徳利の貼紙はりがみを見ても横文字は幾許いくらもある。目に慣れて珍しくもないが、始めての時は中々六かしい。廿六文字を習うて覚えて仕舞うまでには三日も掛りました。けれども段々読む中には又左程しまさほどでもなく、次第々々に易やすくなつて來たが、その蘭学修業の事は扱置き、

抑も私の長崎に往たのは、唯田舎の中津の窮屈なのが忌でく堪らぬから、文学でも武芸でも何でも外に出ることが出来さえすれば難有いと云うので出掛けたことだから、故郷を去るに少しも未練はない、如斯処に誰が居るものか、一度出たらば鉄砲玉で、再び帰て来はしないぞ、今日こそ宜い心地だと独り心で喜び、後向て睡して颯々と足早にかけ出したのは今でも覚えて居る。

活動の始まり夫れから長崎に行つて、そうして桶屋町の光永寺と云うお寺を使つたと云うのは、その時に私の藩の家老の倅で奥平壹岐と云う人はそのお寺と親類で、其処に寓居して居るのを幸いに、その人を使つてマアお寺の居候になつて居るその中

に、小出町に山本物次郎と云う長崎両組の地役人で砲術家があつて、其処に奥平が砲術を学んで居るその縁を以て、奥平の世話で山本の家に食客に入込みました。抑も是れが私の生來活動の始まり。有らん限りの仕事を働き、何でもしない事はない。その先生が眼めが悪くて書を読むことが出来ないから、私が色々な時勢論など、漢文で書いてある諸大家の書を読んで先生に聞かせる。又その家に十八、九の卒が在て独息子、余りエライ少年でない、けれども本は読まなければならぬと云うので、ソコでその卒に漢書を教えて遣らなければならぬ。是れが仕事の一つ。それから家は貧乏だけれども活計は大きい。借金もある様子で、その借金の云延し、新たに借用の申込みに行き、又金談の

手紙の代筆もする。其処の家に下婢が一人に下男が一人ある。
 「所で」動やもするとその男が病氣とか何とか云う時には、男の代だい
 をして水も汲む。朝あさゆう夕とつの掃除は勿論もちろん、先生が湯に這入はいる時は
 背中せなかを流したり湯ゆを取りして遣らなければならぬ。又その内儀おかげ
 さんが猫が大好き、狹ちんが大好き、生物いきものが好きで、猫も狹も犬も
 居るその生物いきもの一切の世話をしなければならぬ。上中下一切の仕
 事、私一人で引受けて遣て居たから、酷く調法な男だ、何とも云
 われない調法な血氣の少年であり乍ながら、その少年の行状はなしよろ
 しい、甚だ宜しくて甲斐かい々々しく働くと云うので、ソコデ以もつて段
 々その山本の家の気に入いつて、仕舞しまいには先生が養子にならないかと
 云う。私は前まえにも云う通り中津の士族で、遂ぞ自分は知りはせぬ

が少さい時から叔父の家の養子になつて居るから、その事を云うと、先生が夫れなら尚更ら乃公の家の養子になれ、如何でも乃公が世話をして遣るからと度々云われた事がある。

その時の一体の砲術家の有様を申せば、写本の蔵書が秘伝で、その本を貸すには相当の謝物を取て貸す。写したいと云えば、写す為めの謝料を取ると云うのが、先ず山本の家の臨時収入で、その一切の砲術書を貸すにも写すにも、先生は眼が悪いから皆私の手を経る。それで私は砲術家的一切の元締になつて、何もかも私が一切取扱て居る。その時分の諸藩の西洋家、例えば宇和島藩、五島藩、佐賀藩、水戸藩などの人々が来て、或は出島の和蘭屋敷に行つて見たいとか、或は大砲を鋤るから図を見せて呉く

れとか、そんな世話をするのが山本家の仕事で、その実は皆私が
遣る。私は本来素人しろうとで、鉄砲を打つのを見た事もないが、図を
引くのは訳けはない。颯々さっさつと図を引いたり、説明を書いたり、
諸藩の人が来れば何に付けても独り罷り出ひとまかで、丸で十年も砲術を
学んで立派に砲術家と見られる位くらいに挨拶あいさつをしたり世話をしたりす
ると云う調子である。ところで私を山本の居候いそうろうに世話をして入れ
て呉れた人、即ち奥平壹岐おくだいらきだ。壹岐と私とは主客處しゅかどころを易えて、
私が主人見たようになつたから可笑おかしい。壹岐は元來漢学者の才
子で局量が狭い。小藩でも大家の子だから如何も我儘わがままだ。もう
一つは私の目的は原書を読むに在て、蘭学医の家に通うたり和蘭
通詞つうじの家に行つたりして一意専心いちいせんしん原書を学ぶ。原書と云うもの

は始めて見たのであるが、五十日、百日とおい／＼日を経るに従て、次第に意味が分るようになる。所が奥平壹岐はお坊さん、貴公子だから、緻密な原書などの読める訳けはない。その中に此方は余程エラクなつたのが主公と不和の始まり。全体奥平と云う人は決して深い巧みのある悪人ではない。唯大家の我儘なお坊さんで智恵がない度量がない。その時に旨く私を籠絡して生捕つて仕舞えば譜代の家来同様に使えるのに、却てヤツカミ出したとは馬鹿らしい。歳は私より十ばかり上だが、何分気分が子供らしくて、ソコデ私を中津に還えすような計略を運らしたのが、私の身には一大災難。

長崎に居ること難しソリヤ斯う云う次第になつて來た。その奥おくだ

平壹岐と云う人に与兵衛と云う実父の隠居があつて、私共は之を御隠居様と崇めて居た。ソコデ私の父は二十年前に死んで居るのですけれども、私の兄が成長の後に父のするような事をして、又大阪にて勤番をして居て、中津には母一人で何もない。姉は皆嫁いて居て、身寄りの若い者の中には私の従兄の藤本元岱と云う医者が唯一人、能く事が分り書も能く読める学者であるが、そこで中津に在る彼の御隠居様が無法な事をしたと云うは、何れ長崎の倅壹岐の方から打合のあつたものと見えて、その隠居が従兄の藤本を呼に来て、隠居の申すに、諭吉を呼還せ、アレが居ては倅壹岐の妨げになるから早々呼還せ、但しソレに就ては母が病気だと申遣わせと云う御直の厳命が下つたから、

固より否むことは出来ず、唯畏りましたと答えて、母にもそのよ
 しを話して、ソレカラ従兄が私に手紙を寄送して、母の病氣に付
 き早々帰省致せと云う表向の手紙と、又別紙に、実は隠居か
 ら斯うく云う次第、余儀なく手紙を出したが、決して母の身を
 案じるなど詳に事実を書いて呉れたから、私は之を見て實に腹が
 立つた。何だ、鄙劣千万な、計略を運らして母の病氣とまで偽を
 云わせる、ソンナ奴があるものか、モウ焼けだ、大議論をして遣
 ろうかと思たが、イヤく左様でない、今アノ家老と喧嘩をした
 所が、負けるに極つて居る、戦わずして勝負は見えてる、一切喧
 嘩はない、アンナ奴と喧嘩をするよりも自分の身の始末が大事
 だと思直して、夫れからシラバクして胆を潰した風をして奥

平の処に行て、扱中津から箇様申して参りました。母が俄に病氣になりました、平生至極丈夫な方でしたが、實に分らぬものです、今頃は如何云う容體でしようか、遠國に居て氣になりますなんて、心配そうな顔してグチャ／＼述立てると、奥平も大に驚いた顔色を作り、左様か、ソリヤ氣の毒な事じや、嘸心配であろう、兎に角に早く帰国するが宜かろう、併し母の病氣全快の上は又再遊の出来るようにして遣るからと、慰さめるように云うのは、狂言が旨く行われたと心中得意になつて居るに違ひない。ソレカラ又私は言葉を続けて、唯今御指図の通り早々帰国しますが、御隠居様に御伝言は御在ませんか、何れ歸れば御目に掛ります、又何か御品があれば何でも持て帰りますと云て、一ト

先ず別れて翌朝又行て見ると、主公が家に遣る手紙を出して、之を屋敷に届けて呉れ、親仁に斯うく伝言をして呉れと云い、又別に私の母の従弟の大橋六助と云う男に遣る手紙を渡して、これを六助の処に持て行け、爾うすると貴様の再遊に都合が宜からうと云て、故意とその手紙に封をせずに明けて見よがしにしてあるから、何もかも委細承知して丁寧に告別して、宿に歸て封なしの手紙を開て見れば、「諭吉は母の病気に付き是非帰国と云うからその意に任せて還すが、修業勉強中の事ゆえ再遊の出来るようその方に取計らえと云う文句。私は之を見てますく癪に障る。「この猿松め馬鹿野郎めと獨り心の中で罵り、ソレカラ山本の家にも事実は云われぬ、若し是れが顕われて奥平の不面

目くにもなれば、禍は却て私の身に降て来て如何な目に逢うか知れない、ソレガ怖いから唯母の病氣とばかり云て暇乞をしました。

江戸行を志す丁度そのとき中津から鉄屋惣兵衛と云う商人が長崎に来て居て、幸いその男が中津に帰ると云うから、兎も角も之と同伴と約束をして置いて、ソコデ私の胸算は固より中津に帰る気はない。何でも人間の行くべき処は江戸に限る、是れから真直に江戸に行きましょと決心はしたが、この事に就ては誰かに話して相談をせねばならぬ。所が江戸から来た岡部同直と云う蘭学書生がある。是れは医者の子で至極面白い慥かな人物と見込んだから、この男に委細の内情を打明けて、「斯う云い

う次第で僕は長崎に居られぬ、余り癪に障るからこのまゝ江戸に飛出す積りだが、実は江戸に知る人はなし、方角が分らぬ。君の家は江戸ではないか、大人おとっさんは開業医と開いたが、君の家に食客よつかくに置て呉れる事は出来まいか。僕は医者でないが丸薬を丸める位ぐらいの事は屹きつと出来るから、何卒世話をどうかして貰もらいたいと云うと、岡部も私の身の有様を氣の毒に思うたか、私と一緒になつて腹を立てゝ容易たやすく私の云う事を請合うけあい、「ソレは出来よう、何でも江戸に行け。僕の親仁おやじは日本橋檜物町ひものに開業して居るから、手紙を書いて遣やろうと云て、親仁名当なあての一封を呉れたから私は喜んで之これを請取りうけと、「ソコデ今この事が知れると大変だ、中津に帰らなければならぬようになるから、是ればかりは奥平にも山本にも

一切誰たれにも云わずに、君一人で呑のみこ込んで居て外に洩ほからさぬようにして、僕は是から下ノ関に出て船に乘のつて先まず大阪に行く、凡そ十日か十五日も掛かかれば着おかくだろう。その時を見計みはかろうて中村（諭吉、当時は中村の姓を冒す）は初めから中津に帰る気はなかつた、江戸に行くと云て長崎を出たと、奥平にも話して呉れ。是れも聊いさかか面つらあつ當だと互わらつに笑て、朋友と内ないない々の打合せは出来た。

諫早にて鉄屋と別るそれから奥平の伝言や何かをすつかり手紙に認めて仕舞しまい、是れは例の御隠居様に遣やらなければならぬ。「私は長崎を出立して中津に歸る所存で諫いさはや早まで参りました処が、その途中で不図江戸に行きたくなりましたから、是から江戸に参ります。就ては壹岐様から斯かよう様々々の御伝言で、お手紙は

是れですからお届け申すと丁寧に認めて遣つて、ソレカラ封をせ
 ずに渡した即ち大橋六助に宛た手紙を本人に届ける為めに、
 私が手紙を書添えて、「この通りに封をせぬのは可笑しい、こん
 な馬鹿な事はないがこの儘御届け申します。原はと云えれば自分の
 方で呼還すように企てゝ置きながら、表べに人を欺くと云うの
 は卑劣至極な奴だ。私はもう中津に帰らず江戸に行くからこの手
 紙を御覧下さいと云うような塩梅に認めて、万事の用意は出来
 て、鉄屋惣兵衛と一処に長崎を出立して諫早まで——
 この間は七里ある——來た。丁度夕方着たが何でも三月の中旬、
 月の明るい晩であつた。「拵鉄屋、乃公は長崎を出る時は中津に
 帰る所存であつたが、是れから中津に帰るは忌になつた。貴様の

荷物と一處に乃公のこの葛籠も序に持て歸て呉れ。乃公はもう着き換が一、二枚あれば沢山だ。是れから下ノ関に出て大阪へ行て、夫れから江戸に行くのだと云うと、惣兵衛殿は呆れて仕舞い、

「それは途方もない、お前さんのような年の若い旅慣れぬお坊さんが一人で行くと云うのは。「馬鹿云うな、口があれば京に上る、

長崎から江戸に一人行くのに何のことがあるか。「けれども私は中津に帰てお母さんにいい様がない。「なあに構うものか、乃公は死も何もせぬから内のおツ母さんに宜しく云て呉れ、唯江戸に参りましたと云えば夫れで分る。鉄屋も何とも云うことが出来ぬ。「時に鉄屋、乃公は是から下ノ関に行こうと思うが、実は下ノ関を知らぬ。貴様は諸方を歩くが下ノ関に知てる船宿はな

いか。「私の懇意な内で船場屋寿久右衛門と云う船宿があります、其處へお入来なされば宜しいと云う。抑もこの事を態々鉄屋に聞かねばならぬと云うのは、実はその時私の懷中かいちゅうに金がない。内から呉れた金が一步もあつたか、その外に和蘭オランダの字引の訳鍵と云う本を売て、搔集かきあつめた所で二歩二朱か三朱しかない。

それで大阪まで行くには如何しても船賃が足らぬと云う見込んだから、そこで一寸と船宿の名を聞いて置いて、夫れから鉄屋に別れて、諫早から丸木船まるきぶねと云う船が天草あまくさの海を渡る。五百八十文出してその船に乗れば明日の朝佐賀まで着くと云うので、その船に乗た所が、浪風なみかぜなく朝佐賀についに着て、佐賀から歩いたが、案内もなければ何もなく真実一身で、道筋の村の名も知らず宿々の

順も知らずに、唯東の方に向て、小倉には如何行くかと道を聞いて、筑前を通り抜けて、多分太宰府の近所を通つたろうと思ひますが、小倉には三日めに着いた。

賄手紙を作るその間の道中と云うものは随分困りました。一人旅、殊に何処の者とも知れぬ貧乏そうな若侍、若し行倒になるか暴れでもすれば宿屋が迷惑するから容易に泊めない。もう宿の善惡は択ぶに暇なく、只泊めて呉れさえすれば宜しいと云うので無暗に歩行いて、何か斯か二晩泊つて三日目に小倉に着きました。その道中で私は手紙を書いて即ち鉄屋惣兵衛の賄手紙を拵えて、「この御方は中津の御家中、中村何様の若旦那で、自分は始終そのお屋敷に出入して決して間違なき御方だから厚く頼む

と鹿爪らしき手紙の文句で、下ノ関船場屋寿久右衛門へ宛て鉄屋惣兵衛の名前を書いてちゃんと封をして、明日下ノ関に渡てこの手紙を用に立てんと思い、小倉までたどり付て泊つた時はおかしかつた。彼方此方マゴマゴして、小倉中宿を捜したが、何処でも泊めない。ヤツト一軒泊めて呉れた所が薄汚ない宿屋で、相宿の同間に人が寝て居る。スルト夜半に枕辺で小便する音がする。何だと思うと中風病の老爺が、しびんに遣てる。実は客ではない、その家の病人でしよう。その病人と並べて寝かされたので、汚くて堪らなかつたのは能く覚えて居ます。

それから下ノ関の渡場を渡て、船場屋を捜し出して、兼て用意の贋手紙を持って行た所が、成程鉄屋とは懇意な家と見え

る、手紙を一見して早速泊めて呉れて、万事能く世話をして呉
れて、大阪まで船賃が一分二朱、賄の代は一日若干、ソコデ船賃
を払うた外に二百文か三百文しか残らぬ。併し大阪に行けば中津
の倉屋敷で賄の代を払う事にして、是れも船宿で心能く承知
して呉れる。悪い事だが全く贋手紙の功德でしょう。

馬関の渡海小倉から下ノ関に船で来る時は怖い事がありました。

途中に出た所が少し荒く風が吹て浪が立て來た。スルトその纜を
引張て呉れ、其方の処を如何して呉れと、船頭が何か騒ぎ立
て乗組の私に頼むから、ヨシ來たと云うので纜を引張たり柱を
起したり、面白半分に様々加勢をして先ず滞りなく下ノ関の宿に
着て、「今日の船は如何したのか、斯うく云う浪風で、斯う

云う目に遇た、潮を冠つて着物が濡れたと云うと、宿の内儀さん
が「それはお危ない事じや、彼あれが船頭なら宜いが実は百姓です。
この節暇ひまなものですから内職にそんな事をします。百姓が農業の
間に慣れぬ事をするから、少し浪風があると毎度大きな間違あいだ
いを仕出来しでかしますと云うのを聞いて、実に怖かつた。成程奴等やつらが一生懸
命になつて私に加勢を頼んだのも道理だと思いました。

馬関より乗船夫それから船場屋寿久右衛門の処から乗のつた船には、三
月の事で皆上かみがた方見物、夫くは種々しうじゅ々様々な奴が乗て居る。
間抜けな若旦那も乗て居れば、頭の禿はげた老爺じじいも乗て居る、上方
辺へんの茶屋女ちややおんなも居れば、下ノ関の安女郎やすじよろうも居る。坊主も、百
姓も、有らん限りの動物が揃そろうて、其奴等そいつらが狭い船の中で、酒を

飲み、博奕ばくちをする。下らぬ事に大きな声をして、聞かれぬ話をし
て、面白そうにしてる中に、私一人は真実無言、丸で取付端とつつきは
がない。船は安芸の宮島へ着た。私は宮島に用はない。唯来たか
ら唯島を見に上る。外の連れんじゆう中なかはお互に朋友だから宜いだろう。
皆酒を飲む。私も飲みたくて堪たまらぬけれども、金がないから只宮
島を見たばかりで、船に帰かえつて来てむしやく船の飯を喰めしてゐるから、
船頭せんどうもこんな客は忌いやだろう、妙な顔をして私を睨にらんで居たの
は今でも覚えて居る。その前に岩国いわくにの錦帶橋きんたいばしも余儀なく見物し
て、夫れから宮島を出て讃岐の金比羅こんぴら様だ。多度津たどつに船が着て金
比羅まで三里と云う。行きたくないことはないが、金がないから
行かれない。外ほかの奴は皆船から出て行て、私一人で船の番をして

居る。爾うすると一晩泊て、どいつもこいつもグデンくに酔よつて陽気になつて帰て来る。癪しゃくに障るけれども何としても仕様しょうがない。

明石より上陸あがし云う不愉快な船中で、如何どうやら斯この十五日目に播州明石に着ついた。朝五ツ時、今の八時頃、明日順風になれば船が出ると云う、けれどもコンナ連れんじゅう中なかのお供をしては際限がない。是れから大阪までは何里と聞けば、十五里と云う。「ヨシ、それじや乃公は是れから大阪まで歩いて行く。就ては是迄これまでの勘定かんじょうは、大阪に着たら中津の倉屋敷まで取りに來い、この荷物だけは預けて行くからと云うと、船頭せんとうが中々聞かない。「爾う旨うまくは行かぬ、一切勘定はらつを払はらつて行けと云う。云われても払はらつう金は

懷中にはない。その時に私は更紗の着物と絹紬の着物と二枚あつて、それを風呂敷に包んで持て居るから、「茲に着物が二枚ある、是れで賄の代位はあるだろう、外に書籍もあるが、是れは何にもならぬ。この着物を売ればその位の金にはなるではないか。大小を預ければ宜いが、是れは挾して行かねばならぬ。何時でも宜しい、船が大阪に着次第に中津屋敷で払て遣るから取りに来いと云うも、船頭は頑張て承知しない。「中津屋敷は知てるが、お前さんは知らぬ人じや。何でも船に乗て行きなさい。賄の代金は大阪で請取ると云う約束がしてあるからそれは宜しい。何日掛ても構わぬ、途中から上ることは出来ぬと云う。此方は只管頼むと小さくなつて詰けを云えば、船頭は何でも聞かぬと剛情を張

て段々声が大きくなる。喧嘩にもならず實に当惑して居た処に、同船中、下ノ関の商人風の男が出て来て、乃公が請合^{うけあ}うと先ず発言して船頭に向い、「コレお前も爾^そう、いんごうな事を云うものじやない。賄^{まかないと}代^{だい}の抵當^{かた}に着物があるじやないか。このお方はお侍じや、貴様達を騙^{だま}す所存^{つもり}ではないよう見受ける。若し騙したら乃公^{おれ}が払う、サアお上りなさいと云て、船頭も是れに安心して無理も云わず、ソレカラ私はその下ノ関の男に厚く礼を述べて船を飛出し、地獄に仏と心の中にこの男を拝みました。

そこで明石から大阪まで十五里の間^{あいだ}と云うものは、私は泊ることが出来ぬ。財布の中はモウ六、七十文、百に足らぬ錢で逆も一晩泊^{とま}ることは出来ぬから、何でも歩かなければならぬ。途中何と

云う処か知らぬが、左側の茶店で、一合十四文の酒を二合飲んで、大きな筈の煮たのを一皿と、飯を四、五杯喰て、夫れからグン／＼歩いて、今の神戸辺は先だか後だか、どう通たか少しも分らぬ。爾うして大阪近くなると、今の鉄道の道らしい川を幾川も渡て、有難い事にお侍だから船賃は只で宜かつたが、日は暮れて暗夜で真暗、人に逢わなければ道を聞くことが出来ず、夜中淋しい処で変な奴に逢えば却て氣味が悪い。その時私の指してゐる大小は、脇差は祐定の丈夫な身であつたが、刀は太刀作りの細身でどうも役に立ちそうでなくて心細かつた。実を云えば大阪近在に人殺しの無暗に出る訳けもない、ソンナに怖がる事はない筈だが、独旅の夜道、真暗ではあるし、臆病神が付いて

るから、ツイ腰の物を便りにするような気になる。後で考えれば却て危ない事だと思う。ソレカラ始終道を聞くには、幼少の時から中津の倉屋敷は大阪堂島玉江橋たまえぱしと云うことを知てるから、ただ唯大阪の玉江橋へはどう行くかとばかり尋ねて、ヤツト夜十時過ぎでもあろう、中津屋敷に着て兄に逢たが、大変に足が痛かつた。大阪着大阪に着て久振ひさしぶりで兄に逢うのみならず、屋敷の内外に幼ない時から私を知てる者が沢山たくさんある。私は三歳の時に国に帰て二十二歳に再び行たのですから、私の生れた時に知てる者は沢山。私の面かおが何處か幼顔おさながおに肖て居ると云うその中には、私に乳を呑まして呉れた仲仕の内儀さんもあれば、又今度兄の供をして中津から来て居る武八ぶはちと云う極質朴な田舎男いなかおとこは、先年も大阪

の私の家に奉公して私のお守もりをした者で、私が大阪に着た翌日、この男を連れて堂島三丁目か四丁目の処を通ると、男の云うに、お前の生れる時に我身夜中にこの横町よこちょうの彼の産婆さんばばの処に迎いに行たことがある、その産婆さんは今も達者にし居る、それからお前が段々大きくなつて、此身おりやお前をだいて毎日々々湊みなとの部屋（勧進元）かんじんもとに相撲の稽古こうぐを見に行た、その産婆さんの家は彼処そこじや湊の稽古場は此處こづちの方じやと、指をさして見せたときには、私も旧むかしを懷おもうて胸一杯になつて思わず涙をこぼしました。都すべて如斯んわな訳わけで私はどうも旅とは思われぬ、眞実故郷かえつに歸きた通りで誠に宜い心地こころもち。それから兄が私に如何どうして貴様きさまは出し抜けに此処こに來たのかという。兄の事であるから構わず斯こう云う次第で参

りましたと云たら、「乃公おれが居なければ宜いが、道の順序を云て見れば貴様は長崎から来るのに中津の方が順路だ。その中津を横に見ておツ母かかさんの処を避よけて来たではないか。それも乃公おれが此処に居なければ兎とも角かく、乃公おれが此処で貴様に面会しながら之を手放して江戸ゆに行けと云えば兄弟共謀だ。如何いかにも済まぬではないか。おツ母さんは夫それほど程に思わぬだろうが、如何どうしても乃公おれが済まぬ。それよりか大阪でも先生がありそうなものじや、大阪で蘭学を学ぶが宜いと云うので、兄の処に居て先生を搜さがしたら緒方おがたと云う先生のある事を聞ききだ出した。

長崎遊学中の逸事鄙事多能は私の獨どくとく得、長崎に居る間は山本先生の家に食客しょつかくせい生なと為り、無暗むやみに勉強して蘭学も漸ようやく方角の分

るようになるその片手に、有らん限り先生家の家事を勤めて、上中下の仕事なんでも引請けて、是れは出来ない、其れは忌だと云たことはない。丁度上方辺の大地震のとき、私は先生家の息子に漢書の素読そどくをして遣た跡で、表の井戸端で水を汲んで、大きな荷桶にないを担いで一足跡出すその途端にガタ／＼と動搖ゆれがすべり、誠に危ない事がありました。

寺の和尚、今は既に物故すでにしたそうですが、是れは東本願寺の末寺、光永寺と申して、下寺の三ヶ寺も持て居る先ず長崎では名のある大寺、そこの和尚が京に上つて何か立身して帰かえつて来て、長崎の奉行所に廻勤かいきんに行くその若党わかとうに雇われてお供かみがたへんをした所が、和尚が馬鹿に長い衣ころもか装束おおでらか妙なものを着て居て、奉行所の

門で駕籠を出ると、私が後からその裾を持ってシヅ／＼と附いて歩いて行く。吹出しそうに可笑しい。又その和尚が正月になると大檀那の家に年礼に行くそのお供をすれば、坊さんが奥で酒でも飲でる供待の間に、供の者にも膳を出して雑煮など喰わせる。是れは難有く戴きました。

又節分に物貰いをしたこともある。長崎の風に、節分の晩に法螺の貝を吹て何か経文のような事を怒鳴つて廻わる、東京で云えば厄払い、その厄払をして市中の家の門に立てば、錢を呉れたり米を呉れたりすることがある。所が私の居る山本の隣り家に杉山松三郎（杉山徳三郎の実兄）と云う若い男があつて、面白い人物。「どうだ今夜行こうじやないかと私を誘うから、

勿論同意。ソレカラ何処かで法螺の貝を借りて来て、面を隠して二人で出掛け、杉山が貝を吹く、お經の文句は、私が少年の時に暗誦して居た蒙求の表題と千字文で請持ち、王戎簡要天地玄黄なんぞ出鱈目に怒鳴り立てゝ、誠に上首尾、錢だの米だの随分相応に貰て来て、餅を買い鴨を買い雑煮を拵えてタラフク喰くつた事がある。

師弟アベコベ私が始めて長崎に来て始めて横文字を習うと云うときには、薩州の医学生に松崎鼎甫まつざきていほと云う人がある。その時に藩主薩摩守さつまのかみは名高い西洋流の人物で、藩中の医者などに蘭学を引立て、松崎も蘭学修業を命ぜられて長崎に出て来て下宿屋に居るから、その人に頼んで教えて貰うが宜かろうと云うので行た所が、

松崎が abc を書いて仮名を附けて呉れたのには先ず驚いた。是れが文字とは合点が行かぬ。二十何字を覚えて仕舞うにも余程手間が掛たが、学べば進む的道理で、次第々々に蘭語の綴も分るようになつて來た。ソコデ松崎と云う先生の人相を見て應対の様子を察するに、決して絶倫の才子でない。依て私の心中窺に、「是れは高たかの知れた人物だ。今でも漢書を讀んで見る、自分が数等上流の先生だ。漢蘭等しく字を読み義を解することすれば、今までこの先生を恐るゝことはない。如何かしてアベコベにこの男に蘭書を教えて呉れたいものだと、生々の初学生が無鉄砲な野心を起したのは全く少年の血氣に違ひない。ソレはそれとしてその後私は大阪に行き、是れまで長崎で一年も勉強して居たから緒

方でも上達が頗る速くて、両三年の間に同窓生八、九十人の上に頭角あたまを現わした。所が人事の廻り合せは不思議なもので、その松崎と云う男が九州から出て来て緒方の塾に這入はいり、私はその時ズツト上級で、下級生の会頭かいとうをして居るその会かいどく読に、松崎も出席することになつて、三、四年の間に今昔あいだこんせきの師弟アベコベ。私の無鉄砲な野心が本当な事になつて、固より人には云われず、又云うべきことでないから黙だまつて居たが、その時の愉快は堪たまらない。ひとり酒ひとのんを飲で得意がつて居ました。左れば軍人の功名手柄こうみょう、政治家の立身出世、金持の財産蓄積なんぞ、孰れも熱心で、一寸と見ると俗なようで、深く考えると馬鹿なように見えるが、決して笑うことはない。ソンナ事を議論したり理窟りくくつを述べたりする学

者も、矢張り同じことで、世間並に俗な馬鹿毛ばかげた野心なみがあるから可笑おかしい。

大阪修業

兄の申すことには私も逆らうことが出来ず、大阪に足を止めまして、緒方先生の塾に入門したのは安政二年卯歳うどしの三月でした。その前長崎に居る時には勿論蘭学の稽古さかをしたので、その稽古をした所は檜林ならばやしと云う和蘭通詞オランダつうじの家、同じく檜林と云う医者の家、それから石川桜所いしかわおうしょと云う蘭法らんぽう医師、この人は長崎に開業して居て立派な門戸はつを張て居る大家たいかであるから、中々入門

することは出来ない。ソコで其処の玄関に行つて 調合所の人の
どに習つて居たので、爾う云うように彼方此方にちよいしくと教
えて呉れるような人があれば其処へ行く。何処の何某に便り誰
の門人になつてミツチリ蘭書を読だと云うことはないので、ソコ
で大阪に来て緒方に入門したのは是れが本当に蘭学修業の始まり、
始めて規則正しく書物を教えて貰いました。その時にも私は学業
の進歩が随分速くて、塾中には大勢書生があるけれども、その
中ではマア出来の宜い方であつたと思う。

兄弟共に病氣ソコで安政二年も終り三年の春になると、新春早々
茲に大なる不仕合な事が起つて來たと申すは、大阪の倉屋敷に
勤番中の兄が傻麻質斯に罹り病症が甚だ軽くない。トウ／＼手足
リューマチス はなは

も叶わぬと云う程になつて、追々全快するが如く全快せざるが如くして居る間に、右の手は使うことが出来ずに左の手に筆を持つて書くと云うような容体。ソレと同時にその歳の二月頃であつたが、緒方の塾の同窓、私の先輩で、予て世話になつて居た加州の岸直輔と云う人が、腸室扶斯に罹つて中々の難症。ソコデ私は平生の恩人だから、コンナ時に看病しなければならぬ。又加州の書生に鈴木儀六と云う者があつて、是れも岸と同国の縁で、私と鈴木と両人、昼夜看病して、凡そ三週間も手を尽したけれども、如何しても惡症でとうく助からぬ。一体この人は加賀人で宗旨は真宗だから、火葬にしてその遺骨を親元に送て遣らうと両人相談の上、遺骸を大阪の千日せんにちの火葬場に持て行て焼もついて、骨を

本国に送り、先ず事は済んだ所が、私が千日から帰て三、四日経つとヒヨイと煩い付た。容体がドウも只の風邪でない。熱があり氣分が甚だ悪い。ソコデ私の同窓生は皆医者だから、誰かに見て貰もらつた所が、是れは腸窒扶斯ちょうしつブスだ、岸の熱病が伝染したのだと云て居る間に、その事が先生に聞えて、その時私は堂嶋の倉屋敷の長屋に寝て居た所が、先生が見舞に見えまして、愈いよいよよ腸窒扶斯に違いない、本当に療治りょうじしなければ是れは馬鹿にならぬ病氣であると云う。

緒方先生の深切夫れから私はその時に今にも忘れぬ事のあると云うのは、緒方先生の深切。「乃公はお前の病氣を屹きつと診てみ遣やる。」診て遣るけれども乃公が自分で処方することは出来ない。何分に

も迷うて仕舞う。此の薬彼の薬と迷うて、後になつて爾うでもなかつたと云て又薬の加減をすると云うような訳けで、仕舞には何の療治をしたか訳けが分らぬようになると云うのは人情の免れぬ事であるから、病は診て遣るが執匙は外の医者に頼む。そのつもりにして居れと云て、先生の朋友、梶木町の内藤数馬と云う医者に執匙を託し、内藤の家から薬を貰て、先生は只毎日来て容体を診て病中の摂生法を指図するだけであつた。マア今日の学校とか学塾とか云うものは、人数も多く逆も手に及ばない事で、その師弟の間は自から公なものになつて居る、けれども昔の学塾の師弟は正しく親子の通り、緒方先生が私の病を見て、どうも薬を授るに迷うと云うのは、自分の家の子供を療治して遣るに迷うと

同じ事で、その扱は実子と少しも違わない有様であつた。後世段々に世が開けて進んで来たならば、こんな事はなくなつて仕舞ましよう。私が緒方の塾に居た時の心地こころもちは、今の日本国中の塾生に較べて見て大変に違う。私は眞実緒方の家の者のように思い又思わずには居られません。ソレカラ唯ただいま申す通り実父同様の緒方先生が立たちあい会で、内藤数馬先生の執匙で有らん限りの療治をして貰いましたが、私の病氣も中々軽くない。わざら煩い付て四、五日目から人事不省ふせい、凡そ一週間ばかりは何も知らない程の容体でしたが、幸にして全快に及び、衰弱はして居ましたれども、歳は若し、平へいぜい生身体の強壯なその為めでしょう、恢復かいふくは中々早い。モウ四月になつたら外に出て歩くようになり、その間に兄は傻麻あいだレウ

質斯マチスを煩わざらつて居り、私は熱病の大病後である、如何どうにも始末が付かない。

兄弟中津に帰るその中に丁ちょうど度兄の年期と云うものがあつて、二ヶ年居れば国に帰ると云う約束で、今年の夏が二年目になり、私も亦病後大阪に居て書物など読むことも出来ず、兎に角に帰国が宜かろうと云うので、兄弟一緒に船に乘のつて中津に帰つたのがその歳の五、六月頃と思う。所が私は病後ではあるが日々に恢復かいふくして、兄の僕麻質斯リューマチスも全快には及ばないけれども別段に危険な病症でもない。夫れでは私は又大阪に参りましょと云て出たのがその歳、即ち安政三年の八月。モウその時は病後とは云われませぬ、中々元気が能くて、大阪に着たその時に、私は中津屋敷の空長あきなが

屋やを借用して独居自炊、即ち土鍋で飯を焚て喰て、毎日朝から夕刻まで緒方の塾に通学して居ました。

家兄の不幸再遊困難所が又不幸な話で、九月の十日頃であつたと思ふ。國から手紙が来て、九月三日に兄が病死したから即刻帰て来いと云う急報。どうも驚いたけれども仕方がない。取るものも

取り敢えずスグ船に乗て、この度は誠に順風で、速に中津の港に着て、家に歸て見ればモウ葬式は勿論、何も斯も片が付て仕舞った後の事で、ソレカラ私は叔父の處の養子になつて居た、所が自分の本家、即ち里の主人が死亡して、娘が一人あれども女の子では家督相続は出来ない、是れは弟が相続する、当然の順序だといふので、親類相談の上、私は知らぬ間にチャント福澤の主人

になつて居て、当人の帰国をまつて相談なんと云うことはありはない。貴様は福澤の主人になつたと知らせて呉れる位の事だ。扱てその跡を襲^{つい}だ以上は、実は兄でも親だから、五十日の忌服を勤めねばならぬ。夫れから家督相続と云えば其^それ相応の勤がなくてはならぬ、藩中小士族相応の勤を命ぜられて居る、けれども私の心と云うものは天外万里^{てんがいはんり}、何もかも浮足になつて一寸とも落^{おち}つかぬ。何としても中津に居ようなど云うことは思いも寄らぬ事であるけれども、藩の正式に依ればチャント勤をしなければならぬから、その命を拒^{こぼ}むことは出来ない。唯^{ただ}言行を謹み、何と云われてもハイ^ヒくと答えて勤めて居ました。自分の内心には如何しても再遊と決して居るけれども、周囲の有様と云うものは中々寄^よ

付かれもしない。藩中一般の説は姑く差措き、近い親類の者まで
 も西洋は大嫌りつで、何事も話しが出ることが出来ない。ソコデ私
 に叔父があるから、其處そこに行つて何か話をして、序そながら夫れとな
 く再遊の事を少しばかり言掛け見ると、夫れはく恐ろしい剣
 幕で頭から叱しかられた。「怪からぬ事を申すではないか。兄の不幸
 で貴様が家督相続した上は、御奉公大事に勤をする筈はずのものだ。
 ソレに和蘭オランダの学問とは何たる心得違いか、呆返あきれかえつた話だ
 とか何とか叱られたその言葉の中に、叔父が私を冷かして、貴様
 のような奴は負角力まげずもうの瘠鑄やせしこと云うものじやと苦々しく睨み
 付けたのは、身の程知らずと云う意味でしょう。逆も叔父さんに
 賛成して貰もらおうと云うことは出来そうにもしないが、私が心に思

つて居れば自から口の端にも出る。出れば狭い所だから直ぐ分る。
 近処辺りに何處となく評判する。平生私の処に能く来るお婆さんと
 云う人。今でも其の人の面を覚えて居る。つい向うのお婆さんと、
 或るとき私方に来て、「何か聞けば諭吉さんは又大阪に行くと云
 う話じやが、マサカお順さん（私の母）そんな事はさせなさらん
 じやろう、再び出すなんと云うのはお前さんは気が違うて居はせ
 ぬかと云うような、世間一般先ずソンナ風で、その時の私の身の
 上を申せば寄辺汀の捨小舟、まるで唄の文句のようだ。
 母と直談ソコデ私はひとり考えた。「是れは逆も仕様がない。唯頼
 む所は母一人だ。母さえ承知して呉れば誰が何と云うても怖い者

はない。ソレカラ私は母にとつくり話した。「おツ母さん。今私が修業して居るのは斯う云う有様、斯う云う塩梅で、長崎から大阪にて修業して居ります。自分で考えるには、如何しても修業は出来て何か物になるだろうと思う。この藩に居た所が何としても頭の上あがる氣遣きづかいはない。眞に朽果しんくちはつると云うものだ。どんな事があつても私は中津で朽果こうかくてようとは思いません。アナタはお淋しいだろうけれども、何卒私を手放して下さらぬか。私の産どうぞれたときにお父ツさんは坊主おつにすると仰しやつたそうですから、私は今から寺の小僧になつたと諦めて下さい」。その時私が出れば、母と死んだ兄の娘、産れて三つになる女の子と五十有余の老母と唯ただの二人で、淋しい心細いに違ないけれども、とつくり話

して、「どうぞ二人で留主をして下さい、私は大阪に行くから」と云たら、母も中々思切りの宜い性質で、「ウム宜しい。」アナタさえ左様云て下されば、誰が何と云ても怖いことはない。

「オーそうとも。兄が死んだけれども、死んだものは仕方がない。お前も亦余所^{またよそ}に出て死ぬかも知れぬが、死^{しへいき}生^{いき}の事は一切言うことなし。何処^{どこ}へでも出て行きなさい」。ソコデ母子の間^{あいだ}と云うものはちゃんと魂胆^{こんたん}が出来て仕舞^{しまつ}て、ソレカラ愈^{いよいよ}出ようと云うことになる。

四十両の借金家財を売る出るには金の始末をしなければならぬ。その金の始末と云うのは、兄の病氣や勤番中の其れ^そ是れ^この入^{にゆう}費^ひ、凡そ四十両借金がある。この四十両と云うものは、その時代に私

などの家に取ては途方心ない大借。これをこの儘にして置いては逆も始末が付かぬから、何でも片付けなければならぬ。如何しようと。外に仕方がない。何でも売るのだ。一切万物売るより外なしと考へて、聊か頼みがあると云うのは、私の父は学者であつたから、藩中では中々蔵書を持て居る。凡そ冊数にして千五百冊ばかりもあるつて、中には随分世間に類の少ない本もある。例えは私の名を諭吉と云うその諭の字は天保五年十二月十二日の夜、私が誕生したその日に、父が多年所望して居た明律の上諭条例と云う全部六、七十冊ばかりの唐本を買取て、大造喜んで居る処に、その夜男子が出生して重ね／＼の喜びと云う所から、その上諭の諭の字を取て私の名にしたと母から聞いた

事がある位くらいで、随分珍らしい漢書があつたけれども、母と相談の上、藏書を始め一切の物を売却しようと云うことになつて、先ず手近な物から売れるだけ売ろうと云うので、軸物のような物から売り始めて、目ぼしい物を申せば頼山陽の半切の掛物を金二分に売り、大雅堂の柳下人物の掛け物を二両二分、徂徠の書、東涯の書もあつたが、誠に値がない、見るに足らぬ。その他はごたくした雑物ばかり。覚えて居るのは大雅堂と山陽。刀は天正祐定二尺五寸拵付、能く出来たもので四両。ソレカラ藏書だ。中津の人で買う者はありはせぬ。如何して何十両と云う金を出す藩士はありはせぬ。所で私の先生、白石と云う漢学の先生が、藩で何か議論をして中津を追出されて

豊後の臼杵藩の儒者になつて居たから、この先生に便つて行けば
 売れるだろうと思つて、臼杵まで態々出掛けて行つて、先生に話を
 した処が、先生の世話で残らずの蔵書を代金十五両で臼杵藩に買
 て貰い、先ず一口に大金十五両が手に入り、その他有らん限
 り皿も茶碗も丼も猪口も一切売つて、漸く四十両の金が揃い、その
 金で借金は奇麗に済だが、その蔵書中に易經集註十三冊に
 伊藤東涯先生が自筆で細々と書き入れをした見事なものがある。
 是れは亡父が存命中大阪で買取て殊の外珍重したものと見え、
 蔵書目録に父の筆を以て、この東涯先生書入の易經十三冊は天下
 稀有の書なり、子孫謹で福澤の家に藏むべしと、恰も遺言のよう
 なことが書いてある。私も之を見ては何としても売ることが出来

ません。是れ丈けはと思うて残して置たその十三冊は今でも私の家にあります。夫れと今に残つて居るのは唐焼の丼が二つある。是れは例の雑物 売 払 のとき道具屋が直を付けて丼二つ 三分と云うその三分とは中津の藩札で銭にすれば十八文のことだ。

余り馬鹿々々しい、十八文ばかり有ても無くとも同じことだと思つて売らなかつたのが、その後四十何年無事で、今は筆洗になつて居るのも可笑しい。

築城書を盜写す夫れは夫れとして、私が今度不幸で中津に帰て居るその間に一つ仕事をしました、と云うのはその時に奥平壹岐と云う人が長崎から帰て居たから、勿論私は御機嫌伺に出なければならぬ。或日奥平の屋敷に推参して久々の面会、四方も

山の話の序に、主人公が一冊の原書を出して、「この本は乃公が長崎から持て来た和蘭新版の築城書であると云うその書を見た所が、勿論私などは大阪に居ても緒方の塾は医学塾であるから、医書、窮理書の外に遂ぞそんな原書を見たことはないから、随分珍書だと先ず私は感心しなければならぬ、と云うのはその時は丁度ペルリ渡来の当分で、日本国中、海防軍備の話が中々喧しいその最中に、この築城書を見せられたから誠に珍しく感じて、その原書が読んで見たくて堪らない。けれども是れは貸せと云た所が貸す気遣はない。夫れからマア色々話をする中に、主人が「この原書は安く買うた。二十三両で買えたから」なんと云うたのには、實に貧書生の胆を潰すばかり。逆も自分に買うことは出

来ず、左ればとてゆるりと貸す気遣はないのだから、私は唯原書を眺めて心の底でひとり貧乏を歎息して居るその中に、ヒヨイと胸に浮んだ一策を遣て見た。「成程是れは結構な原書で御在ます。」
 速も之を読んで仕舞うと云うことは急な事では出来ません。責めては図と目録とでも一通り拝見したいのですが、四、五日拝借は叶いませんまいかと手軽に触つて見たらば、「よし貸そう」と云て貸して呉れたこそ天与の僥倖、ソレカラ私は家に持て帰て、即刻鷺筆と墨と紙を用意してその原書を初から写掛けた。凡そ二百ページ余のものであつたと思う。それを写すに就ては誰にも言わぬのは勿論、写す処を人に見られては大変だ。家の奥の方に引込んで一切客に遇わずに、昼夜精切り一杯、根のあらん限り写し

た。そのとき私は藩の御用で城の門の番をする勤つとめがあつて、二、三日目に一昼夜当番する順になるから、その時には昼は写本を休み、夜になれば窃そつと写物うつしものを持出して、朝、城門の明あくまで写して、一日も眠らないのは毎度のことだが、又この通りに勉強しても、人間世界は壁に耳あり眼めもあり、既すでに人に悟られて今にも原書を返せとか何とか云いつて来はしないだろうか、いよ／＼露顯ろけんすれば唯原書を返したばかりでは済まぬ、御家老様の剣幕で中々六むずかしくなるだろうと思えば、その心配は堪たまらない。生れてから泥ど坊ろぼうをしたことはないが、泥坊の心配も大抵たいていこんなものであると推察しながら、とう／＼写し終りて、図が二枚あるその図も写して仕舞しまつて、サア出来上あがつた。出来上あがつたが読合よみあわせに困る。

是れが出来なくては大変だと云うと、妙な事もあるもので、中津に和蘭のスペルリングの読めるものが只た一人ある。それは藤野啓山オランダじのけいざんと云う医者で、この人は甚だ私の處に縁がある、と云うのは私の父が大阪に居る時に、啓山が医者の書生で、私の家に寄宿して、母も常に世話をはなはして遣たと云う縁故からして、固より信じられる人に違いないと見抜いて、私は藤野の處に行て、「大秘密だいひみつをお前に語るが、実は斯うこく云うことで、奥平の原書を写して仕舞た。所が困るのはその読合せだが、お前はどうか原書を見て居て呉れぬか、私が写したのを読むから。実は昼遣りやりたいが、昼は出来られない。ヒヨツわかと分つては大変だから、夜分私が来るから御苦勞よろだが見て居て呉れよと頼んだら、藤野が宜しいと快く

請合うけあつて呉あわれて、ソレカラ私は其處そこの家に三晩か四晩読合せに行いつて、ソツクリ出来て仕舞しまつた。モウ連城れんじょうの璧たまを手に握わつたよなもので、夫それから原書は大事にしてあるから如何どうにも氣遣きづかいはない。しらばくれて奥平壹岐おくだいらいきの家さざに行こて、「誠に難有ありがと」ございます。お蔭で始めてこんな兵書を見ました。斯う云う新舶來の原書が翻訳しかにでもなりましたら、嘸さざマア海防家には有益の事うあります。併しこんな結構なものは貧書生の手に得らるゝものでない。有難ありがとうございました。返上致いたすしますと云いて奇麗に済よんだのは嬉しかつた。この書を写すに幾日かあいだつたか能く覚えないが、何でも二十日以上三十日足らずの間に写して仕舞しまうて、原書の主人に毛頭もうとう疑うような顔がんしょく色もなく、マンマとその宝物ほうもつの正

味ようみをぬすとつて私の物にしたのは、惡漢わるものが宝藏いっに忍び入ただ。

医家に砲術修業の願書その時に母が、「お前は何をするのか。そんなに毎晩夜よを更かして碌ろくに寝ねもしないじやないか。何の事だ。風邪かぜでも引くと宜よくない。勉強にも程のあつたものだと喧やかましく云う。「なあに、おツ母かさん、大丈夫だ。私は写本をして居るのです。この位くらいの事で私の身体からだは何ともなるものじやない。御安心下さい。決して煩わざらいはしませぬと云うたことがありましたが、ソレカラ愈いよいよ大阪に出ようとすると、茲こに可笑おかしい事がある。今度出るには藩に願書を出さなければならぬ。可笑おかしいとも何とも云いようがない。是れまで私は部屋へや住すみだから外ほかに出でるからと云て届とどけも

願も要らぬ、颶々と出入したが、今度は仮初にも一家の主人であるから願書を出さなければならぬ。夫れから私は兼て母との相談が済んで居るから、叔父にも叔母にも相談は要りはしない。出抜けに蘭学の修業に参りたいと願書を出すと、懇意なその筋の人があなた知らせて呉れるに、「それはイケない。蘭学修業と云うことは御家に先例のない事だと云う。「そんなら如何すれば宜いかと尋ねば、「左様さ。砲術修業と書いたならば済むだらうと云う。「けれども緒方と云えば大阪の開業医師だ。お医者様の処に鉄砲を習いに行くと云うのは、世の中に余り例のない事のように思われる。是れこそ却て不都合な話ではござらぬか。「いや、それは何としても御例のない事は仕方がない。事実相違しても宜よろ

しいから、矢張り砲術修業でなければ済まぬと云うから、「工一
宣しい。如何でも為ましようと云て、ソレカラ 私儀 大阪表緒
方洪庵の許に砲術修業に罷越したい云々と願書を出して聞
き済になつて、大阪に出ることになつた。大抵当時の世の中の
塩梅式が分るであろう、と云うのは是れは必ずしも中津一藩に
限らず、日本国中悉く漢学の世の中で、西洋流など云うことは仮
りそめ 初にも通用しない。俗に云う鼻掴みの世の中に、唯ペルリ渡
来の一条が人心を動かして、砲術だけは西洋流儀にしなければな
らぬと、云わば一線の血路が開けて、ソコで砲術修業の願書で
穩に事が済んだのです。

母の病氣願が済んで愈よ船に乗て出掛けようとする時に母の病氣、
おだやか ねがい のつ

誠に困りました。ソレカラ私は一生懸命、此の医者を頼み彼の医者に相談、様々に介抱した所が虫だと云う。虫なれば如何なる薬が一番の良剤かと医者の話を聞くと、その時にはまだサントニー・ネと云うものはない、セメンシーナが妙薬だと云う。この薬は至極価の高い薬で田舎の薬店には容易にない。中津に只た一軒あるばかりだけれども、母の病気に薬の価が高いの安いのと云て居られぬ。私は今こそ借金を払つた後でなげなしの金を何でも二朱かい歩出して、そのセメンシーナを買って母に服用させて、其れが利いたのか何か分らぬ、田舎医者の言うことも固より信ずるに足らず、私は唯運を天に任せて看病大事と昼夜番をして居ましたが、幸に難症でもなかつたと見えて日数凡そ二週間ばかりで快くなりまし

たから、愈よ大阪へ出掛けと日を定めて、出立のとき別を惜しみ無事を祈つて呉れる者は母と姉とばかり、知人朋友、見送は扱置き見向く者もなし、逃げるようにして船に乗りました。が、兄の死後、間もなく家財は残らず売払うて諸道具もなければ金もなし、赤貧洗うが如くにして、他人の来て訪問して呉れる者もなし、寂々寥々、古寺見たような家に老母と小さい姪とタツタ二人残して出て行くのですから、流石磊落書生も是れには弱りました。

先生の大恩、緒方の食客となる船中無事大阪に着たのは宜しいが、唯生きて身体が着た計りで、扱て修業をすると云う手当は何もない。ハテ如何したものかと思た所が仕方がない。何しろ先生の処

へ行てこの通り言おうと思て、夫から、大阪着はその歳の十一月頃と思う、その足で緒方おがたへ行て、「私は兄の不幸、斯うく云う次第で又また出て参りましたと先ず話をして、夫から私は先生だからほんとうの親と同じ事で何も隠すことはない、家の借金の始末、家財を売払うた事から、一切万事何もかも打明けて、彼の原書写本の一条まで真実を話して、「実は斯う云う築城書をうちあ盜ぬすみうつ写そしてこの通り持もつて参りましたと云た所が、先生は笑て、「爾そうか、ソレは一寸との間に怪しからぬ悪い事をしたような又善い事をしたような事じや。何は扱置さておき貴様は大造たいそう見違えたように丈夫になつた。「左様さようで御在ます。身体からだは病後ことしですけれども、今歳の春大層たいそう御厄介になりましたその時の事はモウ覚えませぬ。元の通

り丈夫になりました。「それは結構だ。ソコデお前は一切聞いて見ると如何しても学費のないと云うことは明白に分つたから、私が世話ををして遣りたい、けれども外の書生に対しても何かお前一人に巔ひいき履はかするようになつては宜よくない。待まつてく。その原書は面白い。就つては乃公おれがお前に云付いいつけてこの原書を訳させると、斯こう云いうことに仕しよう、そのつもりで居いなさいと云いて、ソレカラ私は緒方の食客しょっかくせい生せいになつて、医者うちの家だから食客生と云うのは調合所の者より外ほかにありはしませぬが、私は医者でなくて只ただ翻訳と云う主義で医家の食客生になつて居るのだから、その意味は全く先生と奥方との恩恵好意のみ、実際に翻訳はしてもしなくても宜よいのであるけれども、嘘から出た誠で、私はその原書を翻訳して仕舞しまい

ました。

書生の生活酒の悪癖私は是れまで緒方の塾に這入らずに屋敷から通つて居たのであるが、安政三年の十一月頃から塾に這入て内塾生となり、是れが抑も私の書生生活、活動の始まりだ。元来緒方の塾と云うものは眞実日進々歩主義の塾で、その中に這入て居る書生は皆活潑有為の人物であるが、一方から見れば血氣の壯年、乱暴書生ばかりで、中々一筋縄でも二筋縄でも始末に行かぬ人物の巣窟、その中に私が飛込で共に活潑に乱暴を働いた、けれども又自から外の者と少々違つて居ると云うことともお話しなければならぬ。先ず第一に私の悪い事を申せば、生來酒を嗜むと云うのが一大欠点、成長した後には自からその悪い事を知ても、悪

習既すでに性すでにせいを成して自から禁ずることの出来なかつたと云うことも、敢て包み隠さず明白に自首します。自分の悪い事を公けにするは余り面白くもないが、正味しょうみを言わねば事実談にならぬから、先づ一ト通り幼少以来の飲酒の歴史を語りましよう。抑そもそもも私の酒癖しづへきは、年齢の次第に成長するに従て飲覚え、飲慣れたと云うでなくして、生れたまゝ物心ものごころの出来た時から自然に数寄すきでした。今に記憶して居る事を申せば、幼少の頃、月代さかいきを剃そつるとき、頭の盆ぼんの窪くぼを剃ると痛いから嫌がる。スルト剃そつて呉れる母が、「酒ぱかを給たべさせるから此處ここを剃らせろ」と云うその酒ぱかが飲みたさ計りに、痛いのを我慢して泣かずに剃らして居た事は幽かすかに覚えて居ます。天性の悪癖、誠に愧はすべき事です。その後、次第に年を重ねて弱

冠に至るまで、外に何も法外な事は働くはず行状は先ず正しい積りでしたが、俗に云う酒に目のない少年で、酒を見ては殆んど廉恥を忘れるほどの意氣地なしと申して宜しい。

ソレカラ長崎に出たとき、二十一歳とは云いながらその実は十九歳余り、マダ丁^{ていねん}年にもならぬ身で立派な酒^{しゅかく}客^{ただ}、唯飲みたくて堪^{たま}らぬ。所が兼ての宿願を達して学問修業とあるから、自分の本心に訴えて何としても飲むことは出来ず、滞留一年の間^{あいだ}、死んだ気になつて禁酒しました。山本先生の家^{うち}に食^{しょつかく}客^{中も}、大きな宴会でもあればその時に盗んで飲むことは出来る。又錢^{ぜに}さえあれば町に出て一寸^{ちょい}と升^{ます}の角から遣^やるのも易いが、何時か一度は露^ろ顕^{けん}すると思^{おもつ}て、トウ^{辛抱}^{しんぱう}して一年の間^{あいだ}、正体を現わさずに、

翌年の春、長崎を去て諫早に来たとき始めてウント飲んだ事が
 ある。その後程経て文久元年の冬、洋行するとき、長崎に寄港し
 て二日ばかり滯在中、山本の家を尋ねて先年中の礼を述べ、今度
 洋行の次第を語り、そのとき始めて酒の事を打明け、下戸とは偽
 り実は大酒飲おおざけのみだと白状して、飲んだも飲んだか、恐ろしく飲ん
 で、先生夫婦を驚かした事を覚えて居ます。

血に交わりて赤くならずこの通り幼少の時から酒が数寄すきで酒の為ため
 めには有らん限りの悪い事をして随分不養生おかも犯しましたが、又
 一方から見ると私の性質として品行は正しい。是れだけは少年時
 代、乱暴書生まじわに交つても、家を成して後のち、世の中に交際しても、
 少し人に変つて大きな口が利かれる。滔々とうとうたる濁水どろみず社会にチ

ト変人のように窮屈なようにあるが、左ればとて實際浮氣な花柳談と云うことは大抵事細に知て居る。何故と云うに他人の夢中になつて汚ない事を話して居るのを能く注意して聞いて心に留めて置くから、何でも分らぬことはない。例えば、私は元来囲碁を知らぬ、少しも分らなければれども、塾中の書生仲間に囲碁が始まると、ジャ／＼張り出で巧者なことを云て、ヤア黒のその手は間違いだ、夫れ又やられたではないか、油断をすると此方の方があぶなつち方方が危いぞ、馬鹿な奴だあれを知らぬかなどゝ、宜い加減にしゃべ饒舌れば、書生の素人しろうとの拙囲碁へたごで、助言じよげんは固よより勝手次第で、どつち何方が負けそなと云う事は双方の顔色かおいろを見て能く分わかるから、勝つ方の手を誉めて負ける方を悪くさえ云えば間違ひはない。ソコ

デ私は中々囮碁が強いように見えて、「福澤一番遣やろうかと云わ
れると、「馬鹿云うな、君達を相手にするのは手間潰てまつぶしだ、そん
な暇ひまはないと、高くとまつて澄すまし込んで居るから、いよじよく上じょう
手てのようと思われて凡およそ一年ばかりは胡摩化ごまかして居たが、何か
の拍子ひょうしにツイ化ばけの皮が現われて散々罵さんざんされたことがある、
と云うようなもので、花柳社会の事も他人の話を聞きその様子を
見て大抵こまかに知して居る、知して居ながら自分一身は鉄石てつせきの如
く大丈夫である。マア申せば血に交わりて赤くならぬとは私の事
でしよう。自分でも不思議のようにあるが、是れは如何どうしても私
の家の風ふうだと思います。幼少の時から兄弟五人、他人まぜずに母
に育てられて、次第に成長しても、汚ない事は仮初かりそめにも蔭かげにも

ひなた 日向にも家中で聞いたこともなければ話した事もない。清淨 きい しょうじょう 潔白、おのず 自から同藩普通の家族とは色を異にして、ソレカラ家を去 さつ て他人に交わつても、その風をチャント守て、別に慎むでもない、
 あたりまえ 当然な事だと思て居た。ダカラ緒方の塾に居るその間も、遂
 まえ ぞ茶屋遊をするとか云うような事は決してない、と云いながら
 前にも云う通り何も偏屈で夫れを嫌つて恐れて逃げて廻つて蔭で
 理屈らしく不平な顔をして居ると云うような事も頓としない。遊
 廊の話、茶屋の話、同窓生と一処になつてドシ／＼話をして
 問答して、そして私は夫れを又冷かして、「君達は誠に野暮な奴
 だ。茶屋に行つてフラレ来ると云うような馬鹿があるか。僕は登
 うろう 楼は為ない。為なけれども、僕が一度び奮發して樓に登れば、
 ひとたと

君達の百倍もて被待て見せよう。君等のようなソンナ野暮な事をする
 なら止よして仕舞え。ドウセ登樓などの出来がらそうな柄いなかでない。田
 舎者ものめが、都會に出て来て茶屋遊の ABC を学んで居るなんて、
 ソンナ鈍いことでは生涯役に立たぬぞと云うような調子で哦鳴り
 回つて、實際に於おいてその哦鳴る本人は決して浮氣でない。ダカラ
 人が私を馬鹿にすることは出来ぬ。能く世間にある徳行の君子な
 んて云う学者が、ムヅよしてシント考すえて、他人の為ることを
 悪い／＼と心の中で思て不平を呑のんで居る者があるが、私は人の言
 行を見て不平もなければ心配もない、一緒に戯たわぶれて酒蛙しゃあしゃあ
 て居るから却かえつて面白い。

書生を懲らしめる酒の話は幾らもあるが、安政二年の春、始めて

長崎から出て緒方の塾に入門したその即日そくじつに、在塾の一書生が始めて私に遇て云うには、「君は何處どこから来たか。」「長崎から來たと云うのが話の始まりで、その書生の云うに、「爾そうか、以来は懇親にお交際つきあいしたい。就ては酒を一献酌いつこんくもうではないかと云うから、私が之に答えて、「始めてお目に掛かかて自分の事を云うようであるが、私は元来の酒客しゅかく、然かも大酒たいしゆだ。一献酌もうとは有あり難がたい、是非ぜひお供致ともいたしたい、早速さつそくお供致したい。だが念の為めに申して置くが、私には金はない、実は長崎から出て未たばかりで、塾で修業するその学費さえ甚だ怪しい。有るか無いか分らない。矧や酒を飲むなど、云う金は一錢もない。是れだけは念の為めにお話して置くが、酒を飲みにお誘さそいとは誠に辱かたじけない。是

非お供致そうと斯う出掛けた。所がその書生の云うに、「そんな馬鹿げた事があるものか、酒を飲みに行けば金の要るのは当然の話だ。夫ればかりの金のない筈はないじゃないかと云う。

「何と云われても、ない金はないが、折角飲みに行こうと云うお誘だから是非行きたいものじやと云うのが物分れでその日は仕舞い、翌日も屋敷から通つて塾に行ってその男に出遇い、「昨日のお話は立消になつたが、如何どうか。私は今日も酒が飲みたい連れて行つて呉れないか、どうも行きたいと此方から促した処が、馬鹿云うなど云うような事で、お別れになつて仕舞た。

ソレカラ一月経ち二月、三月経つて、此方もチヤント塾の勝手を心得て、人の名も知れば顔も知ると云うことになつて当り

前に勉強して居る。あるひ一日その今の男を引捕ひつかまえた。引捕まえて面談、「お前は覚えて居るだろう、乃公が長崎から来て始めて入門したその日に何と云い、酒を飲みに行こうと云たじやないか。その意味は新入生と云うものは多少金がある、之を誘さそいだ出して酒を飲もうと斯う考かんがえだろう。言わざとも分て居る。彼の時に乃公が何と云た、乃公は酒は飲みたくて堪たまらないけれども金がないから飲むことは出来ないと刎はねつけて、その翌日は又此方こっちから促した時に、お前は半句の言葉もなかつたじやないか。能く考えて見ろ。憚はばかなら諭吉だからその位に強く云たのだ。乃公はその時は自から決する処があつた。お前が愚図ぐずぐず々々云うなら即席に叩たたき倒たおして先生の処に引ひきずつ摺ひきすつて行つて遣らうと思つたその決心が顔がんし

よくあらわに顯れて怖かつたのか何か知らぬが、お前はどうもせずに引ひ込こんで仕舞た。如何にしても済まない奴だ。斯う云う奴のあるのは塾の為めには獅子身中の中の虫と云うものだ。こんな奴が居て塾を卑劣にするのだ。以来新入生に遇て仮初にも左様な事を云うと、乃公は他人の事とは思わぬぞ。直ぐにお前を捕まえて、誰とも云わらず先生の前に連れて行て、先生に裁判して貰うが宜しいか。心得て居ろと酷く懲しめて遣た事があつた。

塾長になるその後私の学問も少しは進歩した折柄おりから、先輩の人は國に帰る、塾中無人にて遂に私が塾長になつた。扱塾長になつたからと云て、元來の塾風で塾長に何も権力のあるではなし、唯塾中一番六むずかしい原書を会かいどく読するときその会かいとう頭を勤める位のこ

とで、同窓生の交際^{つきあい}に少しも軽^{けい}じゅう重^{じゆう}はない。塾長殿も以前の通りに読書勉強して、勉強の間^{あいだ}にはあらん限りの活動ではないどうかと云^いえば先^まづ乱暴をして面白がつて居ることだから、その乱暴生が徳義を以て人を感化するなど云う鹿^{しかつめ}爪^{つめ}らしい事を考^える詰^わけもない。又塾風を善^よくすれば先生に對しての御奉公、御恩^{ごおんほ}報^うじになると、そんな老人めいた心のあろう筈^{はず}もないが、唯私^{かりそめ}の本来仮^{かり}初^{はじ}にも弱い者いじめをせず、仮初にも人の物を貪^{むさぼ}らず、人の金を借用せず、唯の百文^{ひやくもん}も借りたることは無いその上に、品行は清^{しうう}潔^{じょう}白にして俯仰^{ふぎよう}天地に愧^はずと云う、自から外の者と違う處があるから、一緒になつてワイ^{／＼}云て居ながら、マア一口^{ひとくち}に云^えば、同窓生一人も残らず自分の通りになれ、又自

分の通りにして遣^やろうと云うような血氣の威張りであつたろうと今から思うだけで、決して道徳とか仁義とか又大恩^{だいおん}の先生に忠義とか、そんな奥ゆかしい事は更^さに覚えはなかつたのです。併^{しか}し何でも爾^そう威張り廻つて暴れたのが、塾^たの為めに悪い事もあるう、又自^{おのず}から役に立^{たつ}たこともあるだらうと思う。若し役に立て居れば夫^もれは偶然で、決して私の手柄でも何でもありはしない。

緒方の塾風

左様^{そよう}云^いえば何か私が緒方塾の塾長で頻りに威張^{いぱつ}て自然に塾^{ふう}の風^{ふう}を矯^{きょうせい}正^せしたように聞^{きこ}ゆるけれども、又一方から見れば酒を飲

むことでは随分塾風を荒らした事もあるうと思う。塾長になつて
 も相替らず元の貧書生なれども、その時の私の身の上は、故郷
 に在る母と姪と二人は藩から貰う少々ばかりの家祿で暮して居る、
 私は塾長になつてから 表向に先生家の賄を受けて、その上に
 新書生が入門するとき先生家に 束脩を納めて同時に塾長へも
 金貳朱を呈すと規則があるから、一箇月に入門生が三人あれば塾
 長には一分二朱の収入、五人あれば二分二朱にもなるから 小遣
 錢には沢山で、是れが大抵酒の代になる。衣服は国の母が
 手織木綿の品を送て呉れて夫れには心配がないから、少しでも手て
 許に金があれば直に飲むことを考える。是れが為めには同窓生の中
 で私に誘われてツイ／＼飲だ者も多かろう。扱その飲みようも

至極お租末、殺風景で、錢の乏しいときは酒屋で三合か五合買ぜに来て来て塾中でひとり飲む。夫れから少し都合の宜い時には一朱か二朱以て一寸と料理茶屋に行く、是れは最上の奢で容易に出来兼ねるから、先ず度々行くのは鶏肉屋、夫れよりモツト便利なのは牛肉屋だ。その時大阪中で牛鍋を喰わせる処は唯二軒ある。一軒は難波橋の南詰、一軒は新町の廓の側にあつて、最下等の店だから、凡そ人間らしい人で出入する者は決してない。文身だらけの町の破落戸と緒方の書生ばかりが得意の定客だ。どこの事には頓着なし、一人前百五十文ばかりで牛肉と酒と飯と十分の飲食であつたが、牛は随分硬くて臭かつた。

塾生裸体當時は士族の世の中だから皆大小は挟して居る、けれども内塾生ないじゅくせい五、六十人の中で、私は元来物を質入れしたことがないから、双刀そうとうはチャント持もつて居るその外、塾中に二腰か三腰みもあつたが、跡は皆質に置おいて仕舞しまつて、塾生ほかの誰か所持して居るその刀あたかが恰も共有物で、是れでも差支さしつかえのないと云うは、銘めいめ々倉屋敷くらやにでも行くときに一本挟すばかりで、不斷は脇差わきざし一本、たゞ丸腰にならぬ丈けの事であつたから。夫れから大阪は暖あつたかい処だから冬は難渋な事はないが、夏は眞実の裸体はだか、褲ふんどしも襦袢じゆばんも何もない真裸体まっぶだか。勿論飯を喫ひつかう時と会かいどく読おのづをする時には自から遠慮するから何か一枚ちよいと引掛ける、中にも紹の羽織ふうろ真裸体の上に着てる者が多い。是れは余程おかしな風ふうで、今の人

が見たら、さぞ笑うだろう。食事の時には逆も座つて喰うなんと云うことは出来た話でない。足も踏立てられぬ板敷だから、皆上草履を穿て立て喰う。一度は銘々に別けてやつたこともあるけれども、爾うは続かぬ。お鉢が其処に出してあるから、銘々に茶碗に盛て百鬼立食。ソンナ訳けだから食物の価も勿論安い。お菜は一六が葱と薩摩芋の難波煮、五十が豆腐汁、三八が蜆汁と云うようになつて居て、今日は何か出ると云うことは極つて居る。

裸体の奇談失策裸体の事に就いて奇談がある。或る夏の夕方、私共五、六名の中に飲む酒が出来た。すると一人の思付に、この酒を彼の高い物干の上で飲みたいと云うに、全会一致で、サア

屋根づたいに持出もちだそうとした処が、物干の上に下婢げじよが三、四人涼りょうんで居る。是れは困こまつた、今彼處で飲むと彼奴等あそこのやつらが奥さきに行いて何か饒じし舌やべるに違ちいない、邪魔な奴やつじやと云う中に、長州生せいに松岡勇記まつおかゆうきと云う男がある。至極しじく元氣の宜い活潑な男で、この松岡の云うに、僕が見事に彼あの女共めぐみを物干から逐おいはらつ払ぱて見せようと云いながら、真裸体まっぴだかで一人ツカくと物干ものいしに出て行き、お松まつどんお竹たけどん、暑いじやないかと言葉を掛けて、そのまゝ傾向あおむきに大の字なりに成なつて倒たれた。この風體ふうたいを見ては流石さすがの下婢げじよも其處そこに居ゐることが出来ぬ。氣の毒いたずらそうな顔がほをして皆下りて仕舞しまつた。すると松岡が物干の上から蘭語らんごで上首尾のん早く來くいと云う合図あいじょに、塾部屋の酒さけを持出もちだして涼しく愉快に飲のんだことがある。

又或るときは私は私の大失策、或る夜私が二階に寝て居たら、下から女の声で福澤さんくと呼ぶ。私は夕方酒を飲んで今寝たばかり。うるさい下女だ、今ごろ何の用があるかと思うけれども、呼べば起きねばならぬ。夫れから真裸体で飛起て、階子段を飛下りて、何の用だとふんばたかつた所が、案に相違、下女ではあらで奥さんだ。何うにも斯うにも逃げようにも逃げられず、真裸体で座つてお辞儀も出来ず、進退窮して實に身の置処が無い。奥さんも氣の毒だと思われたのか、物をも云わず奥の方に引込で仕舞た。翌朝御託に出て昨夜は誠に失礼仕りましたと陳べる訳けにも行かず、到頭末代御挨拶なしに済で仕舞た事がある。是ばかりは生涯忘ることが出来ぬ。先年も大阪に行つて

緒方の家を尋ねて、この階子段^{はしこだん}の下だつたと四十年前^{ぜん}の事を思
出して、独り心の中で赤面しました。

不潔に頓着せず塾員は不規則と云わんか不整頓と云わんか乱暴狼^{ろう}
藉^{うぜき}、丸で物事に無頓着^{むとんじやく}。その無頓着の極^{きよく}は世間で云うように潔
不潔、汚ないと云うことを気に止めない。例えば、塾の事である
から勿論桶^{もちろんおけ}だの丼^{どんぶり}だの皿^{さら}などの、あろう筈^{はず}はないけれども、緒
方の塾生は学塾の中に居ながら七輪^{しちりん}もあれば鍋もあつて、物を
煮て喰うと云うような事を不斷^{やつ}遣て居る、その趣^{おもむき}は恰^{あたか}も手鍋^{じよた}世
帶^{まわり}の台所見たような事を机の周囲^{まわり}で遣て居た。けれども道具の
足ると云うことのある筈はない。ソコで洗手^{ちようす}鹽^{だらい}も金^{かな}鹽^{だらい}
も一切食物^{しょくもの}調理の道具になつて、暑中など何處からか素^そ麵^{めん}

を貰うと、その素麺を奥の台所で湯煮ゆでて貰うて、その素麺を冷すには、毎朝、顔を洗う洗手盥もつを持って来て、その中で冷素麺にして、汁つゆを搾こしらえるに調合所の砂糖でも盗み出せば上出来、その外ほか肴さかなを搾こしらえるにも野菜を洗うにも洗手盥は唯一のお道具で、ソンナ事は少しも汚ないと思わなかつた。

夫れ所ではない。虱しらみは塾中永住の動物で、誰だれ一人も之これを免かまぬることは出来ない。一寸ちよいと裸体はだかになれば五疋ごひきも十疋じそくも捕とるに造ぞ作うさはない。春先はるさき少し暖氣はいだになると羽織の襟に匍出はいだすことがある。

或ある書生の説に、ドウダ、吾々われわれの虱しらみは大阪の焼芋に似て居る。
冬中ふゆじゆうが真盛まっさかりで、春になり夏になると次第に衰えて、暑中ひつこ月蚤のみと交代して引込み、九月頃しんいも新芋しんいもが町に出ると吾々

の虱も復^また出て来るのは可笑しいと云^{いつ}た事がある。私は一案を工^く
 風し、抑^そも虱を殺すに熱湯を用うるは洗濯^{せんたく}婆^{ばば}の旧筆法で面白
 くない、乃公^{おれ}が一発で殺して見せようと云て、嚴冬^{じゆうとう}の霜夜に襦^{じゆば}
 衿^{ふくろ}を物^{もの}干^{ほし}に洒^{さら}して虱の親も玉子も一時に枯らしたことがある。
 この工風^{やつ}は私の新發明ではない、曾^{かつ}て誰^だかに聞^{きい}たことがあるから遣^{やつ}て見たのです。

豚を殺すそんな訳けだから塾中の書生に身なりの立派な者は先ず
 少ない。そのくせ市中の縁日など云^いえば夜分屹度^{きつと}出て行く。行く
 と往来の群集、就^{なかんずく}中^よ娘の子などは、アレ書生が來たと云て脇
 の方に避けるその様子は、何か穢多^{しがた}でも出て来て夫れを穢^{きた}ながる
 ようだ。如何^{どう}も仕方^{しかた}がない。往来の人から見て穢多のようと思う

筈だ。或るとき難波橋の吾々得意の牛鍋屋の親爺が豚を買出して来て、牛屋商売であるが氣の弱い奴で、自分に殺すことが出来ぬからと云て、緒方の書生が目指された。夫れから親爺に逢て、「殺して遣るが、殺す代りに何を呉れるか」——「左様ですな」——「頭を呉れるか」——「頭なら上げましょう。」夫れから殺しに行た。此方は流石に生理学者で、動物を殺すに窒塞されれば詰けはないと云うことを知て居る。幸いその牛屋は河岸端であるから、其処へ連て行て四足を縛て水に突込で直ぐ殺した。そこでお礼として豚の頭を貰つて来て、奥から鉈を借りて来て、先ず解剖的に脳だの眼だの能くく調べて、散々いじくつた跡を煮て喰たことがある。是れは牛屋の主人から穢多のように見込

れたのでしよう。

熊の解剖それから又或時あるときには斯こう云いう事ことがあつた。道修町どしょうまちの薬種屋やくしゅやに丹波か丹後から熊が来たと云う触ふれこ込み。或る医者の紹介で、後学こうがくの為め解剖を拝見致したいから誰か来て熊を解剖して呉くれぬかと塾じゅくに云いて來きたた。「それは面白い」。當時緒方の書生は中々解剖と云うことに熱心であるから、早速さつそく行ゆて遣わろうと云うので出掛けでかけて行く。私は医者でないから行かぬが、塾生中七、八人行きました。夫それから解剖して是これが心臓かみがえでは是これが肺かん、是これが肝かんと説明して遣わた所ところが、「誠に有難ありがたい」と云いて薬種屋も医者もふつと帰しまつって仕舞仕舞た。その実は彼等の考かんがえに、緒方の書生に解剖して貰むきずえば無疵くまのいに熊胆くまの膽が取とれると云いうことを知して居ゐるものだから、

解剖に託して熊胆くまのみが出るや否や帰て仕舞たと云う事がチャンと
わかつ 分たから、書生さん中々なかはつたろう了りょうけん簡かんしない。是れは一番こねくつて
遣ろうと、塾中の衆議一決、直にそれ／＼掛りの手分けてわをした。

塾中に雄弁滔とうとう々よと能く喋しゃべつ舌したて誠に剛情なシツコイ男がある、

田中発太郎たなかはつたろう（今は新吾しんごと改名して加賀金沢に居る）と云う、是

れが応接掛おうせつがかり、それから私が掛け合かけあい手紙の原案者で、信州飯山
から来て居る書生で菱湖風りょうこふうの書を善く書く沼田芸平ぬまたうんぺいと云う男
が原案の清書する。夫れから先方へ使者そに行くのは誰れ、脅迫す
るのは誰れと、どうにも斯うにも手に余る奴ばかりで、動もすれ
ば手短てみじかに打毀うちこわしに行くと云うような風ふうを見せる奴もある。又
彼方あちらから来れば捏こねくる奴が控えて居る。何でも六、七人手勢てぜいを揃そろ

えて拈込で、理屈を述べることは筆にも口にも隙はない。応接掛りは不斷の真裸体に似ず、袴羽織にチャント脇差を挾して緩急剛柔、ツマリ学医の面目云々を楯にして剛情な理屈を云うから、サア先方の医者も困て仕舞い、そこで平あやまりだと云う。只謝るだけで済めば宜いが、酒を五升に鷄と魚か何かを持て来て、それで手を拍て塾中で大に飲みました。

芝居見物の失策それに引換えて此方から取られたことがある。道頓堀の芝居に与力や同心のような役人が見廻りに行くと、スツト桟敷に通て、芝居の者共が茶を持って来る菓子を持って来るなどして、大威張りで芝居をたゞ見る。兼てその様子を知て居るから、緒方の書生が、気味の悪い話サ、大小を挾して宗十郎頭

巾を冠て、その役人の真似をして度々行つて、首尾能く芝居見物して居た。所が度重なれば顕われるの諺に洩れず、或る日、本人ものが来た。サア此方は何とも云われないだらう、詐欺だから、役人を偽造したのだから。その時はこねくられたとも何とも、進退谷まり大騒ぎになつて、夫れから玉造の与力に少し由縁を得て、ソレに泣付て内済を頼で、ヤツト無事に収まつた。そのとき酒を持て行たり肴を持て行たりして、何でも金にして三歩ばかり取られたと思う。この詐欺の一件は丹後宮津の高橋順益と云う男が頭取であつたが、私は元来芝居を見ない上に、この事を不安心に思うて、「それは余り宜くなからう、マサカの時は大変だからと云たが肯ない。「何に訳けはない、自から方便

ありなんてヅウ／＼しく遣て居たが、とう／＼捕まつたのが可笑しい所か一時大心配をした。

喧嘩の真似それから時としては斯う云う事もあつた。その乱暴さ加減は今人の思寄らぬことだ。警察がなかつたから云わば何でも勝手次第である。元来大阪の町人は極めて臆病だ。江戸で喧嘩をすると野次馬やじうまが出て来て滅茶苦茶にして仕舞しまうが、大阪では野次馬は迎ても出て来ない。夏の事で夕方飯めしを喰てブラ／＼出て行く。もうしあわせ申合あわせをして市中で大喧嘩の真似をする。お互に痛くないよう^そに大造たいぞうな剣幕で大きな声で怒鳴どなつて掴合つかみあい打合うちあうだろう。爾うするとその辺の店はバタ／＼片付けて戸を締めて仕舞ひつうて寂りとなる。喧嘩と云いた所が唯それだけの事で外に意味はない。そ

の法は同類が二、三人ずつ分れて一番繁昌な賑やかな処で双方から出逢うような仕組にするから、賑やかな処と云えば先ず遊廓の近所、新町九軒の辺で常極りに遣て居たが、併し余り一箇所で遣て化の皮が顯れるとイカヌから、今夜は道頓堀で遣ろう、順慶町で遣ろうと云て遣たこともある。信州の沼田芸平などは余ほど喧嘩の上手であった。

弁天小僧それから一度は斯う云う事があつた。私と先輩の同窓生で久留米の松下元芳と云う医者と二人連で、御靈と云う宮地に行て夜見世の植木を冷かしてゐる中に、植木屋が、「旦那さん悪さをしてはいけまへんと云たのは、吾々の風体を見て万引きをしたと云う意味だから、サア了簡しない。丸で弁天小僧見

たように拈縲ねじくりかえ返した。「何でもこの野郎を打殺うちころして仕舞え。
理屈を云わずに打殺して仕舞えと私が怒鳴る。松下は慰めるよう
な風ふうをして、「マア殺さぬでも宜いぢやないか。」「ヤア面倒めんどうだ、
一打に打殺うちころして仕舞うから止めなさんなど、夫れ是れする中
に往来の人は黒山のようになつて来たから、此方こ
方は尚お面白がつて威張いばつて居ると、御靈の善哉屋ぜんざいやの餅搗もちつきか何
かして居る角力取すもうとりが仲裁に這入はいって来て、「どうか宥ゆるして遣やつて下
さいと云うから、「よし貴様が中に這入はいれば宥やして遣しかる。併し明
日の晩此處に見世を出すと打殺ころして仕舞うぞ。折角中に這入はいったか
ら今夜は宥ここして遣やるからと云て、翌晩行いって見たら、正直な奴だ、
植木屋の処だけ土場見世どばみせを休んで居た。今のように一寸ちよいとも警察

と云うものがなかつたから乱暴は勝手次第、けれども存外に悪い事をしない、一寸この植木見世位ぐらいみの話で実のある悪事は決してしない。

チボと呼ばれる私が一度大に恐れたことは、是れも御靈ごりょうの近処で上方かみがたに行われる砂持すなもちと云う祭礼のような事があつて、町中まちじゆうの若い者が百人も二百人も灯籠とうろうを頭に掛けてヤイヽ云て行列をして町を通る。書生三、四人して之これを見物して居る中に、私が如何いう氣であつたか、何れ酒の機嫌いきわでしよう、杖つえか何かでその頭の灯籠ぶつちおとを打落やつして遣た。スルトその連中れんじゆうの奴やつと見える。チボじやくと怒鳴り出した。大阪でチボ（スリ）と云えば、理非わかを分たず打殺して川に投り込む習ならわしから、私は本当に怖

かつた。何でも逃げるに若かずと覚悟をして、跣になつて堂島の方に逃げた。その時私は脇差を一本挟して居たから、若し追付かるようになれば後向で進で斬るより外仕方がない。斬ては誠に不味い。仮初にも人に疵を付ける了簡はないから、唯一生懸命に駆けて、堂島五丁目の奥平の倉屋敷に飛込でホツト呼吸をした事がある。

無神無仏又大阪の東北の方に葭屋橋あしやばしと云う橋があるその橋手前の処を築地と云て、在昔は誠に如何な家ばかり並んで居て、マア待合まちあいをする地獄屋とでも云うような内実穢きたない町であつたが、その築地の入口の角に地蔵様か金比羅様か知らん小さな堂がある。中々繁昌の様子で、其処に色々な額がくが上げてある。或は男女の拌そこあるいは

んである処が描いてある、何か封書が順に貼付けてある、又は髻が
 切て結い付けてある。夫れを昼の中に見て置て、夜になるとその
 封書や髻のあるのを引きらえて塾に持て帰て開封して見ると、種
 々様々の願が掛けてあるから面白い。「ハ、ア是れは博奕を打
 た奴が止ると云うのか。是れは禁酒だ。是れは難船に助かつたお
 礼。此方のは女狂にこりくした奴だ。夫れは何歳の娘が妙
 な事を念じて居るなど、唯それを見るのが面白くて毎度遣た事
 だが、兎に角に人の一心を籠めた祈願を無茶苦茶にするとは罪の
 深いことだ。無神無仏の蘭学生に逢ては仕方がない。

遊女の贋手紙夫れから塾中の奇談を云うと、そのときの塾生は大
 いてい抵みな医者の子弟だから、頭は坊主か総髪で国から出て来る

けれども、大阪の都会に居る間は半髪になつて天下普通の武家の風がして見たい。今の真宗坊主が毛を少し延ばして当前の断髪の真似をするような訳けで、内実の医者坊主が半髪になつて刀を挟して威張るのを嬉しがつて居る。その時、江戸から来て居る手塚と云う書生があつて、この男は或る徳川家の藩医の子であるから、親の拝領した葵の紋付を着て、頭は塾中流行の半髪で太刀作の刀を挿てると云う風だから、如何にも見栄があつて立派な男であるが、如何も身持が善くない。ソコデ私が或る日、手塚に向て、「君が本当に勉強すれば僕は毎日でも講釈をして聞かせるから、何は扱置き北の新地に行くことは止しなさいと云たら、当人もその時は何か後悔した事があると見えて「アヽ新地か、今

思出しても「忌だ。決して行かない。」「それなら屹度君に教えて遣やるけれども、マダ疑わしい。行かないと云う証文を書け。

「宜しい如何な事でも書くと云うから、云々今後屹度勉強する、若し違約よもをすれば坊主にされても苦からずと云う証文を書かせて私の手に取て置て、約束の通りに毎日別段に教えて居た所が、その後手塚が真実勉強するから面白くない。斯う云うのは全く此方こつちが悪い。人の勉強するのを面白くないとは怪しからぬ事だけれども、何分興きょうがないから窃そつと両三人に相談して、「彼奴の馴染なじみの遊女は何と云う奴か知ら。「それは直すぐに分わかる、何々という奴。

「よし、それならば一つ手紙を遣やろうと、夫れから私が遊女風の手紙を書く。片言かたことまじ交りに彼等の云いそうな事を並べ立て、何で

も彼の男は無心を云われて居るに相違ないその無心は、屹度麝香きつとじやこを呑うれるとか何とか云われた事があるに違いないと推察して、文句の中に「ソレあのとき役足やくそくのじやこはどておますと云うよ

うな、判じて読まねば分らぬような事を書入れて、鉄川様何々よりと記して手紙は出来たが、併し私の手蹟しきじや不味まづいから長州の松岡勇記まつおかゆうきと云う男が御家流おいえりゆうで女の手に紛らわしく書いて、ソレカラ玄関の取次とりつけをする書生に云含めて、「是れを新地から來たと云て持て行け。併し事實を云えば打撲ぶちなぐるぞ。宜しいかと脅迫して、夫れから取次が本人の処に持て行て、「鉄川と云う人は塾中じゅくちゆうにない、多分手塚君のことゝ思うから持て來たと云て渡した。手紙偽造の共謀者はその前から見え隠がくれに様子うかがを窺うかがうて居た

所が、本人の手塚は一人で頻りにその手紙を見て居る。麝香の無心があつた事か如何か分らないが、手塚の二字を大阪なまりにテツカと云うそのテツカを鉄川と書いたのは、高橋順益の思付で余ほど善く出来てる。そんな事で如何やら斯うやら遂に本人をしやくり出して仕舞たのは罪の深い事だ。二、三日は止まつて居たが果して行たから、ソリヤ締めたと共に謀者は待て居る。翌朝歸て平氣で居るから、此方も平氣で、私が鋏を持って行てひよいと引捕えた所が、手塚が驚いて「どうすると云うから、「どうするも何もない、坊主にするだけだ。坊主にされて今のように立派な男になるには二年ばかり手間が掛るだろう。往生しろ」と云て、髪を捕えて鋏をガチャ／＼云わせると、当人は眞面目に

なつて手を合せて挙む。そうすると共謀者中から仲裁人が出て来て、「福澤、余り酷いじやないか。「何も文句なしぢやないか、坊主になるのは約束だと問答の中に、馴合の中人ちゆうにんが段々取持つような風をして、果ては坊主の代りに酒や鶏にわとりを買わして、一処に飲みながら又冷かして、「お願ひだ、もう一度行くて呉れんか、又飲めるからとワイワイ云たのは随分乱暴だけれども、それが自から切諫になつて居たこともあるう。

御幣担ぎぎを冷かす同窓生あいだの間には色々な事のあるもので、肥後から來て居た山田謙輔やまだけんすけと云う書生は極ごくごく々々の御幣担いかつきで、しの字を言わぬ。その時、今の市川団十郎の親の海老藏えびぞうが道頓堀の芝居に出て居るときで、芝居の話をしてると、山田は海老藏のよばいを

見るなんて云う位くらいな御幣担だから、性質は至極立派な人物だけれども、如何も蘭学書生の気に入らぬ筈だ。何か話の端には之を愚弄して居ると、山田の云うに「福澤々々、君のように無法な事ばかり云うが、マア能く考えて見給え。みたま 正月元日の朝、年札に出掛けた時に、葬礼に逢うと鶴を台に戴せて担かつていで来るのを見ると何方が宜いかと云うから、私は、「夫それは知れた事だ。死人は喰しづわれんから鶴の方が宜い。けれども鶴だつて乃公に喰おれわせなければ死人にんも同じ事だと答えたような塩梅式あんばいしきで、何時も冷ひやかして面白がつて居る中に、或るとき長与専斎ながよせんさいか誰だれかと相談して、彼奴あいつを一番大に遣やつてやろうじやないかと一工風ひとくふうして、当人の不在の間にその硯すずりに紙を巻いて位牌いはいを拵えて、長与の書うまが旨あいだから立派に

何々院何々居士と云う山田の法名を書いて机の上に置て、当人の飯を喰う茶碗に灰を入れて線香を立てゝ位牌の前にチャント供えて置た所が、帰て来て之を見て忌な顔をしたとも何とも、真青になつて腹を立てゝ居たが、私共は如何も怖かつた。若しも短気な男なら切付けて来たかも知れないから。

欺て河豚を喰わせる夫れから又一度遣た後で怖いと思つたのは人をだまして河豚を喰わせた事だ。私は大阪に居るとき颯々と河豚も喰えれば河豚の肝も喰て居た。或る時、芸州仁方から来て居た書生、三刀元寛と云う男に、鯛の味噌漬を貰て來たが喰わぬかと云うと、「有難い、成程宜い味がすると、悦んで喰て仕舞て二時間ばかり経てから、「イヤ可愛」そうに、今喰たのは鯛でも何

でもない、中津屋敷で貰た河豚の味噌漬だ。食物の消化時間は大抵知てるだろう、今吐剤を飲でも無益だ。河豚の毒が嘔かれるなら嘔て見ると云たら、三刀も医者の事だから能く分て居る。サア氣を揉んで私に武者振付くように腹を立てたが、私も後になつて余り洒落に念が入過ぎたと思って心配した。随分間違の生じ易い話だから。

料理茶屋の物を盗む前に云う通り御靈の植木見世で万引と疑われたが、疑われる筈だ、緒方の書生は本当に万引をして居たその万引と云うは、呉服店で反物など云う念の入た事ではない、料理茶屋で飲だ帰りに猪口だの小皿だの色々手ごろな品を窃と盗んで来るような万引である。同窓生互に夫れを手柄のようにして

居るから、送別会など、云う大会のときには穫物えものも多い。中には
 昨夜ゆうべの会で団扇うちわの大きなのを背中に入れて帰る者もあれば、平た
 い大皿おおさらを懷中いはらわし吸物椀すいものわんの蓋ふたを袂たもとにする者もある。又或る奴は、
 君達がそんな半端物はんぱものを挙げて来るのはまだ拙つたない。乃公の獲物
 を拝見し給えと云いて、小皿お皿を十人前そろ揃えて手拭てぬぐいに包んで来たこ
 ともある。今思えば是れは茶屋ぢやでもトックに知して居ながら黙つて
 通して、実はその盗品の勘定も払はらいの内に這入はいって居るに相違ない、
 毎度の事でお極りの盜坊どろぼうだから。

難波橋から小皿お皿を投なげずその小皿お皿に縁のある一奇談は、或る夏の事
 である、夜十時過ぎになつて酒さけが飲みたくなつて、嗚呼ああ飲みたい
 と一人が云いうと、僕も爾そぞうだと云う者が直すぐに四、五人出来た。ところ

がチャント門限があつて出ることが出来ぬから、当直の門番を脅迫して無理に開けさして、鍋島の浜と云う納涼の葭簾張りで、不味いけれども芋蛸汁か何かで安い酒を飲んで、帰りに例の通りに小皿を五、六枚擎げて来た。夜十二時過ぎでもあつたか、難波橋の上に来たら、下流の方で茶船に乗てジヤラく三味線を鳴らして騒いで居る奴がある。「あんな事をして居やがる。此方は百五十か其処辺の金を見付けて漸く一盃飲で帰る所だ。忌々敷い奴等だ。あんな奴があるから此方等が貧乏するのだと云いさま、私の持てる小皿を二、三枚投付けたら、一番仕舞の一枚で三味線の音がertzり止んだ。その時は急いで逃げたから人が怪我をしたかどうかわからなかつた。所が不思議にも一箇月ばかり

経て其たつが能よく分わかつた。塾の一書生が北の新地いっに行こて何處かの席で芸者に逢うたとき、その芸者の話に、「世の中には酷ひどい奴もあら。一箇月ばかり前ぱんの夜に私がお客様と舟で難波橋なにわばしの下で涼んで居たら、橋の上からお皿さらを投げて、丁ちよ度私の三味線ひみせんに中あたつて裏うら表おもての皮はを打抜うちぬきましたが、本当に危ない事で、先ず怪我あわせをせんのが仕合あわせでした。何処どこの奴やつか四、五人連れでその皿さらを投げて置おきて南の方にドン／＼逃さげて行こきました。實に憎にくらしい奴やつもあればあるものと、斯このう／＼芸者が話して居たと云いうのを、私共は夫それを聞いて下手げしゆ人にんにはチャント覚えがあるけれども、云いえば面倒だからその同窓の書生にもその時には隠して置いた。禁酒から煙草又私は酒の爲めに生涯の大損おおぞんをして、その損害は

今日までも身に附つて居ると云うその次第は、緒方おがたの塾に学問修業しながら兔角酒とかくを飲のんで宜よいことは少しもない。是れは済すまぬ事だと思い、恰あだかも一念こゝに発起ほつきしたように断然酒を止めた。スルト塾中の大評判ではない大笑おおわらいで、「ヤア福澤が昨日から禁酒した。コリヤ面白い、コリヤ可笑おかしい。何時まで続くだろう。逆とても十日は持てまい。三日禁酒で明日は飲むに違ひいないなんて冷ひやかす者ばかりであるが、私も中々剛情に辛抱しんぱうして十日も十五日も飲まずに居ると、親友の高橋順益じゅんえきが、「君の辛抱はエライ。能くも続く。見上げて遣やるぞ。所が凡およそ人間の習慣は、仮令たとい悪い事でも頓とんに禁よろすることは宜よろしくない。到底出来ない事だから、君がいよく禁酒と決心したらば、酒の代りに烟草タバコを始めろ。何か

一方に楽しみが無くては叶わぬと親切らしく云う。所が私は烟草が大嫌いで、是れまでも同塾生の烟草を喫むのを散々に悪く云うて、「こんな無益な不養生な訳の分らぬ物を喫む奴の気が知れない。何は扱置き臭くて穢なくて堪らん。乃公の側では喫んで呉れるなんて、愛想づかしの悪口を云て居たから、今になつて自分が烟草を始めるのは如何もきまりが悪いけれども、高橋の説を聞けば亦無理でもない。「そんなら遣て見ようかと云てそろく試ると、塾中の者が烟草を呉れたり、烟管を貸したり、中には是れは極く軽い烟草だと云て態々買って来て呉れる者もあると云うような騒ぎは、何も本当な深切でも何でもない。実は私が不斷烟草の事を悪くばかり云て居たものだから、今度は彼奴を喫煙者

にして遣^やろうと、寄つて掛^かつて私を愚弄^{ぐろう}するのは分つて居るけれども、此^{こつち}方は一生懸命禁酒の熱心だから、忌^{いや}な烟^{けむり}を無理に吹かして、十日も十五日もそろく慣らして居る中に、臭い辛いものが自然に臭くも辛くもなく、段々風味が善くなつて來た。凡そ一箇月ばかり経^{たつ}て本当の喫烟客になつた。処が例の酒だ。何としても忘れられない。卑怯^{ひきょう}とは知りながら一寸と一^{いっぱい}盃^{やつ}遣^けて見ると堪^{たま}らない。モウ一盃、これでお仕舞^{しまい}と力んでも、徳利^{とくり}を振^ふて見て音がすれば我慢^{りき}が出来ない。とうく三^{さん}合^{ごう}の酒を皆^{のん}飲^{しまつ}で仕舞^{しまつ}て、又翌日は五合飲む。五合、三合、従前の通りになつて、去らば烟草の方は喫^のまぬむかしの通りにしようとしても是れも出来ず、馬鹿^{わかな}々々しいとも何とも訳^{わけ}が分らない。逆も叶^{かな}わぬ禁酒の発心^{ほつしん}、

一箇月の大馬鹿をして酒とタバコと両刀遣いに成り果て、六十余歳の今年に至るまで、酒は自然に禁じたれども烟草は止みそうにもせず、衛生の為め自から作せる損害と申して一言の弁解はありません。

桃山から帰て火事場に働く塾中兎角貧生とかくひんせいが多いので料理茶屋に行つて旨い魚を喰うことは先ずむずかしい。夜になると天神橋か天満橋の橋詰に魚市さかないちが立つ。マア云わば魚の残物ひけもののようなもので直が安い。夫れを買って来て洗水鹽ちようすだらいで洗て、机の毀れたのか何かを俎にして、小柄こづかを以て拵えると云うような事は毎度遣て居たが、私は兼て手の先きさきが利いてるから何時でも魚洗さかなあらいの役目に廻つて居た。頃は三月、桃の花の時節で、大阪の城の東に桃も

山もやまと云う処があつて、盛さかりだと云うから花見に行こうと相談が出来た。逆とても彼あつち方にいって茶屋で飲食のみくいしようと云うことは叶わぬから、例の通り前の晩に魚の残ひけもの物を買って来て、その外ほか、氷豆腐ひょうとうふだの野葉物やさいものだの買かいととの調ととのえて、朝早くから起きて忽そぞうそぞう々に拵そなへて、それを折か何かに詰めて、それから酒を買って、凡そ十四、五人も同伴つれがあつたろう、弁当を順じゆん持もちにして桃山ももやまに行って、さん／＼飲食いして宜い機嫌になつて居るその時に、不図西ふとの方を見ると大阪の南あたつに當あたつて大火事だ。日は余程よほど落ちて昔の七ツ過すぎ。サア大変だ。丁度ちょうどその日に長与ながよせんさい専斎せんさいが道頓堀の芝居しばゐを見に行ってる。吾々われわれ花見連れんじゆう中なかは何も大阪の火事に利害を感じることはないから、焼けても焼けぬでも構わないけれども、長与ながよが行いって

居る。若しや長与が焼死やけじにはせぬか。何でも長与を救い出さなければならぬと云うので、桃山から大阪迄まで、二、三里の道をどん／＼駆けて、道頓堀に駆付かけつけて見た所が、疾うに焼けて仕舞しまい、三芝居あつたが三芝居とも焼けて、段々北の方に焼延びて居る。長与は如何どうしたろうかと心配したものゝ、逆も搜す訳さがけに行かぬ。間もなく日が暮れて夜になつた。もう夜になつては長与の事は仕方がない。「火事を見物しようじやないかと云て、その火事の中へどん／＼這入はいって行た。所が荷物にもつを片付けるので大騒ぎ。それからその荷物を運んで遣やろうと云うので、夜具包やぐづみか何の包か、風呂敷包かたんすを担いだり簾笥ひきたうを担いだり中々働いて、段々進すすんで行くと、その時大阪では焼ける家の柱に綱つなを付けて家を引倒すと云うこ

とがあるその網を引張つて呉れと云う。「よし来たとその綱を引張る。所が握飯を喰せる、酒を飲ませる。如何も堪えられぬ面白い話だ。散々酒を飲み握飯を喰て八時頃にもなりましたろう。夫れから一同塾に帰た。所がマダ焼けて居る。「もう一度行こうではないかと又出掛けた。その時の大阪の火事と云うものは誠に楽なもので、火の周囲だけは大変騒々しいが、火の中へ這入ると誠に静なもので、一人も人が居らぬ位。どうもない。只その周囲の処に人がドヤ／＼群集して居るだけである。夫れゆえ大きな声を出して蹴破つて中へ飛込みさえすれば誠に楽な話だ。中には火消の黒人と緒方の書生だけで大に働いた事があると云うような訳で、随分活潑な事をやつたことがありました。

一体塾生の乱暴と云うものは是れまで申した通りであるが、その塾生同士相^{あいたがい}互^{あいだがら}の間^{あいだがら}柄^柄と云うものは至^{いたつ}て仲の宜いもので、決して争^{あらそい}などをしたことはない。勿論^{もちろん}議論はする、いろいろの事に就^{つい}て互に論じ合うと云うことはあつても、決して喧嘩をするような事は絶^{たえ}てない事で、殊に私は性質として朋友と本気になつて争うたことはない。仮令^{たと}い議論をすればとて面白い議論のみをして、例え^{あこう}ば赤穂義士の問題が出て、義士は果して義士なるか不義士なるかと議論が始まる。スルト私はどちらでも宜^{よろ}しい、義不義、口の先^さきで自由自在、君が義士と云え^ばば僕は不義士にする、君が不義士と云え^ばば僕は義士にして見せよう、サア來^い、幾度來^{くるし}ても苦くないと^{いつ}云^なて、敵に為り味方に為り、散々論じて勝^{かつ}たり負

けたりするのが面白いと云う位くらいいな、毒のない議論は毎度大声で遣やつて居たが、本当に顔を赧あからめて如何どうあっても是非わかを分しまつて了しまわなければならぬと云う実みの入た議論をしたことは決してない。

塾生の勉強およそ斯こう云う風ふうで、外に出ても亦内に居ても、乱暴もすれば議論いもする。ソレ故ちよい一寸いちもくと一目見た所では——今までの話だけを開きいた所では、如何いかにも学問どころの事ではなく唯ただワイ一して居たのかと人が思うでありますようが、其處そこの一段に至ては決して爾そうでない。学問勉強と云いことになつては、當時世の中には緒方塾生の右に出る者はなかろうと思われるその一例を申せば、私が安政三年の三月、熱病わざるを煩さいわいうて幸に全快に及んだが、病中は括くくりまくら枕ざぶとんで坐蒲團くつくか何かを括くつて枕にして居たが、追々元の体

に恢復して来た所で、只の枕をして見たいと思い、その時に私は中津の倉屋敷に兄と同居して居たので、兄の家来が一人あるそ
の家来に、只の枕をして見たいから持て来いと云いたが、枕がない、
どんなに搜してもないと云うので、不図思付いた。是れまで倉屋
敷に一年ばかり居たが遂ぞ枕をしたことがない、と云うのは時は
何時なんどきでも構わぬ、殆んど昼夜の区別はない、日が暮れたからと
云て寝ようとも思わず頻りに書を読んで居る。読書に草臥くたびれ眠く
なつて来れば、机の上に突臥つつぶして眠るか、或は床の間の床側とこぶちを
枕にして眠るか、遂ぞ本当に蒲団を敷いて夜具を掛けて枕をして
寝るなど、云うことは只の一度もしたことがない。その時に始め
て自分で気が付いて、「成程なるほど枕はない筈だ、是れまで枕をして寝

たことがなかつたからと始めて気が付きました。是れでも大抵
おもむきが分りましよう。是れは私一人が別段に勉強生でも何でもない、
同窓生は大抵皆そんなもので、凡そ勉強と云うことに就ては實に
この上に為ようと云う程に勉強して居ました。

それから緒方の塾に這入てからも私は自分の身に覚えがある。

夕方食事の時分に若し酒があれば酒を飲で初更に寝る。一寝して
目が覚ると云うのが今で云えば十時か十時過、それからヒヨイと
起きて書を読む。夜明まで書を読んで居て、台所の方で塾の飯
炊がコト／＼飯を焚く仕度をする音が聞えると、それを相図に
又寝る。寝て丁度飯の出来上つた頃起きて、その儘湯屋に行つて
朝湯に這入て、それから塾に帰て朝飯を給べて又書を読むと云

うのが、大抵緒方の塾に居る間殆んど常極りであつた。勿論衛生などゝ云うことは頓と構わない。全体は医者の塾であるから衛生論も喧しく言いそうなものであるけれども、誰も気が付かなかつたのか或は思出さなかつたのか、一寸でも喧しく云なかつたのか或は思出さなかつたのか、一寸でも喧しく云たことはない。それで平氣で居られたと云うのは、考えて見れば身体が丈夫であったのか、或は又衛生々々と云うようなことを無闇に喧しく云えば却て身体が弱くなると思て居たのではないいかと思われる。

原本写本会読の法それから塾で修行するその時の仕方は如何云う塩梅あんばいであつたかと申すと、先ず始めて塾に入門した者は何も知らぬ。何も知らぬ者に如何して教えるかと云うと、その時江戸で

翻刻ほんこくになつて居る和蘭オランダの文典が二冊ある。一をガランマチカと云い、一をセインタキスと云う。初学の者には先ずそのガランマチ力を教え、素読そどくを授る傍に講釈をもして聞かせる。之を一冊読了よみおわるとセインタキスを又その通とおりにして教える。如何やら斯うやら二冊の文典が解せるようになつた所で会読かいどくをさせる。会読と云うことは生徒が十人なら十人、十五人なら十五人に会頭かいとうが一人あつて、その会読するのを聞いて居て、出来不出来に依て白玉ひとりまを附けたり黒玉くろだまを付けたりすると云う趣向で、ソコで文典二冊の素読も済めば講釈も済み会読も出来るようになると、夫れから以上は専ら自身自力じりきの研究に任せることにして、会読本の不審は一字半句も他人に質問するを許さず、又質問を試みるような

卑劣な者もない。緒方の塾の蔵書と云うものは物理書と医書との二種類の外に何もない。ソレモ取集めて僅か十部に足らず、固より和蘭から舶來の原書であるが、一種類唯一部に限つてあるから、文典以上の生徒になれば如何してもその原書を写さなくてはならぬ。銘々に写して、その写本を以て毎月六才位会読をするのであるが、之を写すに十人なら十人一緒に写す訳けに行かないから、誰が先に写すかと云うことは籤で定めるので、さてその写しようは如何すると云うに、その時には勿論洋紙と云うものはない、皆日本紙で、紙を能く磨て真書で写す。それはどうも埒が明かないから、その紙に礬水をして、夫れから筆は鷺筆で以て写すのが先ず一般の風であつた。その鷺筆と云うのは如何云うもの

であるかと云うと、その時大阪の薬種屋やくしゅやか何かに、鶴か雁かは知らぬが、三寸ばかりに切た鳥の羽の軸を売る所が幾らもある。是れは鰐の釣道具つりどうぐにするものとやら聞いて居た。価は至極安い物で、それを買って、磨澄ました小刀こがたなとぎすで以てその軸をペンのように削つて使えば役に立つ。夫れから墨も西洋インキのあられよう訛わけはない。日本の墨壺すみつぼと云うのは、磨た墨汁すみわたを綿か毛氈もうせんの切布に浸しつたして使うのであるが、私などが原書の写本に用うるのは、只墨を磨たまゝ墨壺の中に入れて今日のインキのようにして貯えて置きます。斯う云う次第で、塾中誰でも是非写さなければならぬから写本は中々上達して上手じょうずである。一例を挙ぐれば、一人の人が原書を読むその傍そばで、その読む声がちゃんと耳に這入はいって、

颯々と写してスペルを誤ることがない。斯う云う塩梅に読むと
写すと二人掛りで写したり、又一人で原書を見て写したりして、
出来上れば原書を次の人廻す。その人が写丁ると又その次
の人が写すと云うように順番にして、一日の会読分は半紙にして
三枚か或は四、五枚より多くはない。

自身自力の研究扱その写本の物理書、医書の会読を如何するか
と云うに、講釈の為人もなければ読んで聞かして呉れる人もない。
内証で教えることも聞くことも書生間の恥辱として、万々一
も之を犯す者はない。唯自分一人で以てそれを読みくだかなければ
ならぬ。読碎くには文典を土台にして辞書に便る外に道はない。
その辞書と云うものは、此処にツーフと云う写本の字引が塾に一

部ある。これは中々大部なもので、日本の紙で凡そ三千枚ある。

之を一部拵えると云うことは中々大きな騒ぎで容易に出来たもの

ではない。是れは昔長崎の出島に在留して居た和蘭のドクトル

・ヅーフと云う人が、ハルマと云う独逸和蘭対訳の原書の字引を

翻訳したもので、蘭学社会唯一の宝書と崇められ、夫れを日本人

が伝写して、緒方の塾中にもたつた一部しかないから、三人も四

人もヅーフの周囲に寄合て見て居た。夫れからモウ一步立上る

とウエーランドと云う和蘭の原書の字引が一部ある。それは六

冊物で和蘭の註が入れてある。ヅーフで分らなければウエーラン

ドを見る。所が初学の間はウエーランドを見ても分る氣遣はない。

夫ゆえ便る所は只ヅーフのみ。会読は一六とか三八とか大

抵日が極つて居て、いよいよ明日が会読だと云うその晩は、如何な懶惰生でも大抵寝ることはない。ゾーフ部屋と云う字引のある部屋に、五人も十人も群をなして無言で字引を引つゝ勉強して居る。夫れから翌朝の会読になる。会読をするにも籤で以て此処から此処までは誰と極めてする。会頭は勿論原書を持て居るので、五人なら五人、十人なら十人、自分に割当てられた所を順々に講じて、若しその者が出来なければ次に廻す。又その人も出来なければその次に廻す。その中で解し得た者は白玉、解し傷うた者は黒玉、夫れから自分の読む領分を一寸でも滞りなく立派に読んで了つたと云う者は白い三角を付ける。是れは只の丸玉の三倍ぐらい優等な印で、凡そ塾中の等級は七、八級位に分

けてあつた。而して毎級第一番の上席を三ヶ月占て居れば、登級^{こう}すると云う規則で、会読以外の書なれば、先進生が後進生に講釈もして聞かせ不審も聞いて遣り至極深切にして兄弟のようにあるけれども、会読の一段になつては全く当人の自力に任せて構う者がないから、塾生は毎月六度ずつ試験に逢うようなものだ。^あ爾^そう云う訳^わけで次第々々に昇級すれば、殆んど塾中の原書を^{よみつく}讀^{よみつく}尽^{むす}して云わば手を空^{むなし}うするような事になる、その時には何か六かしいものはないかと云うので、実用もない原書の緒^{ちよげん}言^{かいごん}とか序文とか云うような者を集めて、最上等の塾生だけで会^{かい}読^{よぐ}をしたり、又は先生に講義を願^{ねがつ}たこともある。私などは即ちその講義聴聞者^{すなわ}の一人でありしが、之^{これ}を聴聞する中にも様々先生の説を聞いて、そ

の緻密なることその放胆なること實に蘭学界の一大家、名実共に違わぬ大人物であると感心したことは毎度の事で、講義終り、塾に歸て朋友相互に、「今日の先生の彼の卓説は如何だい。何だか吾々は頓に無学無識になつたようだなど、話したのは今に覚えて居ます。

市中に出で大いに酒を飲むとか暴れるとか云うのは、大抵会読を仕舞しまつたその晩か翌日あたりで、次の会読までにはマダ四日も五日も暇ひまがあると云う時に勝手次第に出て行いつたので、会読の日に近くなると所謂月に六回の試験だから非常に勉強して居ました。書物を能く読むと否とは人々の才不才にも依りますけれども、兎とも角かくも外面を胡魔化ごまかして何年居るから登級とうきゆうするの卒業する

のと云うことは絶えてなく、正味の実力を養うと云うのが事実に行われて居たから、大概の塾生は能く原書を読むことに達して居ました。

写本の生活ヅーフの事に就いて序ながら云うことがある。如何かする。その時でも諸藩の大名がそのヅーフを一部写して貰いたいと云う注文を申込で来たことがある。ソコでその写本と云うことが又書生の生活の種子になつた。当時の写本代は半紙一枚十行二十字詰で何文と云う相場である。処がヅーフ一枚は横文字三十行位のもので、夫れだけの横文字を写すと一枚十六文、夫れから日本文字を入れてある註の方を写すと八文、只の写本に較べると余程割りが宜しい。一枚十六文であるから十枚写せば百六十四

文になる。註の方ならばその半値八十文になる。註を写す者もあれば横文字を写す者もあつた。ソレを三千枚写すと云うのであるから、合計して見ると中々大きな金高になつて、自から書生の生活を助けて居ました。今日より考れば何でもない金のようだけれども、その時には決してそうでない。一例を申せば白米一石が三分二朱、酒が一升百六十四文から二百文で、書生在塾の入費は一箇月一分貳朱から一分三朱あれば足る。一分貳朱はその時の相場で凡そ二貫四百文であるから、一日が百文より安い。然るにヅーフを一日に十枚写せば百六十四文になるから、余る程があるので、凡そ尋常一様の写本をして塾に居られるなどゝ云うことは世の中にはないことであるが、その出来るのは蘭学書生に

限る特色的商売であつた。ソレに就て一例を挙げれば斯う云うことがある。江戸は流石さすがに大名の居る処で、啻ただにツーフ計りでなく蘭学書生の為めに写本の注文は盛さかんにあつたもので自から価おのずが高あたいい。大阪と較べて見れば大変高い。加賀の金沢の鈴木儀六と云う男は、江戸から大阪に来て修業した書生であるが、この男が元来一文なしに江戸に居て、辛苦しんくして写本もつで以て自分の身を立てたその上に金を貯たまえた。凡そ一、二年辛抱して金を二十両ばかり拵こしらえて、大阪に出て来て到頭とうとうその二十両の金で緒方の塾で学問をして金沢に帰かえった。是れなどは全く蘭書写本のお蔭である。その鈴木の考かんがえでは、写本をして金を取るのは江戸が宜いいが、修業するには如何どうしても大阪でなければ本当な事が出来ないと目的を定めて、ソレで

その金を持^{もつ}て來たのであると話して居ました。

工芸技術に熱心夫れから又一方では今日のよう^そに都^{すべ}て工芸技術の種子^{たね}と云うものがなかつた。蒸氣機関などは日本國中で見ようと云つてもありはせぬ。化^{ケミスト}学の道具にせよ、何處^{どこ}にも揃つたものはありそうにもしない。揃うた物どころではない、不完全な物もありはせぬ。けれども爾^そう云う中に居ながら、器械の事にせよ化学の事にせよ大体の道理は知て居るから、如何かして實地を試みたいものだと云うので、原書を見てその図を写して似寄の物を揃えると云うことに就^{つい}ては中々骨を折りました。私が長崎に居るとき塩酸亜鉛があれば鉄にも錫^{すず}を附けることが出来ると云うことを聞^{きい}て知て居る。夫れまで日本では松脂ばかりを用いて居たが、松

脂では銅の類に錫を流して鍍金^{めつき}することは出来る。唐金^{からかね}の鍋に白みを掛けるようなもので、鑄掛屋^{いかげや}の仕事であるが、塩酸亜鉛を作ろうとした所が、薬店^{くすりや}に行ても塩酸のある氣遣^{きづかい}はない。自分で拵えなければならぬ。塩酸を拵える法は書物で分る。その方法に依て何うやら斯^こうやら塩酸を拵えて、之に亜鉛を溶かして鉄に錫を試みて、鑄掛屋の夢にも知らぬ事が立派に出来たと云うようなことが面白くて堪^{たま}らぬ。^{あるい}或は又ヨジユムを作つて見ようではないかと、色々書籍^{しょじやく}を取調^{とりしらべ}、天満^{てんま}の八百屋市^{やおやいち}に行て昆布荒^{あらめ}布^{あらめ}のような海草類^{かづら}を買って来て、夫れを炮^{ほうろく}烙^{らく}で煎^{いっ}て如何^{どう}云う風にすれば出来ると云うので、真黒^{まっくろ}になつて遣^{やつ}たけれども是れは到^こ

頭出来ない。それから今度は礪砂どうしや製造の野心を起して、先ず第一の必要は塩酸暗謨尼亞アンモニアであるが、是れも勿論藥店にある品物でない。その暗謨尼亞を造るには如何するかと云えば、骨こつ：骨よりもつと世話なしに出来るのは鼈甲屋べつこうやなどに馬爪の削けずり屑くずがいくらもあつて只ただ呉れる。肥料にするかせぬか分らぬが行きさえすれば呉れるから、それをドツサリ貰もらつて来て徳利とくりに入れて、徳利の外面に土を塗り、又素焼の大きな瓶かめを買って七輪にして沢山たくさん火を起し、その瓶かめの中に三本も四本も徳利を入れて、徳利の口には瀬戸物の管くだを附けて瓶の外に出すなど色々趣向して、ドシ＼＼火を扇ぎ立てると管の先きからタラ＼＼液さが出て来る。即ち是れが暗謨尼亞アンモニアである。至極旨く取れることは取れるが、爰ここに

難渋はその臭氣だ。臭いにも臭くないにも何とも云いようがない。
 那の馬爪、あんな骨類を徳利に入れて蒸焼にするのであるから実に鼻持もならぬ。それを緒方の塾の庭の狭い処で遣るのであるから奥で以て堪らぬ。奥で堪らぬばかりではない。流石の乱暴書生も是れには辟易して逆も居られない。夕方湯屋に行くと着物が臭くつて犬が吠えると云う訳け。仮令い真裸体で遣ても身體が臭いと云て人に忌がられる。勿論製造の本人等は如何でも斯うでもして礪砂と云う物を拵えて見ましようと云う熱心があるから、臭いのも何も構わぬ、頻りに試みて居るけれども、何分周辺の者が喧しい。下女下男迄も胸が悪くて御飯が給べられないと訴える。其れ是れの中でヤツト妙な物が出来たは出来たが、

粉のような物ばかりで結晶しない。如何しても完全な礦砂にならない、加うるに喧しくて堪らぬから一旦罷めにした。けれども氣強い男はマダ罷めない。折角仕掛けた物が出来ないと云ては学者の外聞が悪いとか何とか云うような訳けで、私だの久留米の松下元芳、鶴田仙庵等は思切たが、二、三の人は尚お遣た。如何したかと云うと、淀川の一一番粗末な船を借りて、船頭を一人雇うて、その船に例の瓶の七輪を積込んで、船中で今通りの臭い仕事を遣るは宜いが、矢張り煙が立て風が吹くと、その煙が陸の方へ吹付けられるので、陸の方で喧しく云う。喧しく云えば船を動かして、川を上つたり下つたり、川上の天神橋、天満橋から、ズット下の玉江橋辺まで、上下に逃げて廻て

遣やつたことがある。その男は中村恭安なかむらきょうあんと云う讃岐の金比羅こんぴらの医者であつた。この外ほかにも犬猫は勿論もちろん、死刑人の解剖その他製薬の試験は毎度の事であつたが、シテ見ると当時の蘭学書生は如何にも乱暴なようであるが、人の知らぬ処に読書研究、又実地の事に就ても中々勉強したものだ。

製薬の事に就いても奇談がある。或るとき硫酸りゅうさん酸を造ろうと云うので、様々大骨折おおほねおつて不完全ながら色の黒い硫酸が出来たから、之これを精製して透明にしなければならぬと云うので、その日は先ず茶碗に入れて棚の上に上げて置おいた処が、鶴田仙庵が自分で之を忘れて、何かの機はずみにその茶碗を棚から落して硫酸を頭から冠かぶり、身體からだに左までの径け我がはなかつたが、丁度ちょうど旧暦四月の頃で一枚の袴あわせ

をヅタ／＼にした事がある。

製薬には兎角徳利が入用だから、丁度宜しい、塾の近所の丂池筋に米藤と云う酒屋が塾の御出入、この酒屋から酒を取り寄せて、酒は飲で仕舞て徳利は留置き、何本でもみんな製薬用にして返さぬと云うのだから、酒屋でも少し変に思たと見え、内々塾僕に聞合せると、この節書き生さんは中実の酒よりも徳利の方に用があると云うので、酒屋は大に驚き、その後何としても酒を持って来なくなつて困た事がある。

黒田公の原書を引取る又筑前^{ちくぜん}の国主、黒田美濃守^{くろだみのかみ}と云う大名は、今の華族、黒田のお祖父さんで、緒方洪庵先生は黒田家に入^{ゆつにゆう}して、勿論筑前行くでもなれば江戸に行くでもない、

只ただ大阪に居ながら黒田家の御出入医と云うことであつた。故に黒田の殿様が江戸出府しゆつぶ、或は帰国の時に大阪を通行する時分には、先生は屹度きつと中なかノ嶋のしまの筑前屋敷に伺候しこうして御機嫌ごきげんを伺うと云う常例であつた。或あるとし歳とし、安政三年か四年と思う。筑前侯が大阪通行になると云うので、先生は例の如く中ノ嶋の屋敷に行き、帰宅そぞう々そぞう私を呼ぶから、何事かと思って行て見ると、先生が一冊の原書を出して見せて、「今日筑前屋敷に行たら、斯う云う原書が黒田侯の手に這入はいつたと云いて見せて呉れられたから、一寸ちよいと借りて來たと云う。之これを見ればワンドーベルトと云う原書で、最新の英書を和オランダ蘭に翻訳した物理書で、書中は誠に新らしい事ばかり、就な中かんずくエレキトルの事が如何にも詳つまりかに書いてあるように見える。

私などが大阪で電氣の事を知したと云うのは、只纔たおづかに和蘭の学校たがく読読み本くほんの中にチラホラ論じてあるより以上は知らなかつた。所がこの新舶來の物理書は英國の大家フハラデーの電氣説を土台にして、電池の構造法などがちゃんと出来て居るから、新奇とも何とも唯驚くばかりで、一見直ただに魂たまを奪ましわれた。夫それから私は先生に向むかて、「是れは誠に珍らしい原書で御在ございますが、何時まで此處に拝借こそこそして居ゐることが出来ましようかと云うと、「左様さようさ。何れ黒田侯いづは二晚ふたばんとやら大阪に泊とまると云う。御出立ごしゆつたつになるまでは、彼處に入用にゅうようもあるまい。「左様さようでございますか、一寸と塾もつの者にも見せとう御在ますと云て、塾もつへ持もつて来て、「如何どうだ、この原書はと云つたら、塾もつ中の書生は雲霞うんかの如ごく集つつて一冊の本を見て居る

から、私は二、三の先輩と相談して、何でもこの本を写して取ろうと云うことに一決して、「この原書を唯見たつて何にも役に立たぬ。見ることは止めにして、サア写すのだ。併し千頁もある大部の書を皆写すことは逆も出來られないから、末段のエレキトルの処支け写そう。一同筆紙墨の用意して惚掛りだと云た所で茲に一つ困る事には、大切な黒田様の蔵書を毀すことが出来ない。毀して手分て遣れば、三十人も五十人も居るから瞬く間に出来て仕舞うが、それは出来ない。けれども緒方の書生は原書の写本に慣れて妙を得て居るから、一人が原書を読むと一人は之を耳に聞いて写すことが出来る。ソコデ一人は読む、一人は写すとして、写す者が少し疲れて筆が鈍て来ると直に外の者が交代して、その疲

れた者は朝でも昼でも直に寝ると斯う云う仕組にして、昼夜の別なく、飯を喰う間も煙草を喫む間も休まず、一寸とも隙なしに、凡そ一夜三日の中に、エレキトルの処は申すに及ばず、図も写して読合まで出来て仕舞て、紙数は凡そ百五、六十枚もあつたと思う。ソコデ出来ることなら外の処も写したいと云たが時日が許さない。マアく是れだけでも写したのは有難いと云うばかりで、先生の話に、黒田侯はこの一冊を八十両で買取られたと聞いて、貧書生等は唯驚くのみ。固より自分に買うと云う野心も起りはしない。愈よ今夕、侯の御出立と定まり、私共はその原書を撫くなり廻し誠に親に暇乞をするように別を惜んで還したことがございました。夫れから後は塾中にエレキトルの説が全く面目を新

にして、当時の日本国中最上の点に達して居たと申して憚りません。私などが今日でも電気の話を聞いて凡そその方角の分るのは、全くこの写本の御蔭である。誠に因縁のある珍らしい原書だから、その後度々今の黒田侯の方へ、ひよつと彼の原書はなかろうかと問合せましたが、彼方でも混雜の際であつたから如何なつたか見当らぬと云う。可惜い事で御在ます。

大阪書生の特色 只今申したような次第で、緒方の書生は学問上の事に就ては一寸とも怠つたことはない。その時の有様を申せば、江戸に居た書生が折節大阪に来て学ぶ者はあつたけれども、大阪から態々江戸に学びに行くと云うものはない。行けば則ち教えると云う方であつた。左れば大阪に限て日本国中粒選の工

ライ書生の居よう訳けはない。又江戸に限て日本国中の鈍い書生ばかり居よう訳けもない。然るに何故ソレが違うかと云うことにしては考えなくてはならぬ。勿論その時には私なども大阪の書生がエライくと自慢をして居たけれども、夫^それは人物の相違ではない。江戸と大阪と自から事情が違^{ちがつ}て居る。江戸の方では開国の初^{はじめ}とは云いながら、幕府を始め諸藩大名の屋敷と云う者があつて、西洋の新技術を求むることが広く且^かつ急である。従て聊かでも洋書を解^げすことの出来る者を雇うとか、或^{あるいは}は翻訳をさせればその返礼に金を与えるとか云うような事で、書生輩が自から生計の道に近い。極都合の宜い者になれば大名に抱えられて、昨日までの書生が今日は何百石の侍になつたと云うことも稀にはあつた。

夫れに引換ひきかえて大阪は丸で町人の世界で、何も武家と云うものはない。従て砲術を遣やろうと云う者もなければ原書を取調べようと云う者もありはせぬ。夫れゆえ緒方の書生が幾年勉強して何程工ライ学者になつても、頓とんと實際の仕事に縁がない。即ち衣食に縁がない。縁がないから縁を求めると云うことにも思い寄らぬので、然らば何の為めに苦学するかと云えば一寸ちよいと説明はない。前途自分が如何なるであろうかと考えた事もなければ、名を求める気もない。名を求めぬどころか、蘭学書生と云えば世間に悪く云われるばかりで、既すでに已すでに焼けに成なつて居る。唯昼夜苦しんで六むすかしい原書を読んで面白がつて居るようなもので実に訳けの分らぬ身の有様ありさまとは申しながら、一步を進めて当時の書生の心の底

を叩いて見れば、自から樂しみがある。之を一言すれば——西洋に進の書を読むことは日本國中の人出来ない事だ、自分達の仲間に限て斯様事が出来る、貧乏をしても難渋をしても、粗衣粗食、一見見る影もない貧書生でありながら、智力思想の活潑高尚なることは王侯貴人も眼下に見下すと云う氣位で、唯六かしければ面白い、苦中有樂、苦即樂と云う境遇であつたと思われる。

喻えればこの薬は何に利くか知らぬけれども、自分達より外にこんな苦い薬を能く呑む者はなからうと云う見識で、病の在る所も問わずに唯苦ければもつと呑で遣ると云う位の血氣であつたに違はない。

漢家を敵視す若しも眞実その苦学の目的如何なんて問う者あるも、

返答は唯漠然たる議論ばかり。医師の塾であるから政治談は余り流行せず、国の開鎖論を云えば固より開国なれども、甚だしく之を争う者もなく、唯當の敵は漢法医で、医者が憎ければ儒者までも憎くなつて、何でも蚊でも支那流は一切打払いと云うことは何處となく定まつて居たようだ。儒者が經史の講釈しても聴聞しようと云う者もなく、漢学書生を見れば唯可笑しく思うのみ。殊に漢医書生は之を笑うばかりでなく之を罵詈して少しも許さず、緒方塾の近傍、中ノ島に花岡と云う漢医の大家があつて、その塾の書生は孰れも福生と見え服装も立派で、中々以て吾々蘭学生の類でない。毎度往来に出逢うて、固より言葉も交えず互に睨合うて行違うその跡で、「彼の様ア如何だい。着物ばかり

り奇麗で何をして居るんだ。空々寂々チンパンカンの
 講釈を聞いて、その中で古く手垢の附てる奴が塾長だ。こんな奴等
 が二千年來垢染みた傷寒論を土産にして、國に歸て人を殺す
 とは恐ろしいじやないか。今に見る、彼奴等を根絶やしにして呼い
 吸の音を止めて遣るからなんてワイ／＼云たのは毎度の事である
 が、是れとても此方に如斯と云う成算も何もない。唯漢法医流
 の無学無術を罵倒して蘭学生の氣焰を吐くばかりの事である。

目的なしの勉強兎に角に當時緒方の書生は十中の七、八、目的な
 しに苦学した者であるが、その目的のなかつたのが却て仕合で、
 江戸の書生よりも能く勉強が出来たのであろう。ソレカラ考えて
 見ると、今日の書生にしても余り学問を勉強すると同時に始終我

身の行先ばかり考えて居るようでは、修業は出来なかろうと思う。左ればと云て只迂闊に本ばかり見て居るのは最も宜しくない。宜しくないとは云いながら、又始終今も云う通り自分の身の行え末のみ考えて、如何したらば立身が出来るだろうか、如何したらば金が手に這入るだろうか、立派な家に往むことが出来るだろうか、如何すれば旨い物を喰い好い着物を着られるだろうかと云うような事にばかり心を引かれて、齷齪勉強すると云うことでは決して眞の勉強は出来ないだろうと思う。就学勉強中は自から静にして居らなければならぬと云う理屈が茲に出て来ようと思う。

大阪を去て江戸に行く

私が大阪から江戸へ来たのは安政五年、二十五歳の時である。

同年、江戸の奥平の邸から、御用があるから来いと云て、私を呼びに来た。それは江戸の邸に岡見彦曹おかみひこぞうと云う蘭学好すきの人ひとがつて、この人は立派な身分のある上士族で、如何かして江戸藩邸に蘭学の塾を開きたいと云うので、様々に周旋して、書生を集め原書を読む世話をところして居た。所で奥平家が私をその教師に使うので、その前、松木弘庵まつきこうじ、杉亨二すぎこうじと云うような学者を雇うて居たような訳わけで、私が大阪に居ると云うことが分たものだから、他国の者を雇うことはない、藩中にある福澤を呼べと云うことになつて、ソレで私を呼びに來たので、その時江戸詰づめの家老には奥おく

平壹岐くだいらいきが来て居る。壹岐と私との関係に就ては、私は自から自慢をしても宜いことがある。是れは如何しても悪感情がなければならぬ筈はず、衝突がなければならぬ筈、けれども私はその人と一寸とも戦たたかつたことがない。彼は私を敵視し愚弄ぐろううして居ると云うことは長崎を出た時の様さまでチャント分つて居る。長崎を立つ時に、「貴様は中津に帰れ。かえつたら誰にこの手紙を渡せ。誰に斯こう伝言せよと命ずるからへい」と畏りながら、心の中では舌を出して、

「馬鹿言え、乃公は國に帰りはせぬぞ、江戸に行くぞと云わぬばかりに、席を蹴立けたて、出たことも、後のちになれば先方さきでも知しって居る。けれどもその後私は毎度本人に逢あうて仮かり初そめにも怨えんげん言ことを云いた事ことのない所ではない、態わざと旧恩を謝すると云う趣おもむきばかり装まうて居る

中に、又もやその大切な原書を 盜写ぬすみうつ したこともある。先方も悪ければ此方も十分悪い。けれども唯私がその事を人に語らず顔色おいろにも見せずに、御家老様ごからうさまと尊敬して居たから、所謂いわゆる国家くにがる老の坊さんで、今度私を江戸に呼寄せる事に就ても、家老に異議なく直に決して幸さいわいであつたが、実を申せば壹岐いきよりも私の方かえつが却て罪が深いようだ。

三人同行大阪から江戸に来るに就ては、何は扱置さておき中津に歸て一度母に逢うて別わかれを告げて来ましようと云うので、中津に帰たその時は虎列拉コレラの真盛りで、私の家の近処まで病人だらけ、バタ時とき逗留んじとうりゆう、死にました。その流行病 最中さいちゆう、船のつに乗て大阪に着て暫立しゆつたつと云うことにして立所たちが、

凡そ藩の公用で勤番するに、私などの身分なれば道中並に在勤中家来を一人呉れるのが定例で、今度も私の江戸勤番に付て家来一人振の金を渡して呉れた。けれども家来なんぞと云うことは思いも寄らぬ事で何也要らぬ。けれども茲に旅費がある。待てく、塾中に誰か江戸に行きたいと云う者はないか、江戸に行きたければ連れて行くが如何だ、実は斯う云う詫けで金はあるぞと云うと、即席にどうぞ連れて行て呉れと云たが岡本周吉、即ち古川節藏である（広島の人）。よし連れて行て遣ろう。連れて行くが、君は飯を炊かなればならぬが宜しいか。江戸へ行けば米もあれば長屋もある。鍋釜も貸して呉れるが、本当の家来を止めにすれば飯炊がない。その代に連れて行くのだが如何だ。「飯

を炊く位の事は何でもない、飯を炊こう。「それじや一緒に来いと云て、夫れから私の荷物は同藩の人に頼んで、道連は私と岡本、もう一人備中の者で原田磊蔵はらだらいぞうと云う矢張り緒方の塾生、都合三人の道中で、勿論歩く。その時は丁度十月下旬で少々寒かつたが小春の時節、一日も川止など云う災難に遇わず滞おりなく江戸に着て、先ず木挽町こひきちょう汐留の奥平屋敷に行た所が、鉄砲洲つぼうすに中屋敷がある、其処の長屋を貸すと云うので、早速岡本と私とその長屋に住込で、兩人自炊の世帯持になつた、夫れから同行の原田は下谷練塀したやねりべ小路いこうじの大医大槻俊たいいおおつきしゅん斎先生の処へ入込んだ。江戸へ参れば知己朋友は幾人も居て、段々面白くなつて來た。

江戸に学ぶに非ず教るなり扱さて私が江戸まいづに参まいて鉄砲洲の奥平中屋敷に住すまつて居ると云う中に、藩中の子弟が三人、五人ずつ学びに来るようになり、又他から五、六人も来るものが出来たので、その子弟に教授して居たが、前にも云う通り大阪の書生は修業する為に江戸に行くのではない、行けば教えに行くのだと云う自おのから自負心があつた。私も江戸に来て見た處で、全体江戸の蘭学社会は如ど何云うものであるか知りたいものだと思おもて居る中に、或ある日島しまむら村鼎甫らいていほの家に尋ねて行たことがある。勿論もちろん緒方門下の医者で、江戸に来て蘭書の翻訳などして居た。私も甚だ能く知して居るので、尋ねて参れば何時いつも学問の話ばかりで、その時に主人は生理書の翻訳さい最ちゅう中なか、その原書を持出して云うには、この文の一節が如ど

何しても分らないと云う。夫れから私が之を見た所が、成程解し悪い所だ。依て主人に向て、是れは外の朋友にも相談して見たかと云え巴、イヤもう親友誰々四、五人にも相談をして見たが如何しても分らぬと云うから、面白い、ソレジヤ僕が之を解して見せようと云て、本当に見た所が中々六かしい。凡そ半時間ばかりも無言で考えた所で、チヤント分つた。一体是れは斯う云う意味であるが如何だ、物事は分て見ると造作のないものだと云て、主しゆかく客共に喜びました。何でもその一節は光線と視力との関係を論じ、蠟燭を二本点けてその灯光をどうかすると影法師が如何とかなると云う随分六かしい処で、島村の翻訳した生理発蒙と云う訳書中にある筈です。この一事で私も窃に安心して、先ず是れ

ならば江戸の学者も左まで恐れることはないと思うたことがある。

それから又原書の不審な処を諸先輩に質問して窃にその力量を試したこともある。大阪に居る中に毎度人の読損うた処か人の読損いそうな処を選出して、そうして其れを私は分らない顔して不審を聞きに行くと、毎度の事で、学者先生と称して居る人が読損うて居るから、此方は却て満足だ。実は欺て人を試験するようなもので、徳義上に於て相済まぬ罪なれども、壯年血氣の熱心、自から禁ずることが出来ない。畢竟私が大阪に居る間は同窓生と共に江戸の学者を見下だして取るに足らないものだと斯う思つて居ながらも、只ソレを空くに信じて宜い気になつて居ては大間違が起るから、大抵江戸の学者の力量を試さなければなら

ぬと思て、悪いことは知りながら試験をやつて見たのです。

英学発心ソコデ以て蘭学社会の相場は大抵分て先ず安心ではあつたが、扱又此処に大い不安心な事が生じて來た。私が江戸に來たその翌年、即ち安政六年、五国条約と云うものが發布になつたので、横浜は正しく開けた計りの処、ソコデ私は横浜に見物に行た。その時の横浜と云うものは外国人がチラホラ來て居る丈けで、堀立小屋見たような家が諸方にチョイ／＼出来て、外国人が其処に住んで店を出して居る。其処へ行て見た所が一寸とも言葉が通じない。此方の云うことも分らなければ、彼方の云うことも勿論分らない。店の看板も読めなければ、ビンの貼紙も分らぬ。何を見ても私の知て居る文字と云うものはない。英語だか仏語だか一向計

らない。居留地をブラ／＼歩く中に独逸人ドイツでキニツフルと云う商人の店に打ぶちあたつ当こつちた。その商人は独逸人でこそあれ蘭語蘭文が分る。此方こうかの言葉は口クに分らないけれども、蘭文を書けばどうか意味が通つずると云うので、ソコで色々な話をしたり、一寸ちよいと買物をしたりして江戸に帰かえつて來た。御苦勞な話で、ソレも屋敷に門限があるので、前の晩の十二時から行てその晩の十二時に帰たから、丁度ちょうど一昼夜歩いて居た訳わけだ。

小石川に通う横浜から帰かえつて、私は足の疲れではない、實に落胆して仕舞しまつた。是れはくどうも仕方しかたがない、今まで数年すねんの間あいだ死しにも物狂のぐるいになつて和蘭オランダの書を読むことを勉強した、その勉強したもののが、今は何にもならない、商売人の看板を見ても読むこと

が出来ない、左りとは誠に詰らぬ事をしたわいと、實に落胆して仕舞た。けれども決して落胆して居られる場合でない。彼処に行れて居る言葉、書いてある文字は、英語か仏語に相違ない。所で今世界に英語の普通に行れて居ると云うことは予て知て居る。何でもあれは英語に違いない、今我国は条約を結んで開けかゝつて居る、左すればこの後は英語が必要になるに違いない、洋学者として英語を知らなければ逆も何にも通ずることが出来ない、この後は英語を読むより外に仕方がないと、横浜から帰た翌日だ、一度は落胆したが同時に又新に志を発して、夫れから以来は一切万事英語と覺悟を極めて、さてその英語を学ぶと云うことに就て如何して宜か取付端がない。江戸中に何処で英語を教えて居ると云う

う所のあろう訣けもない。けれども段々聞いて見ると、その時に条約を結ぶと云うが為めに、長崎の通詞の森山多吉郎もりやまたきちろうと云う人が、江戸に来て幕府の御用を勤めて居る。その人が英語を知て居ると云う噂ききだを聞出したから、ソコで森山の家に行つて習いましょこうと斯う思うて、その森山と云う人は小石川の水道町に住居して居たら、早速さつそくその家に行つて英語教授の事を頼たのみい入ると、森山の云うに、昨今御用が多くて大変に忙しい、けれども折角せつかく習おうと云うならば教えて進ぜよう、就ついては毎日出勤前、朝早く来いと云うことになつて、その時私は鉄砲洲てっぽうずに住すまつて居て、鉄砲洲から小石川まで頓やがて二里余よもありましよう、毎朝早く起きて行く。所が今日はもう出勤前だから又明朝来て呉れ、明くる朝早く行くと、人

が来て居て行かないと云う。如何しても教えて呉れる暇がない。

ソレは森山の不親切と云う訳けではない、条約を結ぼうと云う時

だから中々忙くて実際に教える暇がありはしない。そうすると、

こんなに毎朝来て何も教えることが出来んでは氣の毒だ、晩に来て呉れぬかと云う。ソレじや晩に参りましょと云て、今度は日

暮から出掛け行く。あの往来は丁度今の神田橋一橋外の高等

商業学校のある辺で、素と護持院ヶ原と云う大きな松の樹などが

生繁つて居る恐ろしい淋しい処で、追剥でも出そうな処だ。

其処を小石川から帰途に夜の十一時十二時ごろ通る時の怖さ

と云うものは今也能く覚えて居る。所がこの夜稽古も矢張り同じ事で、今晚は客がある、イヤ急に外国方（外務省）から呼びに

来たから出て行かなければならぬと云うような訳けで、頓と仕方がない。凡そ其処に一月か三月通うたけれども、どうにも暇がない。迪もこんな事では何も覚えることも出来ない。加うるに森山と云う先生も何も英語を大層知て居る人ではない、漸く少し発音を心得て居ると云う位。迪も是れは仕方ないと、余儀なく断念。

蕃書調所に入門その前に私が横浜に行^{いっ}た時にキニツフルの店で薄い蘭英会話書を二冊^{かつ}買って来た。ソレを獨^{ひとり}で読^{よむ}とした所で字書がな^{じしょ}い。英蘭対訳の字書があれば先生なしで自分一人で解^{ひとり}げることが出来るから、どうか字書を欲^{ほし}いものだと云^{いつ}た所で横浜に字書などを売る処はない。何とも仕方がない。所がその時に九段下に蕃^{ばんし}

書調所と云う幕府の洋学校がある。其處には色々な字書があると云うことを見出したから、如何かしてその字書を借りたいものだ、借りるには入門しなければならぬ、けれども藩士が出抜けに公儀（幕府）の調所に入門したいと云ても許すものでない、藩士の入門願にはその藩の留守居（しかのち）と云うものが願書に奥印をして然る後に入門を許すと云う。夫れから藩の留守居の処に行って奥印の事を頼み、私は（そ）かみしもを着て藩書調所に行って入門を願うた。その時には箕作麟祥のお祖父さんの箕作阮甫と云う人が調所の頭取（とうどり）で、急速入門を許して呉れて、入門すれば字書を借ることが出来る。直に拝借を願うて、英蘭対訳の字書を手に請取（うけとつ）て、通学生の居る部屋があるから其処で暫く見て、夫れから懐中の風

呂敷を出してその字書を包んで帰ろうとすると、ソレはならぬ、此處で見るならば許して苦しくないが、家に持帰ることは出来ませぬと、その係の者が云う。こりや仕方がない、鉄砲洲から九段坂下まで毎日字引を引きに行くと云うことは逆も間に合ぬ話だ。ソレも漸く入門してたつた一日行た切で断念。

さてどう如何したら宜かろうかと考えた。所で段々横浜に行く商人がある。何か英蘭対訳の字書はないかと頼んで置た所が、ホルトロツプと云う英蘭対訳発音付の辞書一部二冊物がある。誠に小さな字引だけれども価五両と云う。夫れから私は奥平の藩に歎願して買って貰て、サアもう是れで宜しい、この字引さえあればもう先生は要らないと、自力研究の念を固くして、唯その字引と

首引^{くびつひき}で、毎日毎夜^{ひとり}独り勉強、又或は英文の書を蘭語に翻訳して見て、英文に慣れる事ばかり心掛けて居ました。

英学の友を求むそこで自分の一身は爾^そう定めた所で、是^これは如何しても朋友がなくてはならぬ。私が自分で不便利を感じる通りに、今の蘭学者は悉く不便を感じて居るに違いない。逆も今まで学だ^{まなん}のは役に立たない。何でも朋友に相談をして見ようと斯^とう思^{うた}たが、この事も中々易^{やす}くないと云うのは、その時の蘭学者全体の考^{かんがえ}は、私を始^{はじめ}として皆、数年^{すねん}の間刻苦勉強した蘭学が役に立たないから、丸で之を棄^{しまつ}て、仕舞^{あらた}て英学に移ろうとすれば、新に元の通りの苦みをもう一度しなければならぬ、誠に情^{じょうや}ない、つらい話である、譬^{たと}えば五年も三年も水練^{すいれん}を勉強して漸く泳ぐことが出来

るようになつた所で、その水練を罷めて今度は木登りを始めようと云うのと同じ事で、以前の勉強が丸で空になると、斯う考えたものだから如何にも決断が六かしい。ソコデ学友の神田孝平に面会して、如何しても英語を遣らうじやないかと相談を掛けると、神田の云うに、イヤもう僕も疾うから考えて居て実は少し試みた。試みたが如何にも取付端がない。何処から取付て宜いか實に訳けが分らない。併し年月を経れば何か英書を読むと云う小口こぐちが立つに違ひないが、今の処では何とも仕方がない。マア君達は元気が宜いから遣て呉れ、大方角たいていが付くと僕も屹きつと遣るから、ダガ今その処では何分自分で遣ろうと思わないと云う。夫れから番町の村田造六（後に大村益次郎）の處へ行て、その通りに勧めた

所が、是れは如何どうしても遣らぬと云う考かんがえで、神田とは丸で説が違いう。「無益な事をするな。僕はそんな物は読まぬ。要らざる事だ。何もそんな困難な英書を辛苦しんくして読むがものはないじやないか。

必要な書は皆和蘭人オランダが翻訳するから、その翻訳書を読めばソレで沢山たくさんじゃないかと云う。「成程なるほど」それも一説だが、けれども

和蘭人が何も角かも一々翻訳するものじやない。僕は先頃横浜せんごろに
行いつて呆あきれて仕舞しまつた。この塩梅あんぱいでは逆とても蘭学は役に立たぬ。ぜひ是非同意せず、「イヤ読まぬ。僕は一切読まぬ。遣るなら君達は遣り
給いえ。僕は必要があれば蘭人の翻訳したのを読むから構わぬと威い張ぱつて居る。是れは逆こも仕方しかたがないと云うので今度は小石川に居る

原田敬策

にその話をすると、原田は極熱心で、何でも遣ろう。

誰がどう云うても構わぬ。是非遣ろうと云うから、「爾うか、ソ

レは面白い。そんなら二人で遣ろう。どんな事があつても遣遂げ

ようではないかと云うので、原田とは極説が合うて、愈よ英書を
読むと云う時に、長崎から来て居た小供があつて、その小供が英

語を知て居ると云うので、そんな小供を呼んで来て発音を習うたり、

又或は漂流人で折節帰るものがある、長く彼方へ漂流して居た

者が、開国になつて船の便があるものだから、折節帰る者がある

から、そんな漂流人が着くとその宿屋に訪ねて行つて聞いたこともある。

その時に英学で一番六かしいと云うのは發音で、私共は何も

その意味を学ぼうと云うのではない、只スペルリングを学ぶので

あるから、小供でも宜ければ漂流人でも構わぬ、爾う云う者を搜そ
 し廻まわつては学んで居ました。始めは先ず英文を蘭文に翻訳すること
 を試み、一字々々字をひいてソレを蘭文に書直せば、ちゃんと蘭文
 になつて文章の意味を取ることに苦労はない。唯その英文の語音
 を正しくするのに苦んだが、是れも次第に緒が開けて来れば夫れ
 はどの難渋でもなし、詰る處は最初私共が蘭学を棄てゝ英学に移
 ろうとするときに、真実に蘭学を棄てゝ仕舞い、数年勉強の結果
 を空むなしして生涯二度の艱難かんなんしんく辛苦と思ひしは大間違の話で、実
 際を見れば蘭と云い英と云うも等しく横文にして、その文法も略ほほ
 相同じければ、蘭書読む力は自おのづから英書にも適用して決して無益
 でない。水を泳ぐと木に登ると全く別のように考えたのは一時のいぢじ

迷まよいであつたと云うことを発明しました。

始めて亞米利加に渡る

咸臨丸ソレカラ私が江戸に來た翌年、即ち安政六年冬、徳川政府から亞米利加アメリカに軍艦やを遣やると云う日本開闢以来、未曾有の事を決断しました。扱さてその軍艦と申しても至極しごく小さなもので、蒸氣は百馬力、ヒュルプマシーネと申して、港の出入りに蒸氣を焚たくばかり、航海中は唯風ただを便りに運転せねばならぬ。二、三年前、和オ蘭から買入れ、価あたいは小判で二万五千両、船の名を咸臨丸かんりんまると云う。その前、安政二年の頃から幕府の人が長崎いっつに行つて、蘭人に航

海術を伝習してその技術も漸く進歩したから、この度使節がワシントンに行くに付き、日本の軍艦もサンフラン시스コまで航海と斯う云う訳けで幕議一決、艦長は時の軍艦奉行木村摂津守、これに隨従する指揮官は勝麟太郎、運用方は佐々倉桐太郎、浜口興右衛門、鈴藤勇次郎、測量は小野友五郎、伴鉄太郎、松岡磐吉、蒸気は肥田浜五郎、山本金次郎、公用方には吉よ、岡勇平、小永井五八郎、通弁官は中浜万次郎、少年士官には根津欽次郎、赤松大三郎、岡田井蔵、小杉雅之進と、医師二人、水夫火夫六十五人、艦長の従者を併せて九十六人。船の割にしては多勢の乗組人でありしが、この航海の事に就ては色々お話がある。

今度咸臨丸の航海は日本開闢以来

初めての大事業で、

かんりんまる
かいびやく

乗組士官の面々は固より日本人ばかりで事に当ると覺悟して居た

もと
アメリカ
カピテン
ブルツク

処が、その時亞米利加の甲比丹ブルツクと云う人が、太平洋の海

底測量のために小帆前船へネモコバラ号に乗て航海中、薩摩

の 大島沖で難船して幸に助かり、横浜に来て徳川政府の保護を

受けて、甲比丹以下、士官一人、医師一人、水夫四、五人、久し

く滞留の折柄、日本の軍艦がサンフランシスコに航海と聞

く
たりゆう
おりから

く
こうびん
これのつ

き、幸便だから之に乗て帰国したいと云うので、その事が定ま

らうとすると、日本の乗組員は米国人と一緒に乗るのは厭だと云

う。何故かと云うに、若しその人達を連れて帰れば、却て銘々共

が亞米利加人に連れて行て貰たように思われて、日本人の名譽に

いつ
もらつ

係るから乗せないと剛情を張る。夫れ是れで政府も余程困た様子でありしが、到頭ソレを無理庄付けにして同船させたのは、政府の長老も内実は日本士官の伎倆を覚束なく思い、一人でも米国の航海士が同船したらばマサカの時に何かの便利になろうと云う老婆心であつたと思われる。

木村摂津守艦長きむらせつつのかみ 木村摂津守きむらせつつのかみ と云う人は軍艦奉行の職を奉じて海軍の長上官であるから、身分相當に従者を連れて行くに違いない。
 そ夫れから私はどうもその船のつに乘アメリカて亞米利加いっに行こころざして見たい志はあるけれども、木村と云う人は一向知らない。去年大阪から出て來た計りで、そんな幕府の役人などに縁のある訳けはない。所さが幸いに江戸に桂川かつらがわと云う幕府の蘭家らんかの侍医がある。その家は日本

國中蘭学医の総本山とでも名を命つけてよろしい名家であるから、江戸は扱置き日本國中、蘭学社會の人で桂川と云う名前を知らない者はない。ソレ故ゆえ私なども江戸に来れば何は扱置き桂川の家には訪問するので、度々たびたびその家に出入して居る。その桂川の家と木村の家とは親類——極く近い親類である。夫れから私は桂川に頼て、如何かして木村さんの御供をして亞米利加に行きたいが紹介して下さることは出来まいかと懇願して、桂川の手紙を貰て木村の家に行てその願意を述べた所が、木村では即刻許して呉れて、連れて行て遣らうと斯う云うことになつた。と云うのは、案ずるに、その時の世態人情に於て、外国航海など云えば、開闢以来の珍事と云おうか、寧ろ恐ろしい命掛けの事で、木村は勿論軍

艦奉行であるから家来はある、あるけれどもその家来と云う者も余り行く気はない所に、仮初かりそめにも自分から進すすんで行きたいと云うのであるから、実は彼方あつちでも妙な奴だ、幸やつと云う位くらいなことであつたろうと思う。直すぐに許されて私は御供ごくふをすることになつた。

浦賀に上陸して酒を飲む咸臨丸かんりんまるの出帆は万延元年の正月で、品川沖を出て先ず浦賀まに行た。同時に日本から亞米利加アメリカに使節むかいせんが立て行くので、亞米利加からその使節の迎船むかいせんが来た。ポーハタンアボハターンと云うその軍艦のつに乗のて行くのであるが、そのポーハタンは後から來ることになつて、咸臨丸は先に出帆して先ず浦賀に泊とまつた。浦賀に居て面白い事がある。船に乗組のりくみで居る人は皆若い人で、もう是れが日本の訣別おわかれであるから浦賀に上陸して酒を飲もうではな

いかと云出した者がある。何れも同説で、夫れから陸おかあがつに上あがつて茶屋おや見たような処に行くて、散々酒のんを飲のんでサア船に帰かると云う時に、誠に手癖てくせの悪い話で、その茶屋の廊下の棚の上に嗽茶椀うがいぢやわんが一つあつた、是れは船の中で役に立ちそうな物だと思おもつて、一寸ちよいと私が夫それぬすんを盜ぬすんで來くた。その時は冬の事ことで、サア出帆おほりした所が大嵐おおあらし、毎日々々の大嵐、なかく茶椀めしもつに飯めしを盛もつて本式たたに喫たべるなんと云うことは容易な事ではない。所が私の盜だ嗽茶椀おもつが役に立て、その中に一杯飯を入れて、その上に汁でも何でも皆掛けて、立て喰たつくう。誠に世話のない話で、大層たいそう便利を得とて、亞米利加アメリカまで行くて、帰りの航海こうか中も毎日用いて、到頭とうとう日本まで持もつて歸かえて、久しく私の家にゴロチャラして居た。程経ほどへて聞けばその浦賀で上陸のして飲のの

食みくいした処は遊女屋だと云う。夫れはその当そ時私は知らなかつたが、そうして見ると彼の大きな茶椀は女郎の嗽うがいぢやわん茶椀であつたものろう。思おもえば穢きたないようだが、航海中は誠に調法、唯一の宝おか物であつたのが可笑おかしい。

銀貨狼藉さて扱さげそれから船が出てずつと北の方に乘出のりだした。その咸かんり臨丸と云うのは百馬力の船であるから、航府中、始終石炭を焚たたくと云うことは出来ない。只港を出るとき這入はいるときに焚く丈たたけで、沖に出れば丸で帆前船ほまえせん、と云うのは石炭が積たたれますまい、石炭がなければ帆で行かなければならぬ。その帆前船のつに乗のて太平海を渡るのであるから、それはく毎日の暴風で、解はしけ船ぶねが四よし艘そうあつたが激浪げきろうの為ために二艘取しめられて仕舞しまうた。その時は私は

艦長の家来であるから、艦長の為めに始終左右の用を弁じて居た。艦長は船の艤方ともの方の部屋に居るので、或ある日、朝起きていつもの通り用を弁じましようと思って艤方の部屋いっに行た、所がその部屋に弗ドルラルが何百枚か何千枚か知れぬ程散乱して居る。如何したのかと思うと、前夜の大嵐おおあらしで、袋に入れて押入おしいれの中に積上げてあつた弗、定めし錠も卸してあつたに違いないが、劇はげしい船の動搖で、弗の袋が戸を押破おしゃぶつて外に散乱したものと見える。是れは大変な事と思って、直に引返ひきかえして舳おもての方に居る公用方の吉岡勇平よしおかゆうへいにその次第を告げると、同人も大に驚き、場所に駈付けかけつけ、私も加勢せいしてその弗を拾ひろいあつ集めて袋に入れて元の通り戸棚に入れれたことがあるが、元來船中にこんな事の起るその次第は、當時外國為か

替わせと云う事に就ついて一寸ちよいとも考かえがないので、旅たびをすれば金かねが要いる、
 金かねが要いるれば金かねを持もつて行くと云う極ごく簡単な話はなしで、何万弗ドルラルだか知しれない
 弗ふを、袋ふくろなどに入いれて艦長かんじょうの部屋へやに藏おさめて置おきたその金かねが、嵐嵐
 為ためめに溢あふれ出だたと云うような奇談きだんを生うじたのである。夫それでも大た
 抵てい四十年前よの事情じようが分わりましよう。今ならば一向いつこう訳わけけはないい。
 為替かわせで一寸ちよいと送おくて遣やれば、何も正しょう金きんを船ふねに積づんで行く必要ほひはない
 いが、商しょう売ばい思想しゅうのない昔むかの武家ぶけは大抵だいこんなものである。航海こう中なか
 は毎日まいにちの嵐嵐で、始終し船ふね中に波なみを打う上げる。今でも私は覺おえて居ゐる
 が、甲板こうばんの下したに居ゐると上うに四角ような窓まどがあるので、船ふねが傾かたむくとその
 窓まどから大洋たいようの立浪たつなみが能のく見える。それは大層だいな波なみで、船体ふねたいが
 三十七さんじゆ、八度は度ど傾かたむくと云うことは毎度まいどの事ことであつた。四十五よ五度ど傾かたむく

と沈むと云うけれども、幸に大きな災もなく只その航路を進で行く。進で行く中に、何も見えるものはないその中で以て、一度帆前船に遇うたことがあつた。ソレは亜米利加の船で、支那人を乗せて行くのだと云うその船を一艘見た切り、外には何も見ない。牢屋に大地震の如し所で三十七日掛て桑港に着た。航海中私は身体が丈夫だと見えて怖いと思うことは一度もない。始終私は同船の人に戯れて、「是れは何の事はない、生れてからまだ試みたことはないが、牢屋に這入て毎日毎夜大地震に遇て居ると思えば宜いじやないかと笑て居る位な事で、船が沈もうと云うこととは一寸とも思わない。と云うのは私が西洋を信ずるの念が骨に徹して居たものと見えて、一寸とも怖いと思ったことがない。夫そ

れから途中で水が乏しくなつたので布哇に寄るか寄らぬかと云う
 説が起おこつた。辛抱して行けば布哇に寄らないでも間に合うであろう
 が、極用心をすれば寄港して水を取とつて行く、如何しようかと云う
 が、遂に布哇に寄らずに 桑サン 港フランシスコ に直航と斯こう決定して、夫
 れから水の儉約だ。何でも飲むより外は一切水を使うことはなら
 ぬと云うことになつた。所でその時に大に人を感激せしめた事が
 ある、と云うのは船中に亞米利加アメリカの水夫が四、五人居ましたその
 水夫等らが、動やもすると水を使うので、甲比丹カピテンブルツクに、どうも
 水夫が水を使うて困ると云いたら甲比丹の云うには、水を使うたら
 直に鉄砲で撃うちころ殺くして呉れ、是れは共同の敵いじやから説諭も要ら
 なければ理由を質問するにも及ばぬ、即刻銃殺して下さいと云う。

理屈を云えば、その通りに違いない。夫れから水夫を呼んで、水を使はは鉄砲で撃殺すから爾う思えと云うような訛けで水を儉約したから、如何やら斯うやら水の尽きると云うことがなくて、同勢合せて九十六人無事に亞米利加に着た。船中の混雜は中々容易ならぬ事で、水夫共は皆筒袖の着物は着て居るけれども穿物は草鞋だ。草鞋が何百何千足も貯えてあつたものと見える。

船中はもうビシヨくで、カラリとした天氣は三十七日の間に四日か五日あつたと思います。誠に船の中は大変な混雜であつた（桑港着船の上、艦長の奮發で水夫共に長靴を一足ずつ買って遣て夫れから大に体裁が好くなつた）。

日本国人の大膽併しこの航海に就いては大に日本の為めに誇ること

がある、と云うのは抑も日本人の人が始めて蒸氣船なるものを見たのは嘉永六年、航海を学び始めたのは安政二年的事で、安政二年に長崎に於て和蘭人から伝習したのが抑も事の始まりで、その業成て外国に船を乗出そうと云うことを決したのは安政六年の冬、即ち目に蒸氣船を見てから足掛け七年目、航海術の伝習を始めてから五年目にして、夫れで万延元年の正月に出帆しようと云うその時、少しも他人の手を藉らずに出掛けて行こうと決断したその勇気と云いその伎倆と云い、是れだけは日本国の名譽として、世界に誇るに足るべき事実だろうと思う。前にも申した通り、航海中は一切外国人の甲比丹ブルツクの助力は假らないと云うので、測量するにも日本人自身で測量する。亞米利加の人も亦自分で測

量して居る。互に測量したものを見合せる丈けの話で、決して亞米利加人に助けて貰うと云うことは一寸でもなかつた。ソレだけは大に誇ても宜い事だと思う。今の朝鮮人、支那人、東洋全体を見渡した所で、航海術を五年学んで太平海を乗越そうと云うその事業、その勇氣のある者は決してありはしない。ソレ所ではない。昔々露西亞のペートル帝が和蘭オランダにて航海術を学んだと云うが、ペートル大帝だいていでもこの事は出来なかろう。仮令い大帝は一種絶倫の人傑じんけつなりとするも、当時の露西亞に於て日本人の如く大胆にして且つ學問思想の緻密なる國民は容易になかろうと思われる。

米国人の歓迎祝砲海上恙なく桑港サンフランシスコに着た。着くやいなや

土地の重立おもだつたる人々は船まで来て祝意を表し、之を歓迎の始めとして、陸上の見物人は黒山くろやまの如し。次で陸から祝砲を打つと云うことになつて、彼方あちらから打てば咸臨丸かんりんまるから応砲せねばならぬと、この事に就ついて一奇談がある。勝麟太郎と云う人は艦長木村の次に居て指揮官であるが、至極船に弱い人で、航海中は病人同様、自分の部屋の外に出ることは出来なかつたが、着港になれば指揮官の職として万端差図ばんたんさしづする中に、彼の祝砲の事が起おこつた。所で勝の説に、ソレは逆とも出来る事でない、ナマジ応砲などして遣り傷やそこなうよりも此方こちらは打たぬ方が宜いと云う。爾そうすると運用方がたの佐々倉桐太郎は、イヤ打てないことはない、乃公おれが打て見せる。「馬鹿ひや云え、貴様達に出来たら乃公の首を遺やると冷ひやかされ

て、佐々倉はいよく承知しない。何でも応砲して見せると云うので、夫れから水夫共そどもを差団して大砲の掃除、火薬の用意して、砂時計もつを以て時を計り、物の見事に応砲が出来た。サア佐々倉が威張り出した。首尾克よく出来たから勝の首は乃公の物だ。おれ併しかし航海中、用も多いから暫く彼の首を当人に預けて置くと云いつて、大に船中を笑わした事がある。兎も角もマア祝砲だけは立派に出来た。ソコで無事に港に着つけたらば、サアどうも彼方あつちの人の歓迎と云うものは、それはくく實に至れり尽せり、この上の仕様しうようがないと云う程ほどの歓迎。亞米利加人アメリカの身になつて見れば、亞米利加人が日本に来て始めて国を開いたと云うその日本人が、ペルリの日本行わより八年目に自分の國に航海して來たと云う訳けであるから、丁ちよう

度^ど自分の学校から出た生徒が実業に着^{つい}て自分と同じ事をすると
 同様、乃公^{おれ}がその端^{たんちょ}緒^{しょ}を開いたと云わぬ計^{ばかり}の心^{こころもち}持^{もち}であつた
 に違^ひない。ソコでもう日本人を掌^{てのひら}の上に乗せて、不自由をさせ
 ぬよう^よに不自由をさせぬよう^よにとばかり、桑^{サンフランシスコ}港^コに上陸す
 るや否^{いな}や馬車^{もつ}を以^てて迎^{むか}いに来て、取敢^{とりあ}えず市中のホテルに休息と
 云うそのホテルには、市中の役人か何かは知りませぬが、市中の
 重^{おもだつ}立^たた人が雲霞^{うんか}の如く出掛け^けて來た。様々^{ごと}の接待^{きょうおう}饗^{こう}応^{おう}。
 レカラ桑港の近傍に、メールアイランドと云う処に海軍港附屬の
 官舎^{さんしょ}を咸臨^{かんりん}丸^{まる}一行の止宿^{しそゆくじょ}所^所に貸して呉^{くれ}れ、船は航海中なか^ノ
 ノ損^{うりゆう}所^所が出来たからとて、船渠^{ドック}に入れて修覆^{しゆふく}をして呉^{くれ}れる。逗^と
 留^{もうろん}中^{あつちまかない}は勿論^{あつちまかない}彼方^しで賄^{はず}も何もそつくり為^して呉^{くれ}る筈^{はず}であるが、

水夫を始め日本人が洋食に慣れない、矢張り日本の飯でなければ喰えないと云うので、自分賄と云う訳けにした所が、亞米利加の人は兼て日本人の魚類を好むと云うことを能く知て居るので、毎日々々魚を持って来て呉れたり、あるいは日本人は風呂に這入ることが好きだと云うので、毎日風呂を立てゝ呉れると云うような訳け。

所でメールアイランドと云う処は町でないものですから、折節今日は桑港サンフランシスコに来いと云て誘う。夫れから船に乗のつて行くと、ホテルに案内して饗應すると云うような事が毎度ある。

敷物に驚く所が此方は一切万事不慣れで、例えば馬車を見ても始めてだから実に驚いた。其處に車があつて馬が付て居れば乗物だと云うことは分りそうなものだが、一見したばかりでは一寸ちよと考かんがえ

が付かぬ。所で戸を開けて這入ると馬が駈出す。成程是れは馬の挽く車だと始めて発明するような訳け。何れも日本人は大小を挾して穿物は麻裏草履を穿て居る。ソレでホテルに案内されて行て見ると、絨氈が敷詰めてあるその絨氈はどんな物かと云うと、先ず日本で云えば余程の贅沢者が一寸四方幾干と云て金を出して買うて、紙入れにするとか貢入にするとか云うようなソンナ珍らしい品物を、八畳も十畳も恐ろしい広い処に敷詰めてあつて、その上を靴で歩くとは、扱^{さてさて}々途方もない事だと實に驚いた。けれども亞米利加人が往来を歩いた靴の儘で颯々と上るから此方も麻裏草履でその上に上た。上ると突然酒が出る。徳利の口を明けると恐ろしい音がして、先ず変な事だと思うたの

はシャンパンだ。そのコップの中に何か浮ういて居るのも分らない。

三、四月暖氣の時節に氷があろうとは思いも寄らぬ話で、ズーツ
と銘^{めいめい}々の前にコップが並んで、その酒を飲む時の有様^{ありさま}を申せ
ば、列座の日本人中で、先ずコップに浮いて居るものの中に入れて胆^{きも}を潰^{つぶ}して吹出す者もあれば、口から出さずにガリ//＼
噛^かむ者もあると云うような訳^{わけ}けで、漸^{ようや}く氷が這^{はいつ}入て居ると云うこ
とが分つた。ソコで又煙草^{タバコ}を一服^{おもつ}と思^{おもつ}た所で、煙草盆^{たばこのぶち}がない、灰^は
吹^{ふき}がないから、そのとき私はストーヴの火で一寸^{ちよい}と点けた。マ
ツチも出て居たろうけれどもマツチも何も知りはせぬから、スト
ーヴで吸付けた所が、どうも灰吹^{すいがら}がないので吸殻^{すいがら}を棄^{すて}る所がな
い。夫れから懷中の紙を出してその紙の中に吸殻^{ふきだ}を吹出して、念

を入れて揉んでく火の氣のないよう^に捩付けて袂に入れて、暫くして又後の^{あと}一服を遣^やろうとするその時に、袂から煙^{けぶり}が出て居る。何ぞ図^{はか}らん、能く消したと思たその吸殻の火が紙に^{うつづ}移て煙が出来たとは大に胆を潰した。

磊落書生も花嫁の如し都てこんな事ばかりで、私は生れてから嫁^{よめいり}入^{いり}をしたことはないが、花嫁が勝手の分らぬ家に住込んで、見^{うだん}談^{うだん}を云う者もあるその中で、お嫁さんばかり^{ひとしづか}ひとり静にしてお行儀^{つくろ}を繕^{かえつ}い、人に笑われぬようにしようとして却てマゴツイ^{およ}て顔を赤くするその苦しさはこんなものであろうと、凡そ推察が出来ました。日本を出るまでは天下独歩、眼中人なし怖い者なしと威張^{いばつ}

て居た磊落書生も、始めて亞米利加に来て花嫁のように小さくなつて仕舞たのは、自分でも可笑しかつた。夫れから彼方の貴紳士が打寄りダンシングとか云て踊りをして見せると云うのは毎度の事で、扱行て見た処が少しも分らず、妙な風をして男女が座敷中を飛廻るその様子は、どうにも斯うにも唯可笑くて堪らない、けれども笑ては悪いと思うから成るたけ我慢して笑わないようにして見て居たが、是れも初めの中は随分苦労であつた。

女尊男卑の風俗に驚一寸した事でも右の通りの始末で、社会上の習慣風俗は少も分らない。或る時にメールアイランドの近処にバレーフォーと云う処があつて、其処にオランダの医者が居る。和蘭人は如何しても日本人と縁が近いので、その医者が艦長の木村

さんを 招しょうたい 待まつ したいから来て呉くれれないかと云うので、その医者
の家うちに行いつた所ところが、田舎相応の流行家と見えて、中々の御馳走ごちそうが出
る中に、如何いかにも不審な事には、お内儀うちぎさんが出て来て座敷に坐
り込んで頻りに客の取持とりもちをすると、御亭主が周旋奔走して居る。
是れは可笑しい。丸で日本とアベコベな事をして居る。御亭主が
客の相手になつてお内儀さんが周旋奔走するのが 当然あたりまえ である
に、左りとはどうも可笑しい。ソコで御馳走は何かと云うと、豚
の子の丸煮きもが出た。是れにも胆きもを潰つぶした。如何どうだ、マア呆返あきれかえつたな、
丸で安達ケ原あだちはらに行たような訣けわだと、斯こう思おもうた。散々さんざん 馳走ごちそうを
受けて、その帰りに馬に乗らないかと云う。ソレは面白い、久
振りだから乗のろうと云いつて、その馬を借りて乗のて來た。艦長木村

は江戸の旗はたもと本だから、馬に乗ることは上じょうず手てだ。江戸に居れば毎日馬に乗らぬことはない。夫それからその馬に乗てどんくしつ駆かけけて來ると、亞米利加人アメリカが驚いて、日本人が馬に乗ることを知して居ると云うて不思議の顔をして居る。爾そう云う訳わけで双方共に事情が少しも分らない。

事物の説明に隔靴の歎あり夫れから又、亞米利加人アメリカが案内して諸方の製作所などを見せて呉くれた。その時は 桑サンフランシスコ 港 地方にマダ鉄道が出来ない時代である。工業は様々の製作所があつて、ソレを見せて呉れた。其處そこがどうも不思議な訳わけで、電氣利用の電灯はないけれども、電信はある。夫れからガルヴァニの鍍金法めつきと云うものも實際おこなわに行ゆれて居た。亞米利加人の考かんがえに、そう云うもの

は日本人の夢にも知らない事だらうと思て見せて呉た所が、此方おもつはチャント知て居る。是れはテレグラフだ。是れはガルヴァニの力で斯う云うことをして居るのだ。又砂糖の製造所があつて、大きな釜を真空にして沸騰を早くすると云うことを遺て居る。ソレを懇々と説くけれども、此方は知て居る、真空にすれば沸騰が早くなると云うことは。且つその砂糖を清淨にするには骨炭こんで漉せば清淨になると云うこともチャント知て居る。先方では爾そう云う事は思いも寄らぬ事だと斯う察して、懇ろに数えて呉れるのであろうが、此方は日本に居る中に数年間そんな事ばかり穿鑿せんさくして居たのであるから、ソレは少しも驚くに足らない。只驚いたのは、掃溜はきだめに行つても浜辺に行つても、鉄の多い

には驚いた。申さば石油の箱見たような物とか、色々な缶詰の空きがらなどが沢山棄てゝある。是れは不思議だ。江戸に火事があると焼跡に釘拾いがウヤ／＼出て居る。所で亞米利加(アメリカ)にて見ると、鉄は丸で塵埃(ごみ)同様に棄てゝあるので、どうも不思議だと思うことがある。

夫れから物価の高いにも驚いた。牡蠣(かき)を一罐(いちびん)買うと、半弗(ドル)、幾つあるかと思うと二十粒が三十粒位(ぐらいい)しかない。日本では二十四文(もん)か三十文と云うその牡蠣が、亞米利加では一分二朱(いちぶにしゆ)もする勘定で、恐ろしい物の高い所だ、呆(あき)れた話だと思ったような次第で、社會上、政治上、經濟上の事は一向分らなかつた。

ワシントンの子孫如何と問う所で私が不図胸(ふと)に浮かんで或(あるひと)人に

聞いて見たのは外でない、今華盛頓の子孫は如何なつて居るかと尋ねた所が、その人の云うに、華盛頓の子孫には女がある筈だ、
 今如何して居るか知らないが、何でも誰かの内室になつて居る容子だと如何にも冷淡な答で、何とも思て居らぬ。是れは不思議だ。
 勿論私も亞米利加は共和国、大統領は四年交代と云うことは百も承知のことながら、華盛頓の子孫と云えば大変な者に違いない
 と思うたのは、此方の腦中には源頼朝、徳川家康と云うような考があるつて、ソレから割出して聞た所が、今の通りの答に驚いて、是れは不思議と思うたことは今でも能く覚えて居る。
 理学上の事に就ては少しも胆を潰すと云うことはなかつたが、一方の社会上の事に就ては全く方角が付かなかつた。或時にメー

ルアイランドの海軍港に居る甲比丹のマツキヅガルと云う人が、日本の貨幣を見たいと云うので、艦長は予てそんな事の為めに用意したものと見え、新古金銀が数々あるから、慶長小判を始めとして万延年中迄の貨幣を揃えて甲比丹の処へ送て遣た。所が珍らしいくと計りで、宝を貰たと云う考は一寸とも顔色に見えない。昨日は誠に有難うと云てその翌朝お内儀さんが花を持って来て呉れた。私はその取次をして独り窃に感服した。人間と云うものはアヽありたい、如何にも心の置き所が高尚だ、金や銀を貰たからと云てキヨトヽ悦ぶと云うのは卑劣な話だ、アヽありたいものだ、大きに感心したことがある。

軍艦の修繕に価を求めず前に云うた通り亞米利加人は誠に能く世

話をして呉れた。軍艦ドックを船渠に入れて修覆して呉れたのみならず、親切にして呉れた。いよく船の仕度こしらへも出来て帰ると云う時に、軍艦の修覆その他の入用にゅうようを払いしたいと云うと、彼方あつちの人は笑て居る。代金などゝは何の事だと云うような調子で一寸とも話にならない。何と云うても勘定を取りそうにもしない。

始めて日本に英辞書に入るその時に私と通弁つうべんの中浜万次郎なかはままんじろうと云う人と両人がウエブストルの字引じびきを一冊ずつ買って来た。是れが日本にウエブストルと云う字引の輸入の第一番、それを買ってモウ外には何も残ることなく、首尾克よく出帆して來た。

義勇兵所で私が二度目に亞米利加アメリカに行たとき、甲比丹ブルツクに

再会して八年目にきい聞った話がある。それは最初日本の咸臨丸が亞米利加についに着たとき、桑港サンフランシスコで中々議論があつた。今度日本の軍艦が来たからその接待を盛さかんにしなければならぬと云うので、彼處あすこに陸軍の出張所を見たようなものがある。其處そこへ甲比丹ブルックカピテンが行いって、大に歓迎しようではないかと相談を掛けると、華ワシン盛頓トントンに伺うかがうた上でなければ出来ないと云う。「そんな事をして居ては間に合わないから、何でも出張所の独断で遣れと談じても、兎角とかくらち埒あが明かないから、甲比丹は少し立腹して、いよ／＼政府の筋で出来なければ此方こっちに仕様しようがあると云いって、夫れから方向を転じて桑港サンフランシスコの義勇兵に持込んで、どうだ斯こう云う詰わけであるから接待せぬかと云うと、義勇兵は大悦おおよろこびで直すぐに用意が出来

た。全体この義勇兵と云うものは不斷軍役ぐんえきのあるではなし、大將は御医者様で、少将は染物屋そめものやの主人と云うような者で組立てゝあるけれども、チヤント軍服も持て居れば鉄砲も何もすつかり備えて居て、日曜か何か暇ひまな時か又は月夜などに操練そうれんをして、イザ戦争と云う時に出て行くと云うばかりで、太平の時は先ず若い者の道楽仕事であるから、折角拵えた軍服も滅多めつたに着ることがない所に、今度甲比丹ブルツクの話を聞いて千歳一遇の好機会と思ひ、晴れの軍服を光らして日本の軍艦咸臨丸を歓迎したのであると、甲比丹が話して居ました。

布哇寄港祝砲と共に目出度めでたく桑サンフランシスココ港ハワイを出帆して、今度は布哇ハワイ寄港と定まり、水夫は二、三人亞米利加アメリカから連れて來たけれども、

甲比丹ブルツクは居らず、本当の日本人ばかりで、何やら斯うやら布畦を搜出して、其処へ寄港して三、四日逗留した。逗留中、布畦の風俗に就ては物珍しく云う程の要用はないだろう、と思うのは、三十年前^{ぜん}の布畦も今も^{かわつ}変たことはなかろう、その土人の風俗は汚ない有様^{ありさま}で、一見^こ蛮民^{ばんみん}と云うより外仕方^{ほかしかた}がない。王様にも遇うたが、是れも国王陛下と云えれば大層^{たいそう}なようだけれども、其処^{そこ}へ行て見れば驚く程の事はない。夫婦連^{づれ}で出て来て、国王は只羅紗^{ただぎシャ}の服を着て居ると云う位^{くらい}な事、家も日本で云えば中位^{ちゅうぐらい}の西洋造り、宝物^{しきもの}を見せると云うから何かと思たら、鳥の羽^{こしら}で拵えた敷物^{もつ}を持って来て、是れが一番のお宝物だと云う。あれが皇弟か、その皇弟が笊^{ざる}を提げて買物^ゆに行くような訳けで、マア村の

漁師の親方ぐらいの者であつた。

少女の写真それから布畦で石炭を積込んつみこで出帆した。その時に一寸よいした事だが奇談がある。私は予て申す通り一体の性質が花柳かりゆうに戯れるなど、云うことは仮初かりそめにも身に犯した事のないのみならず、口でもそんな如何いかがわしい話をした事もない。ソレゆえ同行の人は妙な男だと云う位くらいには思つて居たろう。夫れから布畦ハウイを出帆したその日に、船中の人こに写真を出して見せた。是はどうだ（その写真は此處ここに在りと、福澤先生が筆記者に示されたるものを見るに、四十年前ぜんの福澤先生の傍かたわらに立ち居るは十五、六の少女なり）。その写真と云うのはこの通りの写真だろう。ソコでこの少女が芸者か女郎か娘かは勿論もちろんその時に見さかいのある訳けは

ない——お前達は 桑 港サンフランシスコ に長く逗留して居たが、婦人と親しく相並んで写真を撮るなどと云うことは出来なかつたろう、サアどうだ、朝夕口でばかり下らない事を云て居るが、実行しなければ話にならないじやないかと、大に冷かして遣た。是れは写真屋の娘で、歳は十五とか云た。その写真屋には前にも行たことがあるが、丁度雨の降る日だ、その時私ひとりで行た所が娘が居たから、お前さん一緒に取ろうではないかと云うと、亜米利加の娘だから何とも思いはしない、取りましようと云うて一緒に取たのである。この写真を見せた所が、船中の若い士官達は大に驚いたけれども、口惜しくも出来なかろう、と云うのは桑港でこの事を云出いいだすと直すぐに真似まねをする者があるから黙て隠して置だまつて、いよ

／ 布畦を離れてもう亞米利加にも何處にも縁のないと云う時に見せて遣て、一時の戯に人を冷かしたことがある。

不在中桜田の事変帰る時は南の方を通たと思う。行くときは違て至極海上は穩かで、何でもその歳には閨があつて、閨を罩めて五月五日の午前に浦賀に着した。浦賀には是非錨を卸すと云うのがお極りで、浦賀に着するや否や、船中数十日のその間は勿論湯に這入ると云うことの出来る訳けもない、口嗽をする水がヤツト出来ると云う位な事で、身体は汚れて居るし、髪はクシャ／＼になつて居る、何は扱置き一番先に月代をして夫れから風呂に這入ろうと思うて、小舟に乗て陸に着くと、木村のお迎が數十日前から浦賀に詰掛けて居て、木村の家来に島安太郎と云う用

人^んがある、ソレが海岸まで迎いに来て、私が一番先に陸^{あがつ}に上^ててその島に遇うた。正月^{はじめ}の初^{はじ}に亞米利加^{アメリカ}に出帆して浦賀に着^つくまでと云うものは風の便りもない、郵便もなければ船の交通と云うものもない。その間^{あいだわざか}は僅^{ほん}に六箇月^{あいだ}の間^{あいだ}であるが、故郷の様子は何も聞かないから、殆^{ほと}んど六ヶ年も遇わぬような心^{こころもち}地^ぢ。ヒヨイと浦賀の海岸で島に遇て、イヤ誠にお久振り、時に何か日本に変^{かわつ}事はないかと尋ねた所が、島安太郎が顔色^{ひさしぶ}を変えて、イヤあつたともく大変な事が日本にあつたと云うその時、私が、一寸^{ちよい}と島さん^{まつ}待て呉れ、云うて呉れるな、私が中^あて見せよう、大変と云えば何でも是れは水戸の浪人が掃部^{かもんさま}様^{やしき}の邸^{あばれこ}に暴^{あばれこ}込んだと云うような事ではないかと云うと、島は更^さらに驚き、どうしてお前さ

んはそんな事を知て居る、何処で誰に聞いた、聞たつて聞ないと
 つて分るじやないか、私はマア雲氣を考えて見るに、そんな事で
 はないかと思う、イヤ是れはどうも驚いた、邸に暴込んだ所では
 ない、斯うく云う訳けだと云て、桜田騒動の話をした。その歳
 の三月三日に桜田に大騒動のあつた時であるから、その事を話し
 たので、天下の治安と云うものは大凡そ分るもので、私が出立す
 る前から世の中の様子を考えて見るとどうせ騒動がありそうな事
 だと思って居たから、偶然にも中たので誠に面白かつた。

その前年から徐々攘夷説が行れると云う世の中になつて来て、
 アメリカ亞米利加に逗留中、艦長が玩具半分に蝙蝠傘を一本買った。
 珍しいものだと云て皆寄て拈くつて見ながら、如何だろう之を日

本に持て帰もつかえつてさして廻まわつたら、イヤそれは 分わかりきつ切きて居る、新錢座の艦長の屋敷から日本橋まで行く間に浪人者に斬きられて仕舞うに違あいだない、先ず屋敷の中まで折節おりふしひろげて見るより外ほかに用のない品物だと云たことがある。凡そこのくらいな世の中よで、帰國の後は日々に攘夷論さかんが盛さかんになつて來た。

幕府に雇わる亞米利加アメリカから歸かえつてから塾生も次第に増して相替あいかわらず教授して居る中に、私は亞米利加渡航さいわいを幸さいわいに彼の國こくじん人に直接して英語ばかり研究して、歸てからも出来るだけ英書を読むようにして、生徒の教授にも蘭書は教えないで悉く英書を教える。所がマダなかく、英書が六むかしくて自由自在に読めない。読めないから便たよる所は英蘭対訳の字書のみ。教授とは云いながら、実は教

うるが如く学ぶが如く、共に勉強して居る中に、私は幕府の外國方（今で云えば外務省）に雇われた。その次第は外国の公使領事から政府の閣老又は外国奉行へ差出す書翰を翻訳する為めである。当時の日本に英仏等の文を読む者もなければ書く者もないから、諸外国の公使領事より来る公文には必ず和蘭の翻訳文を添うるの慣例にてありしが、幕府人に横文字読む者とては一人もなく、止むを得ず吾々如き陪臣（大名の家来）の蘭書読む者を雇うて用を弁じたことであるが、雇われたに就ては自から利益のあると云うのは、例えば英公使、米公使と云うような者から来る書翰の原文が英文で、ソレに和蘭の訳文が添うてある。如何かしてこの翻訳文を見ずに直接に英文を翻訳してやりたいもの

だと思つて試みる、試みて居る間に分らぬ処がある、分らぬと蘭訳文を見る、見ると分ると云うような訳けで、なかく英文研究の為めになりました。ソレからもう一つには幕府の外務省には自から書物がある、種々様々な英文の原書がある。役所に出て居て読むのは勿論、借りて自家へ持て來ることも出来るから、ソんな事で幕府に雇われたのは身の為めに大に便利になりました。

欧羅巴各国に行く

私が亞米利加から帰たのは万延元年、その年に華英通語と云うものを翻訳して出版したことがある。是れが抑も私が出版の始ま

り、先まずこの両三年間と云うものは、人に教うると云うよりも自分で以て英語研究が專業であつた。所が文久二年の冬、日本から歐羅巴ヨーロッパ諸国に使節派遣と云うことがあつて、その時に又私はその使節に附て行かれる機会を得ました。この前亞米利加に行く時には私に木村摠津守きむらせつのかみに懇願して、その従僕と云うことにして連れて行いつて貰もらつたが、今度は幕府に雇おのづわられて居て歐羅巴行ゆきを命ぜられたのであるから、自から一人前いちにんまえの役人のような者になつて、金も四百両ばかり貰もらつたかと思う。旅中は一切官費で、只手当ただとして四百両の金を貰たから、誠に世話なし。ソコで私は平生頓へいぜいとんと金の要らない男で、徒に金を費すと云うことは決してない。四百両貰たその中で百両だけ國に居る母おくつに送おくつてやつた。如何にも母に対し

て氣の毒だと云うのは、亞米利加から帰てマダ國へ親の機嫌を聞きに行きもせずに、重ねて歐羅巴に行くと云うのだから、如何にも済まない。而已ならず私が亞米利加旅行中にも、郷里中津の者共が色々々な風聞を立てゝ、亞米利加に行つて彼の地で死んだと云い、甚だしきに至れば現在の親類の中の一人が私共の母に向て、誠に氣の毒な事じや、諭吉さんもとうく亞米利加で死んで、身体は醯けにして江戸に持て帰たそ.udなんと、威すのか冷すのかソソンな事まで云て母を鬻て居たと云うような事で、是れも時節柄で我慢して黙て居るより外に仕方がないとして居ながら、母に対しては如何にも気が済まない。金をやつたからと云てソレで償える訳けのものではないけれども、マアく百両だの二百両

だのと云う金は生れてから見たこともない金だから、ソレでも送て遣やろうと思て、幕府から請取うけとつた金を分けて送りました。

それから欧羅巴に行くと云うことになつて、船の出発したのは文久元年十二月の事であつた。この度の船は日本の使節たびが行くと云う為ためめに、英吉利イギリスから迎船むかいぶねのようにして来たオーデンと云う軍艦で、その軍艦に乘のつて香港ホンコン、新嘉堡シンガポールなどみなど々に立寄り、紅海はいっに這入はいりて、蘇士スエズから上陸して蒸氣車に乗て、埃及エジプトのカイロ府に着ついて一一晚ふたばんばかり泊り、それから地中海に出て、其処から又船に乗て仏蘭西フランスの馬塞耳マルセイユ、ソコデ蒸氣車に乗て里昂リオンに一泊、巴里パリに着て滞在凡そ二十日、使節の事を終り、巴里を去て英吉利イギリスに渡り、英吉利から和蘭オランダ、和蘭から普魯西プロスの都の

伯林に行き、柏林から露西亞のペートルスボルグ、夫れから再び巴里に帰て来て、仏蘭西から船に乗て、葡萄牙に行き、ソレカラ地中海に這入て、元の通りの順路を経て帰て来たその間の年月は凡そ一箇年、即ち文久二年一杯、推詰てから日本に帰て來ました。

さて 扱今度の旅行に就て申せば、私もこの時にはモウ英書を読み英語を語ると云うことが徐々出来て、夫れから前に申す通りに金も聊か持て居るその金は何も遣い所はないから、只日本を出る時に尋常一樣の旅装をした丈けで、その当時は物価の安い時だから何もそんなに金の要る訳けがない、その余た金は皆携えて行て竜動に逗留中、外に買物もない、唯英書ばかりを買って来た。是れ

が抑も日本へ輸入の始まりで、英書の自由に使われるようになつたと云うのも是れからの事である。

夫れから彼の国の巡回中色々観察見聞したことも多いが、是れは後の話にして、先ず使節一行の有様を申さんに、その人員は、

竹内下野守

正使 松平石見守

副使 京極能登守

御目付 柴田貞太郎

組頭 日高圭二郎

御勘定 福田作太郎

徒士目付 水品樂太郎

調役 岡崎道民

雇医 益頭駿次郎

医師但し漢方医なり 川崎道民

雇医 益頭駿次郎

御普請役

上田友助 定役元締森鉢太郎

定役 福地源一郎

通弁立広

作同 太田源三郎 同 斎藤大之進

同心 高松彦三郎

御小人

人目付 山田八郎 同 松木弘安

反訳方箕作

秋坪同福澤

諭吉同

右の外に三使節の家来両三人ずつと、賄小使六、七人、この小使の中には内証で諸藩から頼んで乗込んだ立派な士人もある。松木、箕作、福澤等は先ず役人のような者ではあるが、大名の家来、所謂陪臣の身分であるから、一行中の一番下席で惣人數凡そ四十人足らず、孰れも日本服に大小を横えて巴里、竜動を闊歩したも可笑しい。

旅行中用意の品々失策又失策日本出発前に外國は何でも食物が不自由だからと云うので、白米を箱に詰めて何百箱の兵糧を貯え、又旅中止宿の用意と云うので、廊下に灯す金行灯二尺四方もある鉄網作りの行灯を何十台も作り、その外提灯、

手燭、ボンボリ、蠅燭等に至るまで一切取揃えて船に積込
 んだその趣向は、大名が東海道を通行して宿駅の本陣に止宿
 する位の胸算に違いない。夫れからいよ／＼巴里に着して、
 先方から接待員が迎いに出て来ると、一応の挨拶終りて先ず此方
 よりの所望は、隨行員も多勢なり荷物も多いことゆえ、下宿は
 成るべく本陣に近い処に頼むと云うのは、万事不取締不安心だ
 から、一行の者を使節の近処に置きたいと云う意味でしよう。
 スルト接待員はいさい承知して、先ず人数を聞きだし、惣勢三十
 何人と分て、「是ればかりの人数なれば一軒の旅館に十組や二
 十組は引受けますとの答に、何の事やら詰けが分らぬ。ソレカラ
 案内に連れられて止宿した旅館は、巴里の王宮の門外にあるホテル

デロウブルと云う広大な家で、五階造り六百室、婢僕五百余人、
 旅客は千人以上差支なしと云うので、日本の使節などは何處
 に居るやら分らぬ。唯旅館中の廊下の道に迷わぬように、当分は
 ソレガ心配でした。各室には温めた空気が流通するから、ストー
 ヴもなれば蒸氣もなし、無数の瓦斯灯は室内廊下を照らして日
 の暮るゝを知らず、食堂には山海の珍味を並べて、如何なる西洋
 嫌いも口腹に攘夷の念はない、皆喜んで之を味うから、爰に手
 持不沙汰なるは日本から脊負て来た用意の品物で、ホテルの廊下
 に金行灯を点けるにも及ばず、ホテルの台所で米の飯を炊くこ
 とも出来ず、とうく仕舞には米を始め諸道具一切の雜物を、接
 待掛りの下役のランベヤと云う男に進上して、唯貰て貰うたの

も可笑しかつた。

先ずこんな塙梅式あんばいしきだから、吾々われわれ一行の失策物ものわら笑いは数限かず
 りもない。シガードシユガード間違えて烟草タバコを買いに遣て砂糖やつを
 持て来るもあり、医者は人參にんじんと思て買って来て生姜しょうがの粉こであつ
 たこともある。又或るときに三使節中の一人が便所あけはなに行く、家來
 がボンボリもつを持って御供おともをして、便所の二重の戸あけはなを明放あけはなにして、
 殿様おこしが奥の方で日本流に用を達すその間、家來は袴はかま着やくよう用よ、殿
 様の御腰おこしの物を持て、便所の外の廊下に平き直ひらてチャント番番をし
 て居るその廊下は旅館中の公道で、男女往来織おるが如くにして、
 便所の内外瓦斯ガスの光明こうめい昼あきらかよりも明なりと云うから堪たまらない。私
 は丁度ちようど其處そこ通り掛かかつて、驚いたとも驚くまいとも、先ず表に立たま

塞ちふさがつて物も言わずに戸を打締ぶちしめて、夫れからそろくその家來殿に話したことがある。

歐洲の政風人情政治上の事に就ついては、竜動ロンドン、巴里パリ等に在留中、色々な人に逢うて色々な事をきい聞いたが、固よりその事柄の由来を知らぬから能く分よわかる訳わけもない。当時は仮蘭西フランスの第三世ナポレヲンが歐洲第一の政治家と持囃もてはやされてエライ勢力であつたが、隣国の中普魯士も日の出の新進國で油断はならぬ。奥地利オーストリアとの戦争、又アルサス、ローレンスの事なども、国交際こつこうさいの問題として、何れ後年には云々の変乱が生ずるであろうなんと云うことは朝野政通ちよやせいつうの予言する所で、私の日記覚おぼえがき書にもチョイ／＼記してある。又竜動に居るとき、或る社中の人が社名を以て議院に建言し

たと云うて、その草稿を日本使節に送^{おくつ}て來た。建言の趣意は、在日本英國の公使アールコツクが新開國たる日本に居て乱暴無状、恰も武力を以^{もつ}て征服したる國民に臨むが如し云々とて、種々様々の証拠を挙げて公使の罪を責るその証拠の一つに、公使アールコツクが日本國民の靈場として尊^{そんぱい}持する芝の山内に騎馬にて乗^{のりこみ}込だるが如き言語に絶えたる無礼なりと痛論したる節もある。私はこの建言書を見て大に胸^{おおい}が下^{さが}った。成るほど世界は鬼ばかりでない、是れまで外國政府の仕振^{しづり}を見れば、日本の弱身に付込み日本人の不文殺伐なるに乗じて無理難題を仕掛けて眞実困^{こまつ}て居たが、その本国に來て見れば「自から」公明正大、優しき人もあるものだと思って、ますく平生^{へいぜい}の主義たる開國一偏の説を堅^{けんご}固に

したことがある。

土地の売買勝手次第又各国巡回中、待遇の最も濃なるは和蘭の右に出るものはない。是れは三百年来特別の関係で爾うなければならぬ。殊に私を始め同行中に横文字読む人で蘭文を知らぬ者はないから、文書言語で云えば欧羅巴中第二の故郷に帰たような詰けで自然に居心が宜い。夫れは扱置き和蘭滯留中に奇談がある。或るとき使節がアムストルダムに行て地方の紳士紳商に面会、四方八方の話の序に、使節の間に、「このアムストルダム府の土地は売買勝手なるかと云うに、彼の人答えて、「固より自由自在。「外国人へも売るか。」「値段次第、誰にでも、又何ほどにても。」左れば爰に外国人が大資本を投じて広く上地を買占め、之に城

廓砲台でも築くことがあつたら、夫れでも勝手次第かと云うに、
彼の人も妙な顔をして、「ソンナ事は是れまで考えたことはない。
如何に英仏その他の国々に金満家きんまんかが多いとて、他国の地面かづを買
て城を築くような馬鹿ばか氣きた商人はありますまいと答えて、双方共
に要領を得ぬ様子で、私共は之を見て實に可笑おかしかつたが、當時
日本の外交政略は凡およそこの辺から割出したものであるから堪たまらな
い訳わけさ。

見物自由の中又不自由夫れは扱居さておき、私がこの前亞米利加アメリカに行いった
ときには、カリフヲルニヤ地方にマダ鉄道がなかつたから、勿論
鉄道を見たことがない、けれども今度は蘇士スエズに上あがつて始めて鉄
道に乗り、ソレカラ歐羅巴ヨーロッパ各国を彼方あちこち此方こちと行くにも皆鉄道ば

かり、到る処に歓迎せられて、海陸軍の場所を始めとして、官私
の諸工場、銀行会社、寺院、学校、俱樂部等は勿論、病院に行け
ば解剖も見せる、外科手術も見せる、或は名ある人の家に晩餐（あるい）
の饗應（きょうおう）、舞踏の見物など、誠に親切に案内せられて、却て招
待の多いのに草臥（くたび）れると云う程の次第であつたが、唯こゝに一つ
可笑しいと云うのは、日本はその時丸で鎖国の世の中で、外国に
居ながら兔角（とかく）外国人に遇（あ）うことを止めようとするのが可笑しい。
使節は竹内、松平、京極の三使節、その中の京極は
御目附（おめつけ）と云う役目で、ソレには又相應の属官が幾人も附て居る。
ソレが一切の同行人を目ツ張子（ぱりこ）で見て居るので、なかく外国人
に遇うことが六かしい。同行者は何れも幕府の役人連で、その中

に先ず同志同感、互に目的を共にすると云うのは箕作秋坪と
 松木弘安と私と、この三人は年来の学友で互に往来して居たの
 で、彼方に居てもこの三人だけは自然別なものにならぬ。何でも
 有らん限りの物を見ようと計りして居る、ソレが役人連の目に面
 白くないと見え、殊に三人とも陪臣で、然かも洋書を読むと云
 うから中々油断をしない。何か見物に出掛けようとする、必ず
 御目附方の下役が附いて行かなければならぬと云う御定まりで
 始終附て廻る。此方は固より密売しようではなし、國の秘密を洩
 らす氣遣いもないが、妙な役人が附て来れば只蒼蠅ただうるさい。蒼蠅いの
 はマダ宜いが、その下役が何か外に差支さしつかえがあると、私共も出
 ることが出来ない。ソレは甚だ不自由でした。私はその時に

是れはマア何の事はない、日本の鎖国をそのまま、^{かつ}担いで来て、歐ヨ
 羅巴各国を巡回するようなものだと云て、三人で笑たことがあります。

血を恐れるソレでも私共は見ようと思うものは見、聞こうと思う事は聞きいたが、序ついでながらこの見けんもん聞きんもんのことに就て私の身の恥を云わねばならぬ。私は少年の時から至極元氣の宜い男で、時として大言壯語いげんそうごしたことも多いが、天稟氣うまれつきの弱い性質で、殺生が嫌い、人の血を見ることが大嫌い。例えは緒方の塾に居るときは刺しらく流りゆう行の時代で、同窓生は勿論もちろん私も腕の脈に針をして血とつを取とつたことがある。所が私は自分でも他人でもその血の出るのを見て心こころも持ちが善くないから、刺しらくと云えればチャント眼めを閉じて見ないよ

うにして居る。腫物しゆもつが出来ても針をすることは先ず見合せたいと云い、一寸ちよつとした怪我でも血が出ると顔色がんしょくが青くなる。毎度都会の地にある行倒ゆきだおれ、首縊くびくくり、変死人などは何としても見ることが出来ない。見物どころか、死人の話を聞いても逃げて廻ると云うような臆病者である。所が露西亞ロシアに滯留中、或る病院に外科手術があるから見物せよとの案内に箕作みつくりも松木まつきも医者だから直ぐに出掛ける。私にも一処に行けと無理に勧めて連れて行かれ、外科室に這入はいって見れば石淋せきりんを取出す手術で、執刀の医師は合羽かつぱを着て、病人をば俎まないたのよう台の上に寝かして、コロ、ホルムを臭かがせて先ず之を殺して、夫れからその医師が光り耀かがやく刀を執てグット制すと、大造たいそうな血ほとばしが迸ほとばしつて医者の合羽は真赤にな

る、夫れから刀の切口に釘抜のようものを入れて膀胱の中にある石を取出すとか云う様子であつたが、その中に私は変な心持になつて何だか気が遠くなつた。スルト同行の山田八郎といふ男が私を助けて室外に連出し、水など呑まして呉れてヤット正気に返た。その前独逸の柏林の眼病院でも、欹目の手術とて子供の眼に刀を刺す処を半分ばかり見て、私は急いでその場を逃出してその時には無事に済んだことがある。松木も箕作り私に意気地がないと云て頻りに冷かすけれども、持て生れた性質は仕方がない、生涯これで死ぬことでしょう。

事情探索の胸算夫れは扱置き私の欧羅巴巡回中の胸算は、凡そ書籍上で調べられる事は日本に居ても原書を読んで分らぬ処は

字引を引て調べさえすれば分らぬ事はないが、外国の人に一番分り易い事で殆んど字引にも載せないと云うような事が此方では一番六かしい。だから原書を調べてソレで分らないと云う事だけをこの逗留中に調べて置きたいものだと思って、その方向で以て是れは相当の人だと思えばその人に就て調べると云うことには力を尽して、聞くに従て一寸々々斯う云うように（この時先生細長くして古々しき一小冊子を示す）記して置いて、夫れから日本に帰てからソレを台にして尚お色々な原書を調べ又記憶する所を綴合せて西洋事情と云うものが出来ました。凡そ理化学、器械学の事に於て、或はエレキトルの事、蒸氣の事、印刷の事、諸工業製作の事などは必ずしも一々聞かなくても宜しいと云うのは、元

来私が専門学者ではなし、聞いた所が眞実深い意味の分る訳けはない、唯一通りの話を聞くばかり、一通りの事なら自分で原書を調べて容易に分かるから、コンナ事の詮索は先ず二の次にして、外に知りたいことが沢山ある。例えばコゝに病院と云うものが有る、所でその入費の金はどんな塩梅にして誰が出して居るのか、又銀行と云うものがあつてその金の支出入は如何して居るか、郵便法が行れて居てその法は如何云う趣向にしてあるのか、仏蘭西では徴兵令を厲行して居るが英吉利には徴兵令がないと云う、その徴兵令と云うのは、抑も如何云う趣向にしてあるのか、その辺の事情が頓と分らない。ソレカラ又政治上の選挙法と云うような事が皆無分らない。分らないから選挙法とは如何な法律で

議院とは如何な役所かと尋ねると、彼方の人は只笑て居る、何を聞くのか分り切た事だと云う様な訳。^{わけ}ソレが此方では分らなくてどうにも始末が付かない。又党派には保守党と自由党と徒党のような者があつて、双方負けず劣らず鎬を削^{しごぎけずつ}て争うて居ると云う。何の事だ、太平無事の天下に政治上の喧嘩をして居ると云う。サア分らない。コリヤ大変なことだ、何をして居るのか知らん。少しも考の付^{かんがえ}こう筈^{はず}がない。彼の人と此の人とは敵だなんと云うて、同じテーブルで酒を飲^{のん}で飯を喰^{くつ}て居る。少しも分らない。ソレが略^{ほほ}分るようになろうと云うまでは骨の折れた話で、その謂れ因縁が少しずつ分るようになつて来て、入組んだ事柄になると五日も十日も掛^{かかる}てヤツト胸に落ると云うような訳^{わけ}で、ソレが今度洋行

の利益でした。

樺太の境界談判それからその逗留中に誠に情けなく感じたことが
 あると申すは、私共の出立前からして日本国中、次第々々に攘夷
 論が盛になつて、外交は次第々々に不始末だらけ、今度の使節が
 露西亞に行た時に此方から樺太の境論を持出して、その談
 判の席には私も出て居たので、日本の使節がソレを云出すと先方
 は少しも取合わない。或は地図などを持出して、地図の色は斯う
 く云う色ではないか、自から此処が境だと云うと、露西亞人の
 云うには、地図の色で境が極れば、この地図を皆赤くすれば世界
 中露西亞の領分になつて仕舞うだらう、又これを青くすれば世界
 中日本領になるだらうと云うような調子で漫語放言、逆も寄付

かれない。マア兎にも角かくにもお互とに實地じしだいを調べたその上の事に為しようと云うので、樺太の境きは極めず宜加減いいかげんにして談判だんばんは罷やめになりましたが、ソレを私が傍そばから聞いて居て、是れは迫そなへも仕様しうやがない、一切万事たよ便べんる所なし、日本の不文不明ふぶんの奴等やつらが威張からいばりして攘夷論さかんが盛さかんになればなる程だ、日本の国力は段々弱おもづくなる丈だけの話はなで、仕舞しまいには如何どう云うようになり果てるだろうかと思おもって、實に情きようけなくなりました。

露政府の厚遇こつこうし國交際こつこうさいの談判は右の通りに水臭みずくさい次第であるが、使節わたくしに対する私の待遇は爾そうでない。ペートルスボルグ滯在中は日本使節一行たの為ために特に官舎かしわを貸か渡わたして、接待委員きょういんと云う者が四、五人あつてその官舎に詰つめ切りで、いろく饗きょう応おうするそ

の饗應の仕方しかたと云うは頗る手厚く、何に一つ遺憾はないと云う有様。ソレで御用がない時は名所旧跡を始め諸所の工場と云うような所に案内して見せて呉れる。その中に段々接待委員の人々と懇意になつて種々な話もしたが、その節露西亞せつロシアに日本人が一人居ると云う噂うわさきいを聞いたその噂は、どうも間違ない事実であろうと思われる。名はヤマトフと唱えて、日本人に違いないと云う。勿論その噂は接待委員から聞いたのではない。その外のほかの人から洩れたのであるが、先ず公然の秘密と云う位くらいな事で、チャント分て居た。そのヤマトフに遇て見たいと思うけれどもなかなか遇われない。到頭逗留中出て来ない。出て来ないがその接待中の模様に至ては動いたつもすると日本風の事がある。例えば室内に刀かたなかけ掛かがあ

り、^{ベッド}寝床には日本流の木の枕があり、^{湯殿}には糟を入れた糟袋があり、食物も勉めて日本調理の風にして箸茶椀なども日本の物に似て居る。どうしても露西亞人の思付く物でない。シテ見ると噂の通り何処にか日本人の居るのは間違いない、明に分て居るけれども、到頭分らずに歸^{かえつ}て仕舞^{しま}いました。私の西航日記にこの事を記して、その傍^{かたわら}に詩のようなものが一寸^{ちよい}と書いてある。

起来就食々終眠、飽食安眠過一年、

他日若遇相識問、歐天不異故鄉天

今日になつて一々記憶もないが、余程^{よほど}日本流の事が多かつたと思われます。

露国に止まることを勧む夫^そから或^{あるひ}日の事で、その接待委員の一

人が私の処に来て、一寸こちらに来て呉れると云て、一間に私を連れて行た。何だと云て話をすると、私の一身上の事に及んで、お前はこの度使節に付て來たが、是れから先は日本に帰て何をする所存かソリヤ勿論知らないが、お前は大層金持かと尋ねるから、「イヤ決して金持ではない、マア幾らか日本の政府の用をして居る、用をして居れば自らその報酬と云うものがあるから衣食の道に差支はないものだと、斯う私は答えた。所が接待委員の云うに、「日本の事だから我々に委しい事情の分る訳けはない、分りはしないけれども、どうも大体を考えて見た所で日本は小国だ、ア、云う小さな国に居て男子の仕事の出来るものじやない。ソレよりかお前はヒヨイと茲に心を変えてこの露西亞に止ロシア」と

まらないかと云うから、私は答えて、「自分の身は使節に隨従して来て居るものであるから、爾う勝手に止まられる訳けのものじやないと有りのまゝに云うと、「イヤ夫^それは造作もない話だ、お前さえ今から決断して隠れる気になれば直ぐに私が隠して遣る。どうせ使節は長く此處^{ここ}に居る氣遣^{きづかい}はない、間もなく帰る。帰ればソレ切だ。そうしてお前は露西亞人になつて仕舞^{しま}いなさい。この露西亞には外国人は幾らも来て居る、就中^{なかんずく}独逸^{ドイツ}の人などは大変に多い、その外^{ほか}和蘭^{オランダ}人も来て居れば英吉利^{イギリス}人も来て居る。だから日本人が来て居たからと云て何も珍しい事はない、是非此処に止まれ。いよく止^{とま}ると決すれば、その上はどんな仕事でも為^しようと思えば面白い愉快な仕事は沢山^{たくさん}ある。衣食住の安心は

勿論、隨分金持になる事も出来るから止まれと懇に説いたのは、決して尋常の戯れでない。チャント一間の中に差向いで真面目になつて話したのである。けれども私がその時に止まると云う必要もなければ、又止まろうと云う気もない。宜い加減に返答をして置くと、その後二、三度同じような事を云て來たが、固より話は纏らズ。その時に私は大に心付きました、成程露西亞は歐羅巴の中で一種風俗のかわつた国だと云うが、ソレに違いない。例えば今度英仏にも暫く滞留し、又前年亞米利加に行たときにも、人に逢いさえすれば日本に行こうと云う者が多い。何か日本に仕事はないか、どうかして一緒に連れて行つて呉れないかと、ソリヤもう行く先々でうるさいように云う者はあれども、遂ぞ止

まれと云うことを只の一度も云いたた人はない。露西亞ロシアに来て始めて止まれと云う話を聞た、その趣おもむきを推察すれば、決して是れは商売上の話ではない、如何どうしても政治上又国交際上の意味を含んで居るに違いない。こりやどうも氣の知れない國だ、言葉に意味を含んで止まれと云う所を見れば、或あるいは陰險の手段を施すあつた為めではないか知らんと思うた事があつた。けれどもそんな事をきい聞たと云うことを行の人に語ることも出来ない、語ればどんな嫌疑を蒙るまいものでもないから、その時に語らぬのは勿論もちろん、日本に歸かえつて來ても人に云わずに黙だまつて居ました。或あるいは爾う云うことを云われたのは私一人でなく、同行の者も同じ事を云われて、私と同じ考えで黙て居た者があつたかも知れない。兎に角に氣の知れぬ國だと

思われる。

生麦の報道到来して使節苦しむ夫れから露西亞ロシアを去て仏蘭西フランスに歸り、いよく出発と云うその時は生麦なまむぎの大騒動、即ち生麦で英人のリチャードソンと云うものを薩摩さむらいきつの侍が斬たと云うことが丁度彼方に報告になつた時で、サア仏蘭西のナポレオン政府が吾々日本人に対して氣不味きまずくなつて來た。人民はどうか知らないが政府の待遇の冷淡不愛相ふあいそうになつた事は甚はなはだしい。主人の方でその通りだから、客たる吾々日本人のキマリの悪いこと如何にも云い様がない。日本の使節が港から船に乗ろうと云うその道は十町余りもあつたかと思う、道の両側に兵隊をずつと並べて見送らした。是れは敬礼を尽すのではなくして日本人を威おどかしたに違ひ

ない。兵士を幾ら並べたつて鉄砲を撃つ詫けでないから、怖くも何ともありはしないけれども、その苦々しい有様と云うものは實に堪らない詫けであつた。私の西航記中の一節に、

閏八月十三日文久二年朝八時

ロシフヲルトに着。

ロシフヲ

ルトは巴里より仏蘭西の海軍港な

り。蒸氣車より下り船に乗るまでの路十余町、この間盛に護

衛の兵卒千余人を列せり。敬礼を表するに似て或は威を示す

なり。日本人は昨夜蒸氣車に乗り車中安眠するを得ず大に疲

れたるに、此処に着して暫時も休息せしめず車より下りて直

に又船に乗らしむ。且つ船に乗るまで十余町の道、日本の一

行には馬車を与えず徒步にて船まで云々。

ソレカラ仏蘭西を出発して葡萄ポルトガルのリスボンに寄港し、使節の公用を済すまして又船に乗り、地中海に入り、印度洋インドに出て、海上無事、日本に帰かえつて見れば擅夷論の真盛りだ。

擅夷論

擅夷論の鋒先洋学者に向う井伊掃部頭いいかもんのかみはこの前殺されて、今度は老中の安藤対馬守あんどうつしまのかみが浪人に疵きずを付けられた。その乱暴者の一人が長州の屋敷に駆込かけこんだとか何とか云う話を聞いて、私はその時始めて心付いた、成るほど長州藩も矢張り擅夷の仲間に這入はいって居るのかと斯う思ったことがある。兎にも角かくにも日本國中擅夷の真ま

盛りでどうにも手の着けようがない。所で私の身にして見ると、是れまでは世間に攘夷論があると云う丈けの事で、自分の身に就て危いことは覚えなかつた。大阪の塾に居る中に勿論暗殺など、云うことのあろう筈はない。又江戸に出て来たからとて怖い敵もなければ何でもないと計り思て居た所が、サア今度ヨーロッパから帰て来たその上はなか／＼爾うでない。段々喧しくなつて、外国貿易をする商人が俄に店を片付けて仕舞うなど、云うような事で、浪人と名くる者が盛に出て来て、何処に居て何をして居るのか分らない。丁度今の壯士と云うようなもので、ヒヨコ／＼妙な処から出て来る。外国の貿易をする商人さえ店を仕舞うと云うのであるから、況して外国の書を読んでヨーロッパの制度文物を夫れ是れと

論するような者は、どうも彼輩は不埒な奴じや、畢竟彼奴等は虚言をついて世の中を瞞着する売国奴だと云うような評判がソロ／＼行れて来て、ソレから浪士の鋒先が洋学者の方に向いて来た。是れは誠に恐入た話で、何も私共は罪を犯した覚えはない。是れはマア何処まで小さくなれば免るゝかと云うと、幾ら小さくなつても免れない。到頭仕舞には洋書を読むことを罷めて仕舞うて摂夷論でも唱えたらば、ソレはお詫が済むだらうが、マサカそんな事も出来ない。此方が無頓着に思う事を遣らうとすれば、浪人共は段々きつくなつて来る。既に私共と同様幕府に雇われて居る翻訳方の中に手塚律藏と云う人があつて、その男が長州の屋敷に行って何か外国の話をしたら、屋敷の若者等が

斬きつて仕舞うと云うので、手塚はドン／＼駆出す、若者等は刀を抜て追おつけ蒐くる、手塚は一生懸命に逃げたけれども逃切れずに、寒い時ひだが日比谷外そとの濠ぼの中へ飛込んで漸ようやく助かつた事こともある。夫れから同じ長州の藩士で東条礼藏とうじょうりようざいぞうと云う人も矢張り私と同僚翻訳方ほんやくがたで、小石川の素もと蜀山人しょくさんじんの住居すまいと云う家いえに住すんで居た。所ところがその家いわゆるに所謂浮浪わの徒わが暴あばれこ込んで、東条は裏口うりぐちから逃出とうしゆつして漸やつと助たすかつたと云うような訳わけで、いよ／＼洋学者はなはなの身みが甚はなはなだ危あやうくなつて来て油断さがならぬ。左そればとて自分の思う所な、為す仕事いふは罷められるものじやない。夫やれから私は構かわない、構かおうと云いた所ところが構かわれもせず、罷めようと云いた所ところが罷められる訳わけでない、マア／＼言語拳動げんぎょを柔やわらかにして決して人に逆さからわないよう、

社会の利害と云うような事は先ず氣の知れない人には云わないようにして、慎めるだけ自分の身を慎んで、ソレと同時に私は専ら著書翻訳の事を始めた。その著訳の一條に就ては今コヽで別段に云う事はない、私の今年開版した福澤全集の緒言に詳に書いてあるから是れは見合せるとして、その著訳事業中、即ち濡夷論全盛の時代に、洋学生徒の数は次第々々に殖えるからその教授法に力を尽し、又家の活計は幕府に雇われて扶持米を貰うてソレで結構暮らせるから、世間の事には頓と頓着せず、怖い半分、面白い半分に歳月を送て居る。或時可笑い事があつた。私が新銭座に一寸住居の時（新銭座塾に非ず）、誰方か知らないが御目に掛りたいと云てお侍が参りましたと下女が取次するから、

「ドンナ人だと聞くと、「大きな人で、眼が片眼かためで、長い刀を挟さして居ますと云うから、コリヤ物騒な奴だ、名は何と云う。」
 「名はお尋ね申したが、お目に掛れば分ると云て被仰おつしやいません。」
 ॥どうも氣味の悪い奴だと思って、夫れから私は窃そつと覗いて見ると、
 何でもない、筑前の医学生で原田はらだすいざん水山、緒方の塾に一緒に居た
 親友だ。思わず罵ののしつた。この馬鹿野郎、貴様は何だ、何ぜ名を云て
 吳れんか、乃公おれは怖くて堪たまらなかつたと云て、奥に通して色々世
 間話ををして、共々に大笑たいしようした事がある。爾そう云う世の中で洋学者
 もつまらぬ事に驚かされて居ました。

英艦来る夫れから攘夷論と云うものは次第々々に增長して、徳川
 将軍家いえもち茂公の上洛となり、続いて御親發ごしんぱつとして長州征伐に出

掛けると云うような事になつて、全く攘夷一偏の世の中となつた。ソコで文久三年の春、英吉利の軍艦が来て、去年生麦にて日本の薩摩の侍さむらいが英人を殺したその罪は全く日本政府にある、英人は只ただ懇親こんしんを以て交ろうと思うて是れまでも有らん限り柔やわらかな手段ばかりを執て居た、然るに日本の国民が乱暴をして剩あまつさえ人を殺した、如何にしてもその責せめは日本政府に在て免あつまぬかるべからざる罪であるから、この後のちはつか二十日いを期して決答せよと云う次第は、政府から十万磅ポンドの償金なを取り、尚お二万五千磅は薩摩の大名から取り、その上罪人を召捕めしとつて眼の前で刑に処せよとの要求、その手紙の来たのがその歳の二月十九日、長々とした公使の公文こうぶんが来た。その時に私共が翻訳ほんやくする役目に當て居るので、夜中に呼びに来て、赤

坂に住で居る外国奉行 松平石見守の宅に行たのが、私と杉まで翻訳したが、是れはマアどうなる事だらうか、大変な事だと
 窺に心配した所が、その翌々二十一日には將軍が危急存亡の大
 事を眼前に見ながら其れを棄てゝ置て上洛して仕舞うた。爾う
 するとサア二十日の期限がチャント來た。十九日に手紙が來たの
 だから丁度翌月十日、所がもう二十日待て呉れろ、ソレは待つの
 待たないのと捫着の末、どうやら斯うやら待て貰うことにな
 つた。所でいよ／＼償金を払うか払わないかと云う幕府の評議が
 なか／＼決しない。その時の騒動と云うものは、江戸市中そりや
 モウ今に戦争が始まるに違ひない、何日に戦争があるなどと云う評

判、その二十日の期間も既に過ぎ去て、又十日と云うことになつて、始終十日と二十日の期限を以て次第々々に返辞を延して行く。私はその時に新銭座に住で居たから、逆もこりや戦争になりそうだ、なればどうも逃げるより外に仕様がないと、ソロく逃仕度をすると云うような事で、ソコで愈よ期日も差迫て、今度はもう掛けねなし、一日も負からないと云う日になつた、と云うのを私は政府の翻訳局に居て詳に知て居るから尚お堪らない。仏国公使無法に威張るその翻訳をする間に、時の仏蘭西のミニストル・ベレクルと云う者が、どう云う氣前だか知らないが大層な手紙を政府に出して、今度の事に就て仏蘭西は全く英吉利と同説だ、愈よ戦端を開く時には英國と共に軍艦を以て品川沖を暴せんたん

れ廻ると、乱暴な事を云うて来た。誠に謂れのない話で、丸でその趣は今の西洋諸国の政府が支那人を威すと同じ事で、政府は唯英仏人の剣幕を見て心配する計り。私には能くその事情が分る、分れば分るほど氣味が悪い。

事態いよく迫る是れはいよく遣るに違いないと鑑定して、内の方の政府を見れば何時迄も説が決しない。事が喧しくなれば閣老は皆病氣と称して出仕する者がないから、政府の中心は何処に在るか訳が分らず、唯役人達が思いくに小田原評議のグヅノヽで、愈よ期日が明後日と云うような日になつて、サア荷物を片付けなければならぬ。今でも私の處に疵の付た簾笥がある。愈よ荷物を片付けようと云うので簾笥を細引で縛て、青山の方へ持まわ

て行けば大丈夫だろう、何も只ただの人間を害する氣遣はないからと云うので、青山の穩田おんでんと云う処に呉黃石くれこうせきと云う芸州げいしゆうの医者があつて、その人は箕作の親類ととので、私は兼て知て居るから、呉の処に行てどうか暫く此處しぶら ここに立退場たちのきばを頼むと相談こしらも調あい、愈よ青山の方と思うて荷物は一切拵えて名札を付けて担出かつきだす計りにして、そうして新銭座の海浜にある江川の調練場いっに行て見れば、大砲の口こうを海の方に向けて擊うつような構えにしてある。是れは今明日んみょうにちの中にいよく事は始まると覺悟を定めた。その前に幕府から布令ふれいが出てある。愈よ兵端いよいへいたんを開く時には浜御殿はまごてん、今の延遼館えんりょうかんで、火矢ひやを擧あげるから、ソレを相図あいづに用意致せと云う市中いちちゆうに布令が出た。江戸ツ子は口の悪いもので、「瓢箪ひょうたん兵端

の開け初めは冷火矢でやる」と川柳があつたが、是れでも時の事
情は分る。

米と味噌と大失策夫から又可笑しい事がある。私の考えに、是
れは何でも戦争になるに違いないから、マア米を買おうと思て、
出入りの米屋に申付けて米を三十俵かつ買って米屋に預け、仙台味噌を
一樽とう買って納おき屋に入れて置た。所が期日が切迫するに従て、切迫
すればするほど役に立たないものは米と味噌、その三十俵の米を
如何どうすると云うた所が、担かついで行かれるものでもなければ、味噌
樽せおつを背負て駆けることも出来なかろう。是れは可笑しい、昔は戦
争のとき米と味噌があれば宜いいいと云たが、戦争の時ぐらい米と味
噌の邪魔になるものはない、是れはマア逃げる時はこの米と味噌

樽は棄てゝ行くより外はないと云て、その騒動の真盛りに大笑いを催した事がある。その時にも新銭座の家に学生が幾人か居て、私はその時二分金で百両か百五十両持て居たから、この金を独りで持て居ても策でない、イザと云えば誰が何処にどう行くか分らない、金があれば先ず餕えることはないから、この金は私が一人で持て居るよりか、家内が一人で持て居るよりか、是れは銘々に分けて持つが宜かろうと云うので、その金を四つか五つに分けて、頭割にして銘々ソレを腰に巻て行こうと、用意金の分配まで出来て、明日か明後日は愈よ戦争の始まり、外に道はないと覺悟した所が、茲に幸な事があると云うのは、その時に唐津の殿様で小笠原壹岐守おがさわらいいきのかみと云う閣老がある。夫れから横浜に浅野備あさのびぜん

前守のかみと云う奉行がある。

小笠原壹岐守ソレ等の人が極秘密に云合いいあわせた事と見えて、五月の初旬、十日前後と思ひますが、愈よ今日と云う日に、前日まで大病だと云て寝て居た小笠原壹岐守がヒヨイとその朝起きて、日本の軍艦に乘のつて品川沖を出て行く。スルト英吉利イギリスの砲ガンボート艦ポートが壹岐守の船の尻に尾ついて走ると云うのは、壹岐守は上方かみがたに行くと云て品川湾を出發したから、若し本当にその方針を取とて本牧の鼻を廻まわれば英人は後から砲擊する筈はずであつたと云う。所が壹岐守は本牧を廻らずに横浜の方へ這入はいて、自分の独断で即刻そつこくに償金を払うて仕舞しまつた。十万磅ポンドを時の相場にすればメキシコ弗ドルで四十万になるその正銀しょうぎんを、英公使セント・ジョン・ニールに渡して

先^まず一段落を終りました。

鹿児島湾の戦争幕府に要求した十万磅^{ボンド}の償金は五月十日に片付^{かたづけ}て、夫れから今度はその英軍艦が鹿児島に行^{いつ}て、被害者遺族の手^そ当として二万五千磅を要求し、且つその罪人を英國人の見て居る所で死刑に処せよと云う掛合^いの為めに、六艘の軍艦は鹿児島湾に廻^{まわ}て錨^{かり}を下ろした。スルト薩摩藩から直^{ただ}ちに来意訪問の使者が来る。英の旗艦^{きかん}の水師提督はクーパー、司令長官はウキルモット、船長はジヨスリングと云う人で、書翰^{しょかん}を薩摩の役人に渡し、応否の返答如何^{いかん}と待て居る。所がなかなか容易な事に返辞^{へんじ}が出来ない。ソレコレする中に薩摩に西洋形の船^{すなわ}、即ち西洋から薩摩藩に買^{かい}取^つった船が二艘あるその二艘の船を談判^{だんばん}の抵當に取ると云う趣

意で、桜島の側に碇泊してあつた二艘の船を英の軍艦が引張て来る手詰の場合になつた。スルト陸の方からこの様子を見ていよく発砲し始めて、陸から発砲すれば海からも発砲して、ドン／＼大合戦になつた、と云うのが丁度文久三年五月下旬、何でも二十八、九日頃である。その時に英の旗艦はマダ陸からは発砲しないことゝ思て錨を挙げずに居た所が、俄に陸の方で撃始めたものだから、サア錨を上げようとすると生憎その時は大変な暴風、加うるに海が最も深いからドウも錨を上げる遑がないと云うので、錨の鎖を切て夫れから運動するようになつた。是れが例の英吉利の軍艦の錨が薩摩の手に入れた由来である。ソコで陸から打つ鉄砲もなか／＼エライ、専ら旗艦を狙うて命中するも

のも多いその中に、大きな丸い破裂弾が旨く発して怪我人が出来た中に、司令長官と甲比丹カピテンと二人の将官が即死して船中の騒動、又船から陸に向ての砲撃もなかきはらく劇しく、海岸の建物は大抵焼はげ払はげうて是れも容易ならぬ損害であつたが、詰つまる所、勝負なしの戦争と云うのは、薩摩の方は英吉利イギリスの軍艦を擊うつて二人の将官まで殺したけれどもその船を如何どうすることも出来ない、又軍艦の方でも陸を焼払うて随分荒したことは荒したけれども上陸することは出来ない、双方共に勝ちも負けもせずに、英の軍艦が横浜に帰かえつたのは六月十日前の頃であつたが、その時に面白い話がある。戦争の済んだ後で彼の旗艦に命中した破裂弾の碎片かけを見て、船中の英人等が頻りしきに語り合うに、「こんな弾丸が日本で出来る訳わけはない。

イヤ能く見れば露西亞製のものじや。露西亞から日本に送つたのであろうなどゝ評議区々なりしと云う。當時クリミヤ戦争の当分ではあるし、元来英吉利と露西亞との間柄は犬と猿のようで、相互に色々な猜疑心がある。今日に至るまでも仲は好くないように見える。

松木、五代、英艦に投ずそれは扱置き茲に薩摩の船を二艘此方に引張て來ると云う時に、その船長の松木弘安（後に寺嶋陶蔵又後に宗則）、五代才助（後に五代友厚）の両人が、船奉行と云う名義で云わば船長である。ソコで英の軍艦が二艘の船を引張て來ようと云うその時に、乗込の水夫などは其処から上陸させたが、船長二人だけは英艦の方に投じた。投じたけれど

も自分の船から出るときに、実は松木と五代と申し談じて窃にそ
の船の火薬車に導火を点けて置たから、間もなく船は二艘とも焼
けて仕舞た。^{しまつ}夫^それは夫^そとして、扱松木に五代と云うものは捕虜^{ほりよ}
でもなければ御^{おきやく}客^きでもない、何しろ英の軍艦に乗込んで横浜に
来たに違^{ちが}はない。その事は横浜の新聞紙にも出て居たのであるが、
ソレ切り少しも消息が分らない。私はその前年松木とヨーロッパに
一緒に行たのみならず、以前から私と箕作^{みづくり}と松木と云うものは
甚だ親しい朋友の間柄で、ソコで松木が英船に乗^のたと云うが如何
したろうかと只^{ただ}その噂^{うわさ}をするばかりで尋ねる所もない。英人が若
しこの兩人を薩摩の方へ還^{かえ}せば、ソリヤもう若武者共^すが直ぐに殺
すに極^{きまつ}て居る。然ればと云て之を幕府の方に渡せば、殺さぬまで

もマア嫌疑けんぎの筋があるとか取調べる廉かどがあるとか云いふて取敢とりあえず牢には入れるだろう。所が今日まで薩摩に還かえしたと云う沙汰もなければ、幕府に引渡したと云う様子もない。如何どうしたろうか、如何いかにも不審な事じやと唯ただ箕作しばさわと私と始終しじゆうその話をして居た。所が凡およそこの事が済んで一年ばかり経たつてから、不意とその松木を見付け出したこそ不思議の因縁である。

薩人、英人と談判松木の話は次にして置て、横浜に英吉利の軍艦イギリスが帰かえて来た跡で、薩摩から談判の為ために江戸に人が出て來た。その江戸に人の出て來たと云うのは、岩下佐治右衛門いわしたさじょうえもん、重野孝之丞しげのこうのじよう（後に安繹あんえき）、その外に黒幕見たような役目おほを帶びて來たのが大久保市蔵おおくぼいちぞう（後に利通としみち）、その三人が出て來た処で、第

一番に薩摩の望む所は兎にも角かくにもこの戦争しばらを暫く延えんいん引して貰もらいたいと云う注文なれども、その周旋たれを誰に頼むと云う手掛りもなく当惑の折柄おりがら、こゝに一人の人があるその一人と云うのは清水卯三郎みずうさぶろう（瑞穂屋卯三郎みずほや）と云う人で、この人は商人ではあるけれども英書も少し読み西洋の事に付ては至極熱心、先ず當時に於てはその身分に不似合ふにあいな有志者である。初め英艦が薩摩に行こうと云うときに、若し薩摩の方から日本文の書翰しょかんを出されたときには之これを読むに困る。通弁つうべんにはアレキサンドル・シーボルトがあるから差支さしつかえないけれども、日本文の書翰を颶々さつきつと読む人がない、と云うので英人から同行を頼まれた。清水は平生勇氣あり隨分すいぶんそんな事の好きな人で、夫れは面白い行いって見よう

と容易^{たやすく}承諾し、横浜税関の免状を申^{もうしう}受け旗艦^{きかん}に乗込み、先方に着して親しく戦争をも見物したその縁があるので、今度薩州の人が江戸に来て英人との談判に付き、黒幕の大久保市蔵^{おおくぼいちぞう}は取敢えず清本卯三郎を頼み、兎に角にこの戦争を暫く延引^{しばらへんいん}して貰いたいと云う事を、在横浜の英公使ジョン・ニールに掛合うことにした。そこで清水は大久保の依託^{とりつき}を受けて横浜の英公使館に出掛けその話を申込んだ所が、取^{とり}次の者の言うに、斯る重大事件^{かか}を談^{だん}するに商人などでは不都合なり、モツト大きな人が來たら宜かろうと云うから、清水は之を押し返し、人に大小^{けいじゅう}軽重^{せうじゆう}はなし、談判の委任を受けて居れば沢山^{たくさん}だ、夫れでも拙者^{せつしゃ}と話は出来ないかと少しく理屈^{いふ}を云^わた所が、そう云う詫^わけなら直ぐに遇^あ

うと云うので、夫れから公使に面会して戦争中止の事を話掛け
 ると、なか／＼聞きそくにも為ない。イヤもう既に印度洋から軍
 艦を増発して何千の兵士は唯今支度最中、然るにこの戦争の時期
 を延して待つなどゝは謂れのない話だ云々と、思うさま威嚇し
 て聞きそくな顔色がない。ソコで清水はその挨拶を承つて薩
 人に報告すると、重野が、辻もこりや六かしそうだ、兎に角に自
 分達が自から談判して見ようと云て、遂に薩英談判会を開き、種
 々様々問答の末、とう／＼要求通りの償金を払う事になり、高
 は二万五千磅、時の相場にして凡そ七万両ぐらいに当り、その七
 万両の金は内実幕府から借用して、そうして島津薩摩守の名義
 では払われないと云うので、分家の島津淡路守の名を以て金を

渡すことにして、且つ又リチャルドソンを殺した罪人は何分にも何処にか逃げて分らないから、若し分たらば死刑と云うことで以て事が収まつた。その談判の席には大久保市蔵おおくぼいちぞうは出ない。岩下いわしと重野しげのの兩人、それから幕府の外国方がいこくがたから鵜飼弥市うかいやいち、監察かんさつ方がたから斎藤金吾さいとうきんごと云う人が立会い、いよく書面とりかわを取換とりかわして事のすつかり収まつたのが、文久三年の十一月の朔日ついたちか二日頃であつた。

松木、五代、埼玉郡に潜むさてそ扱夫さげから私の気になる松木、即ち寺島まつき すなわの話は斯う云う次第である。松木、五代が薩摩の船から英の軍艦に乘のりうつつ移きた所が、清水が居たので松木も驚いた。清水と云う男は以前江戸にて英書の不審を松木に聞きて居たこともある至極しじく

懇意な間柄で、その清水が英の軍艦に居るから松木の驚くも無理はない。「イヤ如何して此処に居るか。」お前さんは如何して又此処に来たと云うような訳けで、大変好都合であつた。ソコで横浜に来たけれども、この儘に何時迄もこの船の中に居られるものでない。マア如何かして上陸したい、と云うその事に付ては清水卯三郎が一切引受ける。それは松木と五代は極々日蔭者ひかげもので、青天白日の身と云うのは清水一人、そこで清水が先ず横浜に上て、夫れから亞米利加人のヴエンリートと云う人にその話をした所が、如何でも周旋しよう、兎に角に艇はしけぶねにのつて神奈川の方に上る趣向に為よう、その船も何も世話をして遣ろうと云うことになつた。所でアドミラルが如何云うかソレに聞いて見なければならぬの

で、アドミラルにその事を話すと至極寛大で、上陸 さしつかえ 差支なしと云うので、ソレカラ一切万事、清水とヴエンリートと諜し合せて、落人おちうど 両人の者は夜分窃ひそか のぼりにその船ふな に乗り移り、神奈川以東の海岸から上る積りに用意した所が、その時には横浜から江戸に来る街道一町か二町目毎に今ごと の巡査じゅんさ 交番所見たようなものがずっと建て居て、一人でも径しいものは通行を咎めると云うことになつて居るから、なかく大小などを挟して行かれるものでない。ソコで大小も陣笠じんがさ いっさい 一切の物はヴエンリートの家に預けて、丸で船頭か百姓のような風をして、小舟に乘込み、舟は段々東に下くだつてとうく羽根田はねだ の浜から上陸して、ソレカラ道中は忍び忍んで江戸に這入はい とした所で、マダ幕府の探偵はなは が甚だ恐ろしい。只ただ

の宿屋には泊られないから、江戸に這入たらば堀留の鈴木と云う船宿に清水が先へ行て待て居るから其処へ来いと云う約束がしてある。ソコで兩人は夜中勝手も知れぬ海浜に上陸して、探り／＼江戸の方に向て足を進める中に夜が明けて仕舞い、コリヤ大変と夫れから駕籠に乗て面を隠して堀留の船宿に来たのがその翌日の昼であった。清水は昨夜から待て居るので万事の都合宜く、その船宿に二晩窃に泊て、夫れから清水の故郷武州埼玉郡羽生村まで二人を連れて来て、其処も何だか氣味が悪いと云うので、又その清水の親類で奈良村に吉田一右衛門と云う人がある、その別荘に移して、此処は極淋しい処で見付かるような気遣いはないと安心して二人とも収め込んで仕舞い、五代はその後五、六

ケ月して窃に長崎の方に行き、松木は凡そ一年ばかりも其処に居る中に、本藩の方でも松木の事を心頭に掛けてその所在を探索し、大久保、岩下、重野を始めとして、江戸の薩州屋敷には肥後七左衛門、南部弥八など云う人が様々周旋の末、これは清水卯三郎が知て居はしないかと思ひ付て、清水の処に尋ねに来た。所が清水はドウも怖くて云われない、不意と捕まえられて首を斬られるのではなかろうかと思ひて真実が吐かれまい。一応は唯知らぬと答えたれども、薩摩の方では中々疑て居る様子。爾うかと思うと時としては幕府の方からも清水の家に尋ねに来る。ソコで清水も当惑して、如何しようとも考えが付かない。殺さないなら早く出して遣りたいが、殺すような事なら今まで助けて置いたものだ

から出したくないと、自分の思案に余て、夫れから江戸の洋学の大家川本幸民先生は松木の恩師であるから、この大先生の意見に任せようと思つて相談に行つた所が、先生の説に、「ソリヤ出すが宜かろう、薩藩人が爾う云うなら有のまゝに明して渡して遣るが宜かろう、マサカ殺しもしなかろうと云うので、ソコで始めて決断して清水の方から薩人に通知して、実は初めから何も斯も自分が世話をした事で一切知て居る、早速御引渡し申すが、只約束は決して本人を殺さぬようにと念を押して、ソコデ松木が始まつて薩人に面会して、この時から松木弘安を改めて寺島陶蔵と化けたのです。右の一条は薩州の方でも甚だ秘密にして、事實を知つて居る者は藩中に唯七人しかないと清水が聞いたそうだが、そ

の七人とは多分大久保、岩下なぞでしよう。

始めて松木に逢うその時は既すでに文久四年となり、四年の何月かドウモ覚えない、寒い時ではなかつた、夏か秋だと思ひますが、或日肥後七左衛門ひごしちざえもんが不意と私方に来て、松木が居るが、お前の処に來ても差さしつかえ支かえはないかと云う。私は實に驚いた。去年からモウ氣になつて居て、箕みづくり作あと遇いさえすればその噂うわさをして居たが、生きて居たか。「確かに生きて居る。」「何処に居るか。」「江戸に居る、兎とに角かくに此処ここに来て宜すいか。」「宜いとも、大宜おおよしだ。」何も憚はばかることはない、少しも構めいわない、直すぐに逢いたいと云うと、その翌日松木が出て來た。誠に冥土めいどの人あつに遭たような気がして、ソレカラいろいろな話をきいて、清水と一緒にになつたと云うことも分

れば何も箇も分て仕舞た。その時、私は新錢座に居ましたが、マ
 ア久振りで飲食を共にして、何處に居るかと聞けば、白銀台
 町に曹某そよにがしと云う医者がある、その家は寺島の内君の里なので、
 その縁で曹の家に潜ひそんで居ると云う。その日は先ずその儘分れて、
 夫れから私は直ぐに箕みつくり作の処に事の次第を云て遣て、箕作も直
 ぐその翌日出て来て兩人同道して白銀の曹の家に行き、三友団座
 昼から晩までいろいろな事を話すその中に、例の覽島戦争の話
 などもあつて、その戦争の事に就てはマダ／＼いろいろ面白い
 事があるけれども、長くなるから此処で之を略し、拵寺島の身
 の上は如何どうだと云うに、薩摩の方は大抵是れで宜しいがマダ幕府
 の意向が分らない、けれども是れとても別段に幕府の罪人でもな

いから爾そう恐れる事もない訳わけ。ソコで寺島は何をして喰くつて居るかと聞けば、今は本藩の翻ほんやく訳わけなどして居ると云う。それこれは話の中に寺島が云うには、モウ／＼鉄砲は嫌だ／＼、今でも乃公おれは鉄砲の音がドーンと鳴ると頭の中がズーンとして来る、モウ嫌だぜ／＼、乃公は思い出して身がブル／＼ツとする、夫れから又その船の火薬庫に導火みちびを點つけるときは随分氣味の悪い話だつた、だが命拾いをしたその時、懷中に金が二十五両あつたからその金もつを持って上陸ていはしたと云う。いろいろの話の中に英人が薩摩湾に碇泊くだもの中じょう菓物きりこが欲しいと云うと、薩摩人しゃみんが之を進上しゆじゆする風ふうをしてその機に乗じじて斬込いかりもうとして出来なかつたと云うような種々な話たぐがありますが、それはマア止めにして錨いかりの話。

夢中で錨を還すその錨を切たと云うことは 清水卯三郎 が船に乗^{のつ}て見て居たばかりで薩摩の人は多分知らない。ソレカラ清水が薩摩の人^{あい}に遇^{あつ}て、那の時に英艦の方では錨を切たのだから拾い挙げて置^{おい}たら宜かろうと云^{いふ}た所が、薩摩でも余り気に留めなかつたと見えて、その錨は何でも漁夫が挙げたと云う話だ。ソレで錨は薩摩の手に這入^{はいっ}たが、二万五千磅^{ポンド}の金を渡して和睦^{わほく}をしたその時に、英人が手軽に錨を還^{かえ}して貰いたいと云うと、易い事だと云て何とも思わず古鉄^{ふるがね}でも渡す積りで返して仕舞^{しまつ}た様子だが、前にも云う通り戦争の負勝^{まけいかち}は分らなかつたのでしよう、何方が勝たでもない、錨を切て将官が二人死んで水兵は上陸も出来ずに帰たと云えばマア負^{まけ}師^{いくさ}、夫れから又薩摩の方も陸を荒されて居なが

ら帰かえつて行く船を追蒐おつかけて行くこともせず打遣うちやつて置おいたのみならず、戦争の翌朝英艦から陸に向むかつて発砲しても陸から応砲もせぬと云え巴こりや薩摩の負師のよう当どちらる、勝たと云えば何どちら方も勝た、負けたと云えば何どちら方も負けた、詰つまり勝負なしとした所で、何でも錨と云うものは大事な物である、ソレを浮かくと還して仕舞しまつたと云うのは誠に馬鹿まづかげた話だけれども、当時の日本人が国際法と云うことを知らないのはマアこの位なもので、加之しかのみならず本来今度の生麦事件で英國が一私人殺害たたの為めに大層な事を日本政府に云掛け、到頭十二万五千磅取ポンビツたと云うのは理か非か、甚はなはだ疑わしい。三十余年前の時節柄とは云え、吾々日本人は今日に至るまで不平である。夫れから薩摩から戦の日延べを云出したそ

の時に、英公使の云振りが威嚇したにも威嚇さぬにもマア大変な劍幕で、悪く云え巴日本人はその威嚇を喰たようなもので、必竟何も知らずに夢中でこの事が終て仕舞た。今ならばこんな馬鹿げた事は勿論なかろうが、既にその時にも亞米利加人などは日本政府で払わなければ宜いがと云て居たことがある。英公使は威嚇し抜て、その上に仏蘭西のミニストルなどが横合から出て威張るなんと云うのは、丸で狂氣の沙汰で訳けが分らない。ソレで事が済んだのは今更ら何とも評論のしようがない。

緒方先生の急病村田蔵六の変態所で京都の方では愈よ五月十日（文久三年）が摂夷の期限だと云う。ソレで和蘭の商船が下ノ関を通ると、下ノ関から鉄砲を打掛けた。けれども幸に和蘭船

は沈みもせずに通とおつたが、ソレがなかく大騒ぎになつて、世の中
は益ますます々恐ろしい事になつて來た。所でその歳の六月十日に緒方
洪庵先生の不幸。その前から江戸に出て来て下谷したやに居た緒方先生
が、急病で大層吐血とけつしたと云う急きゆう使つかいに、私は實に胆きもを潰つぶした。
その二、三日前に先生の處へ行てチャント様子しつを知して居るのに、
急病とは何事であろうと、取るものも取敢とりあえず即刻宅そつこくうちを駆け出して、
その時分には人力車も何もありはしないから、新錢座から下
谷まで駆かけづめ詰こづめで緒方の内に飛込んだ所が、もう縊ことき切れしまつて仕舞しまつた跡。
是れはマア如何どうしたら宜かろうかと丸で夢を見たような訳わけ。道
の近い門人共は疾まく先に來て、後から來る者も多い。三十人も五
十人も詰掛けて、外ほかに用事まなし、今夜は先ずお通夜として皆起

きて居る。所が狭い家だから大勢坐^{すわ}る処もないような次第で、その時は恐ろしい暑い時節で、坐敷から玄関から台所まで一杯人が詰て、私は夜半玄関の敷^{しきだい}台の処に腰を掛けて居たら、その時に村田蔵六（後に大村益次郎^{おおむらますじろう}）が私の隣に来て居たから、「才イ村田君——君は何時長州から帰^{かえつ}て来たか。」「この間^{かまつ}帰^{かえつ}た。」「ドウダ工馬^{ばかん}関では大変な事を遣^{やつ}たじやないか。何をするのか氣^き狂^{きぐるい}共^{あきれかえつ}が、呆返^{どう}た話^ぢやないかと云うと、村田が眼に角^{かど}を立て、「何だと、遣たら如何^{どう}だ。」「如何だツて、この世の中に濡夷^{なんて}丸で氣狂いの沙汰^けじやないか。「氣狂いとは何だ、怪しからん事を云うな。長州ではチャント国^{こくぜ}是^ぜが極^{まつ}てある。あんな奴^{やつ}原^{ばら}に我儘^{わがまま}をされて堪^{たま}るものか。殊に和蘭^{オランダ}の奴が何だ、小さい癖に

横風な面して居る。之を打攘うのは当然だ。モウ防長の士民は悉く死尽しても許しはせぬ、何処までも遣るのだと云うその剣幕は以前の村田ではない。實に思掛けもない事で、是れは変なことだ、妙なことだと思うたから、私は宜加減に話を結んで、夫れから箕作の処に来て、大変だく、村田の剣幕は是れくの話だ、實に驚いた、と云うのはその前から村田が長州に行たと云うことを聞いて、朋友は皆心配して、あの攘夷の眞盛りに村田がその中に呼込まれては身が危い、どうか徑我のないようにしていものだと、寄ると触ると噂をして居る其処に、本人の村田の話を聞て見れば今の次第、實に訳けが分らぬ。一体村田は長州に行って如何にも怖いと云ふことを知て、そうして攘夷の仮面を冠て態と

りきんで居るのだろうか、本心からあんな馬鹿を云う氣遣はあるまい、どうも彼の気が知れない。「そうだ、實に分らない事だ。兎にも角かくにも一切彼の男の相手になるな。下手な事を云うとどんな間違まちがいになるか知れぬから、暫しばらく別べつものにして置おきくが宜まいと、箕作みづくりと私と二人云合いいあわして、夫それから外ほかの朋友にも、村田は変だ、滅多な事を云うな、何をするか知れないからと氣を付けた。

是これがその時の実事談で、今でも不審が晴れぬ。當時村田は自身防禦ぼうぎよの為ためめに攘夷めんの仮面まんを冠かぶて居たのか、又は長州ほに行ゆて、どうせ毒なを舐なめれば皿までと云うような訳わけけで、本当に攘夷主義になつたのか分りませぬが、何しろ私を始め箕作秋坪その外ほかの者は、一時いちじ彼に驚かされてその儘ままソーツと棄置すておいたことがあります。

外交機密を写取る文久三年癸亥の歳は一番喧しい歳で、日本では攘夷をすると云い、又英の軍艦は生麦一件に就て大造な償金を申出もうしだして幕府に迫ると云う、外交の難局と云うたらば、恐ろしい怖い事であつた。その時に私は幕府の外務省の翻訳局に居たから、その外国との往復書翰は皆見て悉く知て居る。即ち英仏その他の国々から斯う云う書翰が来た、ソレに対して幕府から斯う返辭へんじを遣た。又此方から斯う云う事を諸外国の公使に掛合けあい付けると、彼方から斯う返答して來たと云う次第、即ち外交秘密が明に分て居なければならぬ筈。勿論その外交秘密の書翰を宅に持て帰ることは出来ない、けれども役所に出て翻訳するかあるいは又外国奉行の宅に行つて翻訳するときに、私はちゃんとソレを

譜記して置いて、宅に帰てからその大意を書いて置く。例えば生麦の一件に就て英の公使から来たその書翰の大意は斯様々々、ソレに向て此方から斯う返辞を遣わしたと云うその大意、一切外交上往復した書翰の大意を、宅に帰ては薄葉の罫紙に書きして置いた。ソレは勿論ザラに人に見せられるものでない。唯親友間の話の種にする位の事にして置たが、随分面白いものである。所が私はその書付を一日不意と焼て仕舞た。

脇屋卯三郎の切腹焼て仕舞たと云うことに就て話がある。その時に何とも云われぬ恐ろしい事が起た、と云うのは神奈川奉行組頭、今で云えば次官と云うような役で、脇屋卯三郎と云う人があつた。その人は次官であるから随分身分のある人で、その人の親類

が長州に在て、これに手紙を遣た所が、その手紙を不意と探偵に取られた。その手紙は普通の親類に遣る手紙であるから何でもない事で、その文句の中に、誠に穩かならぬ御時節柄で心配の事だ、どうか明君賢相が出て来て何とか始末をしなければならぬ云々と書いてあつた。ソコで幕府の役人がこの手紙を見て、何々、天下が騒々敷い、ドウカ明君が出て始末を付けて貰うようにしたいと云えば、是れは公方様を蔑ろにしたものだ、即ち公方様を無きものにして明君を欲すると云う所謂謀反人だと云う説になつて、直ぐに脇屋を幕府の城中で捕縛して仕舞た。丁度私が城中の外務省に出て居た日で、大変だ、今脇屋が捕縛されたと云う中に、縛られては居ないが同心を見たような者が付いて脇屋が廊下

とおつていった。何も皆驚いて、神奈川の組頭が捕まえられたと云うは何事だと云て、その翌日になつて聞いた所が、今の手紙の一件で斯うく云う嫌疑だと云う。夫れから脇屋を捕まえると同時に家搜しをして、そうしてその儘當人は伝馬町に入牢にゆうろうをもうしつ申付けられ、何かタワイもない吟味ぎんみの末、牢中で切腹を申付られた。その時に検視に行た高松彦三郎たかまつひこさぶろうと云う人は御小人目付で私の知人だ。伝馬町へ検視には行たが誠に氣の毒であつたと、後で彦三郎が私に話しました。ソコで私も脇屋卯三郎おこびとめつけうさぶろうがいよ／＼殺されたと云うことを聞いて酷く恐れた、その恐れたと云うのは外ではない、明君云々と云た丈けの話で彼が伝馬町の牢に入れられて殺されて仕舞た、爾そうすると私の書記かきしるして置たものは外

交の機密に係る恐ろしいものである、若しこれが分りでもすれば直ぐに牢に打込まれて首を斬られて仕舞うに違いないと斯う思たから、その時は私は鉄砲洲に居たが、早々その書付を焼て仕舞たけれども、何分気になつて堪らぬと云うのは、私がその書付の写しか何かを親類の者に遣たことがある、夫れから又肥後の細川藩の人ソレを貸したことがある、貸したその時にアレを写しはしなかつたろうかと如何も気になつて堪らない、と云て今頃からソレを荒立てゝ聞きに遣れば又その手紙が邪魔になる、既に原本は焼て仕舞たがその写しなどが出て呉れなければ宜いが、出て来られた日には大変な事になると見て誠に氣懸りであつた。所が幸に何事もなく王政維新になつたので、大きに安堵して、今では

颯々 さつさつ

とそんな事を人に話したりこの通りに速記することも出来
 るようになつたけれども、幕府の末年には決して爾うでない、自
 分から作た災つくわざわいで、文久三年亥歳いどしから明治元年まで五、六年の間あいだ
 と云うものは、時の政府に對して恰も首の負債あたかを背負しょいながら、他人
 に言われず家内にも語らず、自分で自分の身を窘めくるして居たのは隨はず
 分悪い心持でした。脇屋わきやの罪に較くらべて五十歩百歩でない、外交
 機密を漏もらした奴の方が余程の重罪なるに、その罪の重い方は旨うまく
 免かれて、何でもない親類に文通した者は首を取られたこそ氣の
 毒ではないか、無慘むぎんではないか。人間の幸不幸は何處どこに在るか分
 らない、所謂いわゆる因縁いんねんでしよう。この一事でも王政維新は私の身
 の為ために難ありがたい。夫れは捨て置き、今日でも彼かれの書かたものを見れ

ば、文久三年の事情はよく分わかつて、外交歴史の材料にもなり、頗すこぶる面白いものであるが、何分にも首には易かえられず焼やいして仕舞しまつたが、若しも今の世の中に誰か持もつて居る人があるなら見たいものと思います。

下ノ関の攘夷夫れから世の中はもう引続いきいて攘夷論ばかり、長州の下ノ関では只和蘭船ただオランダを撃つばかりでなく、その後亞米利加の軍艦にも発砲すれば、英吉利の軍艦にも発砲すると云うよいうな訛わけで、到頭とうとうその尻と云うものは英仏蘭米四ヶ国から幕府に捩込ねじこんで、三百万円の償金を出せと云うことになつて、押着もんちやくの末、遂にその償金を払うことになつた。けれども国内の攘夷論はなかく收まりが付かないで、到頭仕舞しまいには鎖国攘夷と云うことを云

わざに新に鎖港と云う名を案じ出して、ソレで幕府から態々池
 田播磨守けだはりまのかみと云う外国奉行を使節として仏蘭西まで鎖港の談判に
 遣わすと云うような騒ぎで、一切滅茶苦茶、暗殺は殆んど毎日
 の如く、實に恐ろしい世の中になつて仕舞た。そ爾う云う時勢であ
 るから、私は唯一身を慎んでドウでもして災をわざわいのがれさえすれば宜
 いと云うことに心掛けて居ました。

剣術の全盛兎に角に癸亥の前後と云うものは、世の中は唯無闇に
 武張るばかり。その武張ると云うのも自から由来がある。徳川政
 府は行政外交の局に當て居るから拠ろなく開港説——開国論を云
 わなければならぬ、又行わなければならぬ、けれどもその幕臣全
 体の有様はドウだと云うと、ソリヤ鎖國家の巣窟そうくつと云ても宜い

有様で、四面八方ドツチを見ても洋学者などの頭を擡げる時代でない。当時少しく世間に向くような人間は悉く長大ちよだい小こを横える。^そ夫れから江戸市中の剣術家は幕府に召出めしされて巾はばを利かせて、剣術おお流行の世の中になると、その風は八方に伝染して坊主までも体度たいどを改めて來た。^{がんらい}元來その坊主と云うものは城内に出仕して大名旗はたもと本の給仕役を勤める所謂茶道坊主であるから、平生は短い脇差わきざしを挿して大名に貰もらつた縮緬ちりめんの羽織を着てチヨコちよこ歩くと云うのが是これが坊主の本分であるのに、世間が武張ぶばるところの茶道坊主までが妙な風になつて、長い脇差を挿して坊主頭を振り立てゝ居る奴がある。又当時流行の羽織はどうだと云うと、御家人旗本の間には黄平きびらの羽織に漆紋うるしもん、それは昔しく

家康公が関ヶ原合戦の時に着て夫れから水戸の老公が始終ソレを召して居たとかと云うような云伝えで、ソレが武家社会一面の大流行。ソレカラ江戸市中七夕たなばたの飾りには、笹に短冊を付けて西瓜すいかの切れとか瓜きりの張子はりことか団扇うちわとか云うものを吊すのが江戸の風である。所が武道一偏、攘夷の世の中であるから、張子の太刀たちとか兜かぶととか云うようなものを吊すようになつて、全体の人気がすつかり昔の武士風になつて仕舞しまつた。逆とても是れでは寄付よりつきよがない。

刀剣を売払うソコで私は只ただ独りの身みみを慎むと同時に、是れはドウしたつて刀は要らない、馬鹿ばか々々しい、刀は売うつて仕舞しまえと決断して、私の処にはそんなに大小などは大層もありはしないが、ソレ

でも五本や十本はあつたと思う、神明前^{しんめいまえ}の田中重兵衛^{たなかじゅうべえ}と云う刀屋^{とうや}を呼^{よん}で、悉く売^{よこ}払^{しまつ}て仕舞^{しまつ}た。けれどもその時分はマダ双^{だいしょ}刀^{とう}を挿^ささなければならぬ時であるから、私の父の挿して居た小^{ちい}さがたな^{かみしも}刀^{とう}、即ち^そを着るとき挿す脇差^{さや}の鞘^{さや}を少し長くして刀に仕立て、夫れから神明前の金物屋で小^{ちい}刀^{とう}を買って短刀作りに拵^{こしら}えて、唯印^{ただじる}し丈^だけの脇差^{さや}に挿すことにして、アトは残らず売^{よこ}払^{しまつ}て、その代金は何でも二度に六、七十両^{うけとつ}請取^{うけとつ}たことは今でも覚えて居る。即ち家に伝わる長い脇差^{さや}の刀に化けたのが一本、小刀で拵えた短い脇差^{さや}が一本、それ切で外^{ほか}には何もない。そうして小さくなつて居るばかり。私は少年の時から大阪の緒方の塾^{じょ}に居るときも、戯^{たわむれ}に居合^{ねい}を抜^{ぬい}て、随^{つい}分^{ぶん}好きであつたけれども、世の中に武芸の

話が流行すると同時に、居合刀がたなはすつかり奥に仕舞しまい込んで、刀なんぞは生れてから挿すばかりで抜たこともなければ抜く法も知らぬと云うような風ふうをして、唯用心に用心して夜分は決して外に出ず、凡およそ文久年間から明治五、六年まで十三、四年の間あいだと云うものは、夜分外出したことはない。その間の仕事は何だと云うと、唯著書ただほんやく翻訳にのみ屈託くつたくして歳月おくつを送て居ました。

再度米国行

それから慶応三年になつて又私は亞米利加アメリカに行いつた。是れで三度目の外国行こう。慶応三年の正月二十三日に横浜を出帆して、今度の亞

米利加行に就いても亦なかく話がある。と云うのは、先年亞米利加の公使口ペルト・エーチ・プラインと云う人が来て居て、その時に幕府で軍艦を拵えなければならぬと云うことで、亞米利加の公使にその買入方かいいれかたを頼んで、數度すうどに渡したその金高は八十万弗ドルラル、そうして追々おいおいにその軍艦が出来て来る筈はず。ソレで文久三、四年の頃、富士山ふじやまと云う船が一艘出来て来て、その価あたいは四十万弗。所がその後幕府はなかなか混雜、又亞米利加にも南北戦争と云う内乱おこつが起たと云うような訳わけで、その後一向便りもない。何しろ金は八十万弗渡したその中で、四十万弗の船が来た丈だけでその後は何も来ない。左りとは埒らちが明かぬから、アトの軍艦は此方から行こつちて請取うけとろう。その序ついでに鉄砲もかつ買って来ようと云うような事で、その

とき派遣の委員長に命ぜられたのは小野友五郎おのともごろう、この人は御勘定吟味役ようぎんみやくと云う役目で御勘定奉行の次席、なかく時の政府に於おいては権力もあり地位も高い役人である。その人が委員長を命ぜられて、その副長には松本寿太夫まつもとじゅだいふと云う人が命ぜられたと云うことは、その前年の冬に定まつた。き夫れから私もモウ一度行て見たいものだと見て、小野の家に度々どど行て頼んだ。何卒一緒に連れて行て呉くれないかと云た所が、連れて行こうと云うことになつて、私は小野に隨ずい従じゆうして行くことになりました。その外同行ほかの人は、船を請取るのですから海軍の人も兩人ばかり、又通弁つうべんの人も行きました。

太平洋の郵便汽船始めて通ずこの時には亞米利加アメリカと日本との間にあいだ

太平洋の郵便船が始めて開通したその歳で、第一着に日本に来たのがコロラドと云う船で、その船に乗込む。前年亞米利加に行た時には小さな船で海上三十七日も掛たと云うのが、今度のコロラドは四千噸の飛脚船、船中の一切万事、實に極樂世界で、廿二日目に桑港に着いた。着たけれども今とは違てその時分はマダ鉄道のないときで、パナマに廻らなければならぬから、桑港に二週間ばかり逗留して、其処で太平洋汽船会社の別の船に乗替えてパナマに行って、蒸氣車に乗てあの地峡を踰えて、向側に出て又船に乗て、丁度三月十九日に紐育に着き、華聖頓に落付て、取敢えず亞米利加の國務卿に遇うて例の金の話を始めた。その時の始末でも幕府の模様が能く分る。此方を出

立 ゆつたつ

する時から、先方の談判には八十万弗渡したと云う請取が
なければならぬと云うことは能く分て居る。所がどうも丸で一寸
とした紙切に十万とか五万とか書てあるものが何でも十枚もある、
その中には而かも三角の紙切に僅に何万弗請取りと記して唯。ブラン
インと云う名ばかり書いてあるのが何枚もある。何の為めにどうし
て請取たと云う 約 やくじょう 定 もなれば何にもない。只金を請取たと
云うだけの印ばかりである。代言流義に行けば誠に薄弱な殆んど
無証拠と云ても宜い位。ソコでその事に就ては出發前に隨分議
論しました。却て是れが宜しい、此方では 一切 万事、アメリカ
の公使と云うものを信じ抜て、イヤアメリカの公使を信じたので
はない、日本の政府が亞米利加の政府を信じたのだ、書付も要ら

なければ条約も要らない、只口ただで請取たら請取たと云うた丈けだいで沢山だ、是れは只覺書に數すうを記した丈けだいの事こと、固もとよりこんな物は証拠にしないと云う風に出ようと相談を極きめて、彼方あつちへ行てからその話に及ぶと、直ぐに前の公使ブラインスが出て來た。出て來て何とも云わない、ドウですか船を渡すなり金を渡すなりドウでも宜いと、文句なしに立派に出掛けて來た。

吾妻艦こまごを買まう先まへず是れで安心こころであるとした所で、此方こちでは軍艦こうかん一艘欲ほしい。夫それから諸方まわりの軍艦こうかんを見て廻まわて、是れが宜かろうと云いつて、ストーンウォールと云う船、ソレが日本よに來まて東あづま艦かんとななりましたらう、この甲鐵艦こうてきかんを買まうことにして、その外ほか小銃何百挺ちよか何千挺あつちか買入めいりれたけれども、ソレでもマダ金かなが彼方あつちに七、八万

弗^{ドル}残^{ラル}て居る。是れは亞^{アメリカ}米利加の政府に預けて置て、その船を廻^{かいこ}航^うするに付^{つい}て、私共は先に帰^{かえつ}たが、海軍省から行^{いっ}た人はアトに残^{のこつ}て、そうして亞米利加の船長を一人雇^{やと}うて此方^{こうち}に廻航^廻することになつて、夫れで事が済^すんだ。丁度船の日本に着^つたのは王政維新の明治政府になつてから、即ち明治元年であるが、その事に就^{つい}て當時会計^{つかさど}を司^{つかさど}つて居た由利公正^{ゆりきみまさ}さんに遇^{あつ}て後に聞^{きい}た所が、ドウもあの時金を払うには誠に困^{こまつ}た、明治政府には金がない。如何^{どう}やら斯^こうやらヤツト何十万弗^{はらつ}拵^{あつち}えて払^{はず}たと云う話を私が聞て、ソレは大間違^{あまつ}いだ、マダ幾らか金^{あつち}が余て彼方^{はず}に預けてある筈^{はず}だと云うたら、爾^そうかと云つて、由利は大^{たいそう}造驚^{ぞうけい}いて居ました。何處^{どこ}にドウなつたか、二重に金を払たことがある。亞^{アメリカ}米利加人が取る訳^{わけ}けは

ない、何處かに舞込んで仕舞たに違いない。

幕府人の無法を厭う、安いドルラルそれは扱置き、私の一身に就てその時甚だ穩かならぬ事があつた、と云うのは私は幕府の用をして居るけれども、如何なこと幕府を佐けなければならぬとか云うような事を考えたことがない。私の主義にすれば第一鎖国が嫌い、古風の門閥無理圧制が大嫌いで、何でもこの主義に背く者は皆敵のように思うから、此方が思う通りに、先方の鎖國家古風家も亦洋学者を外道のように悪むだろう。所で私が幕府の様子を見るに、全く古風のそのまゝで、少しも開国主義と思われない、自由主義と見えない。例えば年来、政府の御用達は三井八郎右衛門で、政府の用を聞くのみならず、役人等の私用をも周旋するの慣

行でした。ソコで今度の米国行に付ても、役人が幕府から手当の金を一步銀で請取れば、亞米利加アメリカに行くときには之を洋銀ドルラルの弗に替えなければならぬ。然るにその時は弗相場ドルの毎日変化する最中で、両替はなはが甚だ面倒である。スルト一行中の或る役人が三井の手代を横浜の旅宿に呼び出し、色々弗の相場を聞きききただ糺さていして扱云うよう、「成程昨今の弗は安くない、併し三井にはズットその前安い時に買入れた弗もあるだろう、拙者せつしゃのこの一步銀いちぶぎんはその安い弗と両替して貰いたいと云うと、三井の手代は平伏して、畏りました、お安い弗と両替いたしましようと云て、幾らか割合を安くして弗を持って來た。私は傍そばに居てこの様子を見て居て「ドウモ無鉄砲な事を言う奴だ、金の両替をするに、安いときに買入れた金と云て、

ドウ云う印があるか、安いも高いもその日の相場に定まつたものを、夫れを相場外はずにせよと云いながら、愧はずる氣色もなく平氣な顔をして居るのみならず、その人の平生へいぜいも賤いやしからぬ立派な士君子であるとは驚いた。又三井の手代も算盤そろばんを知るまいことか、チヤントしつ知て居ながら平氣で損をして何とも云わぬ。畢竟ひつきよう人ひとの罪でない、時の氣風の然らしむる所、腐敗の極度だ、こんな政府の立行たちゆこう筈はずはないと思つたことがある。

御国益論に抵抗す夫れから私共が亞米利加アメリカに行いった所で、その時に日本は国事多端の折柄、徳川政府の方針に万事僕約は勿論、仮令たとい政府であろうとも利益あることには着手せねばならぬと云うので、その掛の役人を命じて御国益掛ごこくえきがかりと云うものが出来た。種し

ゆじゅ

々様々な新工夫の新策たてまつを奉る者があれば、ソレを政府に採用していろいろな工夫をする。例えば江戸市中の何処どこの所に掘割ほりわりをして通船かよいせんの運上うんじょうを取るが宜しいと云う者もあり、又或は新川しんかわに這入はいる酒に税を課したら宜かろうとか、何処どこの原野の開墾いこんを引受けてソレで幾らかの運上うんじょうを納めようと云う者もあり、又或る時江戸市中の下肥しもごえを一手に任せてその利益を政府に占めようではないかと云う説が起おこつた。スルト或る洋学者あが大に氣きえんを吐はいて、政府が差配人さばいにんを無視して下肥の利もっぱを専らにせんとは、是れは所謂いわゆる圧制政府である、昔しく亞米利加國民アメリカはその本国英の政府より輸入の茶に課税したるを憤り、貴婦人達は一切茶を喫のまずして茶話会の楽しみをも廃したと云うことを聞きいた、左れば吾

々もこの度は米国人の讐に倣い、一切上園を廃して政府を困らして遣ろうではないか、この発案の可否如何とて、一座大笑を催したことがある。政府の事情が凡そ斯う云う風であるから、今度の一月中にも例の御国益掛の人が居て、その人の腹案に、今後日本にも次第に洋学が開けて原書の価は次第に高くなるに違いない、依りて今この原書を買って持て帰て売たら何分かの御国益になろうと云うので、私にその買入方を内命したから、私が容易に承知しない。「原書買入は甚だ宜しい。日本には原書が払つていであるから一冊でも余計に輸入したいと思う所に、幸なる哉、今度米国に来て官金を以て沢山に入れ、日本に持て帰て原価でドシく売て遣ろう、左様なれば誠に難有い。如何ようにも

勉強して、安いもの適當なものを買入れよう。この儀は如何で御座ると尋ねれば、「イヤ左様でない、自から御國益にする積りだと云う。「左すれば政府は商売をするのだ。私は商売の宰取りをするために来たのではない、けれども政府が既に商売をすると切て出れば、私も商人になりましよう。左る代りにコンミツシヨン（手数料）を思うさま取るがドウだ。何れでも宜しい、政府が買った儘の価で売て呉れると云えば、私はどんなにでも骨を折て、本を吟味して値切り値切て安く買うて売て遣るようにするが、政府が儲けると云えば、政府にばかり儲けさせない、私も一緒に儲ける。サア爰が官商分れ目だ。如何で御座ると捩り込んで、大変喧しい事になつて、大に重役の歎心を失うて仕舞たが、今日より考

えれば事の是非に拘わらず、隨行の身分にして甚だ宜くない事だと思います。

幕府を倒せ夫れから又斯う云う事がある。同行の 尺振八など、飲みながら壯語快談、ソリヤもう官費の酒だから、船中の事で安くはないが何に構うものか、ドシ／＼飲み次第喰い次第で、颯々と酒を注文して部屋に取て飲む。サアそれからいろいろな事を語出して、「ドウしたつてこの幕府と云うものは潰さなくてはならぬ。抑も今の幕政の様を見る。政府の御用と云えば、何品を買うにも御用だ。酒や魚を買うにも自分で勝手な値を付けて買って居るではないか、上総房州から船が這入ると、幕府の御用だと云て一番先にその魚を只持て行くようなことをして居る。ソレも將軍

様が喰うならばマア宜いとするが、爾うではない、料理人とか云うような奴が只取て来て、その魚を又売うつて居るではないか。この一事推おして他を知るべし、實に鼻持のならぬ政府だ。ソレも宜いとして置おいて、この攘夷はドウだ。自分がその局に當あたつて居るから拋よんどころなく渋々開國論を唱えて居ながら、その実を叩たたいて見ると攘夷論の張本だ。彼の品川の海鼠台場なまこだいば、マダあれでも足りないと云て拵え掛けて居るではないか。夫れから又勝麟太郎かつりんたろうが兵庫いっに行くて、七輪見たような丸い白い台場を築くなんて何だ。攘夷の用意をするのではないか。そんな政府なら叩き潰して仕舞うが宜いじやないかと云うと、尺振八ハシブシハチが、爾うだ、その通りに違ちいない。けれども斯こうして船に乘のて亞米利加アメリカに往来するのも、幕府から入にゆう

用^{よう}を出して居ればこそだ。御^{ごどうぜん}同前^{くつ}に喰^くて居るものも着て居るものも幕府の物ではないか。夫れを衣食して居ながら、ソレを潰すと云うのは何だか少し気に済まないようではないか。「それは構わぬ。御同前に此身^{このみ}等が政府の御用をすると云うのは、何も人物がエライと云て用いられて居るのではない、是^こは横文字^しを知^して居るからと云うに過ぎない。

穢^{けい}多に革細工^{かわざいく}之^{これ}を喻^{たと}えば革細工^{かわざいく}だから穢^{けい}多にさせると云うと同じ事で、マア御^{ごどうぜん}同前^{くつ}は雪駄^{せつた}直^なしを見たような者だ。幕府の殿様方は汚い事が出来ない、幸い此處^{ここ}に革細工をする奴が居るからソレにさせろと云うので、デイ^くが大きな屋敷の御出入^{おでいり}になつたのと少しも変つたことはない。ソレに遠慮会釈^{へちま}も糸瓜^いも要るもの

か、颶々と打毀して遣れ。只此処で困るのは、誰が之を打毀すか、ソレに当惑して居る。乃公等は自分でその先棒になろうとは思わぬ。誰が之を打毀すか、之が大問題である。今の世間を見るに、之を毀そうと云て騒いで居るのは所謂浮浪の徒、即ち長州とか薩州とか云う攘夷藩の浪人共であるが、若しも彼の浪人共が天下を自由にするようになつたら、ソレこそ徳川政府の攘夷に上塗りをする奴じやないか。ソレよりもマダ今の幕府の方が勝しだ。けれども如何したつて幕府は早晚倒さなければならぬ、唯差当たり倒す人間がないから仕方なしに見て居るのだ。困た話ではないかなどゝ、且つ飲み且つ語り、部屋の中とは云いながら、人の出入りを止めるでもなし、傍若無人、大きな声でドシく

論じて居たのだから、爾う云うような話もチラホラ重役の耳に聞えたことがあるに違ちがいない。

謹慎を命ぜらるサア夫それから江戸に歸かえつた所が、前にも云う通り私は幕府の外務省に出て翻訳ほんやくをして居たのであるが、外国奉行から咎められた。ドウも貴様は亞米利加行アメリカこうの御用中不都合があるから引込んで謹慎せよと云う。勿論幕府の引込めと云うのは誠に楽なもので、外に出るのは一向構わぬ。只役所に出さえしなければ宜しいのであるから、一身の為めには何ともない。却て暇になつて難ありがた有すい位のことだから、命令の通り直すぐ引込んで、その時に西洋旅案内と云う本を書いて居ました。

福澤の実兄薩州に在り亞米利加から帰かえつて日本に着ついたのはその歳のとし

六月下旬、天下の形勢は次第に切迫してなか／＼喧やかましい。私は唯ただ家に引籠ひきこもつて生徒に教えたり著書翻訳したりして何も騒ぎはないが、世間ではいろいろな評判をして居る。段々聞くと、福澤の実兄は鹿児島に行いて居るとか何とか云う途方もない評判をして居る。兄が薩藩に与くみして居るから弟も変だと云うのは、私が動やもすれば幕府の攘夷論を冷評して、こんな政府は潰つぶすが宜などい杯わ云うから、自おのからそんな評判も立つのであるが、何は扱置き十余年前にこの世さつを去さつた兄が鹿児島に居る訳わけもなし、俗世界の流言として聊いさきか弁解もせず、又幕府に対しても所謂有志者中には種々の奇策妙案を建言する者が多い様子なれども、私は一切関係せず、唯独ただひとり世の中を眺めて居る中に、段々時勢が切迫

して来て、或日中嶋三郎助と云う人が私の処に来て、ドウして引込んで居るか。「斯うく云う次第で引込んで居る。」ソリヤアどうも飛んだ事だ、この忙しい世の中にお前達が引込んで居ると云うことがあるか、直ぐ出る。「出ろツたつて出さぬものを出られないじやないか。」「宜しい、拙者がすぐに出して遣ると云て、夫それからその時に稻葉美濃守いなばみのかみと云う老中があつて、ソコへ中嶋が行つて、福澤を引込まして置かないで出すようにしたら宜かろうと云うような事になつて、夫れから再び出ることになつた。その美濃守と云うのは旧淀藩士で、今日は箱根塔とうのさわ沢に隠居して居るあの老爺さんことで、中嶋三郎助は旧浦賀の与力、箱館の戦争に父子共に討死した立派な武士で、その碑は今浦賀の公園に立てたつた。

ある。

長官に對して不從順全体今度の亞米利加行に就て斯く私が擯斥されたと云うのは、何か私が獨り宜いようにあるけれども、實を申せば左様でない、と云うのは元と私は亞米利加に行きたいと云て小野友五郎に頼み、同人の信用を得て隨行員となつた一人であれば、一切万事長者の命令に従いその思う通りの事をしなければ済まない訳けだ。所が實際は爾うでなく、始終逆らうような事をするのみか、明に命令に背いたこともある。例えは彼の在留中、小野も立腹したと見え、私に向て、最早や御用も済みたればお前は今から先きに帰国するが宜しいと云うと、私が不服だ。「此處まで連れて来て散々御用を勤めさせて、用が少なくなつた

からと云いつて途中で帰れと云う権力は長官にもなかろう。私は日本を出るとき閣老にお暇いとまごい乞いをして出て來た者である、早く云えば御老中から云いいつ付けられて來たのだ。お前さんが帰れと云ても私は帰らないとリキンダのは、私の方が無法であろう。又或日食事の時に私が何か話の序ついでに、全体今之幕府の気が知れない、攘夷鎖港とは何の趣意しゆいだ、之これが為めに品川の台場の増築とは何の戯たわぶれだ、その台場を築いた者はこのテーブルの中にも居るではないか、こんな事で日本国もが保てると思うか、日本は大切な国だぞなどゝ、公衆の前で公言したような事は、私の方こそ氣違ちがいの沙汰さたである。成程小野は頑固な人に違ちがいない、けれども私の不従順と云うことも十分であるから、始終しじゅう嫌われたのは尤も至極もつとしつく、少しも怨うらむ所

はない。

王政維新

その歳も段々迫て、とうく慶應三年の暮になつて、世の中が物騒になつて來たから、生徒も自然にその影響を蒙らなければならぬ。國に帰るもあれば方々に行くもあると云うような訳けで、学生は次第々々に少くなると同時に、今まで私の住で居た鉄砲洲の奥地を命ぜられ、既に居留地になれば私も其處に居られなくなる。そこで慶應三年十二月の押詰めに、新錢座の有馬と云う大名の

中屋敷を買受けて、引移るや否や鉄砲洲は居留地になり、明く
れば慶応四年、即ち明治元年の正月早々、伏見の戦争が始まつて、
將軍慶喜公は江戸へ逃げて帰り、サアそこで又大きな騒ぎにな
つて仕舞た。即ち是れが王政維新の始まり、その時に私は少しも
政治上に関係しない。抑も王政維新が政治の始まりであるから、
話が少し前に戻つて長くなりますが、一通り私が少年のと
きからの話をして、政治に関係しない顛末を明にしなければな
らぬ。

維新の際に一身の進退素と私は小士族の家に生れ、その頃は封建
時代の事で日本国中何れも同様、藩の制度は守旧一偏の有
様で、藩士銘々の分限がチャント定まつて、上士は上士、下士

士は下士と、箱に入れたようにして、その間に少しも融通があられない。ソコで上士族の家に生れた物は親も上士族であれば子も上士族、百年経てもその分限は変らない。従て小士族の家に生れた者は、おのずから上流士族の者から常に輕蔑けいべつを受ける。人々の智愚賢不肖ちぐけんふしょうに拘わらず、上士は下士を目下に見下すと云う風が専ら行われて、私は少年の時からソレに就て如何にも不平で堪らない。

門閥の人を悪まずしてその惡習を悪む所がその不平の極きよくは、人から侮辱されるその侮辱の事柄にくを惡み、遂には人を忘れて唯ただその事柄を見苦しきことゝ思い、門閥の故ゆえを以て漫に威張るは男子の愧はずべき事である、見苦しきことであると云う觀念を生じ、例えば

上士下士相対して上士が横風である、私は之を見てその上士の傲慢無礼を憤ると同時に、心中では思直して、この馬鹿者めが、何も知らずに夢中に威張て居る、見苦しい奴だと却て氣の毒に思うて、心中却て此方から輕蔑して居ました。私がその時老成人であるか又は仏者またであつたら、人道世教の爲めに如何とか、又は平等を愛して差別を排するとか何とか云う説もあろうが、十歳以上十九か二十歳の少年にそんな六かしい奥ゆかしい考かんがえのあるべき筈はずはない。唯人間の殻からいぱり威張は見苦しいものだ、威張る奴は恥知らずの馬鹿だとばかり思て居たから、夫れゆえ藩中に居て人に軽蔑されても侮辱されても、その立腹を他に移して他人を辱はずかしめると云うことはドウしても出来ない。例えは私が

小士族の身分で上流に対しては小さくなつて居なければならぬけれども、順を云えば又私より以下の者が幾らもあるから、その以下の者に向て自分が輕蔑された丈けソレ丈け輕蔑して遣れば、所謂江戸の敵を長崎で討て、勘定の立つようなものだが、ソレが出来ない。出来ない所ではない、その反対に私は下の方に向て大変丁寧にして居ました。

父母の遺伝是れは私独りの発明でない、私の父母共に爾う云う風があつたと推察が出来ます。前にも云いた通り、私の父は勿論漢学者で、身分は私と同じ事であるから、定めて上流士族から蔑視されて居たでしよう。所が私の父は決して他人を輕蔑しない。例えば江州水口の碩学中村栗園は父の実弟のように親

しくして居ましたが、元來栗園の身分は豊前中津の染物屋の息子で、所謂素町人の子だから、藩中士族は誰も相手になるものがない、けれども私の父はその人物を愛して、身分の相違を問わず大層丁寧に取扱うて、大阪の倉屋敷の家に寄寓させて尚お種々に周旋して、とうく水口の儒者になるように取持ち、その間柄と云うものは眞に骨肉の兄弟にも劣らず、父の死後私の代になつて、栗園先生は福澤の家を第二の実家のような塩梅にして、死ぬまで交際して居ました。シテ見ると是れは決して私の発明でない、父母から譲られた性質であると思う。ソレで私は中津に居て上流士族から蔑視されて居ながら、私の身分以下の藩士は勿論、町人百姓に向ても、仮初にも横風に構えてその人

々を目みくだ下くだに見み下くだして、威張るなど、云うことは一寸ちよいともしたこと
がない。勿論上うへんじょうの者に向むけて威張りたくも威張ることが出来ない、
出来ないから唯ただモウ触さわらぬよう相手にならぬようと、独ひとりり自みずか
ら安心決定あんじんけつじょうして居ゐる。

本藩ほんばんに對たいして功名心こうめいしんなし既すでに心に決定して居ゐれば、藩ばんに居ゐて功こうめ
名心こうめいしんと云うものは更さらに立身出世たちしゆしゆして高い身分みぶんになつて
錦きんを故郷くわいごうに着きて人ひとを驚かすと云うような野心おんしんは少しもないのみか、
私わたしにはその錦きんが却かえつて恥はずかしくて着きることが出来ない。グヅ／＼
云いふえば唯ただこの藩ばんを出て仕舞しまだう丈じやうけの事ことだと云いふのが若い時ときからの
考かんえで、人にこそ云いふわね、私の心こころでは眼中藩まなこばんなしと斯こう安心あんしんを極き
めて居ゐましたので、夫それから長崎ながさきに行ゆき大阪おおさかに出て修業しゅぎょうして居ゐる

その中に、藩の御用で江戸に呼ばれて藩中の子弟を教うると云うことをして居ながらも、藩の政庁に対しては誠に淡泊たんぱくで、長い歳月の間只の一度も建白なんと云うことをしたことはない。能く世間にある事で、イヤどうも藩政を改革して洋学を盛さかんにするが宜いとか、兵制を改革するが宜いとか云うことは書生の能く遣ることだ、けれども私に限り只の一度も云いいだ出したことがない。ソレと同時に自分の立身出世を藩に向て求めたことがない。ドウ云うよう身分を取立てゝ貰もらいたい、ドウ云うようにして禄を増して貰いたいと云うような事は、陰にも陽にもどんな事があつても藩の長老に内願などしたことがない。ソコで江戸に参まいてからも、本藩の様子を見れば種々な事を試こころみて居る。兵制で申せば西洋流の

操練を採用したことがある。けれども私はソレを宜いと云て讃め
 もしなければ悪いと云て止めたこともなし、又或は大に漢学を盛
 にすると云て頻りに学校の改革などを企てたこともある。或は兵
 制は甲州流が宜いと云て法螺の貝を吹て藩中で調練をしたこと
 ある。ソレも私は只目前に見て居るばかりで、善いとも悪いと
 も一寸とも云たことがない。或時に家老の隠居があつて、大層
 政治論の好きな人で、私が家老の家に行たらば、その隠居が、ド
 ウも公武の間が甚だ穩かでない、全体どうも近衛様が爾うも有
 りそうもない事だとか、或は江戸の御老中が詰らないとか云うよ
 うな慷慨談を頻りに云て居る。爾う云われると私も何か云いそ
 うな事だ、所が私は決して云わない。如何にも爾うでしよう、ソ

リヤ成程近衛様も爾うだろう、御老中も爾うだろうが、^{さて}扔ソレが
 実地になると傍観者の思うようにはならぬもので、近くはこの奥
 平様の屋敷でも、マダして宜いこともあるだろう、為なくて宜い
 こともあるだろう、傍観者から之を見たらば嘸堪え難いことに思
 うでありますようけれども、当局の御家老の身になつて見れば又
 爾う思う通りに行かないもので、矢張り今の通りより外に仕様が
 ない。余り人の事を批評しても詰らぬ事です。私は一体そんな事
 に就ては何を議論しようとも思わぬと云て、少しも相手にならな
 かつた。

挙領の紋服をその日に売る爾う云う風に構えて、一切政治の事
 に就て口を出そうと思わない。思わないから奥平の邸で立身出世
 づいて

しようとも思はない。立身出世の野心がなければ人に依頼する必要もない。眼中人もなれば藩もなし、左^さればとて藩の邪魔をしようとも思はず、唯屋敷^{ただ}の長屋を借りて安気に住居するばかり、誠に淡泊なもので、或^{あるとき}時私が何かの事に就て御用があるから出て来いと云うから、上屋敷の御小納戸^{おこなんど}の処へ参た所が、之を貴様に下さると云て、奥平家の御紋の付て居る縮緬^{ちりめん}の羽織を呉れた。即ち御紋服^{ごもんぶく}拝^{はいりよう}領^{うけいり}だ。左まで喜びもしなければ、品物が粗末だと云て苦情も云わず、只難有^{たありがと}うございますと云て拝^{はいりよう}領^{うけいり}して、その帰りに屋敷内に國から来て居る亡^{ぼうけい}兄の朋友菅沼孫右衛門と云う人の勤番^{きんばん}長屋に何か用があつて寄た所が、其処に出入りの呉服屋か知らん古着屋か知らん呉服商人が来て何か話をして居る。

ソレをきいて居ると羽織を拵えると云うような様子。夫れから私が、ア、孫右衛門さん、羽織をお拵えか。「左様さ。」^そ「爾うか、羽織には宜い縮緬の売物があるが買ひなさらんか。」「爾うかソリヤ幸いだが、紋所は。「紋所は御紋付だから誰にでも着られる羽織だがドウだ。」「ソリヤ宜い、爾う云う売物があるなら兎も角も見たいものだ。「買うと云いなされば此処に持て居るこの羽織だがドウだ。」「成程御紋付だから差支ない、買おう。就ては此処に呉服屋が来て居るが、価はドウだ。」「値は呉服屋に付けて貰えば宜いと云て、夫れからどの位の価かと云たら、単羽織の事だから一両三分だと云う。」^{うつ}スグ相談が出来て、その羽織を売て一両三分の金を持って、私は鉄砲洲の中屋敷に帰たことがあると云う

ような次第で、全体藩の一般的の習慣にすれば、拝領の御紋服と云うものはその拝領した年月を系図にまで認めて家の名譽にすると云う位のものなれども、私はその御紋服の羽織を着ても着なくても何ともない。夫れよりか金の方が宜い。一両三分あれば昨日見た彼の原書も買われる、原書を買わなければ酒を飲むと云うよくな、至極無邪気な事であつた。

主従の間も売言葉に買言葉爾う云う風であるから藩に対して甚だ淡白、淡白と云えば言葉が宜いけれども、同藩士族の眼から見れば不親切な薄情な奴と見えるも道理で、藩中の若い者等が酒席などで毎度議論を吹掛けことがあるその時に、私は答えて「不親切薄情と云うけれども、私は何も奥平様に向て悪い事をしたこと

はない、一寸ちよいとでも藩政の邪魔よまきをしたことはない、只命令ただめいりの儘ままに堅く守まもつて居るのだ。この上に親切おやぢと云いふてドウ云いふうことをするのか。私は厚かましい事は出来ない、之これを不親切ふおやぢと云いふえば仕方しほうがない。

今も申す通り私は藩に向て悪い事をしないのみか、一寸ちよいとでも求めたことがなかろう、或あるは身分かみぶんを取立て呉くれれろ、祿ろくを増して呉くれれろと云うような事は、蔭かげにも日向ひなたにも一言いちごんでも云いふたことがあるか。その言葉きへいを聞きた人がこの藩中ばんちゆうに在るかドウか、御家老ごけらう以下の役人えきじんに聞きて見るが宜い。厚かましく親切おやぢを尽つくして、厚かましく泣なな付きつくと云うことは、自分の性質おいに於おて出来ない。是れで悪いと云うならば追お出だすより外ほかに仕方しほうはあるまい。追出せば謹んで命めいを奉じて出て行く丈けよの話だ。凡そ人間の交際こうきは売言葉うりごんばに買言葉かいごんばで、

藩の方から数代御奉公を仰付けられて難有い仕合せであろうと酷く恩に被せれば、失敬ながら此方にも言葉がある、数代家来になつて正直に勤めたぞ、そんなに恩に被せなくとも宜かろうと云わねばならぬ。之に反して藩の方から手前達のような家来が数代神妙に奉公して呉れたからこの藩も行立つと斯う云えば、此方も亦言葉を改め、数代御恩を蒙て難有い仕合せに存じ奉ります、累代の間には役に立たぬ小供もありました、病人もありました、ソレにも拘わらず下さる丈けの家禄はチヤンと下さつて家族一同安楽に生活しました、主恩海より深し山より高しと、此方も小さくなつてお札を申上げる。是れが即ち売言葉に買言葉だ。ソレ丈けの事は私も能く知て居る。爾う無闇に恩に被せる事ばかり云て、

只漠然と不親切と云うような事を云て貰いたくないと云うような
調子で、始終しじゅう問答をして居ました。

長州征伐に学生の帰藩を留める夫れから長州藩が穩かでない。朝敵と銘めいが付つて、ソコで將軍御親發ごしんぱつとなり、又幕府から九州の諸大名にも長州に向むかて兵を出せと云う命令が下くだて、豊前中津藩からも兵を出す。就ついては江戸に留学して居る学生、小幡篤次郎おばたとくじろうを始め十人も居ました、ソレを出兵の御用だから帰れと云て呼よび還かえしに來たその時にも、私は不承知だ。この若い者が戦争に出るとは誠に危ない話で、流丸りゅうがんに中あたても死んで仕舞しまわなければならぬ、こんな分らない戦争に鉄砲かつぱうを担かつがせると云うならば、領分中の百姓に担かつがせても同じ事だ、この大事な留学生に帰かえて鉄砲かつぱうを担かつげな

んて、ソンな不似合な事をするには及ばぬ、仮令たとい弾丸に中あたらな
いでも、足に踏抜ふみぬきしても損だ、構うことはない病氣と云て断て
仕舞しまえ、一人も還かえさない、ソレが罷り間違えば藩から放逐ほうちく丈け
の話だ、長州征伐と云う事の理非曲直はどうでも宜しい、兎とに角かく
に学者書生の関係すべき事でないから決して帰らせないと頑張がんばつ
た所が、藩の方でも因循いんじゆんであつたのか、強いて呼返すと云う
こともせずに、その罪は中津なかつに居る父兄の身に降り來きたつて、その方
共の子弟めいが命に背そむいて帰藩せぬのは平生へいせいの教訓宜よろしからざるに
由よる云々の文句で、何でも五十日か六十日の閉門を申付もうしつけら
れたことがある。凡そ私の心事はこんな風で、藩に仕えて藩政を
如何どうしようとも思わず、立身出世して威張いばろうとも思わず、世間

で云う功名心は腹の底から洗たように何にもなかつた。

幕府にも感服せず藩に対しての身の成行、心の置どころは右の通りで、扱江戸に来て居る中に幕府に雇われて、後にはいよく幕府の家来になつて仕舞えと云うので、高百五十俵、正味百俵ばかりの米を貰て一寸と旗本のような者になつて居たことがある。けれども是れ亦、藩に居るときと同様、幕臣になつて功名手柄をしようと云うような野心はないから、隨て自分の身分が何であろうとも気に留めたことがない。一寸とした事だが可笑しい話があるその次第は、江戸で御家人の事を旦那といい、旗本の事を殿様と云うのが一般的慣例である、所が私が旗本になつたけれども、固より自分で殿様なんて馬鹿気たことを考へる訳けもなけれども、もと

ば、家内の者もその通りで、平生へいぜいと少しもかわつ変た事はない。爾そうすると或あるひ日知己の幕人たしか福地源一郎であつたかと覺ゆが玄関に来て殿様はお内か。「イー工そんな者は居ません」「お内におりでなさらぬか、殿様は御不在か。「そんな人は居ませんと、取次の下女と頻しきりに問答して居る様子、狭い家だからスグ私が聞付けて、玄関に出てその客を座敷に通したことがあるが、成るほど殿様と云いつて下女に分る訳けはない、私の家の中で云う者もなければ聞きいた者もない言葉だから。

洋行船中の談話夫れでも私に全く政治思想のないではない。例えば文久二年欧行の船中で松木弘安まつきこうあんと箕作秋坪みづくりしゅうへいと私と三人、色々日本の時勢論を論じて、その時私が「ドウだ逆とても幕府の一いって

手持は六かしい、先ず諸大名を集めて独逸聯邦のようにして
 は如何と云うに、松木も箕作も、マアそんな事が穩かだらうと
 云う。夫れから段々身の上話に及んで、今日吾々共の思う通り
 を云えば、正米を年に二百俵貰うて親玉（將軍の事）の御
 師匠番になつて、思う様に文明開国の説を吹込んで大変革をさし
 て見たいと云うと、松木が手を拍て、左様だく、是れは遣て見
 たいと云たのは、松木の功名心もその時には二百俵の米を貰うて
 将軍に文明説を吹込むぐらいの事で、当時の洋学者の考は大抵皆
 大同小異、一身のために大きな事は考えない。後にその松木が寺
 島宗則となつて、參議とか外務卿とか云う實際の国事に當
 たのは、実は本人の柄に於て商売違ひであつたと思ひます。

夫れは扱置き世の中の形勢を見れば、天下の浮浪すなわ即ち有志者は京都に集まつて居る。夫れから江戸の方では又幕府と云うものが勿論時の政府でリキンで居ると云う訳けで、日本の政治が東西二派に相分れて、勤王佐幕と云う二派の名が出来た。出来た所で、サア其処に至て私が如何するかと云うに、

第一、私は幕府の門閥压制、鎖国士族が極々嫌いで之に力をつくす氣はない。

第二、左ればとて彼の勤王家と云う一類を見れば、幕府より尚ほ一層甚だしい攘夷論で、こんな乱暴者を助ける気は固よりもとない。

第三、東西二派の理非曲直は姑く扱置き、男子が所謂宿昔しばらさておいてゐるしゆくせ

青雲の志を達するは乱世に在り、勤王でも佐幕でも試みに当て
碎けると云うが書生の事であるが、私にはその性質習慣がな
い。

今その次第を語りましよう。抑も私が始めて江戸に来た時から
して幕府の人には感服しない。そ一寸と旗本御家人に出遇う所が、
応接振りは上品で、田舎者と違ひ弁舌もよく行儀も立派であるが、
何分にも外辺ばかりで、物事を微密に考えるよ脳力もなければ
又腕力も弱そうに見える、けれども先方は幕府の御直参、此方は
又る影もない陪臣だから手の着けようもなく、旗本などに対して
はその人の居ない処でも何様々々と尊敬して居るその塩梅式は、
京都の御公卿様を取扱うように、唯見た所ばかりを丁寧にして心

の中では見縊り抜くびりぬいて居た。

葵の紋の御威光所がその無脳力、無腕力と思う幕府人の剣幕は中々大造たいそうのものである。些細ささいな事のようだが、當時最も癪しゃくに障るものは旅行の道中で、幕人の威張いばり方と云うものは逆とても今時の人には想像は出来ない。私などは譜代大名の家来だから丸で人種違うじむしいの蛆虫うじむし同様、幕府の役人は勿論、凡そ葵の紋所の付つて居る御三家と云い、夫れから徳川親藩の越前家と云うような大名か又はその家来が道中をして居る処に打付ぶつけかろうものならソリヤ堪たまらない。寒中朝寒い時に宿屋を出て、河を渡ろうと思おもつて寒風の吹く処に立て一時間も船の来るのを待まつて居る、ヤツと船が着ついて、やれ嬉しやこの船に乗ろうと云う時に、不意と後ろから葵の紋の侍さまらいが来ると

その者が先きへその船に乗て仕舞う、又アト一時間も待たなければならぬ。駕籠を昇ぐ人足でも無人のときには吾々は問屋場に行つて頼んでヤツと出来た処に、アトから例の葵の紋が来ると、出来たその人足を横合から取られて仕舞う。如何なお心善でも腹を立てずには居られない。凡そ幕府の圧制殻威張りは際限のない事ながら、私共が若い時に直接に侮辱軽蔑を受けたのは、道中の一事でも血氣の熱心は自から禁ずることが出来ず、前後左右に深い考えもなく、唯癪の余りに、こんな悪政府は世界中にあるまいと腹の底から観念して居た。

幕府の攘夷主義幕政の殻威張りが癪に障ると云うのは、是れは此方の血氣の熱心であるとして姑く差置き、扱この日本を開いて

外交をドウするかと云うことになつては、如何も見て居られない、と云うのは私は若い時から洋書を読で、夫れから亞米利加に行き、その次にはヨーロッパに行き、又亞米利加にて、只学問ばかりでなく実地を見聞して見れば、如何しても対外国是は斯う云うように仕向けなければならぬと、ボンヤリした処でも外交際法と云うことに氣の付くは当然の話であろう。ソコでの私の考から割出して、この徳川政府を見ると殆んど取所のない有様で、當時日本国中の輿論は都て攘夷で、諸藩残らず攘夷うでありますけれども、正味の精神を吟味すれば天下隨一の攘夷藩、西洋嫌いは徳川であると云て間違いはあるまい。或は後年に

至^{いたつ}大老^{いいかもんのかみ}井伊^{いの}掃部頭^{くぱゆう}は開国論を唱えた人であるとか開国主義であつたとか云うような事を、世間で吹^{ふい}聴^{ちよう}する人もあれば書に著わした者もあるが、開国主義なんて大嘘^{だいうそ}の皮^{かわ}、何が開国論なものか、存じ掛けもない話だ。井伊掃部頭と云う人は純粹無雜^{ほんざい}申^{もうしぶん}分^{みかわぶし}のない參河武士^{さんかわぶし}だ。江戸の大城^{たいじょう}炎上^{ほのまき}のとき幼君^{よしむすめ}を守護して紅葉山^{もみじやま}に立退^{たちの}き、周囲に枯草^{かくそう}の繁りたるを見て非常の最中^{ふようじゆ}不用心^{みはず}なりとて、親から腰^ねの一刀を抜^{ぬい}てその草を切^{きり}払い、手に幼君^{よう}を擁^よして終夜家外に立詰めなりしと云う話がある。又この人が京都辺の攘夷論者を捕縛して刑に処したることはあれども、是れは攘夷論を悪む^{にく}ためではない、浮浪の処士^{おううぎ}が横議^{よこぎ}して徳川政府の政權を犯すが故にその罪人を殺したのである。是等の事實を

見ても、井伊大老は眞実間違いもない徳川家の譜代、豪勇無二の忠臣ではあるが、開鎖の議論に至ては、眞闇な攘実家と云うより外に評論はない。唯その徳川が開国であると云うのは、外国交際の衝に当て居るから余儀なく渉々開國論に従て居た丈けの話で、一幕捲て正味の樂屋を見たらば大変な攘夷藩だ。こんな政府に私が同情を表することが出来ないと云うのも無理はなかろう。先ずその時の徳川政府の頑固な一例を申せば斯う云うことがある。私がチエーンバーの經濟論を一冊持て居て、何か話の序に御勘定方の有力な人、即ち今で申せば大蔵省中の重要の職に居る人にその經濟書の事を語ると、大造悦んで、ドウか目録だけでも宜いから是非見たいと所望するから、早速翻訳する中に、コンペチ

ショント云う原語に出遭い、色々考えた末、競争と云う訳字を造り出して之に当箇め、前後二十条ばかりの目録を翻訳して之を見せた所が、その人が之を見て頻りに感心して居たようだが、「イヤ茲に争ここあらそいと云う字がある、ドウも是これが穩かでない、どんな事であるか。」「どんな事ツて是れは何も珍らしいことはない、日本の商人のして居る通り、隣で物を安く売ると云えば此方こつちの店ではソレよりも安くしよう、又甲またの商人が品物を宜くすると云えば、乙はソレよりも一層宜よくして客を呼ぼうと斯こう云うので、又或る金貸が利息を下げるれば、隣の金貸も割合を安くして店の繁昌を謀る」と云うような事で、互たがいに競い争うて、ソレで以てちゃんと物価も定まれば金利も極きまる、之を名けて競争と云うので御座る。「成

程、爾そうか、西洋の流儀はキツイものだね。「何もキツイ事はない、ソレで都すべて商売世界の大本おおもとが定きまるのである。「成なるほど程、爾あらそいう云いえば分わらないことはないが、何分ドウも争あらそいと云いう文字が穩たがいかならぬ。是れではドウモ御老中方へ御覽に入れることが出来ないと、妙な事を云いうその様子を見るに、經濟書中あいゆに人間互あいゆに相あいゆ譲あきるとか云いうような文字が見たいのである。例えたば商賣あいをしながらも忠君愛國、國家の為めには無代價あきでも売るとか云いうような意味が記してあつたらば氣に入るであろうが、夫それは出来ないから、「ドウも争あらそいと云いう字が御差支おさしつかえならば、外に翻ほんやく訳の致しようもないから、丸で是れは削こりますようと云いて、競争の文字を真黒に消して目録書を渡たしたことがある。この一事でも幕府全体

の氣風は推察が出来ましょう。夫れから又長州征伐のとき外国人は中々注意して居て、或時英人であつたか米人であつたか幕府に書翰を出し、長州の大名にドウ云う罪があつて征伐するのだろうか、ソレを承りたいと云て來た。爾うするとその時の閣老役人達がいろいろ評議をしたと見え、長々と返辞を遣たその返辞の中に、開鎖論と云うことを頓と云わない。当りまえならば国を開いた今日、長州の大名は政府の命令を奉ぜずに外国人を敵視するとか、下ノ関で外国の船艦に発砲したからとか云いそうなものであるに、ソンな事は一言半句も云わないで、イヤどうも京都に暴れ込んだとか、あるいは勅命に戻り台命に背き、その罪南山の竹を尽すも数えがたしと云うような、漢学者流の文句をゴテ／＼

書いて遣た。私はその返辞を見て、コリヤどうも仕様がない、表面には開国を装うて居るも、幕府は眞実自分も攘夷が為たくて堪らないのだ、逆もモウ手の着けようのない政府だと、實に愛想が尽きて同情を表する気がない。

然らば則ち之に取て代ろうと云う上方の勤王家はドウだと云うに、彼等が代たら却てお釣の出るような攘夷家だ。コリヤ又幕府よりか一層悪い。勤王攘夷と佐幕攘夷と名こそ変れ、その実は双方共に純粹無雜な攘夷家でその攘夷に深浅厚薄の別はあるも、詰る所は双方共に尊攘の仕振りが善いとか悪いとか云うのが争論の点で、その争論喧嘩が遂に上方の攘夷家と関東の攘夷家と鉄砲を打合うような事になるであろう。ドチラも頼むに足らず、その

中にも上方の勤王家は、事実に於て人殺しもすれば放火もして居る、その目的を尋ねて見ると、仮令たといこの國を焦土あにして飽くまで攘夷ことごとをしなければならぬと云う触込みで、一切万事一挙一動悉く攘夷ならざるはなし。然るに日本國中の人がワツとソレに応じて騒ぎ立て居るのであるから、何としても之に同情を表して仲間になるような事は出来られない。是れこそ實に國を滅す奴等こだ、こんな不文不明な分らぬ乱暴人に國を渡せば亡國は限前に見える、情けない事だと云う考かんがえが始終胸に染込んで居たから、何としても上方かみがたの者に左袒さたんする気にならぬ。その前後に緒方の隠居は江戸に居る。是れは故緒方洪庵先生の夫人で、私は阿母おつかさんのようにして居る恩人である。或時に隠居が私と箕作みづくりを呼んで、

ドウじやい、お前さん方は幕府に雇われて勤めて居るけれども、馬鹿々々しい止しなさい、ソレよりか上方に行^{いっ}て御覧。ソリヤどうもいろいろな面白いことがあるぜ、と云う。段々^{きい}聞^きて見ると村田造六^{らた すなわ}即ち^{おおむらますじろう}大村益次郎^{さのえいじゆう}とか佐野栄寿^{さのえいじゆ}(常民)^{つねたみ}とか云うような有志者が、皆緒方の家に出入をして居る。ソレを隠居さんが知て居て、私と箕作の事は自分の子のようにして居たものだから、江戸に居るな、上方に行けと勧めたのも無理はない。その時に私は、誠に難有^{ありがと}うございます、大阪に行けば必ず面白い仕事がありましょうけれども、私はドウも首をもがれたツて攘夷のお供は出来ません、爾^そうじやないかと、箕作と云^いて断わつたことがありましたが、その位の訳^{わけ}で、ドウしてもその上方勢に与みすることは出

来なかつた。

夫からモウ一つ私の身に就いて云えば、少年の時から中津の藩を
 出て仕舞しまつたので、所謂藩の役人らしい公用を勤めたことがない。
 夫れから前にも云う通り、江戸に来て徳川の政府に雇われたから
 と云いった所が、是れは云わば筆執ほんやくる翻訳の職人で、政治に与あずかる
 う訳けもない。只職人の積りで居るのだから、政治の考かんがえと云うも
 のは少しもない。自分でも仕しようとも思わなければ、又私は出来
 ようとも思わない。仮令たとい又私が奮發して、幕府なり上方なり
 何でも都合の宜い方に飛出すとした処が、人の下流に就ついて仕事を
 することは固もとより出来ず、中津藩の小士族で他人に侮辱ぶじょく軽蔑けいべつ
 されたその不平不愉快は骨に徹てつして忘れられないから、今更ら他

人に屈してお辞儀をするのは禁物である。左れば大に立身して所いわゆる謂政治界の大人とならんか、是れも甚だ面白くない。前にも申した通り私は儀式の箱に入れられて小さくなるのを嫌う通りに、その通りに儀式張て横風な顔をして人を眼下に見下だすこともまた甚だ嫌いである。例えば私は少年の時から人を呼棄にしたことはない。車夫、馬丁、人足、小商人の如き下等社会の者は別にして、苟も話の出来る人間らしい人に対して無礼な言葉を用いたことはない。青年書生は勿論、家内の子供を取り扱うにもその名を呼び棄にすることは出来ない。左る代りに政治社会の歴々とか何とか云う人を見ても何ともない。夫れも白髪の老人とでも云えば老人相応に待遇はすれども、その人の官爵が高いなんて高

慢な風をすれば唯可笑しいばかりで、話をするのも面白くない。

是れは私が持て生れた性質か、又は書生流儀の習慣か、老年の今日に至るまでも同じ事で、之を要するに如何しても青雲の雲の上には向きの悪い男であるから、維新前後にもひとり別物になつて居たことゝ、自分で自分の事を推察して居ます。ソレはソレとして、

さて
さとけいき

扱慶喜さんが京都から江戸に帰つて来たと云うその時には、サア

い

大変。朝野共に物論沸騰して、武家は勿論、長袖の学者も医者も坊主も皆政治論に忙しく、酔えるが如く狂するが如く、人が人の顔を見れば唯その詰ばかりで、幕府の城内に規律もなければ礼儀もない。平生なれば大広間、溜の間、雁の間、柳の間なんて、大小名の居る処で中々喧ましいのが、丸で無住のお寺を見たよう

になつて、ゴロ／＼箕坐あぐらを搔かいてて、怒鳴る者もあれば、ソット袂たもとから小さいビンを出してブランデーを飲んでる者もあると云うような乱脈になり果てたけれども、私は時勢を見る必要がある、城中の外國方がいこくがたに翻訳杯ほんやくばいの用はないけれども、見物半分に毎日のように城中に出で居ましたが、その政論流行の一例を云て見ると、或日加藤弘之かとうひろゆきと今一人、誰であつたか名を覚えませぬが、二人其処そこへ行いて、「イヤ加藤君、今日はおかみしも」かみしもが、かみしもを着て出て来て外國方の役所に休息して居るから、私がかと云いうと、「何事だこつて、お逢いを願うと云うのは、此の時に慶喜さんが歸かえつて来て城中に居るでしよう、ソコで色々な策士論客忠臣義士が躍氣やつきとなつて、上方かみがたの賊軍が出発したから何でも是こ

れは富士川で防がなければならぬとか、イヤ爾うでない、箱根の嶮阻に拠て二子山の処で賊を麿殺しにするが宜い、東照

神君三百年の洪業は一朝にして棄つべからず、吾々臣子の分と

して義を知るの王臣となつて生けるは恩を知るの忠臣となつて死するに若かずなんて、種々々々々々の奇策妙案を献じ、悲憤慷慨の氣焰を吐く者が多いから、云わざと知れた加藤等もその連中うで、慶喜さんにお逢いを願う者に違ひない。ソコデ私が、

「今度の一件はドウなるだろう、いよ／＼戦争になるか、ならないか、君達には大抵分るだろうから、ドウぞ夫れを僕に知らして呉れ給え、是非聞きたいものだ。」ソレを聞いて何にするか。

「何にするツて分てるではないか、是れがいよ／＼戦争に極きま

ば僕は荷物を拵えて逸げなくてはならぬ、戦争にならぬと云えば落付おちついて居る。その和戦如何はなかく容易ならぬ大切な事であるから、ドウぞ知らして貰いたいと云うと、加藤は眼を丸くして、「ソーンな氣楽な事をいつ云いふて居る時勢ではないぞ、馬鹿ばか々々ぱぱしい。

「イヤ〜氣楽な所ではない、僕は命掛けだ。君達は戦うとも和睦しようとも勝手にしなさい、僕は始まると即刻そつこく逃にげて行くのだからと云いったら、加藤がブリく怒おこつて居たことがあります。

夫れから又或日に外國方その小役人またあるひが出て来て、時に福澤さんは家来は何人めしつ召連とれるになるかと問うから、「家来とは何だと云いうと、「イヤ事急なれば皆この城中に詰める方々まかないにお賄まぐわを下さるので人数にんすを調べて居る處です。」爾そうかソレは誠に難ありがた有あい、難ありがた

りがた
有いが私は勿論家来もなければ主人もない。ドウぞ福澤のお賄だけはお止めにして下さい。弥々戦争が始まると云うのに、この城の中に来て悠々と弁当など喰て居られるものか、始まろうと云う気振りが見えれば何處かへ直ぐに逃出して行きます。先ず私のお賄は要らないものとして下さいと、笑て茶を呑んで居た。

全体を云うと眞実徳川の人に戦う氣があれば、私がそんな放語漫言したのを許す訳けはない、直ぐ一刀の下に首が夫くなる筈だけれども、是れが所謂幕末の形勢で、逆も本式に戦争などの出来にんきる人氣でなかつた。

その前に慶喜さんが東帰して来たときには、政治上の改革とでも云うか種々様々な役人が出来た。可笑しくて堪らない。新潟奉けいき

行に誰が命ぜられて、何処の代官に誰がなる。甚だしきに至ては逃去て來た後の兵庫奉行になつた人さえあつて、名義上の奉行だけは此方に出來て居る。夫れから又御目附になるもあれば、御使番になるものもある。何でも加藤弘之、津田真一（眞道）なども御目附か御使番かになつて居たと思う。私にも御使番になれと云う。奉書到来と云う儀式で、夜中差紙が来たが、眞平御免だ、私は病氣で御座ると云て取合わない。夫れから段々切迫して官軍（上方勢）が這入り込んで、ソロ／＼鎮将府と云うようなものが江戸に出來て、慶喜さんは水戸の方に行くと斯うなつたので、是れは慶応四年即ち明治元年春からの騒ぎで、その時に私は芝の新錢座に屋敷が買つてあつたから引越ししなけれ

ばならぬ。その屋敷の地坪は四百坪、長屋が一棟に土蔵が一つある切りだから、生徒の為めに塾舎も拵えなければならず、又私の住居も拵えなければならぬ。^{すまい} 扱^{さげ}その普請の一^{さて}段になつた所で、江戸市中大騒動の最中、却て都合が宜い。^{かえつ} 八百八町只の^{ただ}一軒でも普請をする家はない。ソレどころではない、荷物を擗^{から}げて田舎に引^ひ越すと云うような者ばかり、手廻しの宜い家では竈^{かまど}の銅壺まで外^{はず}して仕舞^{しまつ}て、自分は土竈^{どべつつい}を拵えて飯を焚^{たい}て居る者もある。この最中に私が普請を始めた処が、大工や左官の悦びと云うものは^{よろこ}一方ならぬ。安いにもく、何でも飯が喰^くわれさえすれば宜い、米の代さえあれば働くと云う訳けで、安い手間料で人手は幾らでもあるから、普請は颶^{さつさつ}々と出来る。その建物も新たに拵えるの

ではない。奥平屋敷の古長屋を貰もらつて来て、凡そ百五十坪も普請したが、入費は僅か四百両ばかりで一切仕上げました。いよいよ普請の出来たのはその年（明治元年）四月頃と覚ゆ。その時私の朋友などは態々止めに来て、「今頃普請をするものがあるか、何処でも家を毀こわして立退くと云う時節に、君独り普請をしてドウする積りだと云うから、私は答えて、「ソリヤ爾そうでない、今僕あらたが新に普請するから可笑おかしいように見えるけれども、去年普請をして置たらドウする。いよいよ戦争になつて逃げる時にその家を担かついで行かれるものでない。成程今戦争になれば焼けるかも知れない、又焼けないかも知れない、仮令たとい焼けても去年の家が焼けたと思えば後悔も何もしない、少しも惜しくないと云て颯々

と普請をして、果して何の災もなかつたのは投機商売の中たよう
 なものです。何でも私の處で普請をした為めに、新錢座辺は余
 程立退きが寡かすくなつた。彼處の内で普請をする位だから戦争になら
 ぬであろう、マア引越ひきこしを見合せようと云て思止おもいとまつた者も大分
 あつたようだ。けれども実は私も心の中では怖いさ。何処から焼
 け始まつてドンな事になるか知れぬと思うから、何処かに逃げる
 用意はして置かなければならぬ。屋敷の中に穴を掘ほつて隠れて居よ
 うか、ソレでは雨の降るときに困る。土蔵の椽えんの下に這入はいって居よ
 うか、若し大砲で撃れると困る。ドウしようかと思う中に、近所
 に紀州の屋敷しばりきゆう（今の芝離宮）があつて、その紀州藩から幾人
 も生徒が来て居るを幸い、その人達に頼んで屋敷を見に行た所が、

広い庭で土手が二重に喰違くいちがになつて居る処がある。此処が宜かろう、罷り違まかちがつていよ／＼ドン／＼遣やるようにならば、此処へ逃げて来よう、けれども表から行かれない、行かれないから海岸から行くより外ほかないと云うので、いよ／＼セツパ詰つまつたその時に、私は伝馬船てんまぶねを五、六日の間雇やとつて、新銭座しんせんざの浜辺に繫つないで置おいたことがある。サアいよくと云うときに、家内の者をその船に乗せて海の方からその紀州の屋敷いっへ行ゆて、土手の間に隠れて居ようと云う覚悟。その時に私の処の子供が二人、一いち（總領のいちたろう一太郎氏そなり）と捨すて（次男の捨次郎氏すてじろうなり）、家内と子供を連れて其処へ行こうと云う覚悟をして居た所が、ソレ程心配にも及ばず、追々官軍が入込んで来た所が存外優しい、決して乱暴な事をしな

い。既に奥平の屋敷が汐留にあつて、彼処に居る（別室に居る年寄を指して）一太郎のお祖母さんがその屋敷に居るので、五歳ばかりの一太郎が前夜からお祖母さんの処に泊て居た所が、奥平屋敷のツヒ近所に増山と云う大名屋敷があつて、その屋敷へ不逞の徒が何人とか籠て居ると云うので、長州の兵が取囲んで、サア戦争だ、ドン／＼遣て居る。夫れから捕まえられたとか斬られたとか、或は奥平屋敷の溝の中に入り、人が斬倒されて、ソレを又上から鎗で突たと云うような大騒動。所で私の倅はお祖さんの方に居る、奥平の屋敷も焼かれて仕舞うだろう、あの子とお祖母さんはドウなろうかと大変な心配で、迎いに遣ろうと云ても遣ることも出来ない。夫れ是れする中に夕方になつた所で事は

鎮しずまつて仕舞しまつたが、その時でも大変に優しくて、ジツとして居ればドウもしない、何もこの内に居る者に怪我をさせようともしなければ乱暴もしない、チヤンと軍令と云うものがあつて締りしまつが付て居るから安心しなさいと頻りに和なだめて一寸ちよいとも手を触れないと云う一例でも、官軍の存外優しかったことが分る。前に思おもつたとは大違ちがいい、何ともない。

義塾次第に繁昌さて拵四月になつた所で普請も出来上り、塾生は丁度慶応三年と四年の境が一番諸方に散じて仕舞しまつて、残のこつた者は僅に十八人、夫れから四月になつた所が段々帰かえつて来て、追々塾の姿を成して次第に盛さかんになる。又盛になる訳わけもある、と云うのは今度私が亞米利加アメリカに行た時には、其以前、亞米利加に行た時よりも多く

金を貰いました。^{ところ}所で旅行中の費用は都^{すべ}て官費であるから、政府から請取^{うけとつ}た金は皆手元に残る故^{ゆえ}、その金を以て今度こそは有らん限りの原書を^{かっ}買ってきました。大中小の辞書、地理書、歴史等は勿論、その外法律書、経済書、数学書などもその時殆めて日本に輸入して、塾の何十人と云う生徒に銘^{めいめい}々^々その版本を持たして立派に修業の出来るようにしたのは、實に無上の便利でした。ソコデその当分十年余も亞米利加出版^{アメリカ}の学校読本が日本国中に行われて居たのも、畢^{ひつきよう}竟^{もつ}私が始めて持^{かえつ}て帰^{いんえん}たのが因縁^{いんえん}になつたことです。その次第は生徒が始めて塾で学ぶ、その学んで卒業した者が方々^{ほうぼう}に出て教師になる、教師になれば自分が今まで学んだものをその学校に用ゐるのも自然の順序であるから、日本国中に慶應義

塾に用いた原書が流布して広く行われたと云うのも、事の順序はよく分わかて居ます。

官賊の間に偏せず党せずそれで先ず官軍は存外柔かなものであつて、何も心配はない。併し政治上の事は極めて鋭敏なもので、嫌け疑んぎと云うことがあつては是れは容易ならぬ訳わけであるから、ソレを明にする為あきらかために、私は一切万事何も斯しかも打明けて、一口に云えれば塾も住居も殻明からあきにして仕舞しまい、何処どこを搜した所で鉄砲は勿論いっちよう一挺いつもなし、刃物はものもなければ飛道具とびどうぐもない、一目明白、直に分るようになりました。始終爾そう云う身構えにして居るから、私の處には官軍方の人も颶々さつさつと来れば、賊軍の人も颶々さつさつと出入りして居て、私は官でも賊でも一切構わぬ、何方に向ても依怙えこひ龜

眞^{いき}なしに扱^{あつかつ}て居るから、双方共に朋友でした。その時に斯^こう云う面白い事がありました。官軍が江戸に乗込んでマダ賊軍が上野に籠^{こも}らぬ前に、市川辺に小競^{こぜりあい}合^{あい}がありました。爾^そうすると賊軍方の者が夜は其処^{そこ}に^{いつたたかつ}て戦^{ねつ}て、昼^{ねむ}は睡^{ねむ}いからと云て塾^{いっつ}に来て寝て居た者があつたが、根^{ねつ}から構^{ねむ}わない。私はその人の話を聞いて、「君はソンナ事をして居るのか、危ない事だ、マア止^{よし}にした方が宜^よかろうと云たくらいのことである。

古川節藏脱走夫^それから古川節^{ふるかわせつぞう}藏^{ぞう}は長崎丸と云う船の艦長であつたが、榎本釜次郎^{えのもとかまじろう}よりも先駆けして脱走すると云うので、私にその事を話した。所が節藏は先年私が大阪から連れて來た男で、私弟のようにして居たから、私はその話を聞て親切に止めました。

「ソリヤ止よすが宜い、逆とても叶わない、戦争すれば必ず負けるに違
いない。東西ドチラが正しいとか正しくないと云うような理非
曲直は云わないが、何しろ斯う云う勢いきおいになつたからは、モウ船に
乗のて脱走したからとて勝てそうにもしないから、ソレは思とい止ま
るが宜いと云た所が、節藏はマダなかく強氣つよきで、「ナアに屹度
勝つ、是れから出掛けこて行いて、諸方に出没して居る同志者をこの
船に乘せて便利の地に挙あげて、官軍が江戸の方に遣やて来るその裏
をつい衡そて、夫れから大阪湾いつに行いて搔廻かきまわせば官軍が狼狽すると云う
ような事になつて、屹度勝算きつとはありますと云いて、中々私の云うこ
とを聞かないから、「爾そうか、ソレならば勝手おにするが宜い、乃お
公れはモウ負けても勝かつても知らないぞ。だが乃公おれは足下そくかを助けよう

とは思わぬ。唯可哀なのはお政さんだ（節蔵氏の内君）、ソレ丈けは生きて居られるように世話をして遣る、足下は何としても云う事を聞かないから仕方がない、ドウでもしなさいと云て別れたことがあります。

発狂病人一条米国より帰来もう一ヶ条。この時に仙台の書生で、以前この塾に居て夫れから亞米利加アメリカに留学して居た一條某と云うものがあつて、ソレが亞米利加から帰て來た。所がこの男が発狂して居ると云う。ソレを船中で親切に看病して呉くわれると云うのは、矢張り一条と同時に塾に居た柳本直太郎やぎもとなおたろう、是れはこの間まで愛知県の書記官をして居たが、今では市長か何かになつて居るそうだ。この柳本直太郎やぎもとなおたろうが親切に看病して、横浜に着船した。

その時は丁度仙台藩がいよく朝敵になつたときで、江戸中で仙台人と見れば見付次第捕縛と云うことになつて居る。ソコで横浜に来た所が、正しく仙台人だ、捕縛しようかと云うに、紛う方なき発狂人だ、ドウにも手の着けようがない。その時に寺島（宗則）が横浜の奉行をして居て、発狂人は仕方がないから打遣て置けど云うような事でその儘にしてあるその中に、病人は人を疑う病症を発して、飲食物に毒があると云て一切受付けず、凡そ一週間余り何も飲食しない。飲食しないからその儘棄てゝ置けば餓死する。ソコでいろいろと和めて勧めたけれども何としても喰わない。爾うすると、不意としたことで、その病人が福澤先生に遇あいたいと云うことを云出した。福澤は江戸に居ましよう、ソコで

横浜に置くなら宜いが江戸に連れて行くのはドウかと思って、御奉行（寺島）に伺た所が、御奉行様も福澤に行くと云うなら颯々と連れて行けと云うので、ソレから新錢座しんせんざに連れて來た。ソレが面白い、來た所で先ず取敢えず久振りと云て茶を出して、茶も飲め、序ついでに飯も喰えと勧めて、夫それから握飯を出して、私も喫べるから君も一つ喫べなさい、ソレが喫べられなければ私の喫べ掛けを半分喫べなさい、毒はないじやないかと云うよ^うなことで試みた所が、ソコで喰出くいした。喰て見れば氣狂くちいの事だから、今まで思おもつて居たことは忘れて仕舞しまい、新錢座に来て安心したと見え、食氣は回復して、ソレは宜いが、マダ／＼病人が何を遣り出すか知れない、昼夜番いが要る。所が可笑おかしい。その時に薩州の者も居

れば土州の者も居る、その官軍一味の者が居て、朝敵だから捕縛
 しようと云う位な病人を扶^{たす}けて看柄して居る。爾^そうすると仙台の
 者が忍んで来る。大^{おおつき}槻^{せがれ}の卒なども内々見舞に来て、官軍と賊軍
 と塾^{あつ}の中で混り合^{あつ}て、朝敵藩の病人を看病して居ながら、何も風
 波^{うは}もなければ苦味^{にがみ}もない。ソンナ事が塾の安全であつた訳^わけでし
 ょう。眞実平等区別なし、疑わんとするも疑うべき種^{たね}がない。一
 方には脱走して賊軍に投^{なげ}ずるがあるかと思えば、一方にはチヤン
 と塾に這入^{はいっ}て居る官軍もあると云うような不思議な次第柄で、斯^こ
 う云う事は造^{つくつ}たのじや出来ぬ、装うても出来ぬ、私は腹の底から
 偏頗^{へんぱ}な考がない、少しも幕府の事を感服しなければ、官軍の事を
 も感服しない、戦争するなら銘^{めいめい}々勝手にしろと、裏も表もなく

その趣意で貰いて居たから、私の身も塾も危い所を無難に過したことゝ思う。

新政府の御用召夫れからいよ／＼王政維新と定まつて、大阪に明治政府の仮政府が出来て、その仮政府から命令が下くだつた。御用があるから出て来いと一番始めに沙汰さたのあつたのが、神田孝平かんだたかひらと柳川春三ながわしゅんさんと私と三人。所が柳川春三はドウも大阪に行くのは嫌いやだ、だから命は奉ずるけれども御用があればドウゾ江戸に居て勤めたいと云う注文。神田孝平は命に応じて行くと云う。私は一も二もなく病氣で出られませぬと断り。その後大阪の仮政府は江戸に遷て来て、江戸の新政府から又御用召ごようめしで度々たびたび呼びに来ましたけれども、始終断る計り。或時あるとき神田孝平が私の処へ是非出

ろと云て勧めに來たから、私はこれに答えて、「一体君は何う思うか、男子の出處進退は銘々の好む通りにするが宜いではないか、世間一般そうありたいものではないか、之に異論はなかろう。ソコデ僕の目から見ると、君が新政府に出たのは君の平生好む所を実行して居るのだから僕は甚だ賛成するけれども、僕の身には夫れが嫌いだ、嫌いであるから出ないと云うものも是亦自分の好む所を実行するのだから、君の出て居ると同じ趣意ではないか。左れば今僕は君の進退を賛成して居るから、君も亦僕の進退を賛成して、福澤は能く引込んで居る、旨いと云て誉めてこそ呉れそうなものだ。夫れを誉めもせずに呼出しに来るのは友達甲斐がないじやないかと大に論じて、親友の間であるから遠慮会釈も

なく刎付はねつけたことがある。

学者を讃めるなら豆腐屋も讃めろ夫れから幾ら呼びに來ても政府
へはモウ 一切出ないと説を極めて居た所が、或日 細川潤次

郎ろうが私の處へ來たことがある。その時はマダ文部省と云うものゝ
ない時で、何でもこの政府の学校の世話をしろと云う。イヤそれ

は往けない、自分は何もそんな事はしないと答え、夫れからいろ

くの話もあつたが、細川の云うに、ドウしても政府に於て只棄おい
てゝ置くと云う理屈はないのだから、政府から君が国家に尽つくした
功労を讃めるようにしなければならぬと云うから、私は自分の説
を主張して、讃めるの讃められぬのと全体ソリヤ何の事だ、人間
が人間 当あたりまえ前の仕事をして居るに何も不思議はない、車屋は車

を挽き豆腐屋は豆腐を拵えて書生は書を読むと云うのは人間當前^{まえ}の仕事として居るのだ、その仕事をして居るのを政府が誉めると云うなら、先ず隣の豆腐屋から誉めて貰わなければならぬ、ソンな事は一切止しなさいと云て断たことがある。是れも隨分^{まん}暴論である。

マア斯^こう云うような調子で、私は酷く政府を嫌うようにあるけれども、その眞実の大本^{たいほん}を云えば、前に申した通りドウしても今度の明治政府は古風一天張りの攘夷政府と思^{おもいこ}込んで仕舞^{しまつ}たからである。攘夷は私の何より嫌いな事で、コンな始末では仮令^{たと}い政府は替ても逆も国は持てない、大切な日本國を滅茶苦茶にして仕舞うだろう本当に爾^そう思^{おもつ}た所が、後に至^{いたつ}てその政府が段々文明開

化の道に進んで今日に及んだと云うのは、實に難^{ありがた}有^めい目出^でたい次第であるが、その目出たからうと云うことが私には始めから測量^{りょうりょう}が出来ずに、唯^{ただ}その時に現れた実の有様に値^ねを付けて、コンな古臭い攘夷政府^{つくつ}を造て馬鹿な事を働いて居る諸藩の分らず屋は、國を亡ぼし兼ねぬ奴等^{やつら}じやと思って、身は政府に近づかずに、唯日^{ただ}本に居て何か勉めて見ようと安心^{つけ}決^{じょう}定^{じよ}したことである。

英國王子に潔身の祓私^{おのづ}が明治政府を攘夷政府と思たのは、決して空に信じたのではない、自^{おのづ}から憂^{うれ}うべき証拠がある。先ず爰^まに一奇談を申せば、王政維新となつて明治元年であつたか二年であつたか歳^{とし}は覚えませぬが、英吉利^{イギリス}の王子が日本に來遊、東京城に參^さ内^{んだい}することになり、表面は外国の貴賓を接待することであるか

ら固もとより故障はなけれども、何分にも穢けがれた外国人を皇城に入れると云うのはドウも不本意だと云うような説が政府部内に行われたものと見えて、王子入城の時に二重橋の上で潔身みそぎ祓はらいをして内に入れたことがある、と云うのは夷狄いてきの奴は不淨の者であるから祓はらいをして体たいを清めて入れると云う意味でしよう。所がソレが宣い物笑いの種サ。その時に亞米利加アメリカの代理公使にポルトメンと云う人が居まして、毎度ワシントン政府に自分の任にんしょ所の模様を報知して遣やる、けれども余り必要でない事は大統領がその報告書を見ない、此方こっちでは又ソレを見て貰もらうのが公使の名譽としてある。

ソコで公使が今度英の王子入城に付き潔身みそぎ祓うんぬん々の事を探り出して大に悦びおおいよろこ、是れは締めた、この大奇談を報告すれば大統領

が見て呉れるに違いないと云うので、その表書きに即ちエツヂンボルフ王子の清めと云う可笑しな不思議な文字を書いて、中の文句はドウかと云うに、この日本は眞実、自尊自大の一小鎖国にして、外国人をば畜生同様に取扱うの常なり、既にこの程英吉利の王子入城謁見のとき、城門外に於て潔身の祓を王子の身辺に施したり、抑も潔身の祓とは上古穢けがれたる者を清めるに灌水法を行いしが、中世、紙の發明以来紙を以て御幣なるものを作り、その御幣を以て人の身体を撫なで、水の代用として一切の不淨不潔を払うの故実あり、故に今度英の王子に施したるはその例に由ることにして、日本人の眼を以て見れば王子も亦唯不淨の畜生たるに過ぎず云々とて、筆を巧に事細かに書かいて遣やつたことがある。ソレは私が尺せき

振八から詳に聞きました。この尺振八と云う人はその時、亞米利加公使館の通弁をして居たので、尺が私の處に来てこの間是れくの話、大笑いではないかと云て、その事実もその書面の文句も私に親しく話して聞かせましたが、實に苦々しい事で、私は之を聞いて笑い所ではない泣きたく思いました。

米国前の國務卿又日本を評す又その頃、亞米利加の前國務卿シーワルトと云う人が、令嬢と同伴して日本に来遊したことがある。この人は米国有名の政治家で、彼の南北戦争のとき専ら事に当て、リンコーンの遭難と同時に兇徒に傷けられたこともある。元來英國人とは反りが合わずに、云わば日本聾員の人でありながら、今度来遊、その日本の實際を見て何分にも聾員が出来ぬ、こんな

根性の人民では氣の毒ながら自立はむずかしいと断言したことある。ソコデ私の見る所で、新政府人の挙動は都て儒教の糟粕を嘗め、古学の固陋主義より割出して空威張りするのみ。顧みて外国人の評論を聞けば右の通り。逆も是れは仕方がないと真実落胆したれども、左りとて自分は日本人なり、無為にしては居られず、政治は兎も角も之を成行に任せ、自分は自分にて聊か身に覚えたる洋学を後進生に教え、又根気のあらん限り著書翻訳の事を勉めて、万が一にも斯民を文明に導くの僥倖もあらんかと、便り少なくも独り身構えした事である。

子供の行末を思うその時の私の心事は實に淋しい有様で、人に話したことはないが今打明けて懺悔しましよう。維新前後、無茶ありさまざんげ

苦茶の形勢を見て、迦もこの有様では國の獨立は六かしい、他年一日外国人から如何なる侮辱ぶじょくこうむを被るかも知れぬ、左ればとて今日全国中の東西南北何れを見ても共に語るべき人はない、自分一人では勿論もちろん何事も出来ず亦その勇氣もない、實に情ない事であるが、いよ／＼外人が手を出して跋扈ばつこ乱暴と云うときには、自分は何とかしてその禍わざわいを避けるとするも、行く先きの永い子供こどもは可か愛あいそうだ、一命に掛けても外国人の奴隸にはしたくない、或あるいや蘇宗そしゆうの坊主にして政事人事の外に独立させては如何いかん、自力自食して他人の厄介にならず、その身は宗教の坊主と云えおのづば自から辱はずかしめを免まぬかるゝこともあらんかと、自分に宗教の信心しんじんはなくして、子を思うの心より坊主にしようなど、種々無量に考えたこ

とがあるが、三十年の今日より回想すれば恍として夢の如し、唯
今日は世運の文明開化を難^{ありがた}有く拝するばかりです。

授業料の濫觴^{さてつぼう}扱^{さば}鉄砲洲^{とう}の塾^{じゅく}を芝^{しば}の新錢座^{しんせんざ}に移したのは明治元年即ち慶応四年、明治改元の前でありしゆえ、塾の名を時の年号に取て慶應義塾と名づけ、一時散じた生徒も次第に帰来して塾は次第に盛^{さかん}になる。塾が盛になつて生徒が多くなれば塾舎の取締も必要になるからして、塾則のようなものを書いて、是れも写本は手間が取れると云うので版本にして、一冊ずつ生徒に渡し、ソレには色々箇条のある中に、生徒から毎月金を取ると云うことも慶應義塾が創めた新案である。従前、日本の私塾では支那風を真似たのか、生徒入学の時には束脩^{そくしゅう}を納めて、教授する人を先生と

仰ぎ奉り、入学の後も盆暮両度ぐらいに生徒銘々の分に応じて金子なり品物なり熨斗を附けて先生家に進上する習わしでありしが、私共の考えに、逆もこんな事では活潑に働く者はない、教授も矢張り人間の仕事だ、人間が人間の仕事をして金を取るに何の不都合がある、構うことはないから公然価を極めて取るが宜いと云うので、授業料と云う名を作て、生徒一人から毎月金二分ずつ取立て、その生徒には塾中の先進生が教えることにしました。その時塾に眠食する先進長者は、月に金四両あれば喰うことが出来たので、ソコで毎月生徒の持て来た授業料を搔き集めて、教師の頭に四両ずつ行渡れば死はせぬと大本を定めて、その上に尚お余りがあれば塾舎の入用にして居ました。今では授業

料なんぞは普通とうぜん当然のようにあるが、ソレを始めて行うた時は實に天下の耳目を驚かしました。生徒に向むかて金二分持もつて來い、水引みずひも要らなければ熨斗のしも要らない、一両持もつて來れば釣つりを遣やるぞと云うように触込ふれこんでも、ソレでもちやんと水引を掛けて持もつて来るものもある。スルとこんな物があると札さつを檢あらための邪魔になると云て、態わざと上包かえを還かえして遣るなどは隨すい分殺風景なことで、世間の人の驚いたのも無理はないが、今日それが日本國中の風俗習慣になつて、何ともなくなつたのは面白い。何事に由よらず新工風しんくふうを運ゆらして之これを実地に行うと云うのは、その事の大小を問わず余程の無鉄砲でなければ出来たことではない。左さる代りに夫それが首尾能よまいく参まて、何時の間にか世間一般の風ふうになれば、私の為めには

怡も心願成就で、こんな愉快なことはありません。

上野の戦争新銭座の塾は幸に兵火の為めに焼けもせず、教場もどうやらこうやら整理したが、世間は中々喧しい。明治元年の五月、上野に大戦争が始まつて、その前後は江戸市中の芝居も寄席も見世物も料理茶屋も皆休んで仕舞て、八百八町は真の闇、何が何やら分らない程の混乱なれども、私はその戦争の日も塾の課業を罷めない。上野ではどん／＼鉄砲を打つて居る、けれども上野と新銭座とは二里も離れて居て、鉄砲玉の飛で来る氣遣はないと云うので、丁度あの時は英書で経済の講釈をして居ました。大分騒々敷い容子だが烟でも見えるかと云うので、生徒等は面白がつて梯子に登て屋根の上から見物する。何でも昼から暮れ

過ぎまでの戦争でしたが、此方こちらに関係がなければ怖い事もない。

日本國中唯慶應義塾のみ此方こっちがこの通りに落おちつきはらつ付はらつ払はらつて居れば、

世の中は広いもので又妙なもので、兵馬騷乱の中にも西洋の事を知りたいと云う氣風は何處かに流行して、上野の騷動が済むと奥

州の戦争と為り、その最中にも生徒は続々入学して来て、塾はま

すく盛さかんになりました。顧みて世間を見れば、徳川の学校は勿論

潰れて仕舞い、その教師さえも行衛ゆくえが分らぬ位、況して維新政府

は学校どころの場合でない、日本國中苟も書を讀よんで居る処は唯慶

應義塾ばかりと云う有様ありさまで、その時に私が塾の者に語かたつたことが

ある。昔しく拿破翁ナポレオンの乱に和蘭オランダ國の運命は断絶して、本国

は申すに及ばず印度インド地方まで悉く取られて仕舞て、國旗を擧あげる

場所がなくなつた。所が、世界中纔に一箇処を遺した。ソレは即ち日本長崎の出島である。出島は年来和蘭人の居留地で、歐洲兵乱の影響も日本には及ばずして、出島の国旗は常に百尺竿頭うに翻々として和蘭王国は曾て滅亡したることなしと、今でも和蘭人が誇て居る。シテ見るとこの慶應義塾は日本の洋学の為めには和蘭の出島と同様、世の中に如何なる騒動があつても変乱があつても未だ曾て洋学の命脈を断やしたことはないぞよ、慶應義塾は一日も休業したことはない、この塾のあらん限り大日本は世界の文明国である、世間に頓着するなど申して、大勢の少年を励ましたことがあります。

塾の始末に困る、樂書無用夫^それはそれとして又一方から見れば、また

塾生の始末には誠に骨が折れました。戦争後意外に人の数は増したが、その人はどんな種類の者かと云うに、去年から出陣してさん／＼奥州地方で戦て漸く除隊になつて、国には帰らずに鉄砲を棄てゝその儘塾に来たと云うような少年生が中々多い。中にも土佐の若武者などは長い朱鞘しゆざやの大小を挟さして、鉄砲こそ持たないが今にも斬きて掛かかろうと云うような恐ろしい顔がんしょく色いろをして居る。爾そうかと思うとその若武者が紅い女の着物を着て居る。是れはどうしたのかと云うと、会津で分捕りした着物だと云て威張いばつて居る。實に血腥ちなまぐさい怖い人物で、一見先ず手の着けようがない。ソコデ私は前申す通り新銭座の塾を立てるとき同時に極めて簡単な塾則を捨てて、塾中金の貸借かしきりは一切相成らぬ、寝るときは寝て、

起るときは起き、喰うときには定めの時間に食堂に出る、夫れから樂書らくがき一切相成らぬ、壁や障子に樂書を禁ずるは勿論、自分所有の行灯あんどうにも机にも一切の品物に樂書は相成らぬと云うくらいの箇条で、既に規則を極めた以上はソレを実行しなくてはならぬ。そこで障子に樂書してあれば私は小刀を以て其処だけ切きりや破ぶつて、この部屋に居る者が元の通りに張れと申付ける。夫れから行灯に書いてあれば、誰の行灯でも構わぬ、その持主とがを咎める

と、時としてはその者が、「是れは自分でない、人の書かいたのですと云いつても私は許さぬ。人が書たと云うのは云訛いいわけにならぬ、自分の行灯に樂書されてソレを見て居ると云うのは馬鹿だ、馬鹿の罰に早々張替えるが宜よろしい、樂書した行灯は塾に置かぬ、破るから

アトを張て置きなさいと云うようにして、寸毫も仮さない。如何に血腥い若武者が何と云おうとも、そんな事を恐れて居られない。ミシく遣付けて遣る。名は忘れたが、不図見た所が桐の枕に如何な樂書がしてある。「コリヤ何だ。銘々の私有品でも樂書は一切相成らぬと云たではないか、ドウ云う訳けだ、一句の返答も出来なかろう。この枕は私は削りたいけれども削ることが出来ない、打毀ぶちこすから代りを取て来なさいと云て、その枕を取上げて足で踏潰ふみつぶして、サアどうでもしろ、攫つかみ掛かかて来るなら相手になろうと云わぬばかりの思惑を示した所で、決して掛らぬ。全体私は骨格からだは少し大きいが、本当は柔術も何も知らない、生れてから人を打たることもない男だけれども、その権幕はドウも撃ち

そうな攫つかみ挂りそうな氣色けしきで、口の法螺ほらでなくして身體からだの法螺で吹倒した。所が皆小さくなつて言うことを聞くようになつて来て、ソレでマア戦争帰りの血腥なまぐさい奴も自おのから静になつて塾の治まりが付き、その中には真成ほんとうな大人おとなしい学者風の少年も多く、至極じごく勉強してます／＼塾風を高尚にして、明治四年まで新錢座しんせんざに居ました。

始めて文部省維新の騒乱も程なく治まつて天下太平むいに向て來たが、新政府はマダマダ跡の片付かたづけが容易な事でなくして、明治五、六年までは教育に手を着けることが出来ないで、専ら洋学を教えるは矢張り慶應義塾ばかりであつた。何でも廢藩置県の後に至るまでは、慶應義塾ばかりが洋学を専らにして、ソレから文部省と云い

うものが出来て、政府も大層^{たいそう}教育に力を用うことになつて來た。義塾は相変らず元の通りに生徒を教えて居て、生徒の数も段々殖^ふえて、塾生の数は常に二百から三百ばかり、教うる所の事は一切^{いつさい}英学と定め、英書を読み英語を解するようなどばかり教導して、古来日本に行われる漢学には重きを置かぬと云う風^{ふう}にしたから、その時の生徒の中には漢書を読むことの出来ぬ者が隨^{すい}分あります。漢書を読まずに英語ばかりを勉強するから、英書は何でも読めるが日本の手紙が読めないと云うような少年が出来て來た。物事がアベコベになつて、世間では漢書を讀^{よん}でから英書を学ぶと云うのを、此方には英書を学んでから漢書を学ぶと云う者もあつた。波多野承五郎^{はたのしょうごろう}などは小供の時から英書ばかり勉強して居た。

たので、日本の手紙が読めなかつたが、生れ付き文才があり氣力のある少年だから、英学の跡で漢書を学べば造作もなく漢学が出来て、今では彼の通り何でも不自由なく立派な学者に成て居ます。教育の方針は数理と独立畢竟私がこの日本に洋学を盛にして、如何でもして西洋流の文明富強国にしたいと云う熱心で、その趣は慶應義塾を西洋文明の案内者にして、恰も東道の主人と為り、西洋流の一手販売、特別エゼントとでも云うような役を勤めて、外国人に頼まれもせぬ事を遺て居たから、古風な頑固な日本人に嫌われたのも無理はない。元來私の教育主義は自然の原則に重きを置いて、数と理とこの二つのものを本にして、人間万事有形の經營は都てソレから割出して行きたい。又一方の道德論に於ては、

人生を万物中の至尊至靈のものなりと認め、自尊自重じちよゆやしく苟も卑劣な事は出来ない、不品行な事は出来ない、不仁不義、不忠不孝ソンな浅ましい事は誰に頼まれても、何事に切迫しても出来ないと、一身を高尚たれ至極しごくにし所謂いわゆる独立の点に安心するようになしたものだと、先まづ土台を定めて、一心不乱に唯ただこの主義にのみ心を用いたと云うその訳けは、古來東洋西洋相あいだい對してその進歩の前後遅速を見れば、實に大造たいそうな相違である。双方共々に道徳の教おしえもあり、經濟の議論もあり、文に武におのゝ長所短所ありながら、扱國勢の大体より見れば富国強兵、最大多数、最大幸福の一いつだん段に至れば、東洋国は西洋国の下に居らねばならぬ。國勢の如何は果して国民の教育より来るものとすれば、双方の教育法に相違が

なくてはならぬ。ソコで東洋の儒教主義と西洋の文明主義と比較して見るに、東洋になきものは、有形に於て數理学と、無形に於て独立心と、この二点である。彼の政治家が国事を料理するも、実業家が商売工業を働くも、國民が報國の念に富み、家族が團欒の情に濃なるも、その大本たいほんを尋ねれば自おのから由來する所が分る。

近く論ずれば今の所謂立國の有らん限り、遠く思えば人類のあらん限り、人間万事、數理の外に逸することは叶はず、独立の外に依る所なしと云うべきこの大切な一義を、我日本國に於ては軽く見て居る。是れでは差向き國を開いて西洋諸強国と肩を並べることは出来そうにもしない。全く漢學教育の罪であると深く自分信じて、資本もない不完全な私塾に専門科を設けるなどは逆も

及ばぬ事ながら、出来る限りは数理を本にして教育の方針を定め、一方には独立論の主義を唱えて、朝夕一寸した話の端にもその必要を語り、或は演説に説き或は筆記に記しなどしてその方針に導き、又自分にも様々工風して躬行実践を勉め、ますく漢学が不信仰になりました。今日にても本塾の旧生徒が社会の実地に乘出して、その身分職業の如何に拘らず物の数理に迂闊ならず、氣品高尚にして能く独立の趣意を全うする者ありと聞けば、是れが老余の一大樂事です。

右の通り私は唯漢学ただが不信仰で、漢学に重きを置かぬ計りでない、一步を進めて所謂腐儒の腐説を一掃して遣ろうと若い時から心掛けました。ソコで尋常一樣の洋学者や通詞など云うような

者が漢学者の事を悪く云うのは普通の話で、余り毒にもならぬ。所が私は隨分漢書を読んで居る。読で居ながら知らない風をしては毒々敷い事を言うから憎まれずには居られない。他人に對しては眞実素人のような風をして居るけれども、漢学者の使う故事などは大抵知て居る、と云うのは前にも申した通り、少年の時から六かしい経史をやかましい先生に授けられて本当に勉強しました。

左国史漢は勿論もちろん、詩経、書経のような經義けいぎでも、又は老子莊子のようないかにも妙な面白いものでも、先生の講義を聞き又自分に研究しました。是れは豊前中津の大儒白石先生の賜たまものである。どの経史の義を知て、知らぬ風をして折々漢学の急処のようないか所を押えて、話にも書かいたものにも無遠慮に攻撃するから、是れぞ所謂いわゆる獅子身し

中の虫で、漢学のためには私は實に悪い外道である。斯くまでに私が漢学を敵にしたのは、今の開国の時節に、陳く腐れた漢説が後進少年生の腦中に蟠まつては、逆も西洋の文明は國に入る事が出来ないと飽くまでも信じて疑わず、如何にもして彼等を救出して我が信ずる所に導かんと、有らん限りの力を尽し、私の眞面目を申せば、日本国中の漢学者は皆來い、乃公が一人で相手になろうと云うような決心であつた。ソコで政府を始め世間一般の有様を見れば、文明の教育稍々普ねしと雖も、中年以上の重なる人は逆も洋学の佳境に這入ることは出来ず、何か事を謀り事を断する時には余儀なく漢書を便にして、万事ソレから割出すと云う風潮の中に居て、その大切な靈妙不思議な漢学の大主義を頭

から見下して敵にして居るから、私の身の為めには隨分危ない事である。

著書翻訳一切独立又維新前後は私が著書翻訳を始めた時代で、その著訳書の由来は福澤全集の緒言に記してあるから之を略しますが、元來私の著訳は眞実私一人の發意で、他人の差圖も受けねば他人に相談もせず、自分の思う通りに執筆して、時の漢学者は無論、朋友たる洋学者へ草稿を見せたこともなければ、況して序文題字など頼んだこともない。是れも余り殺風景で、実は當時の故老先生とか云う人に序文でも書かせた方が宜かつたか知れないが、私は夫れが嫌いだ。ソンな事かた／＼で、私の著訳書は事実の如何に拘わらず古風な人の気に入る筈はない。ソレでも

その書が殊更に大に流行したのは、文明開国の勢に乗じたこと
であります。

義塾三田に移る慶應義塾が芝の新銭座しばしんせんざを去て三田の只今の処に
移たのは明治四年、是れも塾の一大改革ですから一通り語りまし
ょう。その前年五月私が酷い熱病ひどかかに罹り、病後神経が過敏になつ
た所せ為か、新銭座の地所が何か臭いように鼻に感じる。又事実湿
地うりやもあるから何処かに引移りたいと思い、飯倉いいくらの方に相当の
売家さがしを搜さが出して略相談ほぼきを極めようとするときに、塾の人の申す
に、福澤が塾すを棄てゝ他に移るなら塾も一緒に移ろうと云う説が
起おこて、その時には東京中に大名屋敷が幾らもあるので、塾の人は
毎日のように方々の明屋敷あきやしきを搜して廻まわり、彼処そこでもない此こ

処でもないと勝手次第に宜さうな地所を見立てゝ、いよ／＼芝の三田にある島原藩の中屋敷が高燥の地で海滨の眺望も良し、塾には適當だと衆論一決はしたれども、此方の説が決した計りで、その屋敷は他人の屋敷であるから、之を手に入れるには東京府に頼み、政府から島原藩に上地を命じて、改めて福澤に貸渡すと云う趣向にしなければならぬ。ソレには政府の筋に内談して出来るように拵えねばならぬと云うので、時の東京府知事に頼み込むは勿論、私の平生知て居る佐野常民その他の人にも事の次第を語りて助力を求め、塾の先進生※掛りにて運動する中に、或日私は岩倉公の家に参り、初めて推参なれども御目に掛りたいと申込んで公に面会、色々塾の事情を話して、詰り島原

藩の屋敷を拝借したいと云う事を内願して、是れも快く引受けて呉れる。何處も此處も至極都合の好い折柄、幸いにも東京府から私に頼む事が出来て来たと云うは、當時東京の取締には邏卒らそつとか何とか云う名を付けて、諸藩の兵士が鉄砲を担いで市中を廻まわして居るその有様ありさまの殺風景とも何とも、丸で戦地のように見える。政府も之これを宜くないことゝ思い、西洋風にポリスの仕組に改革しようと心付きはしたが、扱さげそのポリスとは全体ドンなものであるか、概略でも宜しい、取調べて呉れぬかと、役人が私方に来て懇々内談するその様子は、この取調とりしらべさえ出来れば何か礼をすると云うように見えるから、此方は得たり賢し、お易い御用で御座ござる、早速さつそく取調べて上げましようが、私の方からも願の筋ねがいすじが

ある、兼て長官へ内々御話いたしたこともある通り、三田の島らの屋敷地を拝借いたしたい、是れ丈けは厚く御含を願うと云うは、巡査法の取調と屋敷地の拝借と交易にしようと云うよな塩梅に持掛け、役人も否と云わずに黙諾して帰る。ソレから私は色々な原書を集めて警察法に関する部分を翻訳し、綴り合せて一冊に認め早々清書して差出した所が、東京府ではこの翻訳を種にして尚お市中の実際を斟酌し様々に工風して、断然彼の兵士の巡回廻を廃し、改めて巡邏と云うものを組織し、後に之を巡査と改名して東京市中に平和穩当の取締法が出来ました。ソコで東京府も私に対してものづから義理が出来たような訳けで、屋敷地の一条もスラ～行われて、島原の屋敷を上地させて福澤

に拝借と公然命令書が下り、地所一万何千坪は拝借、建物六百何十坪は一坪一円の割合にて所謂大名の御殿二棟、長屋幾棟の代価六百何十円を納めて、いよいよ塾を移したのが明治四年の春でした。

敬礼を止める引越して見れば誠に広々とした屋敷で申分なし。
(ひきこ)

御殿を教場にし、長局(ながつぼね)を書生部屋にして、尚お足らぬ処は諸方諸屋敷の古長屋を安く買取て寄宿舎を作りなどして、俄に大きな学塾に為ると同時に入学生の数も次第に多く、この移転の一挙を以て慶應義塾の面目を新にしました。序ながら一奇談を語りましよう。新錢座入塾から三田に引越し、屋敷地の広さは三十倍にもなり、建物の広大な事も新旧較べものにならぬ。新塾の教

場すなわち御殿の廊下などは九尺巾もある。私は毎日塾中を見廻り、日曜は殊に掃除日と定めて書生部屋の隅まで一々検め、大便所の内まで私が自分で戸を明けて細に見ると云うようにして居たから、一日に幾度び廊下を通て幾人の書生に逢うか知れない。所がその行進ゆきあい毎に、新入生などは勝手を知らずに、私の顔を見ると丁寧に辞儀をする。先方から丁寧に遣れば、此方も之に応じて辞儀をしなければならぬ。忙しい中にウルサクて堪まらぬ。ソレから先進の教師連に尋ねて、「廊下で書生のお辞儀に困りはせぬか、双方の手間潰つぶしだがと云うと、何れも同様、塾が広くなつて家の内の御辞儀には閉口と云うから、『よし来た、乃公おれが広告を掲示して遣るといふと云て、

塾中の生徒は長者に對するのみならず 相互の間にも粗暴無礼は固より禁ずる所なれども、講堂の廊下その他塾舎の内外往来 頻繁の場所にては、仮令い教師先進者に行逢うとも丁寧に辭儀するは無用の沙汰なり、互に相見て互に目礼を以て足るべし。益もなき虚飾に時を費すは学生の本色に非ず。

この段心得の為めに掲示す。

と張紙して、生徒のお辭儀を止めた事がある。長者に對して辭儀をするなど云えば、横風になれ、礼儀を忘れよと云うように聞えて、奇なように思われるが、その時の事情は決して爾うでない。百千年来压制の下に養われて官民共に一般の習慣を成したるこの国民の氣風を活潑に導かんとするには、お辭儀の廃止も自

から一時の方便で、その功能は慥に見えました。今でも塾にはコ
ンな風が遺て、生徒取扱いの法は塾の規則に従い、不法の者があ
れば会釈なくミシく遣付けて寸毫も仮さず、生徒に不平があ
れば皆出て行け、此方は何ともないと、チヤンと説を極めて思う
様に制御して居れども、教師その他に対して入らざる事に敬礼な
んかんと云うような田舎らしい事は塾の習慣に於て許さない。左
ればとて本塾の生徒に限て粗暴な者が多いでもなし、一方から見
て幾分かその気品の高尚にして男らしいのは、虚礼虚飾を脱した
その功德であろうと思われる。

地所払下三田の屋敷は福澤諭吉の拝借地になつて、地租もなけれ
ば借地料もなし恰も私有地のようではあるが、何分にも拝借と云い

えれば何時立退いつたちのきを命じられるかも知れず、東京市中を見れば私同様官地を拝借して居る者は甚はなはだ多い、孰れも不安心に違ちがないと推察が出来る。如何かして之これを御おはらいさげ払下いさげにして貰いたいと様々思案の折柄、當時政府に左院と称して議政局のようなものが立て居て、その左院の議員中に懇意こんいの人があるからその人に面会、何か話の序ついでには拝借地の有名無実なるを説き、等しく官地を使用せしむるならば之を私有地にして銘めいめい々に地所保存の謀はかりごとなを為さしむるに若かずと、頻りに利害を論じてその人の建言を促したるは毎度の事で、その他政府の筋の人にさえ逢えば同様の事を語るの常なりしが、明治四年の頃、それからあらぬか、政府は市中の拝借地をその借地人又は縁故ある者に払下げるとの風ふうぶん聞こが聞える。是れは妙また

なりと大に喜び、その時東京府の課長に福田と云う人が専ら地所の事を取扱うと云う事を聞ききつた伝え、早速福田の私宅を尋ねて委細の事実を確かめ、いよいよ發令の時には知らして呉れることに約束して、帰宅して日々便りを待て居ると、数日の後に至り、今日發令したと報知が来たから、暫時も猶予は出来ず、翌朝東京府に代理の者を差出し御払下おはらいさげを願うて、代金を上納せんと金を出した処が、府庁にも昨日發令した計りで出願者は一人もなし、マダ帳簿も出来ず、上納金請取の書式も出来ずと云うから、その正式の請取は後日の事として今日は唯金子丈けの御収納を願うと云て、強いて金を渡して仮り御払下かの姿を成し、その後、地所代価取領の本証書も下りて、いよいよ私の私有地と為り、地券ちけんめん面本邸のくだ

外に附属の町地面を合して一万三千何百坪、本邸の方は千坪に付
 き価十五円、町地の方は割合に高く、両様共算して五百何十円と
 は、殆んど無代価と申して宜しい。その代価の事は兎も角もとし
 て、斯く私が事を性急にしたのは、この屋敷に久しく住居すれば
 するほどいよ／＼ます／＼宜い屋敷になつて来て、實に東京第一、
 他に匹敵するものはないと自から感心して、塾員と共に満足する
 と同時に、之を私有地にすると云えれば何か故障の起りそうな事だ
 と、俗に云う虫が知らせるような塩梅で、何だか気になるから
 無暗に急いで埒を明けた所が、果して然り、東京の諸屋敷地を払
 下げると云う風聞が段々世間に知れ渡たその時に、島原藩士何某
 が私方に遣て来て、当屋敷は由緒ある拝領屋敷なるゆえ、主人島

原藩主より御払下を願う、此方へ御譲渡し下されいと捩込んで
 来たから、私は一切知らず、この地所のむかしが誰のものであ
 りしや夫れさえ心得て居ない、兎に角に私は東京府から御払の地
 所を買請けたまでの事なれば、府の命に服従するのみ、何か思
 召もあらば府庁へ御談じ然るべしと刎付ける。スルと先方も中
 ヴ渢とい。再三再四遣て来て、とうく仕舞には屋敷を半折して
 半分ずつ持とうと云うから、是れも不承知。地所の事は島原藩
 と福澤と直談すべき性質のものでないから御返答は致さぬ、一
 切万事君夫れ之を東京府に聞けと云う調子に構えて居て、六か
 しい談判も立消になつたのは難有い。今日になつて見れば、東
 京中を尋ね廻ても慶應義塾の地所と甲乙を争う屋敷は一箇所もな

い。正味一万四千坪、土地は高燥にして平面、海に面して前に遮るものなし、空氣清く眺望佳なり、義塾唯一の資産にして、今これを売ろうとしたらば、むかし御払下の原価五百何十円は、百倍でない千倍になりましよう。義塾の慾張り、時節を待て千倍にも二千倍にもして遣ろうと、若い塾員達はリキンで居ます。

教員金の多少を争う右の通り三田の新塾は万事都合能く行われて、塾の資本金こそ皆無なれ、生徒から毎月の授業料を取集めて之を教師に分配して、如何やら斯うやら立行くその中にも、教師は皆本塾の先進生であるから、この塾に居て余計な金を取ろうと云う考はない。第一私が一銭でも塾の金を取らぬのみか、普請の時などには毎度此方から金を出して遣る。教師達もその通りで、外に

出れば隨分給料の取れるのを取らずに塾の事を勤めるから、是れも私金を出すと同じ事である。凡そコンナ風で無資金の塾も維持が出来たが、その時の真面目を申せば、月末などに金を分配するとき、動もすれば教師の間に議論が起るその議論は即ち金の多少を争う議論で、僕はコンなに多く取る訳けはない、君の方が少ないと云うと、「イヤ爾うでない、僕は是れで沢山だ、イヤ多い、少ないど、喧嘩のように云てるから、私は側から見て、「ソリや又始まつた、大概にして置きなさい、ドウせ足りない金だから宜い加減にして分けて仕舞え、争う程の事でもないと毎度笑て居ました。この通りで慶應義塾の成立は、教師の人々がこの塾を自分の中のものと思うて勉強したからの事です。決して私一人の力に叶

う事ではない。人間万事余り世話をせずに放任主義の方が宜いかと思われます。その後時勢も次第に進歩するに従い、塾の維持金を集め、又大学部の為めにも募り、近來は又重ねて募集金を始めましたが、是れも私は余り深く関係せず、一切の事を塾出身の若い人に任せて居ます。

暗殺の心配

是れまで御話し申した通り、私の言行は有心故造^{ゆうしんごぞう}態と敵を求める訳けでは固^{もと}よりないが、鎖国風の日本に居て一際目立つ様^{よう}に開國文明論を主張すれば、自然に敵の出来るのも仕方がない。

その敵も口で彼かれ是これ喧かましく云いうて罵ばり詈詈する位は何でもないが、唯ただ怖たまくて堪たまらぬのは襲擊暗殺の一こ事です。是これから少しその事を述べましょうが、凡およそ世の中に我身に取とつて好よかない、不愉快な、氣味の悪い、恐ほろしいものは、暗殺が第一番である。この味は狙ねらわねられた者より外に分るまいと思う。實に何とも口にも言われず筆にも書かれません。是これが病氣わざらを煩いたみうとか、痛どころ所ところがあるとか何とか云いえば、家内に相談くわだんし朋友はかに謀かえつると云いう様ような事こともあるが、暗殺ばかりは家内の者へ云いえば當人かたよりは却かえつて家の者が心配こころしよう、心配こころして呉くわれてソレが何にも役やくに立たつぬ、ダカラ私はそんな事を家内の者に云いつた事こともなければ親友ちゆうゆうに告おげた事ことももとない。固たとよりこの身に罪つみはない、仮令たゞい粗そつわわれても恥はずかしい事ことではないと

云うことは 分切わかりきつて居ても、人に語かたつて無益の事であるから、心配するのは自分一人である。私が暗殺を心配したのは毎度の事で、或あるいは風声鶴唳ふうせいかくれいにも驚きました。丁度今の狂犬を見たようなもので、おとなしい犬でも氣味が悪いと云うような訳わけけで、どうも人を見ると氣味がわるい。

床の下から逃げる積りソレに就ついては色々面白い話がある。今この三田みたの屋敷の門を這入はいって右の方にある塾の家は、明治初年私の住居で、その普請ふしんをするとき、私は大工に命じて家の床ゆかを少し高くして、押入の処に揚板あげいたを造つくつて置おいたと云うのは、若し例の奴等に踏込まれた時に、旨く逃げられゝば宜いが、逃げられなければ揚板から床の下に這入うまて其処そこから逃出にげだそうと云う私の秘計で、今まで

も彼処の家は爾うなつて居ましよう。

暗殺の歴史その大工に命ずる時に何故と云うことは云われない、又家の者にも根ツから面白い話でないから何とも云うことが出来ぬ、詰り私独りの苦労で、實に馬鹿氣た事ですが、夫れは差置き、私の見る処で、我開国以来世に行われた暗殺の歴史を申さんに、最初は唯新開國の人民が外国人を嫌うと云うまでの事で、深い意味はない。外国人は穢れた者だ、日本の地には足踏みもさせられぬと云うことが国民全体の氣風で、その中に武家は双刀を腰にして氣力もあるから、血氣の若武者は折々外国人を暗打にしたこともある。併しその若武者も日本人を憎む訛けはないから、私などが仮令い時の洋学書生であつても災に罹る筈はない。大阪

修業中は勿論もちろん、江戸に来ても当分は誠に安心、何も心配したことない。例えば開国の初に、横浜で露西亞人の斬られたことは、唯ただその事変に驚くばかりで自分の身には何とも思わざりしに、その後間もなく外人嫌いの精神は俄にわかに進歩して殺ひどごろし人の法が綿密になり、筋道すじみちが分り、区域が広くなり、之に加うるに政治上の意味をも調合して、万延元年、井伊大老の事変後は世上何となく殺氣を催して、手塚てづかり律藏つづぞう、東条とうじょう礼藏うれいぞうは洋学者なるが故にとて長州人に襲撃せられ、塙はなわ一郎じろうは国学者として不臣なりとて何者かに首を斬きられ、江戸市中の唐物屋は外国品を売買して國の損害するとして苦しめらるゝと云うような風潮になつて來ました。是れが即ち尊王攘夷の始りで、幕府が王室に対する法は多年

来何も相替ることはなけれども、京都の御趣意は攘夷一天張りであるのに、然るに幕府の攘夷論は兎角因循姑息に流れて埒が明かぬ、即ち京都の御趣意に背くものである、尊王の大義を弁えぬものである、外国人に媚びるものである、と斯う云えば、その次には洋学者流を売国奴と云うのも無理はない。サア洋学者も怖くなつて來た。殊に私などは同僚親友の手塚東条両人まで侵されたと云うのであるから、怖がらずには居られない。

廻国巡礼を羨む又真実怖い事もある。凡そ維新前、文久二、三年から維新後、明治六、七年の頃まで、十二、三年の間が最も物騒な世の中で、この間私は東京に居て夜分は決して外出せず、余儀なく旅行するときは姓名を偽り、荷物にも福澤と記さず、コソノ

＼して往来するその有様は、欠落者が人目を忍び、泥坊が逃げて廻るまるで、誠に面白くない。そのとき途中で廻国巡礼に出逢い、その笠を見れば何の国何都何村の何某と明白に書いてある。「拵々羨ましい事だ、乃公もアゝ云う身分になつて見たいと、自分の身を思い又世の有様を考えて、妙な心持になつて、ソレからその巡礼に銭など与えて、貴様達は夫婦か、故郷に子はないか、親はあるか、など色々話し、問答して別れたことは今に覚えて居ます。

長州室津の心配是れも私が姓名を隠して豊前中津から江戸に帰て来た時の事です。元治元年、私が中津に行つて、小幡篤次郎兄弟を始め同藩子弟七、八名に洋学修業を勧めて共に出府するときに、

中津から先ず船に乗て出帆すると、二、三日天気が悪くて、風次第で何処の港に入るか知れない、スルと南無三宝、攘夷最中の長州室津と云う港に船が着た。そのとき私は同行少年の名を借りて三輪光五郎（今日は府下目黒のビール会社に居る）と名乗て居たが、一寸上陸して髪結床に行た所が、床の親仁が喋々述べて居る、「幕府を打潰す——毛唐人を追巻くると云い、女子供の唄の文句は忘れたが、「やがて長門は江戸になるとか何とか云うことを面白そうに唄うて居る、そのあたりを見れば兵隊が色々な服装をして鉄砲を担いで威張て居るから、若しも福澤といふ正体が現われては、たつた一発と、安い気はしないが、爰が大事と思い態と平氣な顔をして、唯順風を祈て船の出られるのを

待て居るその間の怖さと云うものは、何の事はない、贊者いざりが病やまいぬに囮まれたようなものでした。

箱根の心配ソレから船は大阪に着て上陸、東海道をして箱根に掛
 けり、峠の宿の破不屋はふやと云う宿屋に泊ると、奥の座敷に戸田何某
 と云う人が江戸の方から来て先さきに泊とまつて居る。この人は當時、山
 陵奉行とか云う京都の御用を勤めて居て、供の者も大勢附ついて居る
 様子、問わずと知れた攘夷の一類と推察して氣味が悪い、終夜ろ
 くに寝もせず、夜の明ける前に早々宿屋を駆かけだ出してコソくく逃げ
 たことがある。

中村栗園先生の門を素通りその時の道中であつたか、江こう州しゆう水み
 口なくち、中なか村むら栗りつ園えん先生の門前を素通りしましたが、是れは甚こはなはだ

気に済まぬ。栗園の事は前にも申す通り私の家と浅からぬ縁のある人で、前年、私が始めて江戸に出るとき水口を通行して其処へ尋ねた所が、先生は非常に喜んで、過ぎし昔の事共を私に話して聞かせ、「お前の御親父ごしんぱ」の大坂で御不幸の時は、私は直ぐ大坂に行つて、ソレからお前達が船に乘のつて中津に帰るその時には、私がお前を抱いて安治川口あじかわぐちの船まで行いつて別れた。そのときお前は年弱としよわの三つで、何も知らなかろうなどゝ云う話で、私も實にほんとうの親に逢あつたような心持がして、今晩は是非泊れと云いつて、中村の家に一泊しました。斯くまでの間柄であるから、今度も是非とも訪問しなければならぬ。所がその前に人の噂うそを聞けば、水口の中村先生は近來もつぱ専ら孫子の講釈をして、玄関には具足ぐそくなどが飾かざつてある

と云う、問うに及ばず立派な攘夷家である、人情としては是非とも立寄たちよつて訪問せねばならぬが、ドウも寄ることが出来ぬ。栗園先生は頼んでも私を害する人ではないが、血氣の門弟子もんていしが沢山居るから、立寄れば逆とても助からぬと思おもつて、不本意ながらその門前を素通りしました。その後先生には面会の機会がなくて、遂ついに故人になられました。今日に至るまでも甚はなはだ心残りで不愉快に思います、

増田宗太郎に窺くわわる以上は維新前まへの事で、直ただちに私の身に害を及ぼしたでもなし、唯無暗ただむやみに私が怖おもつく思いわゆるたばかり、所謂世間の風声ふうせいかぐれい鶴唳つづきに臆病心おくびんじんを起したのかも知れないが、維新後まへになつても忌いやな風聞ふうもんは絶えず行われて、何分にも不安心のみか、歳月を経へ

て後に聞けば、實際恐るべき事も毎度のことでした。頃は明治三年、私が豊前中津へ老母の迎いに参^{まい}て、母と姪と兩人を守護して東京に帰^{かえ}たことがあります。その時は中津滞留も左まで怖いとも思わず、先ず安心して居ましたが、数年後に至^{いた}て實際の話を聞けば、恐ろしいとも何とも、實に命拾いをしたような事です。私の再^{またい}従弟に増田宗太郎と云う男があります。この男は後に九州西南の役に賊軍に投じて城山で死に就^つた一種の人物で、世間にも名を知られて居ますが、私が中津に行^いったときはマダ年も若く、私より十三、四歳も下ですから、私は之を子供のように思^{これ}い、且つ住居の家も近^{きん}処で朝夕往来して交際は前年の通り、宗さん^{そう}と云て親しくして居ましたが、元^{がん}來この宗太郎の母は神官の家

の妹で、その神官の倅即ち宗太郎の従兄に水戸学風の学者があつて、宗太郎はその従兄を先生にして勉強したから中々エライ、その上に増田の家は年来堅固なる家風で、封建の武家としては一点も愧る所はない。宗太郎の実父は私の母の従兄ですから、私もその風采を知て居ますが、ソレハソレハ立派な侍と申して宜しいこの父母に養育せられた宗太郎が水戸学国学を勉強したとあれば所謂尊攘家に違ひはあるまい。ソコで私は今度中津に帰ても宗太郎をば乳臭の小児と思い、相替らず宗さんくで待遇して居た処が、何ぞ料らん、この宗さんが胸に一物、恐ろしい事をたくらんで居て、そのニコニコ優しい顔をして私方に出入したのは全く探偵の為めであつたと云う。さて探偵も届いたか、いよ／＼今

夜は福澤を片付けると云うので、忍びくに動静を窺いに来た、田舎の事で外廻りの囮いもなければ戸締りもない、所が丁度その夜は私の処に客があつて、その客は服部五郎兵衛と云う私の先進先生、至極磊落な人で、主客相対して酒を飲みながら談論は尽きぬ。その間宗太郎は外に立て居たが、十二時になつても寝そうにもしない、一時になつても寝そうにもしない、何時までも二人差向いで飲んで話をして居るので、余儀なくお罷めになつたと云う。是れは私が大酒夜更しの功名ではない僥倖である。

一夜の危険ソレから家の始末も大抵出来て、いよいよ中津の廻米船に乗つて神戸まで行き、神戸から東京までの間は外国の郵船に

乗る積りで、サア乗船と云う所が、中津の海は浅くて都合が悪い。
 中津の西一里ばかりの処に鵜ノ島うしまと云う港があつて、其処に船が
 掛かかつて居ると云うから、私はそのとき大病後ではあるし、老人、
 子供の連れであるから、前日から鵜ノ島うしまに行いつて一泊して翌朝ゆる
 りと乗船する趣向にして、その晩鵜ノ島の船宿のような家に泊り
 ましたが、知らぬが仏とは申しながら、後に聞けばこの夜が私の
 万死一生、恐ろしい時であつたと云うは、その船宿の若い主人が
 例の有志者の仲間であるとは恐ろしい、私の一行は老母と姪とそ
 の外に近親ほか今泉いまいずみの後室と小兒（小兒は秀太郎六歳）役に立ち
 そうな男は私一人、是れも病後のヒヨロくと云うその人数を留
 めて置いて、宿の奴が中津の同志者に使つかいを走らして、「今夜は上

都合云々と内通したから堪らない。ソコデ以て中津の有志者即ち暗殺者は、金谷と云う処に集会を催して、今夜いよ／＼鵜ノ島に押掛け福澤を殺すことに議決した、その理由は、福澤が近来奥平の若殿様を誘引して亞米利加に遣ろうなんと云う大反された計画をして居るのは怪しからぬ、不臣な奴だと云う罪状であるから、満座同音、国賊の誅罰に異論はない。

福澤の運命はいよいよ切迫した、老人子供の寝て居る処に血気の壮士が暴れ込んでは逆も助かる道はない、所が爰に不思議とや云わん、天の恵みと云わん、壮士連の中に争論を生じたと云うのは、如何にも今夜は好機会で、行きさえすれば必ず上首尾と極てるから、功名手柄を争うは武士の習いで、仲間中の両三人が、

「乃公おれが魁さきすると云えば、又一方の者は、「爾そう甘くは行かん、乃公の腕前で遣やつて見せると言出して、負けず劣らず、とうく仲間喧嘩わいわが始まつて、深更に及ぶまで如何どうしても決しない、余り喧嘩わいわが騒々しく、大きな声が近處きんじよまで聞えると、その隣家ながに中西与太夫しょだいふと云う人の住居すじょがある、この人は私などより余程年を取とて居る、その人が何の事か知らんと行いて見た所が、斯こう云いう訳わけだと云う。中西は流石さすがに老成の士族だけあつて、「人を殺すと云うのは宜よろしくない事だ、思止まるが宜いいと云うと、壯士等は中々聞入れず、「イヤ思おもい止まらぬと威張いはる、ヤレ止まれ、イヤ止まらぬと、今度は老人を相手に大議論を始めて、彼かれ此これと悶着んぢやくして居る間に夜よが明けて仕舞しまい、私は何にも知らずにその

朝船に^{のつ}乗^{のつ}て海上無事神戸に着きました。

老母の大坂見物も叶わず扱神戸に着た處で、母は天保七年、大阪を^{さつ}去^{さつ}てから三十何年になる、誠に久し振りの事であるから、今度こそ大阪、京都方々を思うさま見物させて悦ばせようと、中津出帆の時から楽しんで居た処が、神戸に上陸して旅宿に着て見ると、東京の小幡篤次郎から手紙が来てあるその手紙に、昨今京阪の間甚^{はなは}だ穏かならず、少々^{ききこ}聞込みし事もあれば、神戸に着船したらば成るたけ人に知られぬよう注意して、早々郵船にて帰京せよとある。ヤレ^く又^{また}しても面白くない報^{しらせ}だ、左ればとてこんな忌^{いや}な事を老母の耳に入れるでもなしと思い、何かつまらぬ口実を作^{つくつ}て、折角楽しみにした上方見物も罷めにして、空し

く東京に帰かえつて来ました。

警戒却て無益なり前の鵜ノ島うしまの話に引替えて、誠に馬鹿ばか々々しい事もあります。明治五年かと思う。私が中津なかつの学校を視察に行き、その時旧藩主に勧めて一家拳こぶしつて東京に引越し、私が供をして参ると云うことになつた。処ところで藩主が藩地を去るは固より士族もとの悦ぶことでない。私も能くその情実は知て居るけれども、昔の大名風で藩地に居れば奥おく平家の維持が出来ない、思切おもいきつて断行せよと云うので、疾雷耳しつらいを掩おおうに暇あらず、僅か六、七日間の支度なかつで、御隠居様も御姫様も中津なかつの浜から船に乘のつて馬関ばかんに行き、馬関で蒸氣船に乘替えて神戸と、都ての用意調すべい、いよ／＼中津の船に乗て夕刻沖の方に出掛けた処が生憎あいにく風がない、夜中水尾木みずおぎの

処にボチャ／＼して少しも前に進まない。ソコで私は考えた。

「コリヤ大変だ、爰にグヅ／＼して居ると例の若武者が屹と遣て来るに違いない、来ればその目指す敵は自分一人だ、幸い夜の明けぬ中に船を上あがつて陸行するに若くはなしと決断して、極暑の時であつたが、払曉ふつきょう マダ暗い中に中津の城下に引返して、その足で小倉まで駆けて行きました。所が大きに御苦労、後に聞けばこの時には藩士も至極穩かで何の議論もなかつたと云う。此方が邪推めぐらしを運らして用心する時は何でもなく、ポカンとして居る時は一番危あやうい、實に困こまつたものです。

疑心暗鬼互に走る時は違うが維新前、文久三、四年の頃、江戸深川六軒掘に藤沢志摩守ふじさわしまのかみ と云う旗本はたもとがある。是れは時の陸軍の

将官を勤め、^{べく}の西洋家で、或日その人の家に集会を催し、客は
 小出播磨守^{こいではりまのかみ}、成島柳北^{なるしまりゆうほく}を始め、その外皆むかしの大家と唱
 うる蘭学医者、私とも合して七、八名でした。その時の一体の事
 情を申せば、前に申した通り、私は十二、三年間、夜分外出しな
 いと云う時分で、最も^{みず}自から警めて、内々^{いまし}刀にも心を用い、能よ
 く研がせて斬れるようにして居ます。^{あえ}之^{これ}を頼みにするではな
 けれども、集会の話が面白く、ツイ^く怖い事を忘れて思わず夜
 を更かして、十二時にもなつた所で、座中みな気が付いて、サア帰
 りが怖い。^{きず}疵持つ身と云う訳けではないが、いずれも洋学臭い連
 中だから皆^みな怖がつて、「大分晩^{おそ}うなつたが如何だろうと云うと、^{どう}
 主人が氣を利かして屋根舟を用意し、七、八人の客を乗せて、六

軒堀の川岸から市中の川、即ち堀割すなわほりわりを通り、行くく成島は柳橋やなぎばしから上り、それから近いものくと段々に上げて、仕舞に戸塚と云う老医と私と二人になり、新橋の川岸に着て、戸塚は麻布に帰り私は新錢座しんせんざに帰らねばならぬ。新橋から新錢座まで凡そ十丁もある。時刻はハヤ一時過ぎ、然かもその夜は寒い晩で、冬の月が誠に能く照して何となく物凄い。新橋の川岸へ上つて大通りを通り、自から新錢座の方へ行くのだから、此方側こっちがわすなわ即ち大通り東側の方をとおつ通て四辺を見れば人は唯ただの一人も居ない。その頃は浪人者が徘徊して、其処にも此処にも毎夜のように辻斬つじぎりとて容易に人を斬ることがあつて、物騒とも何とも云うに云われぬ、夫れから袴はかまの股立ももひきを取て進退に都合の好いように趣向して、颶さ

々と歩いて行くと丁度源助町の央あたりと思う、向から一
 人やつて来るその男は大層大きく見えた。実は如何だか知らぬ
 が、大男に見えた。「ソリや来た、どうもこれは逃げた所がおつ
 付ない。今ならば巡査が居るとか人の家に駆込むとか云うことも
 あるが、如何してく騒々しい時だから不意に人の家に入られる
 ものでない、却て戸を閉て仕舞て、出て加勢しようと云うも
 のゝないのは分り切てる。「コリヤ困た、今から引返すと却て引
 身になつて追駆けられて後から遣られる、寧そ大胆に此方から進
 むに若かず、進むからには臆病な風を見せると付上がるから、衝
 当るよう遣ろうと決心して、今まで私は往来の左の方を通て
 居たのを、斯う斜に道の真中へ出掛けると、彼方の奴も斜に出て

來た。コリヤ大變おもつだと思おもたが、最もう寸步も後に引かれぬ。いよ／＼となれば兼かねて少し居合の心得もあるから、如何どうして呉くれようか、これは一つ下から刎はねて遣やりましょと云いう考かんがえで、一生懸命、イザと云いえば真ほんとう實じに遣やる所存つもりで行くと、先方もノソ／＼遣やつて来る。私は實に人きるを斬きと云いうことは大嫌いやい、見るのも嫌いやいだ、けれども逃のがれれば斬きられる、仕方いよいよがない、愈むうよ先まへ方が抜ぬき掛かかれば背ぬきに腹はらは換かわえられぬ、此こつち方も抜ぬいて先まへを取くらねばならん、その頃ごろは裁判さいばんもなければ警察けいさつもない、人ひとを斬きたからと云いて咎とがめられもせぬ、只ただその場ばを逃のがげさえすれば宜よろしいと覺悟ひとあしひとして、段々あつち行くと一步ひとつ々々あし近くなつて、到頭とうとうすれ違ちがついになつた、所すれが先まへ方のの奴ちがつも抜ぬきかん、此こつち方は勿論もちろん抜ぬきかん、所すれで擦すれ違ちがつたから、それを拍子ひょうしに

私はドン／＼逃げた。どの位足が早かつたか覚えはない、五、六間先へ行て振返ふりかえつて見ると、その男もドン／＼逃げて行く。如何も何とも云われぬ、實に怖かつたが、双方逃げた跡で、先ずホツと呼吸いきをついて安心して可笑おかしかつた。双方共に臆病者と臆病者との出逢い、拵えた芝居のようで、先方の奴の心中も推察が出来る。コンな可笑しい芝居はない。初めから此方は斬る氣はない、唯逃げては不味まづい、屹と殺られると思たから進んだ所が、先方も中々心得て居る、内心怖わ／＼表面颯々さつさと出て来て、丁度抜きさえすれば切先の届く位すれ／＼になつた処ところで、身を翻ひるがえして逃出したのは誠にエライ。こんな處で殺されるのは眞実の犬死だから、此方も怖かつたが、彼あつち方もさぞ／＼怖かつたろうと思う。今

その人は何處に居るやら、三十何年前若い男だから、まだ生きて居られる年だが、生きて居るなら逢うて見たい。その時の怖さ加減を互に話したら面白い事でしょう。

雑記

暗殺の患は政治家の方に廻わる凡そ私共の暗殺を恐れたのは、前に申す通り文久二、三年から明治六、七年頃までのことでしたが、世間の風潮は妙なもので、新政府の組織が次第に整頓して、^{したがつ}隨て執政者の権力も重きを成して、^{おのづ}自から威福の行われるようになると同時に、天下の耳目は政府の一方に集り、私の不平も公衆の苦じもく

情も何も蚊かもその原因を政府の当局者に帰して、之に加うるに羨せ
 望嫉妬んぼうしつとの念を以もつてして、今度は政府の役人達が狙くわわれるようになつて来て、洋学者の方は大に樂になりました。くいちがい 喰違に岩倉公襲撃の頃からソロく始まつて、明治十一年、大久保内務卿の暗殺以来、毎度の兎きょうへん 変は皆政治上の意味を含んで居るから、云わば学者の方は御留主になつて、政治家の為めには誠に氣の毒で万々推察しますが、私共は人に羨うらやまられる事がないから、先ず以て今日は安心と思想います。

剣を棄てゝ剣を揮う私が芝の源助町しばげんすけで人を斬きろうと決心した、居合いあいも少し心得て居るなんて云いえれば、何か武人めいて刀剣でも大切にするように見えるけれども、その実は全く反対で、爾そうでは

ないどころか、日本武士の大小を丸で罷めて仕舞いたいとは私の宿願でした。源助町のときには成程双刀を挾して、刀は金剛兵衛盛高、脇差は備前祐定、先ず相應に切れそうな物であつたが、その後、間もなく盛高も祐定も家にある刀剣類はみんな売て仕舞て、短かい脇差のような物を刀にして御印に挾して居たが、是れに就ても話がある。或曰、本郷に居る親友高畠五郎を訪問していろいろ話をして居る中に、不図気が付いて見ると恐ろしい長い刀が床の間に一本飾てあるから、私が高畠に向て、あれは居合刀のようだが何にするのかと問えば、主人の云うに、近來世の中に剣術が盛になつて刀剣が行われる、ナニ洋学者だからと云て負けることはない、僕も一本求めたのだとリキンで居る

から、私は之これを打消し、「ソレは詰つまらない、君は之これを以て威すつ
もりだろうが、長い刀を家に置おいて今の浪人者を威おどそうと云ても、
威おど嚇かしの道具になりはしない。詰つまらぬ話だ、止よしなさい。僕は家
にある刀剣はみんな売うつして仕舞しまつて、今挿して居るこの大小二本きり
しかない。然かもその大の方は長い脇差を刀にしたので、小の方
は鰹かつ節おぶしこ小刀がたなを鞘さやに藏おさめてお飾かざりに挿して居るのだ。ソレに君が
こんな大造たいそうな長い刀を弄いじくると云うのは、君に不似合よだ、止よ
が宜い、御願おねがいだから止よして呉くれれ。論より証拠、君にはこの刀は
抜けないに極きまつて居る、それとも抜くことが出来るか。「ソレは抜
くことは出来ない、逆とてもこんな長い物を。「ソリヤ見たことか、
抜けもせぬものを飾かざつて置くと云う馬鹿者があるか。僕は一切刀を

罷めて居るが、憚りながら抜くことは知て居るぞ、抜て見せようと云て、四尺ばかりもある重い刀を取て庭に下りて、兼て少し覚え居る居合の術で二、三本抜て見せて、「サア見給え、この通りだ。どうだ、君には抜けなかろう。その抜ける者は疾くに刀を売して仕舞しまつたのに、抜けない者が飾て置くとは間違ちがいではないか。是れは独り吾々洋学者ばかりでない、日本国中の刀を皆なうつちやつて仕舞しまうと云うことにしなければならぬ、だからこんなものは颶々さつさと片付けて仕舞さうが宜よろしい。君も今から廃刀と決心して、いよく飾りに挟ささなければならんと云うなら、小刀でも何でも宜しいと云て、大きに論じた事がある。

扇子から懷劍が出る是れも大抵同時代と思う。幕府の翻訳ほんやくきょ

局くに雇れて其處そこに出て居た時、或人あるひとが私に話すに、「近來な
かく面白い扇子せんすが流行る。はや鉄扇てつせんと云うものは昔から行われて
居たが、今はソレが大おおいに進歩して、唯ただの扇子と見せて置おいて、その
実はヒヨイと抜くと懷劍うわさが出て来る、なかく面白い事を發明し
たと噂うわさして居る。ソコで私が大にまぜかえして遣やつた。「扇子の中
から懷劍の出るのが何が賞めた話だ。それよりも懷劍として置いて、
ヒヨイト抜くと中から扇子の出るのが本当だ、倒さかさまにしろ、爾そ
したら賞めて遣やる、そんな馬鹿な殺伐な事をする奴があるものか、
面白くもないと云いつて、打毀うちこわした事を覚えて居ます。

幕府が倒れると私はすぐ帰農して、夫れ切り双刀を廃して丸腰そ
になると、塾の中でも段々廃刀者が出来る。所がこの廃刀と云う

事は中々容易な事でない。実を申せば持兎器を罷めるのだから、世間の人は悦びよろこそうなものだが、決して爾うでない。私が始めて腰の物なしで汐留しおどめの奥平屋敷いっぴやに行た所が、同藩士は大に驚き、丸腰で御屋敷しゆつにゆう出入するとは殿様に不敬ではないかなどゝ議論する者もありました。又或あるとき塾どくの小幡仁三郎おばたじんざぶろうと誰か二、三人で散歩中、その廃刀を何処かの壯士とがに見咎められて怖い思いをした事もある、けれども私は断然廃刀と決心して、少しも世の中に頓着とんじやくせず、「文明開國の世の中に難ありがた有あそうに兎きようき器を腰にして居る奴は馬鹿だ、その刀の長いほど大馬鹿であるから、武家の刀は之これを名けて馬鹿メートルと云いうが好かろうなどゝ放言して居れば、塾中にも自から同志がある。

和田与四郎壮士を挑む明治四年、新銭座から今の三田に移転した当分の事と思う、或日和田義郎（今は故人になりました）と云う人が、思切た戯をして壮士を驚かしたことがある。この人は後に慶應義塾幼稚舎の舎長として性質極めて温和、大勢の幼稚生を実子のように優しく取扱い、生徒も亦舎長夫婦を実の父母のように思うと云う程の人物であるが、本来は和歌山藩の士族で、少年の時から武芸に志して体格も屈強、殊に柔術は最も得意で、所謂怖いものなしと云う武士であるが、一夕例の丸腰で二、三人連れ、芝の松本町を散歩して行くと、向うから大勢の壮士が長い大小を横たえて大道狭しと遣て来る。スルと和田が小便をしながら往来の真中を歩いて行く。サアこの小便を避けて左右に道を

開くか、何か咎め立てして喰て掛るか、爰が喧嘩の間一髪、いよ
 く掛かかつて来れば五人でも十人でも投ほうり出して殺して仕舞うと云う
 意氣いきごみ込が、先方の若武者共に分たか、何にも云わずに避けて通た
 と云う。大道で小便とは今から考えれば隨ずい分乱暴であるが、乱
 世の時代には何でもない、こんな乱暴が却て塾の独立を保つ為め
 になりました。

百姓に乗馬を強ゆ相手は壯士ばかりでない、唯ただの百姓町人に對し
 ても色々試こころろみた事がある。その頃私が子供を連れて江ノ島鎌倉に
 遊び、七里ヶ浜しちりがはまを通るとき、向うから馬に乗のつて来る百姓があつて、
 私共を見るや否や馬から飛下りたから、私が咎めとがて、「是れ、貴
 様は何だと云て、馬の口を押えて止めると、百姓が怖こわそうな顔

をして頻りに詫るから、私が、「馬鹿云々、爾うじやない、この馬は貴様の馬だろう」「ヘイ」「自分の馬に自分が乗たら何だ、馬鹿な事するな、乗て行けと云ても中々乗らない。」「乗らなければ打撲るぞ、早く乗て行け、貴様は爾う云う奴だからいけない。」今政府の法律では百姓町人、乗馬勝手次第、誰が馬に乗て誰に逢うても構わぬ、早く乗て行けと云て、無理無体に乗せて遣りましたが、その時私の心の中でひとり思うに、古来の習慣は恐ろしいものだ、この百姓等が教育のない計りで物が分らずに法律のあることも知らない。下々の人民がこんなでは仕方がないと余計な事を案じた事がある。

路傍の人の硬軟を試る夫れから又斯う云う面白い事がありました。
そ
またこ
い

明治四年の頃でした。 摂州三田藩の九鬼と云う大名は兼て懇意の間柄で、一度は三田に遊びに来いと云う話もあり、私もその節病後の身で有馬の温泉にも行て見たし、かた／＼先ず大阪まで出掛け、大阪から三田まで凡そ十五里、途中名塩に一泊する積りにして、ソコで大阪に行けば何時でも緒方の家を訪問しないことはない、故先生は居ないでも未亡夫人が私を子のようにして愛して呉れるから、大阪に着くと取敢えず緒方に行って、三田に遊び有馬に行くことなども話しました所が、私は病後でどうも歩けそうにない、駕籠を貸して遣ろうと云われるので、その駕籠をつらせて大阪を出立した。頃は旧暦の三、四月、誠に好い時候で、私はパツチを穿いて羽織か何か着て蝙蝠傘を持って、駕籠に乗て行

くつもりであつたが、少し歩いて見るとなか／＼歩ける。「コリヤ駕籠は要らぬ、駕籠屋、先へ行け、乃公は一人で行くからと云て、たつた一人で供もなれば連れもない、話相手がなくて面白くない所から、何でも人に逢うて言葉を交えて見たいと思い、往来の向うから来る百姓のような男に向て道を聞いたら、そのとき私の素振りが何か横風おうふうで、むかしの士族の正体が現われて言葉も荒らかつたと見える、するとその百姓が誠に丁寧に道を数えて呉くれれてお辞儀じぎをして行く、こりや面白いと思い、自分の身を見れば持て居るものは蝙蝠傘一本きりで何にもない、も一度遣やつて見ようと思うて、その次ぎに来る奴に向て怒鳴り付け、「コリや待て、向うに見える村は何と申す村だ、シテ村の家数は凡およそ何軒ある、

あの瓦屋の大きな家は百姓か町人か、主人の名は何と申すなど、
 下くだらぬ事をたゞみ掛けて士族丸出しの口調で尋ねると、その奴は
 道の側に小さくなつて恐れながら御おこたえ答申上げますと云うような
 様子だ。此方こつちはますく面白くなつて、今度は逆さかさまに遣て見ようと
 思付おもいつき、又向うから来る奴に向て、「モシモシ憚はばかりながら一寸
 ものをお尋ね申しますと云うような口調に出掛け、相替あいかわらず
 下らぬ問答を始め、私は大阪生れで又大阪にも久しく寄留して居
 たから、その時には大抵たいてい大阪の言葉しつも知て居たから、都すべて奴の
 調子に合せてゴテくー話かをすると、奴は私を大阪の町人が掛取かけとり
 にでも行く者と思うたが、中々横おうふう風ふうでろくに会釈さつさもせずに颶さつさ
 々と別れて行く、底そこで今度は又その次ぎの奴に横風よこふうをきめ込み、

又その次には丁寧に出掛け、一切先方の面色に取捨なく誰でも唯向うから来る人間一匹ずつ一つ置きと極めて遣て見た所が、凡そ三里ばかり歩く間、思う通りに成たが、ソコデ私の心中は甚だ面白くない。如何にも是れは仕様のない奴等だ、誰も彼も小さくなるなら小さくなり、横風ならば横風で可し、斯う何うも先方の人を見て自分の身を伸縮するような事では仕様がない、推して知るべし地方小役人等の威張るのも無理はない、世間に圧制政府と云う説があるが、是れは政府の圧制ではない人民の方から圧制を招くのだ、之を何うして呉れようか、捨てようと云て固より見捨てられる者でない、左ればとて之を導いて俄に教えようもない、如何に百千年來の余弊とは云いながら、無教育の土百姓

が唯無闇に人に詫るばかりなら宜しいが、先き次第で驕傲になつたり柔和になつたり、丸でゴムの人形見るようだ、如何にも頼母しくないと大に落胆したことがあるが、変れば變る世の中で、マアこの節はそのゴム人形も立派な国民と成て学問もすれば商業も働き、兵士にすれば一命を軽んじて國の為めに水火にも飛込む。福澤が蝙蝠傘一本で如何に士族の仮色を使うても、之に恐るゝ者は全国一人もあるまい。是れぞ文明開化の賜でしよう。

独立敢て新事例を開く私の考は塾に少年を集めて原書を読ませる計りが目的ではない。如何様にもしてこの鎖国の日本を開いて西洋流の文明に導き、富国強兵以て世界中に後れを取らぬようにしたい。左りとて唯これを口に言うばかりでなく、近く自分の身より

始めて、仮初めにも言行齟齬しては済まぬ事だと、先ず一身の私を慎しみ、一家の生活法を謀り、他人の世話にならぬようとに心掛けて、扱一方に世の中を見て文明改進の為めに施して見たいと思ふ事があれば、世論に頓着せず思切て試みました。例えは前にも申した通り、学生から授業料の金を取立てる事なり、武士の魂と云う双刀を棄てゝ丸腰になる事なり、演説の新法を人に説いて之を実地に施す事なり、又は著訳書に古來の文章法を破て平易なる通俗文を用うる事なり、凡そ是等は当時の古風家に嫌われる事であるが、幸に私の著訳は世間の人気に役じて渴する者に水を与へ、大旱に夕立のしたようなもので、その売れたことは實に驚く程の数でした。時節の悪いときに、ドンな文章家ドンな学者

が何を著述したつて何を翻訳したつて、私の出版書のように売れよう訳けはない。畢竟私の才力がエライと云うよりも、時節柄がエラかつたのである。又その時代の学者達が筆不調法であったか、馬鹿に青雲熱に浮かされて身の程を知らず時勢を見ることを知らなかつたか、マアそのくらいの事だと思われる。兎にも角にも著訳書が私の身を立て家を成す唯一の基本になつて、ソレで私塾を開ても、生徒から僅ばかりの授業料を搔集めて私の身上に着けるようなケチな事をせずに、全く教師等の所得にすることが出来たその上に、折々私の財嚢から金を出して塾用を弁ずることも出来ました。

所で私の性質は全体放任主義といおうか、又は小慾にして大無

慾とでも云おうか、塾の事に就て朝夕心を用いて一生懸命、些細の事まで種々無量に心配しながら、又一方ではこの塾にブラサガツて居る身ではない、是非とも慶應義塾を永久に遺して置かなければならぬと云う義務もなければ名譽心もないと、初めから安心決定して居るから、隨て世の中に怖いものがない。同志の

後進生と相談して思う通りに事を行えば、塾中自から独立の氣風を生じて世間のそに合わぬことも多いのと、又一つには私が政治社会に出ることを好まずに在野の身でありながら、口もあれば筆もあるから颶々と言論して、時としてはその言論が政府の癱瘓に障ることもある。実を云えば私は政府に対して不平はない、役人達の以前が、無鉄砲な攘夷家であろうとも、人を困らせた奴

であろうとも、一切既往を云わず、唯今日の文明主義に変化して開国一偏に国事を經營して呉れゝば遺憾なしと思えども、何かの氣まぐれに官民とか朝野とか忌に區別を立てゝ、私塾を疏外し邪魔にして、甚だしきは之を妨げんなんとケチな事をされたのには少々困りました。今これを云えば話も長し言葉も穢くなるから抜きにして、近年帝国議会の開設以来は官辺の風も大に改まりて、余り酷い事はない。何れ遠からぬ中に双方打解けるようになるでしよう。

又私は知る人の為めに尽力したことがあります。是れは唯私の物數寄ばかり、決して政治上の意味を含んで居るのでも何でもない。眞実一身の道楽と云おうか、慈悲と云おうか、癪瘡と云

おうか、マアそんな所から大に働いたことがあります。仙台藩の留守居役を勤めて居た大童信太夫おおわらしんだゆうと云う人があつて、旧幕府時代から私はその人と極ごく懇意こんいにして居ました、と云てその人が蘭学者でもなれば英学者でもない、けれども兎に角に西洋文明の風ふうを好み洋学書生を愛して楽しみにして居る所は、気品の高い名士と申して宜しい。当事諸藩の留守居役でも勤めて居れば、芸者を上げて騒ぐとか、茶屋に集まるとか、相撲を巔ひいきにするとか云うのが江戸普通の風俗で、大童も大藩の留守居だから随分金廻わりも宜かつたろうと思われるに、絶えてそんな馬鹿な遊びをせず、唯何ただでも書生を養て遣ると云うことが面白くて、書生の世話をばかりして、凡そ当時仙台の書生で大童の家の飯を喰くわない者は

なかろう。今の 富田鉄之助とみたてつのすけ を始め一人として世話にならない者はない。所が幕末の時勢段々切迫して、王政維新の際に仙台は佐幕論に加担して忽ち失敗して、その謀主は但木土佐ただきとさ と云う家老であると定まつて、その人は腹を切きつ て仕舞しま つたその後で、但木土佐が謀主だと云い うけれども、その実は謀主の謀主がある、ソレは誰だと云うに 大童信太夫おおわらしんだゆう 、 松倉良助まつくらしようすけ の兩人だと斯こ う云わ 訳わけ で、維新後その兩人は仙台に帰かえつ て居た所が、サアその仙台の同藩中の者から妙な事を饒舌しゃべり出した、既すでに政府は朝敵の処分をして事ことづみ 濟じやく になつては居るが、内からそんなことを云い 出だ して、マダ罪人が幾人もあると訴えたからには、マサか捨てゝも置かれぬと云う所から、久我大納言こがだいなごん 言を勅使として下向を命じた、と云う政府の

趣意は甚だ旨い、この時に政府は既に処分済の後だから、成る丈
 け平穏を主として事を好まぬ。ソコで久我と仙台家とは親類であ
 るから、久我が行けば定めて大目に見るであろう、左すれば怪我
 人も少ないだろうと云う為めに、態と久我を揃んだと云うことは、
 その時私も窃ひそかに聞きました。政府の略は中々行届いて居る、所が
 仙台の藩士が有ろうことか有るまいことか、御上使の御下向もよお
 て景氣を催し、生首を七ツとやら持て出たので久我も驚いたと云
 う、そんな事まで仙台藩士が遣やつた。その時に松倉も大童も、居れ
 ば危ないから脊戸口せどぐちから駆かけだ出して、東京まで逃げて來た、と云う
 のは兩人ともモウちやんと首を斬られる中に數えられて居たその
 次第を、誰か告げて呉れる者があつて、その儘家ままを飛出して東京

へ来て潜ひそんで居るその中にも、仙台藩の人が在京の同藩人に対して様々残酷な事をして、既に熱海貞爾と云う男は或夜今其処で同藩士に追駆けられたと申して、私方に飛込んで助かつた事さえありました。この物騒な危ない中にも、大童と松倉はどうやら斯うやら久しく免かれて居て、私は素より懇意だからその居処も知て居れば私の家にも来る。政府の人から見られるのは苦しくない、政府はそんな野暮はしない、そんな者を見ようともしないが、何分にも同藩の者が遣るので誠に危ない。引捕えて、是れが罪人でございと云えば、如何に優しい大目な政府でも唯見ては居られない。實に困た身の有様だと、毎度兩人と話す中に、私は両人の為めに同情を表すると云うよりも、寧ろこの仙台藩士た

の無情残酷と云うことに酷く腹が立ちました。弱武者の意氣地のない癖にひどい事をする奴だ、ドウかして呉れたいものだと斯う考えた所で、夫れから私が大童に面会して、ドウか青天白日の身になる工夫がありそなものだ、私が一つ試みて見よう、何でも是れは一番、藩主をひつとら引捕えて談ずるが上策だらうと相談して、私は大きに御苦労な訳けだけれども、日比谷内にある仙台の屋敷に行きて、藩主に御目に懸りたいと触込んで、藩主に面会した。ソコで私がこの藩主に向て大に談じられる由縁のあると云うのは、その藩主と云う者は伊達家の分家宇和島藩から養子に来た人で、前年養子になると云うその時に、私が与て大に力がある、と云うのは當時大童が江戸屋敷の留守居で世間の交際が広いと云うので、

養子選択の事を一人で担任して居て、或時^{あるとき}私に談じて、「お前

さんの処（奥平家）の殿様は宇和島から来て居る、その兄さんが国（宇和島）に居る、その人の強弱智愚如何を聞いて貰いたいと云うから、早速取調べて返事をして、先ず大童の胸に落ちて、

今度は宇和島家の方に相談をして貰いたいと云うので、夫れから

又私は麻布竜土の宇和島の屋敷に^{いつ}て、家老の桜田大炊と云

う人に面会してその話をすると、一も二もなく、本家の養子になろうと云うのだから唯難^{ただありがた}有いとの即答、一切^{いつさい}大童と私と二人

で周旋して、夫れから表向きになつて貰た^{もらつ}その人が、その時の藩主になつて居るので、ソコで私がその藩主に遇^あうて、時に尊藩の大童、松倉^{まつくら}の両人が、この間仙台から逃げて参^{まい}たのは、彼方に

居れば殺されるから此方に飛出して來たのであるが、彼の兩人は今でも見付け出せば藩主に於て本当に殺す氣があるのか、但し殺したくないのか、ソレを承りたい。
「いや決して殺したいなど、云う意味はない。」
「然らばモウ一歩進めて、お前さんはソレを助けると云う工夫をして、ドウかして、命の繫がるようにして遣ては如何で御座る。実はお前さんは大童に向て大に報いなければならぬことがある。知るや知らずや、お前さんが仙台の御家に養子に來たのは斯う云う由来、是れの次第であつたが、夫れを思つても殺すことは出来まい。屹度御決答を伺いたいと、顔色を正しくして談じた処が、「決して殺す氣はないが、是れは大参事に任まかしてあるから、大参事さえ助けると云う気になれば、

私には勿論異論はないと云う。マダ若い小供でしたから何事も大参事に任かしてあつたのでしよう。「然らばお前さんは確かだな。」「確かだ。」「ソレならば宜しい、大参事に遇おうと云て、直ぐ側の長屋に居たから其處へ捻込んだ。サア今藩主に話をして來たがドウだ。藩主は大参事次第だと確かに申された。然らば則ち生殺はお前さんの手中にある、殺す氣か、殺さぬ氣か。仮しや殺す積りで捜し出そうと云ても決して出る気遣いはない。私はちゃんと居処を知て居る、捜せるなら試みに捜して見るが宜い、捕縛すると云うなら私の力の有らん限り隠蔽して見せよう、出来るだけ摘発して見なさい、何時まで経ても無益だ。そんな事をして人を苦しめないでも宜いだろうと、裏表から色々話すと、大参事

にも言葉がない。いよく助ける、助けるけれども薩州辺りから何とか口を添えて呉れると都合が宜いなんて又弱い事を云うから宜しいと云い棄てゝ、夫れから私は薩州の屋敷に行つて、斯うく云う次第柄だから助けて遣て呉れぬかと云うと、大藩とか強藩とか云うので口を出すのは実は迷惑な話だが、何も六かしい事はない、宮内省に弁事と云うものがあるから、その者に就て政府の内意を聞いて上げるからと云て、薩摩の公用人が政府の内意を聞いて、私の処に報知して呉れたには、兎も角も自訴させるが宜しい、自訴すれば八十日の禁錮ですつかり罪は滅びて仕舞うと云うことが分た。夫れから念の為め私は又仙台の屋敷に行つて大参事に面会して、政府の方は自訴すれば八十日と極て居るが、之にお負けが付

きはしないか、自訴と云えばこの屋敷に自訴するのであるが、この屋敷で本藩の私を以て八十日を八年にして遣^やろうなんと云うお負けを遣りはしないか、ソレを確かに約束しなければ玉は出されないと、念に念を入れて問答を重ね、最後には若し違約すれば復讐するとまで脅迫して、いよいよ大丈夫と安心して、ソレからその翌日両人を連れて日比谷の屋敷に行た、所が屋敷の役所見たような処には罪人、大童^{おおわら}、松倉^{まつくら}の旧時の属官ばかりが列んで居るだろう、罪人の方が余程エライ、オイ貴様はドウして居るのだと云うような調子で、私は側から見て可笑^{おか}しかつた。夫れから宇田川町の仙台屋敷の長屋の二階に八十日居て、ソレで事が済んで、ソレから二人は晴天白日、外を歩くようになつて、その後は今日

に至るまでも旧の通りに交際して互に文通して居ます。生涯変らぬ事でしょう。只この事たるや仙台藩の無氣力残酷を憤ると同時に、藩中稀有の名士が不幸に陥りたるを氣の毒に感じたからのことで、随分彼方此方と歩き廻りましたが、口で云えば何でもないけれども、人力車のある時節ではなし、一切歩いて行かなけばならぬから中々骨が折れました。

夫れから榎本（当年の釜次郎、今の武揚）の話をしましょ。前に申す通りに古川節蔵は私の家から脱走したようなもので、後で聞いて見れば榎本よりか先きに脱走したそうで、房州鋸山とか何処とかに居た佐幕党の人を長崎丸に乗せて、ソレを箱根山に上げて、ソレで箱根の騒動が起たので、あれは古

川節藏が遣たのだと申します。節藏が脱走した後で以て、脱走艦は追々函館に行て、夫れから古川の長崎丸と一処に又此方へ侵しに来た、と云うのは官軍方の東艦、即ち私などが亞米利加から持て來た東艦が官軍の船になつて居る、ソレを分捕りしようと云うことを企てゝ、そうして奥州宮古と云う港で散々戦た所が、負けて仕舞て到頭降参して、夫れから東京へ護送せられて、その時は法律も裁判所も何もないときで、糺問所と云う牢屋のようなものがあつて、その糺問所の手に掛つて古川節藏と、前年、私が米国に同行した小笠原賢蔵と云う海軍士官と、二人連れて霞ヶ関の芸州の屋敷に監禁されて居る。ソコで私は前には馬鹿をすると云て止めたのであるけれども、監禁され

て居ると云えば可哀想だ。幸い芸州の屋敷に懇意な医者が居るから、その医者の処に行つて、ドウかして古川に遇いたいものだが、遇わして呉れぬかと云つたらば、番人も何も居ないようであつたが、その医者の取計いで、遇わして呉れました。夫れから長屋の暗いような処に行つて見ると二人がチヤンと這入つて居るから、私が先ず言葉を掛けて、「ザマア見ろ、何だ、仕様がないじやないか。止めまいことか、あれ程乃公が止めたじやないか。今更ら云たつて仕方はないが、何しろ喰物が不自由だろう、着物が足りなかろうと云て、夫れから宅に帰つて毛布を持って行つて遣たり、牛肉の煮たのを持て行つて遣たり、戦争中の様子や監禁の苦しさ加減を聞たりした事があるので、私は「能く」糺問所の有様を知つて居ます。

所が榎本釜次郎えのもとかまじろうだ。釜次郎は節藏せつぞうよりか少し遅れて此方に
 帰て来て同じく糺問所きゆうもんじょの手に掛て居る。所が頓と音づれが分
 らない、と云うのは私は榎本と云う男は知て居ることは知て居る、
 途中で遇て一寸挨拶あつちょとしたぐらいな事はあるが、一緒に相対して
 共に語り共に論ずると云うような深い交際はない。だから余り氣
 に止めて居なかつた。所がこの榎本と云う一体の大本おおもとを云うと、
 あの阿母おつかさんと云う人は素もと一橋家の御馬方おんまかたで林代次郎はやしだいじろうと
 云う日本第一乗馬の名人と云われた大家の娘で、この婦人が幕府
 の御徒士おかげちの榎本円兵衛えんべえと云う人に嫁して設けた次男が榎本釜次郎
 です。ソコでその林の家と私の妻の里の家とは回縁かいえんの遠い続つづき
 合あいになつて居るから、ソレで前年中は榎本の家内の者も此方

に來たことがある。又私の妻も小娘のときには祖母おばあさんに連れられて榎本の家に行たことがあると云うので、少し往来の道筋とおつが通て居て全く知らぬ人でない。所が榎本が今度きゆうもんじょ糺問所の手に掛かかって居て、その節せつ、榎本の阿母おつかさんも姉あねさんもお内儀かみさんも静岡に居るが、一向かまじろう金次郎の処から便りがないので大に案おおいじて居るよこと、丁度ちょうどその時に榎本の妹の良人に江連加賀守えづれかがのかみと云う人があつて、この人は素と幕府の外国奉行を勤めて居て私はがいこくがたの方の翻訳方よこであつたから能く知て居る。ソコで江連が静岡から私の処に手紙を寄越よこして、榎本はこの節どうして居るだらうか、頓とんと便りがないので母も姉も家内も日夜案おもじて居る、何でも江戸に来てるうわさると云う噂きいは風の便りに聞きたけれども、ソレも確めることが出

来ない、其れに就て江戸に親戚身寄の者に問合せたけれども、嫌疑を恐れてか只の一度返辭を寄越した者がない、ソコで君の處に聞きに遣たら何か様子が分るだらうと思うが、ドウぞ知らして呉れぬかと云うことを縷々と書いてきました。所で私はその手紙を見て先ず立腹したと申すは、榎本は兎も角も、その親戚身寄の者が江戸に居ながら嫌疑を恐れて便りをしないとは卑劣な奴だ、薄情な奴だ、実に幕府の人間は皆こんな者だ、好し乃公が一人で引受けて遣ると云う心が頭に浮んで来て、加うるに私は古川節藏の一件で糺問所の様子を知て居るから、スグ江連の方へ返辞を出し、榎本は今糺問所に這入て居る、殺されるか助かるかソリヤどうも分らない、分らないけれども何しろ煩いもしなければ

何もせずに無事に居るので御座る、その事を阿母さん始め皆さんへ伝えて呉れよと云て遣ると、又重ねて手紙を寄越して、老母と姉が東京に出たいと云うが上京しても宜しかろうかと云て来たから、颶々と御出なさい、私方に嫌疑もなんにもない、公然と出て御出でなさいと返辞をすると、間もなく老人と姉さんと母子二人出京して、ソレから糺問所の様子も分り差入物などして居る中に、阿母さんが是非釜次郎に逢いたいと云出した。所が法律も何もない世の中で、何処に訴えて如何しようと云う方角が分らない。ソコで私が一案を工風して、老母から哀願書を差出すことにして、私が認めた案文のその次第は、云々 今般倅釜次郎犯罪の儀、誠に以て恐れ入ります、同人事は実父円兵衛存命中

斯様々々、至極孝心深き者で、父に事えて平生は云々、又その病中の看病は云々、私は現在ソレを見て居ます、この孝行者にこの不忠を犯す筈はない、彼れに限て悪い根性の者では御在ません、ドウゾ御慈悲に御助けを願います、私はモウ余命もない者で御座るから、いよいよ釜次郎を刑罰とならばこの母を身代りとして殺して下さいと云う趣意で、分らない理窟を片言交りにゴテ／＼厚かましく書いて、姉さんのお楽さんに清書をさせて、ソレからお婆さんが杖をついて哀願書を持って糺問所に出掛けた処が、コレは余程監守の人を感動させたと見え、固よりこんな事で罪人の助かる訳けはないが、とうく仕舞に獄窓を隔てゝ母子面会だけは叶いました。夫れ是れする中に爰に妙な都合の宜い事が出来ました

その次第は、榎本が箱館で降参のとき、自分が嘗て和蘭在留中学び得たる航海術の講義筆記を秘蔵して居るその筆記の蘭文の書を、國の為めにとて官軍に贈て、その書が官軍の將官黒田良助（黒田清降）の手にあると云うことを聞きました。所で人は誰か忘れたが、或日その書を私方に持参して、何の書だか分らぬがこの蘭文を翻訳して貰いたいと云うから、之を見れば兼て噂に聞いた榎本の講義筆記に違いない。是れは面白いと思い、蘭文翻訳は易いことであるのを、私は先方に気を揉ませる積りで態と手を着けない。初めの方四、五枚だけ丁寧に分るよう翻訳して、原本に添えて返して遣て、是れは如何にも航海にはなくてはならぬ有益な書に違いない、卷初の四、五枚を見ても分る、所が

版本の原書なれば翻訳も出来るが、講義筆記であるからその講義を聴聞した本人でなければ何分にも分り兼ねる、誠に可惜い宝書で御座ると云て、私は榎本の筆記と知りながら知らぬ風をして唯ただ翻訳の云々で氣を揉まして、自然に榎本の命の助かるように、云わば伏線の計略を運めぐらした積りである。又その時代には黒田も私方に来れば、私も黒田の家に行いたこともある。何時か何處か時も処も忘れましたが、私が黒田に写真おくつを贈おくつたことがあるその写真は、亞米利加の南北戦争、南部敗北のとき、南部の大統領か大将か何でも有名の人が婦人の着物を着て逃げ掛けて居る写真で、私がその前年、亞米利加から持かえつて帰くろだて一枚あつたから黒田に贈おくつて、是れは亞米利加の南部の何と云う人で、逃げる時に斯こう云う姿で逃げ

たと云う、敢て命を惜むでもなかろうけれども、又一方から云え
 ば命は大切な者だ、何としても助かろうと思えば斯く見苦しい姿
 をしても逃げるのが当然の道である。人間と云うものは一度
 び命を取れば後で幾ら後悔しても取返しが付かない。ドウも榎
 本は大変な騒ぎをした男であるが、命だけは取らぬようにした
 方が得じやないか、何しろこの写真を進上するから御覧なさいと
 云て、濃に話したことある。爾うした所で、ドウやら斯うやら
 する間にいよく助かることになつた、けれどもその助かると云
 うのは固より私の周旋したばかりで助かつたと云う訳けではない、
 その時の眞実内情の噂を聞けば長州勢はドウも榎本等を殺すよう
 な勢があつた、ソコで薩州の藩士がソレを助けようと云う意味が

あつたと云うから、長州勢に任かせたら或は殺されたかも知れぬ。
 何れ大西郷などがリキンでとうく助かるようになつたのでし
 ょう。是れは私の為めには大童信太夫よりか余程骨の折れた仕
 事でした。彼れ此れする中に私が煩い付て、その事は病後まで引
 張て居て、病氣全快に及ぶと云うときだから、明治三年にいよ
 く放免になりましたが、唯殘念で氣の毒なのは、阿母さんは愛
 子の出獄前に病死しました。

所が前申す通り榎本釜次郎と私とは刎頸の交と云う詫けで
 はなし、何もそんなに力を入れる程の親切のあろう詫けもない、
 只仙台藩士の腰抜けを憲つたと同じ事で、幕府の奴の如何にも無
 気力不人情と云うことが癪に障たので、ソコでどうでも斯うでも

助けて遣らうと思て駆廻わりましたが、その節、毎度妻と話をし
 て今でも覚えて居ます、私の申すに、扱榎本の為めに今日はこの
 通りに骨を折て居るが、是れは唯人間一人の命を助けるばかりの
 志で外ほかになんにも趣意はない、元がんらい来榎本と云う男は深く知らな
 いが随ずいぶん分何かの役に立つ人物に違いはない、少し氣色のけいろかわつ
 ではあるが、何分にも出身で御けいん家人だから殿様好きだ、今
 こそ牢ろうに這入て居るけれども、是れが助かつて出るようになれば、
 後日あるいは役人になるかも知れぬ、その時は例の通りの殿様風でび
 んくするような事があるかも知れない、その時になつて殿様の
 ひんくを見たりきい聞たりして、ヤレ昔を忘れて厚かましいだの可お
 笑しいだと云う念が兎の毛ほども腹の底にあつては、是れは榎

本の悪いのでなく此方こつちの卑劣と云うものだから、そんな事なら私は今日唯ただ今から一切の周旋を止めるがドウだと妻に語れば、妻も私と同説で、左様な浅ましい卑しい了簡は決してないと申して、夫妻固く約束したことがあるが、後日ごにちに至いたつて私の云いふた通りになつたのが面白い。榎本えのもとが段々立身して公使になつたり大臣になつたりして立派な殿様になつたのは、私が占八卦うらないはづけの名人のようだけれども、私の處にはチャント説が極きまつて居て、一切の事情を知る者は私と妻と兩人より外ほかにないから、榎本がドウなろうと私の家で噂うわさをする者もない、子供などは今度のこの速記録を見て始めて合点がてんするでしょう。

一身一家経済の由来

頼母子の金式朱を返す是れから私が一身一家の経済の事を陳べま
 しょう。凡そ世の中に何が怖いと云ても、暗殺は別にして、借金
 ぐらい怖いものはない。他人に対して金錢の不義理は相済まぬ事
 と決定すれば、借金はますく怖くなります。私共の兄弟姉
 妹は幼少の時から貧乏の味を嘗め尽して、母の苦勞した様子を見
 ても生涯忘れられません。貧小士族の衣食住その艱難の中に、
 母の精神を以て自から私共を感化した事の数々あるその一例を申
 せば、私が十三、四歳のとき母に云付けられて金子返済の使をし
 たことがあります。その次第柄は斯う云うことです。天保七年、

大阪に於て私共が亡父の不幸で母に従て故郷の中津に帰りましたとき、家の普請をするとか何とか云うに、勝手向は勿論不如意ですから、人の世話で頼母子講を拵えて一口金二朱ずつで何両とやら纏まとった金が出来て一時の用を弁じて、その後、毎年幾度か講中が二朱ずつの金を持寄り、鬪引にて満座に至りて皆済になる仕組であるが、大家の人は二朱計りの金の為めに何年もこんな事に關係して居るのは面倒だと云う所から、一時二朱の掛け金を出したまゝに手を引く者がある。之を掛けすてと云います。その実は講主が人に金を唯貰うような事なれども、一般の風俗で左まで世間に怪しむ者もない。所が福澤の頼母子に大阪屋五郎兵衛と云う廻船屋が一口二朱を掛け棄にしたそうです。勿論私は

の三、四歳頃か幼少の時の事で何も知りませんでしたが、十三、四歳のとき或あるひ日母おふくろが私に申すに、「お前は何も知らぬ事だが、十
年前に斯ういふく云う事があつて大阪屋おおさかやが掛棄けきにして、福澤の家は
大阪屋に金二朱じゆを貰うたようなものだ。誠に気に済すまぬ。武家が
町人まちにんから金を恵まれて夫れそなへを唯ただ貰うて黙て居ることは出来ません。
疾いうから返したいくあつと思ては居たがドウも爾そなへう行かずに、ヤツ
と今年は少し融通ゆうとうが付いたから、この二朱のお金おんせんを大阪屋おおさかやに持て
行いて厚あつう礼れいを述べて返して来いと申して、その金を紙に包んで私
に渡しました。ソレから私は大阪屋おおさかやに参まいて金の包みを出すと、
先方では意外に思うたか、「御返済かえしなど却かえつて痛いたみ入ります。最早もは
や古い事です。決してそんな御心配には及びませんと云いつて頻しきりに

辞退すれども、私は母の云うことを聞いて居るから、是非渡さねばならぬと、互に押し返して口喧嘩のように争うて、金を置いて帰たことがあります。今はハヤ五十二、三年も過ぎてむかしくの事であるが、そのとき母に云付けられた口上も、先方の大坂屋の事も、チャンと記憶に存して忘れません。年月日は覚えないが何でも朝のことゝ思う、豊前中津下小路の西南の角屋敷、大阪屋五郎兵衛の家に行て主人五郎兵衛は留守で、弟の源七に金を渡したと云うことまで覚えて居ます。こんなことが少年の時から私の脳中に遺て居るから、金銭の事に就ては何としても大胆な横着な举动は出来られません。

金がなければ出来る時まで待つソレから段々成長して、中津に居

る間は漢学修業のかたわらに内職のような事をして多少でも家の活計を助け、畠もすれば米も搗き飯も炊き、鄙事多能、あらん限りの辛苦して貧小士族の家に居り、年二十一のとき始めて長崎に行つて、勿論學費のあろう詫けもない、寺の留守番をしたり砲術家の食客よつかくになつたりして、不自由ながら蘭学を学んで、その後大阪に出て、大阪の緒方先生の塾に修業中も、相替あいかわらず金の事は恐ろしくて唯の一度でも他人に借りたことはない。人に借用すれば必ず返済せねばならぬ。当然のことであたりまえで分り切て居るから、その返済する金が出来る位ならば、出来る時節まで待て居て借金はしないと、斯う覺悟を極めて、ソコで二朱や一分は拵置き、百文の錢でも人に借りたことはない。チャンと自分の金の出来る

まで待て居る。夫れから又私は質に置いたことがない。着物は塾に居るときも故郷の母が夏^{なつ}冬^{ふゆ}手織木綿の品を送て呉れましたが、ソレを質に置くと云えば何時か一度は請^{うけかえ}還^さなければならぬ。

請還す金があるならその金の出来るまで待て居るが宜いと斯う思^うから、金の入用はあつても只^{ただ}の一度も質に入れたことがない。

けれどもいよく金に迫て如何してもなくてならぬと云うときか、恥かしい事だが酒が飲みたくて堪^{たま}らないと云うようなことがあれば、思切^{おもいきつ}てその着物を売^{うつ}て仕舞^{しま}います。例えばその時に浴衣一枚を質に入れゝば武朱貸して呉れる、之^{これ}を手離して売ると云えば武朱と武百文になるから売ることにすると云うような経済法にして、且つ又私は写本で錢を取ることもしない。大事な修業の身を以てかまた

錢の為めに時を費すは勿体ない、吾身の為めには一刻千金の時
 である、金がなければ唯使わぬと覺悟を定めて、大阪に居る間と
 うく一錢の金も借用したことなくして、その後江戸に來ても同
 様、仮初にも人に借用したことはない。折節自分で想像して
 は唯怖くて堪らない、借金が出来て人から催促されたら如何だろ
 う、世間の人、朋友の中にも毎度ある話だ、借金が出来て返さな
 ければならぬと云て、此方から借りては彼方に返し、又彼方から
 借りては此方に返すと云う者があるが、私は少しも感服しない。
 誠に氣の済まぬ話で、金を借りて返さなくてならぬなんて嘸忙し
 い事であろう、能くもアレで一日でも半日でも安んじて居られた
 ものだと思うて、殆んど推量が出来ない。一口に云えば私は借

金の事に就いて大の臆病者で、少しも勇気がない。人に金を借用してその催促に逢うて返すことが出来ないと云うときの心配は、恰も白刃を以て後ろから追蒐おつかけられるような心地こころもちがするだらうと思います。

駕籠に乘らず下駄、傘を買うソコで私が金を大事にする心掛けの事実に現われた例を申せば、江戸に参まいつてから下谷練したやねりいこうじいこうじ梶おか俊しゅん斎さい先生の塾に朋友があつて、私はその時鉄砲洲てつぱうすに居たが、その朋友の処へ話いつに行くて、夜になつて練屏ねりび小路こうじを出掛けて、和泉橋いずみばしの処に來ると雨ふりだこまつが降出だした。こりやドウも困こまつたことが出来た、逆も鉄砲洲までは行かれないとと思うと、和泉橋の側わきに辻駕籠かが居たから、その駕籠屋に鉄砲洲まで幾らで行くかと聞たら、

三朱しゆだと云う。ドウも三朱と云う金を出してこの駕籠に乗るは無益だ、此方は足がある。ソレは乗らぬことにして、その少し先きに下駄屋が見えるから、下駄屋へ寄て下駄一足に傘一本買かて両方で二朱しゆ余り、三朱出ない。夫れから雪駄を懷ふところに入れて、下駄を穿はて傘をさして鉄砲洲てっぽうすまで帰かえつて來た。デその途中私は獨り首肯ひとうなづき、この下駄と傘が又役に立つ、駕籠に乘のたつて何も後に残るものはない、こんな処つつしが慎おもつむべきことだと思おもつことがあります、マアその位くらいに注意して居たから、外は推おして知いるべし、一切無駄な金を使つかつたことがない。紙かみ入に金を入れて置く、ソレは二分か三分か入れてある、入れてあるけれども何時まで経たつてもその金のなくなつたことがない。酒は固もとより好きだから朋友と酒を飲みに行く

ことはある、ソンな時には金も入りますが、唯獨りでブラリと料理茶屋に這入はいて酒を飲むなぞと云うことは假初かりそめにもしたことがない。ソレ程に私が金を大事にするから、又同時に人の金も決して貪むさぼらない。ソリヤ以前奥平家に對して朝鮮人を氣取たのは別な話にして、その外と云うのは決して金は貪らないと、自身独立、自力自活と覺悟を極きめました。

事変の当日、約束の金を渡すソコで以て慶応三年、即ち王政維新の前年の冬、芝新錢座しばしんせんざに有馬家（大名）の中屋敷が四百坪ばかりあるその屋敷を私が買いました。徳川の昔からの法律によると、武家屋敷は換え屋敷を許しても売買は許さないと云うのが撻よつた。所が徳川もその末年になると様々な根本的改革と云うよう

な事が行われて、武家屋敷でも代金を以て売買勝手次第と云うことになつて、新錢座の有馬の中屋敷が売物になると人の話を聞いて、同じ新錢座住居の木村摺津守の用人大橋栄次と云う人に周旋を頼んで、その有馬屋敷を買うことに約束して、価は三百五十五両、その時の事だから買うと云た所が、武家と武家との間で十五両、手金だの証書取換せなどゝ云うことのあるう訳けはない、唯売りましよう然らば則ち買いましようと云う丈けの話で約束が出来て、その金の受取渡しは何時だと云うと、十二月二十五日に金を相渡し申す、請取ろうと、チヤンと約束が出来て居て、夫れから私はその前日、三百五十五両の金を揃えて風呂敷に包んで、翌早朝新錢座の木村の屋敷に行つて見ると、門が締て潜戸まで鎖してある。

夫れから門番に、此処を明けて呉れ、何で締めて置くかと云うと、
 「イー工此処は明けられません。」「明けられませんたつて福澤だと云うのは、私は亞米利加行の由縁で、木村家には常に出入して家の者のようにして居たから、門番も福澤と聞いて潛戸を明けて呉れたは呉れたが、何だか門前が騒々しい、ドタバタ遣て居る。何事か知らんと思って南の方を見ると、真黒な煙が立て居る。ソレで木村の玄関に上て大橋に遇て、大変騒々しいが何だと云うと、大橋がヒソくして、「お前さんは何も知らぬか、大変な事が出来ました、大騒動だ、酒井の人数が三田の薩州の屋敷を焼払おうと云う、ドウもそりや大騒動、戦争で御座ると云うから、私も驚いて、ソリヤ少しも知らなかつた、成程ドウも容易ならぬ形勢だが、

夫^それは夫^れとして、時にあの屋敷の金^{もつ}を持^て來たから渡してお呉^く
 んなさいと云うと、大橋が、途方もない、屋敷どころの話じやない、何の事だ、モウこりや江戸中の屋敷が一錢の価^{あたい}なしだ、ソレを屋敷を買うなんてソンな馬鹿らしい事は一切罷めだ、マアそんな事を為なさるなど云て取^{とりあわ}合ぬから、私は不承知だ。ソリヤ爾^そうでない、今日渡^{わたす}と云う約束だからこの金は渡さなくてはならぬと云うと、大橋^{おおはし}は脇の方に向て、「約束したからと云て時勢に依^{よつ}たものだ、この大変な騒動中に屋敷を買うと云うような馬鹿氣^{ばかげ}たことがあるものか。仮令^{たと}い今買えばと云ても、三百五十五両を半価にしろと云えれば半価にするに違ひない、只の百両でも悦んで売るだろう、兎に角に見合せだ、罷めだくと云て相手にならぬ

から、私は押返して、「イヤそれは出来ません。大橋さん、能くお聞きなさい。先達せんだつてこれを有馬から買おうと云うときには、何と貴方は約束なすつたか、只十二月の廿五日すなわ即ち今日、金を渡そう、受取ろうと、ソレより外ほかに何にも約束はなかつた。若し万が一、世の中に変乱があれば破約する、その価を半分にすると云う言葉が、約束の中にあるかないかと云うに、そんな約束はないではないか。仮令たとい約条書よじょしょがなかろうと、人と人と話したのが何寄よりの証拠しがのみだ、売買の約束をした以上は当然あたりまえに金を払わぬこそ大きな間近いまいいだ、何でも払わんければならぬ。加之しかのみならず、マダ私が云うことがある。若し大橋おおはしさんの言う通りにこの三百五十五両を半価にせよとか百両にせよとか云いえば、時節柄ありま有馬家

では承知するであろう。ソコで私が三百五十五両の物を百両に買
 たと斯うした所で、この変乱がどんなになるか分らない。今あの
 通り酒井の人数が三田の薩州屋敷を焼払やきはらつて居るが、是れが何でも
 ない事で天下奉平たいへい、安全の世の中になるまいものでもない。扱
 いよく天下泰平になつて、私が彼の買屋敷の内に住すまつい込んで居
 る。スルと有馬の家来も大勢あるから、私の処の門前を通る度に
 睨にらんで通るだろう、彼の屋敷は三百五十五両の約束たびをしたが、金
 の請取渡うけとりわたしのその日に三田に大変乱があつたその為めに百両で
 売た、福澤は二百五十五両得をして、有馬家では二百五十五両損
 をしたと、通る度に睨んで通るに違ひない。口に言わないでも心
 に爾う思そおもつて忌な顔いまつをするに極きまつて居る。私はソンな不愉快な屋敷に

住もうと思わない。何は扱置き、構うことはない、ドウぞこの金を渡して下ださい。皆無損かいむようろをしても宜しい。この金を唯渡ただした計りで、その屋敷に住まうどころではない、逃出して行くと云うような大騒動があるかも知れない。有ればあつた時の話だ。人間世界の事は何が何やら分らない、確かに生きて居ると思う人が死んだりする。矧んや金だ、渡さなければならぬと捩ねじくれ込んで、到頭とうとうもつ持て行いって貰そいました。爾そう云いわう訳わけで誠に私が金と云うことにして極きわめて律義に正しく遣やつて居たと云うのは、是れは矢張り昔の武家根性で、金錢の損得に心を動かすは卑劣わいはくだ、気が餒すえると云うような事を思おもつたものと見えます。

子供の学資金を謝絶すそれに又似寄またによつたことがある。明治の初年に

横浜の或る豪商あが学校を拵えて、この慶應義塾こしらの若い人を教師に頼んでその学校の始末をして居ました。そ爾うするとその主人は私に親みずから新塾に出張して監督をして貰いたいと云う意があるよう見える。私の家にはそのとき男子が二人、娘が一人あつて、兄が七歳ななつに弟が五歳いつつぐらい。是れも追々成長するに違いない、成長すれば外国に遊学させたいと思おもつて居る、所が世間一般の風を見るに、学者とか役人とか云う人が動やもすれば政府に依頼して、自分の子を官費生にして外国に修業させることを祈いのつて、ドウやら斯こやら周旋いきどいが行よろて目的を達すると獲物さでもあつたように悦ぶ者が多あい。嗚呼見苦しい事だ、自分の産んだ子ならば学問修業のため洋行よろさせるも宜よろしいが、貧乏で出来なければ為せぬが宜よろし

い、夫れを乞食のよう人に泣付なきついて修業をさせて貰うとは扱も
 く意氣地のない奴共だと、心窃に之を愍笑ひんしょうして居ながら、
 私にも男子が二人ある、この子が十八、九歳にもなれば是非とも
 外国に遣らなければならぬが、先さきだつものは金だ、どうかしてそ
 の金を造り出したいと思えども、前途甚はなはるかだ遙なり、二人遣て何年
 間の学費は中々の大金、自分の腕で出来どうようか如何どうだろうか誠に
 覚束おぼつかない、困たことだと常に心に思おもつて居るから、敢あえて愧はじること
 でもなし、颯々と人に話して、金が欲しい、金が欲しい、ドウ
 かして洋行ななつをさせたい、今この子が七歳いつつだ五歳いっつだと云うけれども、
 モウ十年経たてば仕度したくをしなければならぬ、ドウもソレまでに金が
 出来れば宜いがと、人に話して居ると、誰かこの話を例の豪商に

も告げた者があるか、或日私の処に来て商人の云うに、お前さん
 に彼の学校の監督をお頼み申したい、斯く申すのは月に何百円と
 かその月給を上げるでもない、態々月給と云ては取りもしなか
 ろうが、茲に一案があります、外ではない、お前さんの小供兩人、
 彼のお坊ツちゃん兩人を外国に遣るその修業金になるべきものを
 今お渡し申すが如何だろう、此処で今五千円か一万円ばかりの金
 をお前さんに渡す、所で今要らない金だからソレを何処へか預け
 て置く、預けて置く中に小供衆が成長する、成長して外国に行こ
 うと云うときには、その金も利倍増長して確かに立派な学費にな
 つて、不自由なく修業が出来ましよう、この御相談は如何で御座
 ると云い出した。成程是れは宜い話で、此方はモウ実に金に焦れ

て居るその最中に、二人の子供の洋行費が天から降^{ふつ}て来たようなもので、即^{そつこく}刻応と返辞^{へんじ}をしなければならぬ処だが、私は考えました。待て霎時^{しばし}、どうも爾^そうでない、抑^{そもそ}も乃公^{おれ}が彼の学校の監督をしないと云うものは、為^しない所以^{ゆゑん}があつて為^しないとチヤンと説^きを極めて居る。ソコで今金の話が出て来て、その金の声を聞き前説を変じて学校監督の需^{もとめ}に応^いじようと云えど、前に之^{これ}を謝絶したのが間違いか、ソレが間違いでなければ今その金を請取^{うけと}るのが間違^こいである。金の為^ために変説と云えど、金さえ見れば何でもすると斯^こう成らなければならぬ。是^これは出来ない。且つ又今日金の欲しいと云うのは何の為^ために欲しいかと云えど、小供の為^ためだ。小供を外国で修業させて役に立つように為^しよう、学者に為^すようと云

う目的であるが、子を学者にすると云う事が果して親の義務であるかないか、是れも考えて見なければならぬ。家に在る子は親の子に違ひない。^{ちが}違ひないが、衣食を授けて親の力相応の教育を授けて、ソレで沢山だ。^こ如何あつても最良の教育を授けなければ親たる者の義務を果さないと云う理窟はない。親が自分に自から信じて心に決して居るその説を、子の為めに変じて進退すると云ては、所謂独立心の居處^{いどころ}が分らなくなる。親子だと云ても、親は親、子は子だ。その子の為めに節^{せつ}を屈して子に奉公しなければならぬと云うことはない。宜しい、今後若し乃公の子が金のないため^たに十分の教育を受けることが出来なければ、是れはその子の運命だ。^{さいわい}幸にして金が出来れば教育して遣る、出来なければ無学

文盲のまゝにして打遣て置くと、私の心に決断して、扱先方の人は誠に厚意を以て話して呉れたので、固より私の心事を知る訳けもないから、体能く礼を述べて断りましたが、その問答応接の間、私は眼前に子供を見てその行末を思い、又顧みて自分の身を思ひ、一進一退これを決断するには随分心を悩ました。その話は相済み、その後も相替らず眞面目に家を治めて著書翻訳の事を勉めて居ると、存外に利益が多くて、マダその二人の小供が外国行の年頃にならぬ先きに金の方が出来たから、小供を後廻しにして中上川彦次郎を英國に遣りました。彦次郎は私の為めに只た一人の甥で、彼方も亦只た一人の叔父さんで外に叔父はない、私も亦彦次郎の外に甥はないから、先ず親子のようなもので

す。彼あれが三、四年も英國に居る間には随分金も費しましたが、ソレでも後の小供を修業に遣ると云う金はチャンと用意が出来て、二人とも亞米利加アメリカに六年ばかり遣やつて置きました。私は今思い出しても誠に宜い心持がします。能よくあの時に金を貰もらわなかつた、貰え巴生涯氣掛りだが、宜い事をしたと、今日までも折々思い出して、大事な玉に瑾きずを付けなかつたような心持がします。

乗船切符を偽らざ右様な大金の話でない、極ごくごく々些細の事でも一寸よいと胡麻化ごまかして貪むさぼるようなことは私の虫が好かない。明治九年の春、私が長男いちたろう一太郎と次男すてじろう捨次郎と両人を連れて上方見物に行くとき、一は十二歳余り、捨は十歳余り、父子三人従者も何もなしに、横浜から三菱会社の郵便船に乗り、船賃は上等にて十

円か十五円、規則の通りに払うて神戸に着船、金場小平次と云う兼て懇意の問屋に一泊、ソレから大阪、京都、奈良等、諸所見物して神戸に帰^{かえつ}て来て、復た三菱の船に乗込むとき、問屋の番頭に頼んで乗船切符を買い、サア乗込みと云うときにその切符を請^{うけと}つて見れば、大人の切符が一枚と子供の半札が二枚あるから、

番頭を呼んで、「先刻申した通り切符は大人が二枚、小供が一枚の筈^{はず}だ、何かの間違^{まちが}いであろう、替えて貰^{もら}いたいと云うと、番頭は落付払い、「ナーニ間違^{まちが}いはありません。大きいお坊ツちゃんの御年^{おとし}も御誕生^おも聞きました。正味十二と二、三ヶ月、半札は当然^{あたりまえ}です。規則には満十二歳以上なんて書いてあります^{かい}が、満十三、四歳まで大人の船賃を払う者は一人もありませんと云う

から、私は承知しない。「二、三ヶ月でも二、三日でも規則は規則だ、是非規則通りに払うと云うと、番頭も中々剛情で、ソーンな馬鹿な事は致しませんと云て議論のように威張るから、「何でも宜しい。乃公は乃公の金を出して払うものを払い、貴様には唯その周旋を頼む丈けだ。何も云わずに呉れろと申して、何円か金を渡して、乗船前、忙しい処に切符を取替えた事がある。是れは何も珍らしくない、買物の代を当然に払うまでの事だから、世間の人も左様であろうと思うけれども、今日例えれば汽車に乗て見ると、青い切符を以て一寸^{もつ}と上等に乗込む人もあるようだ。過日も横浜から例の青札^{あおふだ}を以て上等に飛込み神奈川に上^{あが}った奴がある。私は箱根帰りに丁度^{ちょうど}その列車に乗て居て、ソット奴の手に

握にぎつてる中等切符を見て、扱さてさていや々賤しい人物だと思いました。

本藩の扶持米を辞退す是れまで申した所では何だか私が潔白な男のように見えるが、中々爾うでない。この潔白な男が本藩の政庁に対しては不潔白とも卑劣とも名状すべからざる举动ふるまいをして居ました。話は少々長いが、私が金錢の事に付き数年間に豹ひょうへ變へんしたその由来を語りましよう。王政維新のその時に、幕府から幕臣一般に三ヶ条の下問を發し、第一、王臣になるか、第二、幕臣になつて静岡に行くか、第三、帰農して平に民になるかと云つて來たから、私は無論帰農しますと答えて、その時から大小を棄てゝ丸腰になつて仕舞いしままでは是れまで幕府の家来になつて居るとは云いながら、奥おく平だいらからも扶持米ふちまいを貰てもらつて居たので、幕臣

でありながら半ばは奥平家の藩臣である。然るに今度いよく帰農と云え巴、勿論幕府の物を貰う訳けもないから、同時に奥平家の方から貰て居る六人扶持か八人扶持の米も、御辞退申すと云て返して仕舞いました、と申すはその時に私の生活はカツ／＼出来るか出来ないかと云う位であるが、併しどうかしたなら出来ないことはないと大凡その見込が付て居ました。前にも云う通り私は一体金の要らない男で、一方では多少の著訳書を売て利益を收め、又一方では頓と無駄な金を使わないから多少の貯蓄も出来て、赤貧ではない。是れから先き無病堅固にさえあれば、他人の世話にならずに衣食して行かれると考を定めて、ソレで男らしく奥平家に対しても扶持方を辞退しました。スルと奥平の役人達は却て

之を面白く思わぬ。ソンナにしなくても宜い、是れまで通り遣
 ろうと云て、その押問答がなかく喧ましい。妙なもので、此方
 が貰おうと云うときには容易に呉れぬものだが、要らないと云う
 と向うが頻りに強うる。ソレで仕舞には、ドウもお前は不親切だ、
 モウ一步進めると藩主に対して薄情不忠な奴だと云うままでになつ
 て來た。夫れから此方も意地になつて、「ソレなら戴きましよう。
 戴きましようだが、毎月その扶持米を精げて貰いたい。モ一つ序
 でにその米を飯か粥に焚て貰いたい。イヤ毎月と云わずに毎日貰
 いたい。都ての失費は皆米の内で償いさえすれば宜いから爾うし
 て貰いたい。ソレでドウだと申すに、御扶持を貰わなければ不親
 切不忠と云われる、不忠の罪を犯すまでにして御辞退申す程の考

はないから慎んで戴きます。願の通りその御扶持^{まいめい}米が飯か粥になつて来れば、私は新^{しん}銭^{せんざ}座私宅近^{きんじよ}処の乞食に触^{ふれ}を出して、毎朝來い、喰^くわして遣ると申して、私が殿様から戴いた物を、私宅の門前に於て難渢者共に戴かせます積りですと云うような乱暴な激論で、役人達も困^{こまつ}たと見え、とうく私の云う通りに奥平藩の縁も切れて仕舞^{しま}いました。

本藩に対してもその卑劣朝鮮人の如し斯^こう云えば私が如何にも高尚廉潔の君子のように見えるが、この君子の前後を丸出しにすると実は大笑いの話だ。是^これは私一人でない、同藩士も同じことだ。イヤ同藩士ばかりでない、日本国中の大名の家来は大抵皆同じことであろう。藩主から物を貰えれば拝領^{いつ}と云て、之に返礼する気

はない。馳走になれば御酒下されなんと云て、氣の毒にも思わず唯難有いと御辞儀をするばかりで、その実は人間相互いの附合いと思わぬから、金錢の事に就ても亦その通りでなければならぬ。私が中津藩に対する筆法は、金の辞退どころか唯取ること計り考えて、何でも構わぬ、取れるだけ取れと云う氣で、一両でも十両でも旨く取出せば、何だか猶に行って獲物のあつたような心持がする。拝借と云て金を借りた以上は此方のもので、返すと云う念は万々ない。仮初にも自分の手に握れば、借りた金も貰た金も同じことで、後の事は少しも思わず、義理も廉恥もないその有様は、今の朝鮮人が金を貪ると何にも変たことはない。嘘も吐けば媚も献じ、散々なことをして、藩の物を只取ろう／＼とば

かり考えて居たのは可笑しい。

百五十両を掠め去るその二、三ヶ条を云えば、小幡おばたその外ほかの人が江戸に来て居て、私が一切引受けて世話をして居るときに、藩から勿論もちろんソレに立行く丈けの金を呉れよう訳わけはない。ドウやら斯うやら種々様々に、私が有らん限りの才覚をして金つくつを造た。

例えば当時横浜に今のような欧字新聞がある、一週に一度ずつの発行、その新聞を取寄せて、ソレを翻訳ほんやくしては、佐賀藩の留守居るすとか仙台藩の留守居とか、その外一、二藩もありました、ソンな人に話を付けて、ドウぞ翻訳かつを買って貰いたいと云て多少の金にするような工風くふうをしたり、又は私が外国から持て帰た原書の中の不用物うつを売りして金策をして居ましたが、何分大勢おおぜいの書生の

世話だからその位の事では、逆も追付く訳けのものでない。 所でそ
 の時江戸の藩邸に金のあることを聞込んだから、即案に宜い加減
 な事を書立て、何月何日頃何の事で自分の手に金の這入る約束が
 あると云うような嘘を揃えて、誠めかしく家老の処に行つて、散々
 御辞儀をして、斯うく云う訳けですから暫時百五十両丈けの御
 振替ふりかえを願いますと極手軽に話をすると、家老は逸見志摩へんみしまと云う
 誠に正しい氣の宜い人で、暫時のことならば拝借仰おおせつ付けられて
 も宜かろうと云うような曖昧な答をしたから、その答を聞くや否
 やすぐにその次の元締役もとじめやくの奉行の処に行つて、今御家老志摩殿に
 斯う云う話をした所が、貸して苦しくないと御聞済になつたか
 ら、今日その御金を請取りたいと云うと、奉行は不審を抱き、ソ

レは何時の事だか知らぬがマダその筋から御沙汰にならぬと妙な
 顔色して居るから、仮令い御沙汰にならぬでもモウ事は済んで居
 ます、唯金をさえ渡して下されば宜しい、何も六かしい事はない
 と段々説た、所が家老衆が爾う云えども御金のないことはない、
 余り不都合でもなかろうとその答も曖昧であつたが、此方はモウ
 済んだ事にして仕舞て、その足で又その下役の元締小吟味、是れ
 が真実その金庫の鍵を持って居る人であるその小吟味方の処へ行て、
 只今金を出して貰いたい、斯うく云う次第で決してお前さんの
 落度になりはしない、正当な手順で、僅か三ヶ月経てば私の手に
 ちゃんと金が出来るからすぐに返上すると云て、何の事はない、
 疾雷耳を掩うに遑あらず、役人と役人と評議相談のない間に、

百五十両といふ大金を掠めて持て来たその時は、恰も手に竜宮の珠を握りたるが如くにして、且つその握た珠を竜宮へ返えそうなんと云う念は毛頭ない。誠に不埒な奴さ。夫れで以て一年ばかり大に樂をしたことがあります。

原書を名にして金を貪る又或る時、家老奥平壹岐の処に原書を持参して、御買上を願うと持込んだ所が、この家老は中々黒人、その原書を見て云うに、是れは宜い原書だ、大層高価のものだろうと頻りに賞めるから、此方はチヤンと向うの腹を知て居る、有益な本で実価は安いなどと威張て出掛けると、ソレじや外へ持て行けと云うに極て居るから、一番、その裏を搔て、「左様です、原書は誠に必要な原書ですが、之を私が奥平様にお買上

げを願うと云うのは、この代金を私が請取て、その金は私が使つて、
 爾うしてその御買上げになつた原書を私が拝借しようと斯う云
 うので、正味を申せば私がマア金を唯貰おうと云う策略でござる。
 斯くの通り平たく心の実を明らかに申上げるのだから、ドウか
 この原書を名にして金を下さい。一口に申せば私は体の宜い乞食、
 お貰い見たようなものでござると打付けた所が、家老も仕方がな
 い、その訳けは、家老が以前に自分の持て居る原書一冊を奥平藩
 に二十何両かで売付けたことがあるその事を聞込んだから私が行
 たので、若しも否めばお前さんはドウだと暴れて遣らうと云う強
 身の伏線がある、丸で脅迫手段だから、家老も仕方なしに承知し
 て、私も矢張りその原書を名にして先例に由り二十何両かの金を

取て、その内十五両を故郷の母の方に送て一時の窮を凌ぎました。人間は社会の虫なりと云うような次第で、ソレはソレは卑劣とも何とも實に云いようのない悪い事をして一寸とも愧じない。仮初にも是れはドウも有間敷事だなんと思たことがない。取らないのは損だとばかり、獵に行けば雀を撃たより雁を取た方がエライと云う位の了簡で、旨く大金を掠め取れば心窃に誇て居るとは、実に浅ましい事であるのみならず、本来私の性質がソレ程卑劣とも思わない、随分家風の悪くない家に生れて、幼少の時から心正しき母に育てられて、苟も人に交て貪ることはしないと説を立てゝ居る者が、何故に藩庁に対してばかり斯くまでに破廉恥なりしや、頓と訳けが分らぬ。シテ見ると人間と云う者はコリヤ

社会の虫に違ひない。社会の時候が有りのまゝに續けば、その虫
が虫を産んで際限のない所に、この蛆虫即ち習慣の奴隸が、不
図面目を改めると云うには、社会全体に大なる変革激動がなけれ
ばならぬと思われる。ソコで三百年の幕府が潰れたと云えば、是
れは日本社会の大変革で、隨分私の一身も始めて夢が醒めて、
藩庁に対する挙動も改まらなければならぬ。是れまで自分が藩庁
に向て愧ずべき事を犯したのは、畢竟 藩の殿様など云う者を
崇め奉つて、その極度はその人を人間以上の人と思い、その財産
を天然の公共物と思い、知らず識らず自から鄙劣に陥りしことな
るが、是れからは藩主も平等の人間なりと一念こゝに発起して、
この平等の主義からして物を貪るは男子の事に非ずと云う考えが

浮かんだのだろうと思われる。その時には特に考えたこともない、説を付けたこともないが、私の心の変化は恐ろしい。何故に以前藩に対してあれほど卑劣な男が後に至ては折角呉れようと云う扶持方をも一酷に辞退したか、辞退しなくつても世間に笑う者もないのに、打て変た人物になつて、この間まで丸で朝鮮人見たような奴が、恐ろしい権幕を以て呉れる物を刎返して、伯夷、叔齊ののような高潔の士人に変化したとは、何と激変ではあるまい。他人の話ではない、私が自分で自分を怪しむことであるが、畢竟封建制度の中央政府を倒してその倒るゝと共に個人の奴隸心を一掃したと云わなければならぬ。

支那の文明、望むべからず之を大きく論ずれば、彼の支那の事だ、

支那の今日の有様を見るに、何としても満清政府をあの儘に存じて置いて、支那人を文明開化に導くなんと云うことは、コリや眞実無益な話だ。何は扱置き老大政府を根絶やしにして仕舞て、ソレから組立てたらば人心こゝに一変することもあるう。政府に如何なるエライ人物が出ようとも、百の李鴻章りこうしょうが出て来たつて何にも出来はしない。その人心を新あらたにして国を文明にしようとなれば、何は兎ともあれ、試みに中央政所を潰すより外に妙策はなかろう。之これを潰して果して日本の王政維新のように旨うまく参るか参らぬか、屹きつと請合は難かたけれども、一国独立の為めとあれば試みにも政府を倒すに会釈はあるまい、國の政府か、政府の國か、このくらいの事は支那人にも分る筈はずと思う。

旧藩の平穏は自から原因あり私の經濟話から段々枝えだがさいて長くなりましたが、序ついでながら中津藩の事に就て、モ少し云う事があります。前に申す通り私は勤王佐幕など云う天下の政治論に少しも関係しないのみならず、奥平藩の藩政にまでも至極淡泊にあつたと云うその為ために、茲こゝに隨づいぶん分心に快いことがある、と云うのはあの王政維新の改革が行われたときに、諸藩の事情を察するに、勤王佐幕の議論さかんが盛もりで、動やわもすれば旧大臣等に腹を切らせるとか、大英断もつを以て藩政改革とか云う為めに、一藩中に争論が起り、党派が分れて血を流すと云うようなことは、何れの藩も十中八、九、皆ソレであつたその時に、若し私に政治上の功名心があつて、藩に行いつて佐幕とか勤王とか何か云出いいだせば、必ず一騒動を起すに違い

ない。所が私は黙て居て一寸も発言せず、人が噂うわさをすれば、爾そう喧やかましく云わんでも宜い、棄てゝ置きなさいと云うように、極淡泊にして居たから、中津なかつの藩中が誠に静で、人殺しも何もなかつたのはソレが為めためだらうと思ひます。人殺しどころか人を黜ちつちょ陥おとしたと云うこともなかつた。

藩の重役に因循姑息説を説くソコで私が明治三年、中津に母を迎いえに行たことがある、所がその時は藩政も大いに変かわて居まして、福澤が東京から來たから話を聞こうではないかと云うようなことになつて、家老の邸やしきに呼ばれて行た、所が藩の役人と云う有らん限りの役人重役が皆其處そこに出て居る。案するに、私が行たらば嘸さざドウも大変な事を云うだらうと待受まちうけて居たに違ちがいない。夫れか

ら私が其処に出席すると、重役達の云うに、藩はドウしたら宜か
 ろうか、方向に迷て五里霧中なんかんと、何か心配そうに話すか
 ら、私は之に答えて、イヤもう是れはドウするにも及ばぬことだ、
 能く諸藩では或は禄を平均すると云うような事で大分騒々しい
 が、私の考えでは何にもせずに今日のこの儘で、千石取て居る人
 は千石、百石取て居る人は百石、大平無事に悠々として居るが
 上策だと、その説を詳に陳べると、列座の役人は大層驚くと同時
 に、是れはくく穩かなことを云うものかな哉と云わぬばかりの趣で、
 大分顔色が宜い。

武器売却を勧む夫それから段々話が進んで来た所で、私は一つ注文
 を出した。今云う通り禄も身分も元の通りにして置くが宜かろう、

ソレは宜しいが、茲に一つ忠告したいことがある。今この中津藩には小銃もあれば大砲もあり、武を以て国を立てようと云うその趣おもむきはチャンと見えて居るが、併しかし今の藩士とこの藩に在る武器で以て果して戦争が出来るかドウか、私はドウも出来なかろうと思う、左れば今日只ただ今長州の人がズツと暴れ込めば長州に従わなければならぬ、又薩州の兵が攻せめく来れば之にも抵抗することが出来ないから薩州に従わなければならぬ、誠に心配な話である、之を私が言葉を設けて評すれば、弱藩罪つみなし武器災わざわいをなすと云わねばならぬ、ダカラ寧いっそこの鉄砲を皆うつ売しまして仕舞しまいたい、見れば大砲はいづれもクルップだ、これを売れば三千五千或あるいは一万円になるかも知れぬから、一切いつさい売しまつて仕舞しまつて昔の琉球見たようになつて仕舞うが

宜い、爾うして置いて長州から政めて来たら、ハイく、又薩摩から遣て来たら、ハイく、斯う為ようとか、アヽ為ようとか云えば、ドウか長州に行て直に話をして下さい、又長州ならドウか薩州に行て直談を頼むと云て、一切の面倒を他に嫁して、此方はドウでも宜いと、斯う云う仕向けが宜かろう、そうした所で殺しもしなければ捕縛して行きもしないから爾う云うようにしたい、そうして一方に於てはドウしてもこの世の中は文明開化になるに極てるから、学校を捨てて文明開化の何物たるを藩中の少年子弟に知らせると云う方針を執るが一番大事である、捨爾う云う方針を執るとして、武器を廃して仕舞えれば、余り割合が宜過ぎるようだが、ソコには斯う云うことがある、今私は東京の事情を察する

に、新政府は陸海軍を大に改革しようとして金がなくて困て居る、
 ソコで一片の願書なり届書なり認めしたたて出して見るが宜しい、その
 次第はこの中津藩なかつは武備を廃したる為ために年々何万円と云う余計
 な金がある、この金を納めましよから政府の方でドウでも為す
 つて下さいと斯う云いえば、海陸軍では大に悦よろこぶ、政府の身になつ
 て見れば、この諸藩三百の大名が各々色変りの武器を作り色変
 りの兵を備えて置くその始末に堪たまるものじやない、ドウしたツ
 て一様にしたいと云うのは、コリヤ政府の政略に於て有るに極きまつ
 訳わけではないか、然るに此処ここではクルツプの鉄砲だ、隣おひではアーネ
 ムストロングの大砲だ、イヤ彼處あそこでは仏蘭西フランスの小銃、此方は和蘭オラン
 から昔むかし輸入したゲベルを持って居ると云うような、日本國中

千種万様の兵備では、政府に於てイザ事と云ても戦争が出来そうにもしない、ソレよりかその金を納むるが宜い、爾うすれば独り政府が悦ぶのみならずして、中津藩も誠に安樂になる、所謂一拳両全の策であるから爾う遣りなさいと云た。

武士の丸腰所がソレには大反対さ。兵事係の役人が三人も四人も居る中で、菅沼新五右衛門すがぬましんごえもんと云う人などは大反対、満坐一致で、ソレは出来ませぬ、何の事はない、武士に向て丸腰になれと云うような説で、ソレ計りは何としても出来ないと云うから、私は深く論じもせず、出来なければ為なさるな、ドウでも宜しい、御勝手になさい、只私は爾ただうしたらば便利だと思う丈けの話だからと云て、ソレ切り罷めになつて仕舞しづまいましたが、併し私はその政治

論に熱しなかつたと云う為ために、中津の藩士が怪我を為なかつたと云うことは、是れは事實に於て間違いないことで、自から藩の為めに功德になつて居ましよう。その上に中津藩では減禄をしないのみならず、平均した所で増加した者がある。何でも大変に割合が宜かつた。例えば私の妻の里などは三百五十石取て居て三千円ばかりの公債証書を貰い、今泉（秀太郎氏なり）は私の妻の姉の家で三百五十石か取て居たが四千円も貰いましたろう。けれども藩士の禄券と云うものは悪錢身に付かずと云うような詫けで、終にはなくして仕舞つて何もありはしない。兎に角に中津藩の穩かであつたと云うことは間違いない話です。

商売の実地を知らず話は以前に立て復た經濟を語りましよ

う。私は金錢の事を至極大切にするが、商売は甚だ不得手である、
 その不得手とは敢て商売の趣意を知らぬではない、その道理は一
ひととお
こころえ
 通り心得て居る積りだが、自分に手を着けてぱいぱい売買かしかり貸借は
 何分ウルサクて面倒臭くて遣る気がない。且つむかしの士族書生
 の氣風として、利むさぼを貪るは君子の事に非ずなんと云うことが脳に
 染込んで、商売は愧はずかしいような心持こころもちがして、是れも自から
 身に着き纏まとううて居るでしょう。既すでにに江戸に始めて來たとき、同藩
 の先輩岡見彦曹おかみと云う人が、和蘭オランダ辞書の原書を翻ほんこく刻して一冊
 の代価五両、その時には安いもので随分望む人もある中に、私が
 世話をしても朋友に一冊買わせて、その代金五両を岡見もつに持て行く
 と、主人が金一分、紙に包んで呉くれれたから驚いた、是れは何の事

か少しも分らん、本の世話をして売うつたその札とは呆れた話だ、畢ひ
 競つきよう 主人が少年書生と見縊みくびつて金を恵む了簡であろう、無礼な
 事をするもの哉かなと少し心に立腹して、眞面目になつて争う事があ
 ると云うよくな次第で、物の売買に手数料などゝ云うことは町人
 共の話として、書生の身には夢ほども知らない。

火斗ひのうを買って貨幣法の間違さていを知る左れども是等は唯書生の一身に
 直接して然しかるのみ。扱經濟の理窟おおいに於ては當時町人共の知らぬ処
 に考かんがえの届いたくことがある。或あるとき私が鍛冶橋外かじばしそとの金物屋いっに行だて台
 火斗ひのうを買かつて、価もんめが十二匁およと云うその時、どう云う詰けだか供
 の者に錢を持たせて、十二匁なれば凡そ一貫二、三百文になるか
 ら、その錢を店の者に渡したときに、私が不図ふと心付た。この錢の

目方は凡そ七、八百目から一貫目もある、然るに錢の代りに請取つた台火斗は二、三百目しかない、錢も火斗も同じ銅でありながら、通用の貨幣は安くて売買の品は高い、是れこそ經濟法の大間違いだ、こんな事が永く続けば錢を鑄潰して台火斗を作るが利益だ、何としても日本の錢の価は騰貴するに違いないと説を定めて、一步を進めて金貨と銀貨との目方、性合を比較して見て、西洋の金一銀十五の割合にすれば、日本の貨幣法は間違いも間違いか大間違いで、私が首唱して云うにも及ばず、外国の商人は開国その時から大判小判の輸出で利を占めて居るとの風聞。ソレから私も知て居る金持の人々に頻りに勧めて金貨を買わせた事があるが、是れも唯人に話をする計りで自分には何にも為ようとも思付かぬ。

唯私の覚えて居るのは安政六年の冬、米国行の前、或人に金銀の話をして、翌年夏、帰国して見れば、その人が大に利益を得た様子で、御札おれいに進上すると云て、一朱銀の数も計えず私の片手に山盛り一杯金いんを呉くれたから、深く礼を云うにも及ばず、何は扱置き早速朋友さつそくを連れて築地の料理茶屋いっに行て、思うさま酒を飲ませたことがある。

簿記法を翻訳して簿記を見るに面倒なり先ずこの位まなことで、その癖私は維新後早く帳合之法ちようあいのほうと云う簿記法の書を翻訳して、今日世の中にある簿記の書は皆私の訳例に倣ならうて書かいしたものである。だから私は簿記の黒人くろうじんでなければならぬ、所が読書家の考かんがえと商売人の考とは別のものと見えて、私はこの簿記法を実地に活用す

ることが出来ぬのみか、他人の記した帳簿を見ても甚だ受取が悪い。ウンと考へれば固より分らぬことはない、屹と分るけれども、唯面倒臭くてソンな事をして居る氣がないから、塾の会計とか新聞社の勘定とか、何か入組んだ金の事はみんな任せにして、自分は唯その總体の締て何々と云う数を見る計り。^{ばか}こんな事で商売の出来ないのは私も知て居る。例えば塾の書生などが学費金を持て来て、毎月入用だけ請取りたいから預けて置きたいと云う者がある。今の貴族院議員の滝口吉良なども、先年書生の時はその中の一人で、何百円か私の處に預けてあつたが、私はその金をチャンと簞笥の袖^{ひきだし}斗に入れて置て、毎月取りに来れば十円でも十五円でも入用だけ渡して、その残りは又紙に包んで仕舞て置く。

その金を銀行に預けて如何すれば便利だと云うことを知るまい事か、百も承知で心に知て居ながら、手で為ることが出来ない。銀行に預けるは扱置きさて、その預た紙幣の大小をちよいと一寸私に取替えてもと本の姿を変えることも気が済まない。如何でも是れは持て生れた藩士の根性か、然らざれば書生の机の抽斗ひきだしの会計法でしよう。

借用証書があらば百万円遣ろうソコで或時例の金融家のエライ人が私方に来て、何か金の話になつて、千種万様、実に目に染みるような混雜な事を云うから、扱さく如何もウルサイ事だ、この金を彼方あつちに向けて、彼の金は此方こっちに返えすと云う話であるが、人に貸す金があれば借りなくても宜さうなものだ、商売人は人の金を借りて商売すると云うことは私も能く知て居るが、苟も人に

金を貸すと云うことは余た金があるから貸すのだ、仮令あまつい商売人でも貸す金があるなら成るなたに成るだけ借用しないようにするのが本意ではないか、然るにをば成るただけ借用しないようにするのが本意ではないか、然るに自分に資本を持て居ながら、態々わざわざ人に借用とは入らざる事をしたものだ、余計な苦労を求めるようなものだと云うと、その人が大に笑て、迂闊おおわらつ千万、途方うかつもない事を云う、商売人と云うものは入組いりくんでく滅茶々々めちゃめちゃになつたと云うその間に、又種々様々いの面白いことのあるもので、そんな馬鹿な事が出来るものか、啻ただに商売人に眼らず、凡そ人の金を借用せずに世の中を渡ると云うことが出来るものか、ソンな人が何處どこに在るかと云て私を冷却いっするから、私はその時始めてヒヨイと思付おもいつた。今御話を聞けば、世の中

に借金しない者が何処に在るかと云うが、その人は今こゝに居ます。私は是れまで只の一度も人の金を借りたことがない。「そんな馬鹿な事を云いなさるな。」「イヤ如何してもない。生れて五十年（是れは十四、五年前の話）人の金を一銭でも借りたことはない。ソレが嘘ならば、試に私の印形の据て居るものとは云わない、反古ほごでも何でも宜しい、ソレを搜して持もつて来て御覧。私が百万円で買おう。ドウしたつてありはしない。日本国中に福澤かいの書た借用証文と云うものはソレこそ有る氣遣いはないが如何だ、と云うような訳わけけで、その時に私も始めて思い出したが、私は生れてこの方かたち遂そで金を借りたことがない。是れはマア私の眼から見れば尋常一樣の事と思うけれども、世間の人が見たらば甚はなはだ尋常一樣で

ないのかも知れぬ。

金を預けるも面倒なりソレで私は今でも多少の財産を持って居る、持て居たけれども私ところの会計と云うものは至極簡単で、少しも入込んだことはない。この金を誰に返^かえさなければならぬ、之を此方^{こちら}に振向^かけなければならぬと云うような事は絶えてない。ソレで僅^{わずか}かばかり二百円とか三百円とか云^いう金が、手元にあつてもなくとも構わない、ソレを銀行に預けて、必要のとき小切手で払いをすれば利息が徳になると云う、ソレは私も能く知^よりて居て、世間一体そう云う風^{ふう}になりたいとは思えども、扱^{さて}自分には小面倒^{こめんどう}臭い、ソンな事にドタバタするよりか、金は金で仕舞^{しまつ}て置^{おい}て、払うときにはその紙幣^{さつ}を計^{かぞ}えて渡して遣^やると、斯^こう云う趣向にして、

私も家内もその通りな考え方で、真実封建武士の机の抽斗の会計と云うことになつて、その話になると丸で別世界のようで、文明流の金融法は私の家に這入はいりません。

仮初にも愚痴を云わず夫れからして、世間の人が私に對して推察する所を、私が又推察して見るに、ドウも世人の思う所は決して無理でない、と云うのは私が若い時から困こまつたと云うことを一言でも云うたことがない、誠に家事多端で金の入用が多くて困るとか、今歳ことしは斯う云う不時な事があつて困却致すとか云うような事を、仮初かりそめにも口外したことがない、私の眼には世間が可笑おかしく見える、世間多数の人が動やもすれば貧乏で困る、金が不自由だ、無力だ、不如意だ、なんかんと愚痴をこぼすのは、或あるいは金を貸し

て貰^{もら}いたいと云うような意味で言うのか、但^{ただ}しは洒落^{しゃれ}に言うのか、飾りに言うのか、私の眼から見れば何の事だか少しも詫^わけが分らない、自分の身に金があろうとなかろうと敢^{あえ}て他人に関係したことでない、自分一身の利害を下らなく人に語るのは独^{ひとりごと}語^{を言}うようなもので、こんな馬鹿^{ばかげ}氣^きた事はない、私の流儀にすれば金がなければ使わない、有ても無駄に使わない、多く使うも、少な^{あつ}く使うも、一切^{いつきい}世間の人のお世話に相成^{あいな}らぬ、使いたくなれば使わぬ、使いたければ使う、嘗て人に相談しようとも思わなければ、人に喙^{くちばし}を容れさせようとも思わぬ、貧富苦楽、共に独立独歩、ドンな事があつても、一寸^{ちよいと}でも困^{こまつ}たなんて泣言^いを云わずに何時も悠々として居るから、凡俗世界ではその様子を見て、コリ

ヤ何でも金持かねもちだと測量する人もありましよう。所が私は又その測量者があろうとなからうと、その推測が中あたろうと中のまいと、少しも頓着とんじやくなしに相替らず悠々として居ます。既すでに先年、所得税法の始めて発布せられた時などは可笑おかしい、区内の所得税掛りとか何とか云う人が、私の家には財産が凡およそ七十万円あるその割合で税を取ると、内々云いつて來た者があるから、私がその者に云うに、何卒どうぞその言葉を忘れて呉れるな、見て居る前で福澤の一家残らず裸体はだかになつて出て行くから、七十万で買かつて貰いたい、財産は帳面のまゝ渡して、家も倉も衣服も諸道具も鍋も釜も皆遣やるから、ソックリ買かいとつ取て七十万円の金に易かえたい、唯漠然たる評価は迷惑だ、現金で売買したい、爾そうなれば生来始めての大儲けで、

生涯さぞ安樂であろうと云て、大笑いしたことがあります。

他人に私事を語らず私が經濟上に堅固を守て臆病で大胆な事の出来ないのは、先天の性質であるか、抑も亦身の境遇に駄られて遂に堅く凝り固まつたものでしよう。本年六十五歳になりますが、

二十一歳のとき家を去て以来、自から一身の謀を為し、二十三歳、家兄を喪いしより後は、老母と姪と二人の身の上を受け、二十八歳にして妻を娶り子を生み、一家の責任を自分一身に担うて、今年に至るまで四十五年のその間、二十三歳の冬大阪緒方先生に身の貧困を訴えて大恩に浴したるのみ、その他は仮初にも身事家の私を他人に相談したことなれば又依頼したこともない。人の智恵を借りようとも思わず、人の差圖を受けようとも思わず、

人間万事天運に在りと覺悟して、勉めることは飽くまでも根氣能く勉めて、種々様々の方便を運らし、交際を広くして愛憎の念を絶ち、人に勧め又人の同意を求めるなどは十人並に遣りながら、ソレでも思う事の叶わぬときは、尚おそれ以上に進んで哀願はない、唯元に立戻て獨り静に思止るのみ。詰る所、他人の熱に依らぬと云うのが私の本願で、この一義は私が何時発起したやら、自分にも是れと云う覚えはないが、少年の時からソンな心掛け、イヤ心掛けと云うよりもソンな癖があつたと思われます。

按摩を学ぶ中津に居て十六、七歳のとき、白石と云う漢学先生の塾に修業中、同塾生の医者か坊主か二人、至極の貧生で、二人とも按摩をして凌いで居る者がある。その時、私は如何でもして

国を飛出そうと思って居るから、之を見て大に心を動かし、コリヤ面白い、一文なしに國を出て、ソレから二人の者に按摩の法を習い、頻りに稽古して隨分上達しました。幸にその後按摩の芸が身を助ける程の不仕合もなしに済みましたが、習うた芸は忘れぬもので、今でも普通の田舎按摩よりかエライ。湯治などに行って家内子供を揉んで遣て笑わせる事があります。こんな事がマア私の常に云う自力自活の姿とでも云うべきものか、是れが故人の伝を書くとか何とか云えば、何々氏夙に独立の大志あり、年何歳その学塾に在るや按摩法を学んで云々などと、鹿爪らしく文字を並べるであります。が、私などは十六、七のとき大志も何もありはせぬ、唯貧乏

でその癖、学問修業はしたい、人に話しても世話をしても呉れる気遣いなし、しようことなしに自分で按摩と思付た事です。凡そ人の志はその身の成行次第に由て大きくもなり又小さくもなるもので、子供の時に何を言おうと何を行おうと、その言行が必ずしも生涯の抵当になるものではない、唯先天の遺伝、現在の教育に従^{したがつ}て、根氣能く勉めて迷わぬ者が勝を占めることでしょう。

一大投機私が商売に不案内とは申しながら、生涯の中で大きな投機のようなことを試みて、首尾能く出来た事があります。ソレは幕府時代から著書翻訳を勉めて、その製本 売捌の事をば都^{すべ}て書林に任してある。所が江戸の書林が必ずしも不正の者ばかりでもないが、兎角人を馬鹿にする風がある。出版物の草稿が出来

ると、その版下を書くにも、版木版摺はんぎはんずりの職人を雇うにも、亦そ
の製本の紙を買入るゝにも、都すべて書林の引受けで、その高いも安いも云うがまゝにして、大おおもと本の著訳者は当合扶持あてがいぶちを受けられる
と云うのが年来の習慣である。ソコで私の出版物を見ると中々大層なもので、之を人任せにして不利益は分わかつて居る。書林の奴等に何程の智恵もありはしない、高たかの知れた町人だ、何でも一切の
権力を取揚とりあげげて此方こっちのものにして遣やろうと説とつつきはを定さだめた。定めたは宜いが実は望洋の歎で、少しも取付端はさみがない。第一番の必要と云うのが職人を集めなければならぬ。今まで書林が中に挟はさまつて居て、一切の職人と云う者は著訳者の御直参おじきさんでなく、向う河岸に居るようなものだから、彼れを此方の直轄にしなければなら

ぬと云うのが差向さしむきの必要。ソコで私は一策を案じたその次第は、
 当時、明治の初年で余程金もあり、之を搔集かき集めて千両ばかり出来
 たから、夫れから数寄屋町の鹿島と云う大きな紙問屋に人を遣やつて、
 紙の話をして、土佐半紙を百何十俵、代金千両余りの品を即金で
 一度に買うことに約束をした。その時に千両の紙と云うものは実
 に人の耳目じもくを驚かす。如何なる大書林と雖いえども、百五十両か二百両
 の紙を買うのがヤツトの話で、ソコへ持て来て千両現金、直ぐに
 渡して遣ると云うのだから、値ねも安くする、品物も宜い物を寄越
 すに極きまつてる。高かつたか安かつたか知らないが、百何十俵の半紙
 を一時に新錢座しんせんざに引取て、土蔵一杯積込んで、ソレから書林
 に話して版摺の職人を貸して呉くれと云うことにして、何十人と云

う大勢の職人を集め、旧同藩の士族二人を監督に置いて仕事をさせて居る中に、職人が朝夕紙の出入れをするから、蔵に這入てその紙を見て大に驚き、大変なものだ、途方もないものだ、この家に製本を始めたが、このくらい紙があれば仕事は永続するに違いないと先ず信仰して、且つ此方では払いをクリ／＼して遣ると云うような訳けで、是れが端緒になつて、職人共は問わず語りに色々な事を皆白状して仕舞う。此方の監督者は利いた風をして居るが、その実は全くの素人でありながら、職人に教わるようなもので、段々巧者になつて、ソレから版木師も製本仕立師も次第々々に手に附けて、是れまで書林の為すべき事は都て此方の直轄にして、書林には唯出版物の売捌を命じて手数料を取らせる計りのこ

としたのは、これは著訳社会の大変革でしたが、唯この事ばかりが私の商売こころを試みた一例です。

品行家風

莫逆の友なし経済の事は右の如くにして、私は私の流義ごじを守まもつて生涯このまま替えず終ることであろうと思いますが、ソレから又自分の一身の行状は如何どうであつたか、家を成した後に家の有様は如何かと云うことに付ついて、有りのまゝの次第を語りましよう。扱さて私の若い時は如何だと申すに、中津なかつに居たとき子供の時分から成年に至るまで、何としても同藩の人と打解けて眞実に交わること

が出来ない、本当に朋友になつて共々に心事を語る所謂莫逆の友と云うような人は一人もない、世間にはいのみならず親類中にもない、と云て私が偏窟者で人と交際が出来ないと云うではない。ソリヤ男子に接しても婦人に逢うても快く話をして、ドチラかと云えばお饒舌りの方であつたが、本当を云うと表面ばかりで、実はこの人の真似をして見たい、彼の人のように成りたいとも思わず、人に誉められて嬉しくもなく、悪く云われて怖くもなく、都て無頓着で、悪く評すれば人を馬鹿にして居たようなもので、仮初にも争う気がないその証拠には、同年輩の子供と喧嘩をしたことがない、喧嘩をしなければ怪我もしない、友達と喧嘩をして泣て家に帰て阿母さんに言告けると云うようなことは唯の

一度もない。口先ばかり計り達者で内実は無難無事な子でした。

大言壯語の中、忌むべきを忌むソレから國さつを去て長崎ながさきに行き大阪に出でその修業中も、ワイわい／＼朋友と共に笑い共に語かたつて浮うかく々して居るようにあるけれども、身の行状つつしを慎つつしみ品行を正しくすると云うことは、努つとめずして自然にソレが私の体に備そなわつて居ると云いつても宜よろしい。モウそれはさん／＼な乱暴な話をして、大言壯語、至らざる所なしと云う中にも、嫌いやらしい汚いいだない話と云うことは一寸とでも為したことがない。同窓生の話に能よくある事で、昨夜、北の新地に遊んでなんと云うような事を云いいだ出よそうとすると、私は態わざと其処そこを去らずに大箕坐あぐらをかけてワイ／＼とその話を打消し、「馬鹿野郎、余計なことを口走るな、と云うような調子で雜まぜ返して

仕舞う。ソレから江戸に出て来ても相替らずその通り、朋友も多い事だから相互に往来するのは不斷の事で、頻りに飛廻って居たけれども、扱例の吉原とか深川とか云う事になると、朋友共が私に話をすることが出来ない。その癖私は能く事情を知て居る。誠に事細に知て居るその訳けは、小本なんぞ読むにも及ばず、近く朋友共が馬鹿話に浮かれて饒舌るのを、黙て聞いて居れば容易に分る。六かしい事も何にもない、チヤンと呑込んで知つて居るけれども、如何なこと、左様な事を思出したこともないのみならず、吉原深川は扱置き、上野の花見に行たこともない。始めて上野、向島を見る私は安政三年、江戸に出て来て、只酒が好きだから所謂口腹の奴隸で、家にない時は飲みに行かなけりわゆるこうふく

ればならぬ、朋友相会あいかいすれば飲みに行くと云うような事は、ソリヤ為て居るけれども、遂ついぞ花見遊山はしない。文久三年六月、緒方先生不幸のとき、下谷したやの自宅出棺、駒込の寺に葬式執行しつこうのその時、上野山内を通行して、始めて上野と云う処を見た。すなわち私が江戸に来てから六年目である。「成なる程これが上野か、花の咲く処かと、通行しながら見物しました。向島もその通りで、江戸に来てから毎度人の話には聞くが一度も見たことがない。所で明治三年酷ひどい腸窒扶斯ちようフスを煩い、病後の運動には馬に乗るのが最も宜しいと、医者も勧め朋友も勧めたので、その歳の冬から馬に乗て諸方を乗廻りのりまわ、向島と云う処も始めて見れば、玉川辺にも遊び、市中内外、行かれる処だけは何処どこでも乗廻わして、東京の方

角も大抵分りました。その時に向島は景色もよし道もよし、毎度馬を試みて、向島を廻つて上野の方に帰て来るとき、何でも土手のsuchな處を通りながら、アゝ彼処が吉原かと心付て、ソレではこのまゝ馬に乗^(のつ)て吉原見物を為^(あ)ようじやないかと云出したら、連騎の者が場所柄に騎馬では余り風^(ふう)が悪いと止めて、ソレ切りになつて未だに私は吉原と云う処を見たことがない。

小僧に盃を差す斯う云うような次第で、一寸^(ちよい)と人が考へると私は奇人偏^(へんくつ)窟者^(つきあ)のように思われましようが、決して爾^(そ)うでない。私の性質は人に附合^(つきあ)して愛憎^(あいそう)のない積りで、貴賤貧富、君子も小人も平等一樣、芸妓に逢うても女郎を見ても塵も埃も之を見て何とも思わぬ。何とも思わぬから困ることもない。此奴は穢^(けが)れた

動物だ、同席は出来ないなんて、妙な渋い顔色して内実プリく
 怒ると云うような事は決してない。古いむかしの事であるが、四
 十余年前、長崎に居るとき、光永寺と云う 真宗寺しんしゅうでらに同藩の家
 老が滞留中、或日市中の芸妓げいぎか女郎か五、六人も変な女を集めて
 酒宴の愉快、私はその時酒を禁じて居るけれども陪席御相伴ごしうばんを
 仰せ付けられ、一座杯盤狼藉はいばんろうぜきの最中、家老が私に杯をさして、
 「この酒を飲んで、その杯を座中の誰でも宜しい、足下の一番好
 いてる者へさすが宜かろうと云うのは、実は其處そこに美人が幾人も
 居る、私はその杯を美人にさしても可笑しい、態わざと避けてさゝな
 くとも可笑しい、屹きつと困るであろうと酙なぶるのはチヤントわかつ分て居る。
 所が私は少しも困らない。杯をグイと干して、大夫さんの命に従

い一番好いた人に上げます、ソレ高さん、と云て杯をさしたのは、六、七歳ばかりの寺の末子で、私が瀉蛙々々として笑て居たから家老殿も興にならぬ。既に今年春ジヤパン・タイムス社の山田季治が長崎へ行くと聞き、不図光永寺の事を思出して、あの時は如何なつてるか、高さんと云う小僧があつた筈だが、如何して居るか尋ねて見たいと申したら、山田の返事に、寺は旧の通り焼けもせず、高さんも無事息災、今は五十一歳の老僧で隠居して居るとて写真など寄送しましたが、右の一件も私の二十一歳の時だから、計えて見ると高さんは七歳でしたろうに、恐ろしい古い話です。嫌疑を憚らず左様いう訳けで私は若い時から婦人に対して仮初にも無礼はしない。仮令い酒に酔ても謹しむ所は屹と謹しみ、女

の忌がるような禁句を口外したことはない。上戸本性で、謹みながら女を相手に話もすれば笑いもして談笑自在、何時も慣れゝしくして、その極は世間で云う嫌疑と云うような事を何とも思わぬ。血に交わりて赤くならぬこそ男子たる者の本領であると、チヤンと自分に説を極めてあるから、男女夜行くときは灯を照らすとか、物を受授するに手より手にせずとか、アンな古めかしい教訓は、私の眼から見ると唯可笑しいばかり。扱もゝ卑怯なる哉、ソンな窮窟な事で人間世界が渡れるものか、世間の人が妙な処に用心するのはサゾ忙しいことであろう、自分は古人の教に縛られる気はない、自から自分の身を信じて颶々と人の家に出入りして、其處にお嬢さんが居ようと、若い内君が独り留守して

居ようと、又は杯盤狼藉はいばんろうぜきの常に芸妓とか何とか云う者が騒いで居ようと、少しも遠慮はしない。酒を飲のんで大きな声をしてドン／＼話をして、酔えば面白くなつて戯れて居ると云うような風ふうであるから、あるいは人が見たらば変に思うこともありましよう。

醜声外聞の評判却て名譽ソコで或時奥平藩の家老が態々わざわざ私を呼びによこして、扱さげ云うよう、足下そこかは近来某々それそれの家などに毎度出入して、例の如く夜分晚くまで酒を飲で居るとの風聞、某家には娘もあり、某家は何時も芸妓など出入して家風よろが宜しくない、足下がそんな処に近づいて醜声外聞とは残念だ、君子は瓜田かでんに履くつを結ばず、李下りいかに冠を正さずと云うことがある、年若い大事な身体からだである、少し注意致したら宜かろうと、真面目まじめになつて忠告した

から、私はその時少しも謝らない。左様で御在ますか、コリヤ面白い。私は今まで随分太平楽を云たとか、恐ろしい声高に話をして居たとか云て、毎度人から嫌がられたこともありました。が、併し艶男と云われたのは今日が生れてから始めて。コリヤ私の名譽で、至極面白い話だから私は罷めますまい。相替らずその家に入出しましよう。此処で御注意を蒙て夫れで前非を改めて罷めるなんて、ソンな弱い男ではござらぬ。但し御親切は難りがた有い、御札は申上げましようが、実は私は何とも思わぬ。却て面白いから、モツと評判を立てゝ貰いたいと云て、冷かして帰た事があります。

始めて東京の芝居を観る前に申す通り、私は江戸に来て六年目に

始めて上野と云う処を見て、十四年自に始めて向島を見たと云うくらいの野暮やぼだから、勿論芝居などを見物したことはない。少年のとき旧藩中津なかつで、藩主が城内の能舞台で田舎の役者共を呼出して芝居もよおを催し、藩士ばかりに陪観ばいかんさせる例があつて、その時に一度見物して、その後大阪修業中、今の市川團十郎の実父海老藏えびぞうが道頓堀の興行中、或る夜同窓生が今から道頓堀の芝居に行くから一緒に行こう、酒もあると云うから、私は酒さけと聞いて応と答え、ソレから行く道で酒を一升かつ買って、徳利たづさを携えて二、三人連れで芝居に這入り、夜分二幕か三幕見たのが生来二度目の見物。ソレから江戸に来て、江戸が東京となつても、芝居見物の事は思出しもせず、又その機会もなくして居る中に、今を去ること凡そ

十五、六年前、ふと不図した事で始めて東京の芝居を見て、その時戯たわぶれに、

誰道名優伎絶倫

先生遊戯事尤新

春風五十独醒客

却作梨園一醉人

と云いう詩が出来ました。之を見ると私が変人のようにあるが、実

は鳴物は甚だ好きで、女の子には娘にも孫にも琴、三味線を初

め、又運動半分に踊の稽古もさせて老余唯一の樂みにして居ます。

不風流の由来元來私は生れ付き殺風景でもあるまい、人間の天

性に必ず無芸殺風景と約束があるでもなかろうと思うが、何分私

の性質と云うよりも少年の時から様々の事情がコンな男にして仕舞たのでしよう。先ず第一に私は幼少の時から教育の世話をしてくれるので、口クに手習^{てならい}をせずに成長したから、今でも書が出来ない。成長の後でも自分で手本を習たら宜さそうなのだが、その時は既に洋学の門に入て天下の儒者流を目の敵にし、儒者のすることなら一から十まで皆気に入らぬ、就中そ^{なかんづく}の行状が好かない。口に仁義忠孝など饒舌^{しゃべ}りながら、サアと云うときには夫れ程に意氣地^{いくじ}はない。殊に不品行で酒を飲^{のん}で詩を作て書が旨いと云えば評判^よが宜い。都て気に喰^くわぬ。よし／＼洋学流の吾々^{われわれ}は反対に出掛けて遣^やろうと云う気になつて、恰も江戸の剣術全盛の時代に刀剣を売^{うり}払^{はらつ}て仕舞^{しま}い、兼て嗜^すきな居合^{いあい}も罷めて

知らぬ風をして居たような塩梅式に、儒者の奴等が詩を作ると云えば此方は殊更らに等閑にして善く書かずに見せようと、飛だ処に力身込んで手習をしなかつたのが生涯の失策。私の家の遺伝を云えば、父も兄も文人で、殊に兄は書も善くし、画も出来、篆刻も出来る程の多芸な人に、その弟はこの通りな無芸無能、書画は扱置き骨董も美術品も一切無頓着、住居の家も大工任せ、庭園の木石も植木屋次第、衣服の流行など何が何やら少しも知らず又知ろうとも思わず、唯人の着せて呉れるもの着て居る。或る時家の留守に急用が出来て外出のとき、着物を着替えようと思ひ、箪笥の引出しを明けて一番上にある着物を着て出て、帰宅の

上、家内の者が私の着て居るのを見て、ソレは下着だと云て大に笑われたことがある。殺風景も些ちと念ねん入いりの殺風景で、決して誉ほめめた話でない。畢ひつき竟よう少年の時から種々様々の事情に逐おわれてコンな事に成行き、生涯これで終るのでしよう。兎角とかく世間の人の悦んで居るような事は、私には樂みにならぬ、誠に損な性分です。ダカラ近來は芝居を見物したり、又は宅に芸人など呼ぶこともあらが、是れとて無上の快樂事とも思われず、マアく児孫まごこを集め共に戯れたわぶ、色々な芸をさせたり嗜すきな物を馳走ちそうしたりして、一家内の長少睦たがいしく述解かたけて談り笑うその談笑の声を一種の音楽として、老余の樂みにして居ます。

妻を娶て九子を生むソレから私方の家事家風を語りましよう。文

久元年、旧同藩士の媒妁を以て同藩士族江戸定府土岐太郎八の次女を娶り、是れが今のお妻です。結婚の時私は二十八歳、妻は十七歳、藩制の身分を申せば妻の方は上流士族、私は小士族、少し不釣合のようにあるが、血統は兩人共頗る宜しく、往古はイザ知らず、凡そ五世以降双方の家に遺伝病質もなければ忌むべき病に罹りたる先人もなし。妻は無論、私の身に悪疾のあるべきようもなく、夫妻無病。文久三年に生れたのが一太郎、その次は捨次郎と、次第に誕生して四男五女、合して九人の子供になり、幸にして九人とも生れたまゝ皆無事で一人も欠けない。九人の内五人までは母の乳で養い、以下四人は多産の母の身体衛生の為めに乳母を雇うて育てました。

子供の活動を妨げず養育法は着物よりも食物の方に心を用い、粗服はさせても滋養物は屹^{きつ}と与えるようにして、九人とも幼少の時から体養に不足はない。又その躾^{しつけかた}方^{また}は温和と活潑^{かつぱつ}とを旨とし、大抵^{たいてい}の処までは子供の自由に任せる。例えば風呂の湯を熱くして無理に入れるような事はせず、据風呂^{すえふろ}の側^{そば}に大きな水桶を置いて、子供の勝手次第に、ぬるくも熱くもさせる。全く自由自在のようなれども、左ればとて食物を勝手に任せ^{まか}て何品でも喰い次第にすると云う訳^{わけ}ではない。又子供の身体の活潑を祈れば室内の装飾などは逆^{とて}も手に及ばぬ事と覺悟して、障子^{からかみ}唐紙^{からかみ}を破り諸道具に疵^{きず}付けても先ず見逃がしにして、大抵^まな乱暴には大きな声をして叱ることはない。酷く剛情を張るような事があれば、父母

の顔色をむずかしくして睨む位が頂上で、如何なる場合にも手を下くだして打たことは一度もない。又親が実子に向ても嫁に接しても、又兄姉が弟妹に対しても名を呼棄にせず、家の中に嚴父慈母の区別なく、嚴と云えば父母共に嚴なり、慈と云えば父母共に慈なり、一家の中は丸で朋友のようで、今でも小さい孫などは、阿母さんはどうかすると怖いけれども、お祖父さんが一番怖くないと云て居る。世間並にすると少し甘いように見えるが、ソレでも私方の孫子に限て別段に我儘わがままでもなし、長少戯れながら長者の眞面目に言う事は能く聞いて逆う者もないから、余り厳重にせぬ方が利益かと思われる。

家に秘密事なし又家の中に秘密事なしと云うのが私方の家風で夫

婦親子の間に隠す事はない、ドンな事でも云われないことはない。子供が段々成長して、是れは彼の子に話して此の子には内証なんて、ソンな事は絶えてない。親が子供の不行届を咎めて遣れば、子供も亦親の失策を笑うと云うような次第で、古風な目を以て見ると一寸と尊卑の礼儀がないように見えましょ。

礼儀足らざるが如しその礼儀の事に就て申せば、家の主人が出入するとき家内の者が玄関まで送迎して御辞儀をすると云うような事が能く世間にあるが、私の処では絶えてソンな事がない。私の外出するには玄関からも出れば台所からも出る。帰るときもその通りで唯足の向た方に這入て来る。或は車に乗て帰て来た時に、車夫又別当共へ、玄関の処で御帰りなんて余計な事を云て呉れる

な、と云う訳けであるから、幾ら玄関で怒鳴どなつても出て来る人はない。その一点になると世間の人じやない近くは内の御祖母おばばさんが怪んあやしで居ましよう。この老人は土岐家とぎの後室、本年七十七歳、むかしは奥平藩士の奥様で、武家の礼儀作法を大事に勤めた身であるから、今日の福澤の家風を見て、何分不作法で善くない、左ればとて是これが悪いと云う箇条もない、妙な事だと見て居るだろうと、私は窃ひそかに推察します。

子女の間に軽重なしソレから又私に九人の子供があるが、その九人の中に輕重愛憎けいじゅうあいそうと云うことは眞実ちよい一寸ともない。又四男五女のその男の子と女の子と違まいのあられよう訳けもない。世間では男子が生れると大造目出度めでたがり、女の子でも無病なれば先ずノ

\目出度いなんて、おのずから軽重があるようだが、コンな馬鹿氣た
 事はない。娘の子なれば何が悪いか、私は九人の子がみんな娘だ
 つて少しも残念と思わぬ。唯今日では男の子が四人、女の子が五
 人、宜い塩梅に振分けになつてるとと思うばかり、男女長少、腹
 の底から之を愛して兎の毛ほども分隔ではない。道徳学者は動
 もすると世界中の人を相手にして一視同仁なんて大きな事を云て
 るではないか。況して自分の生んだ子供の取扱いに、一視同仁が
 出来ぬと云うような浅ましい事があられるものか。唯私の考に、
 総領もその他の子供も同じとは云いながら、私が死ねば総領が相
 続する、相続すれば自から中心になるから、財産を分配するにも、
 外の子に比較して一段手厚くして、又何か物があつて、兄弟中誰

にも遣りようがない、唯一つしかないと云うような物は、總領の一太郎が取て宜かろうと云うくらいな事で、その外には何も変ることはない。例えば斯う云う事がある。明治十四、五年の頃、月日は忘れたが、私が日本橋の知る人の家に行つて見ると、その座敷に金屏風だの蒔絵だの花活はないけだのゴテきく一杯に列ならべてある。コリヤ何だと聞いて見れば、亞米利加アメリカに輸出する品だと云う。夫れから私が不図ふとした出来心で、この品を一目見渡して私の欲しいものは一品でもない、皆不用品だが、又入用と云えば一品も残さず皆入用だ、兎に角とくに之これを亞米利加に積出して幾らの金になれば宜いのかソレは知らぬけれども、売ると云えば皆買うが如何どうだ、買ったからと云てソレを又儲けて売ろうと云うのではない、家に仕舞しまい込また

んで置くのだと云うと、その主人も唯の素町人でない、成程爾う
 だな、コリヤ名古屋から来た物であるが、亞米利加に遣て仕舞え
 ば是れ丈けの品がなくなる、お前さんの処に遣れば失くならずに
 あるから売りましよう、ソンなら皆買うと云て、二千二、三百円
 かで、何百品あるか碌に品も見ないで皆買って仕舞たが、夫れから
 私がその品を見て樂むではなし、品柄も能く知らず数も覚えず、
 唯邪魔になるばかりだから、五、六年前の事でした、九人の小供
 に分けて取て仕舞えと申して、小供がワイ／＼寄て、その品を九
 に分けて、ソレを籤で取て、今では皆小供が銘々に引受けて、
 家を持て居る者は家に持て行く者もあり、マダ私のところの土蔵
 の中に入れてあるのもある、と云うのが凡そ私の財産分配法で、

如何にもその子に厚薄と云うものは一寸ともないのですから、小供の中に不平があろうたツて有られた訳けのものでないと見て居ます。

西洋流の遺言法に感服せず近來遺言も書きました。遺言の事に就ては、能く西洋の話にある主人の死んだ後で遺言書を明けて見てワツと驚いたなんて云う事は毎度聞^{きい}てるが、私は甚だ感服しない。死後に見せることを生前に言うことが出来ないとは可笑^{はなは}_{おか}しい。畢^ひ

竟^{つきよう} 西洋人が習慣に迷うて馬鹿をして居るのだ、乃公はソンな

馬鹿の真似はしないぞと云^{いつ}て、家内子供に遺言の書付を見せて、

この遺言書は筆筒^{たんす}のこの抽斗^{ひきだし}に這^は入^いて居るから皆能く見て置け、

又説^{また}が変れば又書^{かきか}えて又見せるから、能く見て置^おいて、乃父の死

んだ後で争うような卑劣な事をするなよと申して笑て居ます。

体育を先にす扱又子供の教育法に就ては、私は専ら身体の方を大事にして、幼少の時から強いて読書などさせない。先ず獸身を成して後に人心を養うと云うのが私の主義であるから、生れて三歳五歳まではいろはの字も見せず、七、八歳にもなれば手習をさせたりさせなかつたり、マダ読書はさせない。夫れまでは唯暴れ次第に暴れさせて、唯衣食には能く気を付けて遣り、又子供ながらも卑劣な事をしたり賤しい言葉を真似たりすれば之を咎るのみ、その外は一切投遣りにして自由自在にして置くその有様は、犬猫の子を育てるに変わることはない。即ち是れが先ず獸身を成すの法にして、幸に犬猫のように長成して無事無病、八、

九歳か十歳にもなればソコで始めて教育の門に入れて、本当に毎日時を定めて修業をさせる。尚おその時にも身体の事は決して等閑にしない。世間の交母は動もすると勉強々々と云て、子供が静にして読書すれば之を賞める者が多いため、私方の子供は読書勉強して遂ぞ賞められたことはないのみか、私は反対に之を止めて居る。小供は既に通り過ぎて今は幼少な孫の世話ををして居るが、矢張り同様で、年齢不似合に遠足したとか、柔術体操がエラクなつたとか云えば、褒美でも与えて賞めて遺るけれども、本を能く読むと云て賞めたことはない。既に二十年前の事です。長男一太郎と次男捨次郎と兩人を帝国大学の予備門に入れて修学させて居た処が兎角胃が悪くなる。ソレから宅に呼返して色々手当

すると次第に宜くなる。宜くなるから又入れると又悪くなる。到と
 頭三度入れて三度失敗した。その時には田中不二麿たなかふじまろと云う人が
 文部の長官をして居たから、田中にも毎度話をしました。私方の
 小供を予備門に入れて実際の実験があるが、文部学校の教授法を
 このまゝにして遣て行けば、生徒を殺すに極きまつて居る。殺さなければ
 気狂いになるか、然らざれば身心共に衰弱して半死半生の片輪
 者になつて仕舞しまうに違ひない。丁度ちょうどこの予備門の修業が三、四
 年かかる、その間に大学の法が改まるだろうと思つて、ソレを使り
 に子供を予備門に入れて置くが、早く改正して貰もらいたい。この儘まま
 で置くなれば東京大学は少年の健康屠殺場と命名して宜しい。早
 々教授法を改めて貰いたいと、懇意こんいの間柄で遠慮なく話はしたが、

何分埠らちが明かず、子供は相替らず三ヶ月やつ遣て置けば三ヶ月引かして置かなければならぬと云うような訳わけけで、何としても予備門の修業に堪えず、私も遂ついに断念して仕舞うて、夫れから此方こちらの塾じゅく（慶應義塾けいおうぎじゅくなり）に入れて普通の学科を卒業させて、亞米利加アメリカに遣て彼かれの大学校の世話になりました。私は日本大学の教科を悪いと云うのではない、けれども教育の仕様しうが余り嚴重で、荷物が重過ぎるのを恐れて文部大学を避けたのです。その通りで今でも説は変えない、何としても身体が大事だと思います。

子女幼時の記事又私の考かんがえに、人間は成長して後に自分の幼年の時その有様ありさまを知りたいもので、他人はイザ知らず私が自分で左様思かいうから、筆まめな事だが私は小供の生立おいたちの模様かいを書いて置きました

た。この子は何年何月何日何分に産れ、産の難易は云々、幼少の時の健康は斯くく、氣質の強弱、生付きの癖など、ザツと荒増し記してあれば、幼少の時の写真を見ると同様、この書たものを見れば成長の後、第一面白いに違いない、自から又心得になる事もありましょう。私などは不幸にして実父の面も知らず、画像に写したものもなし、又私がドンな子供であつたか母に聞いたばかりで書たものはない。少年の時から長老の人がソーンな話をすると耳を傾けて聞いて、唯殘念にばかり思うて、ひとり身の不幸を悲んで居たから、今度は私の番になつてこの通りに自分の伝を記して子供の為めにし、又先年小供の生立の事をも認めて置たから先ず遺憾はない積りです。

三百何十通の手紙又親子の間は愛情一偏で、何ほど年を取^{とつ}ても互に理窟らしい議論は無用の沙汰である。是れは私も妻も全く同説で、親子の間を成る丈^たけ離れぬようにする計^{ばか}り。例えば先年、長男次男が六年の間亞米利加^{アメリカ}に行^{いっ}て居ましたその時には、亞米利加の郵船が一週間に大抵一度、時としては二週間に一度と云う位の往復でしたが、小供両人の在米中、私は何か要用のときは勿^い論、仮令^{たと}い用事がなくても毎便必ず手紙を遣^やらない事はない。六年の間何でも三百何十通と云う手紙を書きましたが、私が手紙を書^{かきは}放^なにして家内が校合^{きょうごうかた}方になつて封じて遣るから、両親の親筆に相違ない。彼方の小供両人も飛脚船の来る度に必ず手紙を寄^よ越す。この事は兩人出発の節堅く申付^{もうしつけ}て、「留学中手紙は毎便必

すく出せ、用がなければ用がないと云て寄越せ、又学問を勉強して不死半生の色の青い大学者になつて帰て来るより、筋骨逞しき無学文盲なものになつて帰て来い、その方が余程悦しい。仮初めにも無法な事をして勉強し過ぎるな。僕約は何處までも僕約しろ、けれども健康に係わると云うほどの病氣か何かの事に付き、金次第で如何にもなると云うことならば思い切って金を使え、少しも構わぬからと斯う云うのが私の命令で、ソンな事で六年の間学んで二人とも無事に帰て來ました。

一身の品行、亦自から効力あり又私の内が夫婦親子睦じくて私の行状が正しいからと云て、特に譽める程の事でもない。世の中に品行方正の君子は幾らもある。私も亦、これが人間唯一の目的で

一身の品行修まりて能事終るなんて自慢をするような馬鹿でもないと自から信じて居るが、扱又これが妙なもので、社会の交際に関係する所は甚だ広くて、意外の辺に力を及ぼすことがあるその一例を申せば、旧藩の奥平家に対し私は如何なる者ぞと尋ねるに、見る影もなき貧小士族が、洋学など修業して異様な説を唱え、或は外国に行き、又或は外国の書を翻訳して大言を吐散らし、剩さえ儒流を軽蔑して憚る所を知らずと云えば、是れは所謂異端外道に違いない。同藩一般の見る所でこの通りなれば、藩主の奥なんぞにはドンな報告が這入て居るか知れない。兎に角に福澤諭吉は大変な奴だと折紙が付て居たに違いない。所が物換り星移り、段々時勢が変遷して王政維新の世の中になつて見れば、藩

論も自から面目を改め、世間一般西洋流の喧嘩らしい今日、福澤も
 マンザラでなし、或は之を近づけて何かの役に立つこともあるう
 と云うような説がチラホラと涌て来たその時に、嶋津祐太郎と
 云う奥平家の元老は、頗る事の能く分る、云わば卓識の君子で、
 時勢の緩急を視察して、コリヤ福澤を疏外するは不利であると云
 うことに着眼して居る折柄、奥平家の大奥に芳蓮院様と云う女
 隠居がある、この貴婦人は一橋家から奥平家に下て來た由緒
 ある身分で、最早や余程の老年でもあり、一家無上の御方様と
 崇められて居る。ソコで嶋津が先ずその御隠居様に対して色々西
 洋の話をすると、彼の国には文学武備、富國強兵、医術も精し
 く航海術も巧なり、その中には随分日本の風俗習慣に違た事も

数々ありますが、爰に西洋流義に不思議なるは男女の間柄で、男女相互に軽重なく、如何なる身分の人でも一夫一婦に限て居ます、是れ丈けは西洋の特色で御座ると云う所を持込んだ所が、その御隠居様も若い時には直接に身に覚えがある。この話を聞いて心を動かさずには居られない。恰も豁然発明した様子で、ソレから福澤を近づける気になつて、次第々々に奥向の方に出入の道が開けて、御隠居様を始め所謂御上通りの人に逢うて見れば、福澤の外道も唯の人間で、角も生えて居なければ尻尾のある者でもない、至極穩かな人間だと云う所からして、段々懇親になつたと云うその話は、程経て後に内々嶋津から聞きました。シテ見るに一夫一婦の説も隠然の中には随分勢力のあるもので、就ては

今の世に多妻の悪弊を除^{のぞい}て文明風にするなんと論ずるは野暮^{やぼ}だと云うような説があるけれども、畢^{ひつきょう}竟^{まけおし}負^に借^{まけおし}みの苦しい遁^にげ口上で取るに足らない。一夫一婦の正論決して野暮^{やぼ}でない、世間の多数は同主義で、殊^{こと}に上流の婦人は悉く此方^さの味方であるから、私の身がこの先^さき何時まで生きて居るか知れぬけれども、有らん限りの力を尽して、前後左右を顧^{かえり}みずドンな奴を敵にしても構わぬ、多妻法を取締めて、少しでもこの人間社会の表面だけでも見られるような風^{ふう}にして遣^{おもつ}ろうと思^やて居ます。

老余の半生

仕官を嫌う由縁私の生涯は終始替ることなく、少年時代の辛苦、老後の安楽、何も珍らしいことはない。今の世界に人間普通の苦樂を嘗めて、今日に至るまで大に愧ることもなく大に後悔することもなく、心静に月日を送りしは、先ず以て身の仕合せと云わねばならぬ。所で世間は広し、私の苦樂を遠方から見て色々に評論し色々に疑う者もありましよう。就中私がマンザラの馬鹿でもなく政治の事も随分知て居ながら、遂に政府の役人にならぬと云うは可笑しい、日本社会の十人は十人、百人は百人、皆立身出世を求めて役人にこそなりたがるその処に、福澤が一人これをいやがるのは不審だと、蔭で窃に評論する計りでない、現に直接に私に向て質問する者もある。啻に日本人ばかりでない、知己の

外国人も私の進退を疑い、何故政府に出て仕事をせぬか、政府の好地位に立たつて思う事を行えば、名譽にも為り金にも為り、面白いではないかと、米国人などは毎度勧めに來たことがあるけれども、私は唯笑たおらつて取合とりあわぬ。ソコで維新の当分は政府の連中が私を評して佐幕家の一人と認め、彼かれは旧幕府に操みさおを立てゝ新政府に仕官せぬ者である、將軍政治を悦よろこんで王政を嫌う者である、古来、革命の歴史に前朝の遺臣と云う者があるが、福澤もその遺臣を氣取きどつて、物外に瓢ひょうぜん然として居ながら心中無限の不平を抱いて居るに違ちがいない、心に不平があれば新政府の為ためめに宜よいことは考えない、油断のならぬ奴だなんて、種々様々な想像を運めぐらして居る者の多いのは、私も大抵たいていしょ知かて居る。所が斯く評せらるゝ前朝の遺

臣殿は、久しい以前から前朝の門閥制度、鎖国主義に愛想をつかして、維新の際に幕府の忠臣義士が盛んに忠義論を論じて佐幕の氣焰きえんを吐はいて脱走までする時に、私は強て議論もせず、脱走連中に知して居る者があれば、余計な事をするな、負けるから罷よしにしろと云いて止めて居た位だから、福澤を評するに前朝の遺臣論も勘定が合わぬ。前朝の遺臣と云えれば維新の時に幕府の忠臣義士こそ丁ど度適當の嵌役はまりやくなれども、この忠臣義士は前朝に忠義の一役を勤めて何時の間にか早替り、第二の忠義役を勤めて第二の忠臣義士となつて居るから、是れも遺臣と云われぬ。その遺臣論は姑さしおく擋さしおき、私の身の進退は、前に申す通り、維新の際に幕府の門閥制度、鎖国主義が腹の底から嫌きらいだから佐幕の気がない。左ればと

て勤王家の拳動を見れば、幕府に較べてお釣りの出る程の鎖国攘夷、固よりコンな連中に加勢しようと思ひも寄らず、唯ジツと中立独立と説を極めて居ると、今度の新政府は開国に豹変した様子で立派な命令は出たけれども、開国の名義中、鎖攘タップリ、何が何やら少しも信ずるに足らず、東西南北何れを見ても共に語るべき人は一人もなし、唯獨りで身に叶う丈けの事を勤めて開国一偏、西洋文明の一天張りでリキンで居る内に、政府の開國論が次第々々に真成のものになつて来て、一切万事改進ならざるはなし、所謂文明駿々乎として進歩するの世の中になつたこそ實に有り難い仕合せで、實に不思議な事で、云わば私の大願も成就したようなものだから、最早や一点の不平は云われない。

問題更らに起るソコで私の身の進退に就いても更らに問題が起る。

是れまで新政府に出身しなかつたのは、政府が鎖国攘夷の主義であるから之を嫌うたのだ、仮令い開国と触出してもその内実は鎖攘の根性、信するに足らずと見縊たのである、然るに政府の方針がいよく開国文明と決して着々事実に顕わるゝに於ては、官界に力を尽して政府人と共に文明の国事を經營すること本意ではないかと世間の人の思うのは、一寸と尤ものように見えるが、この一段になつてもマダ私に動く気がない。

威脅張の群に入るべからず従前曾て人に語らず、又語る必要もないから黙て居て、内の妻子も本当に知りますまいが、私の本心に於て何としても仕官が出来られないその眞面目を丸出しに申せば、

第一、政府がその方針を開国文明と決定して大に国事を改革する
 と同時に、役人達が国民に対して無暗に威張る、その威張るのも
 行政上の威厳と云えば自から理由もあるが、實際は爾うでない、
 唯殻威張ただからいぱりをして喜んで居る。例えば位記などは王政維新、文明
 の政治と共に罷めやそうなことを罷めずに、人間の身に妙な金箔を
 着けるような事をして、日本國中いらざる処に上下貴賤の區別を
 立てゝ、役人と人民と人種の違うような細工をして居る。既に政
 府が貴いたつといと云えれば政府に入る人も自然に貴くなる、貴くなれば自
 然に威張るようになる、その威張りは即ち殻威張すなわからで、誠に宜しく
 ないと知りながら、何も蚊なにかも自然の勢いきおいで、役人の仲間になれば何
 時の間にか共に殻威張を遣やるようになり行く。然かのみならず、

自分より下にむかつて威張れば上に向ては威張られる。馳こつこ鼠こ
 つこ、實に馬鹿らしくて面白くない。政府に這入りさえせねば馬
 鹿者の威張るのを唯見物して唯笑わらつて居る計りなれども、今の日本の風潮で、役人の仲間になれば、仮令い最上の好地位に居ても兎に角に殼威張と名づくる醜體を犯さねばならぬ。是れが私の性質に於て出来ない。

身の不品行は人種を殊にするが如し之を第一として、第二には甚だ申し憎いことだが、役人全体の風儀を見るに氣品が高くない。その平生美衣美食、大きな邸宅に住居して散財の法も奇麗で、万事端思切りが能くて、世に処し政を料理するにも卑劣でない、至極面白い氣風であるが、何分にも支那流の磊落を氣取て一身

の私を慎^{つつ}しむことに気が付かぬ。動^{やや}もすれば酒を飲んで婦人に戯^{たわぶ}され、肉慾^{もつ}を以て無上の快楽事として居るように見える。家の内外に妾^{しょく}などを飼うて、多妻の罪を犯しながら恥かしいとも思わず、その悪事を隠^{おさ}すともせずに横^{おう}風^{ふう}な顔をして居るのは、一方に西洋文明の新事業を行い、他の一方には和漢の旧醜体を学ぶものと云^いわねばならぬ。ダカラ外^{ほか}の事を差置^{さしおい}てこの一点に就^つて見れば、何だか一段^{さがつ}下^さた下等人種のように見える。是^これも世の中の流俗として遠方から眺めて居れば左まで憎らしくもなく又咎^{とが}めようとも思わぬ、時に往来して用事も語り談笑妨げなけれども、扱^{さて}いよ／＼この人種の仲間になつて一つ竈^{かまど}の飯を喰^{めし}くい本当に親しく近くなるうと云^いうには、何處^{どこ}となく穢^{ききた}ないよう汚れたように思われて

ツイ嫌になる。是れは私の潔癖とでも云うようなもので、全体を申せば度量の狭いのでしようが、何分にも生れつきの性質とあれば仕方がない。

忠臣義士の浮薄を厭う第三、幕末に勤王佐幕の一派が東西に立つかれて居るその時に、私は唯古来の門閥制度が嫌い、鎖国攘夷が嫌いばかりで、固より幕府に感服せぬのみか、コンな政府は潰して仕舞うが宜いと不斷氣焰を吐て居たが、左ればとて勤王連の様を見れば、鎖攘論は幕府に較べて一段も二段も劇しいから、固よりコンな連中に心を寄せる筈はない。唯黙つて傍観して居る中には維新の騒動になつて、徳川將軍は逃げて帰て來た。スルと幕府の人は勿論、諸方の佐幕連が中々喧しくなつて議論百出、東照

神君三百年の遺業は一朝にして棄つべからず、三百年の君恩は臣子の身として忘るべからず、薩長何者ぞ、唯是れ関ヶ原の降参武士のみ、常々たる三河譜代の八万騎、何の面目あれば彼の降参武士に膝を届すべきやなんて、大造な劍幕で、薩長の賊軍を東海道に邀え擊んとする者もあれば、軍艦を以て脱走する者もあり、策士論客は將軍に謁して一戦の奮発を促がし、諫争の極きよく放はなつて号泣するなんぞは、如何にもエライ有様で、忠臣義士の共進会であつたが、その忠義論もトウ／＼行われずに幕府がいよ／＼解散になると、忠臣義士は軍艦に乗つて箱館に居る者もあれば、陸兵を指揮して東北地方に戦う者もあり、又はプリ／＼立腹して静岡の方に行く者もあるその中で、忠義心の堅い者は東京を賊地

と云て、東京で出来た物は菓子も喰わぬ、夜分寝る時にも東京の方は頭にせぬ、東京の話をすれば口が汚れる、話を聞けば耳が汚れると云う 塩梅式は、丸で今世の伯夷、叔齊、静岡は恰も明治初年の首陽山であつたのは凄まじい。所が一年立ち二年立つ中に、その伯夷、叔齊殿が首陽山に蕨の乏しいのを感じたか、ソロ／＼山の麓に下りて、賊地の方にノツソリ首を出すのみか、身体を丸出しにして新政府に出身、海陸の脱走人も静岡行の伯夷、叔齊も、猫も杓子も政府の辺に群れ集て、以前の賊徒今の官員衆に謁見、是れは初めて御目に掛るとも云われまい、兼て御存じの日本臣民で御座ると云うような調子で、君子は既往を語らず、前言前行は唯戯れのみと、双方打解けて波風なく治まりの

付たのは誠に目出度い、何も咎立とがめてするにも及ばぬようだが、私には少し説がある。抑そも王政維新あらそいの争が、政治主義の異同から起て、例えは勤王家は鎖国攘夷を主張し、佐幕家は開国改進を唱えて、遂に幕府の敗北と為り、その後に至て勤王家も大に悟りて開國主義に変じ、恰も佐幕家の宿論に投するが故に、之と共に爾後ともの方針を与よにすると云えは至極しごもつと尤もに聞ゆれども、当時の争に開鎖など云う主義の沙汰さたは少しもない。佐幕家の進退は一切万事、君臣の名分から割出して、徳川三百年の天下うんぬん々々と争いながら、その天下が無くなつたら争の点も無くなつて平氣の平左衛門とは可笑おかしい。ソレも理窟の分らぬ小輩ちいざえもんならば固もとより宜よろしいが、争論の発起人で頻りに忠義論を唱えて伯夷はくい叔しゆくせい齊さいを氣取り、又はそ

の身躬みみずから脱走して世の中を騒がした人達の気が知れない。勝負は時の運に由る、負けても恥かしいことはない、議論が中らなかつても構わないが、遣傷やりそこなつたらその身の不運と諦らめて、山に引込むか、寺の坊主にでもなつて、生涯を送れば宜いと思えども、中々もつ以て坊主どころか、洒蛙しゃあしゃあ々々と高い役人になつて嬉しがつて居るのが私の気に喰くわぬ。扱々忠臣義士も當てにならぬ、君臣主従の名分論も浮氣なものだ、コンな薄うすべらな人間と伍を為すよりも独りで居る方が心持が宜いと説を極めて、初一念を守り、政治の事は一切人に任せて、自分は自分だけの事を勉めるように身構えをしました。実は私の身の上に何も縁のないことで、入らざるお世話のようだが、前後の事情を能く知て居るから、忠臣

義士の成行なりゆきを見るとツイ氣の毒になつて、意氣地なしのように腰抜のよう^{んしゃく}に、思うまいと思ても思われて堪たまらない。全く私の癪かでしようが、是れも自然に私の功名心を淡泊にさせた原因であろうと思われます。

独立の手本を示さんとす第四には、勤王佐幕など云う喧いやかましい議論は差置き、維新政府の基礎が定まると、日本国中の士族は無論、百姓の子も町人の弟も、少しばかり文字もんじでも分る奴は皆役人になりたいと云う。仮令たとい役人にならぬでも、兎とに角かくに政府に近づいて何か金儲ありさまでもしようと云う熱心で、その有様は臭い物に蠅はえのたかるようだ。全国の人民、政府に依らねば身を立てる処のないよう^いに思つて、一身独立と云う考かんがえは少しもない。偶たまたま外国修業の

書生などが帰^{かえつ}て来て、僕は畢^{ひっせい}生独立の覺悟で政府仕官は思いも寄らぬ、なんかんと鹿^{しかつめ}爪^{しりつめ}らしく私方へ来て満腹^{きえん}の気焰^{きえん}を吐く者は幾らもある。私は最初から當てにせずに宜い加減に聞流して居ると、その独立先生が久しく見えぬ。スルと後に聞けばその男はチヤンと何省の書記官に為^なり、運の好^いい奴は地方官になつて居ると云うような風^{ふう}で、何も之^{これ}を咎^{とが}めるではない、人々の進退はその人の自由自在なれども、全国の人^{ただ}が唯政府の一方を目的にして外^{ほか}に立身の道なしと思^{おもいこ}込んで居るのは、畢^{ひつきよう}竟^さ漢学教育の余弊^{ほが}で、所謂宿^{いわゆる}昔^{まよい}青雲の志と云うことが先祖以来の遺伝に存して居る一種の迷^さである。今この迷を醒まして文明独立の本義を知らせようとするには、天下一人でもその眞実の手本を見せたい、

亦自からその方針に向う者もあるだろう、一国の独立は国民の獨立心から湧て出ることだ、國中を挙げて古風の奴隸根性では逆も国が持てない、出来ることが出来ないことがソーンな事に躊躇せず、自分がその手本になつて見ようと思付、人間万事無頓着と覺悟を定めて、唯独立独歩と安心決定したから、政府に依りすぐる氣もない、役人達に頼む氣もない。貧乏すれば金を使わない、金が出来れば自分の勝手に使う。人に交わるには出来る丈けの誠を尽して交わる、ソレでも忌と云えば交わつて呉れなくても宜しい。客を招待すれば此方の家風の通りに心を用いて饗應する、その風が嫌いなら来て呉れなくても苦しうない。此方の身に叶う丈けを尽して、ソレから上は先方の領分だ。誉めるな

り譏るなり喜ぶなり怒るなり勝手次第にしろ、讃められて左まで
 歓びもせず、譏られて左まで腹も立てず、いよく気が合わねば
 遠くに離れて附合わぬ計りだ。一切万事、人にも物にもぶら下
 らずに、云わば捨身になつて世の中を渡るとチャンと説を定めて
 居るから、何としても政府へ仕官などは出来ない。この流儀が果
 して世の中の手本になつて宜い事か、悪い事か、ソレも無頓着だ、
 宜ければ甚だ宜しい、悪るければソレまでの事だ、その先きまで
 責任を負い込もうとは思いません。

右の通り条目を並べて第一から第四まで述立てゝ見れば、私の
 政府に出ないのは初めからチャンと理窟を定めて箇様々々と自か
 ら自分を束縛してあるように見えるが、実はソレホド窮窟な訳け

ではない、ソレホド六むずかしい事でもない。唯ただ今日これを筆記して人に分るようにしようとするには、話に順序がなくては叶わぬ。ソコで久しい前年から今日に至るまで、物に触れ事に当り、人と談論した事などを思出して、彼の時はアヽであつた、この時は斯うであつたと、記憶中に往来するものを取集めて見ると、前に記した通りになる。詰つまる所、私は政治の事を軽く見て熱心でないのが政界に近づかぬ原因でしよう。喻たとえば人の性質に下戸げこ上戸じょうごがあつて、下戸は酒屋に入らず上戸は餅屋に近づかぬと云う位のもので、政府が酒屋なら私は政事の下戸でしよう。

政治の診察医にして開業医に非ずとは云うもののゝ、私が政治の事を全く知らぬではない、口に談論もすれば紙に書きもする。但ただ

談論書記する計りで、自からその事に当ろうと思わぬその趣は、
 恰も診察医が病を診断してその病を療治しようとも思わず、又事
 実に於て療治する腕もないようなものでしうが、病床の療治は
 皆無素人でも、時としては診察医も役に立つことがある。ダカ
 ラ世間の人も私の政治診断書を見て、是れは本当の開業医で療治
 が出来るだろう、病家を求めるだろうと推察するのは大間違いの
 沙汰です。

明治十四年の政変この事に就いて一寸と語りますが、明治十四年の
 頃、日本の政治社会に大騒動が起つて、私の身にも大笑いな珍事が
 出来ました。明治十三年の冬、時の執政大隈、伊藤、井上
 の三人から私方に何か申して参つて、或る処に面会して見ると、何

か公報のような官報のような新聞紙を起すから私に担任して呉れ
 ろと云う。一向趣意が分らぬから先ず御免と申して去ると、その
 後度々人の往復を重ねて話が濃くなり、とうく仕舞に、政府
 はいよく国会を開く積りでその用意の為ために新聞紙も起す事で
 あると秘密を明かしたから、是れは近頃面白い話だ、ソンな事な
 ら考え直して新聞紙も引受けようと凡そ約束は出来たが、マダ何い
 時からと云う期日は定まらずに、そのまゝに年も明けて明治十四
 年と為り、十四年も春去秋來、頓と埠の明かぬ様子なれど
 も、此方も左まで急ぐ事でないから打遣て置く中に、何か政府中
 に議論が生じたと見え、以前至極同主義でありし隈伊井の三人が
 漸く不和になつて、その果ては大隈が辞職することになりまし

た。拵^{さで}大隈の辞職は左まで驚くに足らず、大臣の進退は毎度珍らしくもない事であるが、この辞職の一条が福澤にまで影響して来たのが大笑いだ。当時の政府の騒^{しつがつ}ぎは中々一通りでない。政府が動けば政界の小輩も皆動搖して、隨^{したがつ}て又種々様々の風聞を製造する者も多いその風聞の一、二を申せば、全体大隈と云うは専横な男で、様々に事を企てるその後には、福澤が居て謀主になってるその上に、三菱の 岩崎弥太郎^{いわさきやたろう}が金主になつて既に三十万円の大金を出したそうだなんて、馬鹿な茶番狂言の筋書見たような事を触^{ふれま}廻^{まわ}して、ソレから大隈の辞職と共に政府の大方針が定まり、国会開設は明治二十三年と予約して色々の改革を施す中にも、従前の教育法を改めて所謂^{いわゆる}儒教主義を復活せしめ、文部省も一時

妙な風になつて来て、その風が全国の隅々までも靡かして、十何年後の今日に至るまで政府の人もその始末に当惑して居るでしょう。凡そ当時の政変は政府人の発狂とでも云うような有様で、私はその後岩倉から度々呼びに来て、ソッと裏の茶室のような処で面会、主人公は何かエライ心配な様子で、この度の一件は政府中、実に容易ならぬ動搖である、西南戦争の時にも随分苦労したが、今度の始末はソレよりも六かしいなんかんと話すのを聞けば、余程騒いだものと察しられる。實に馬鹿氣たことで、政府は明治二十三年、国会開設と国民に約束して、十年後には饗應するといつて案内状を出したようなものだ、所がその十年の間に客人の気に入らぬ事ばかり仕向けて、人を捕えて牢に入れたり東京の

外に逐出したり、マダ夫れでも足らずに、役人達はむかしの大名公卿の真似をして華族になつて、是れ見よがしに殼威張からいぱり やつを遣て居るから、天下の人はますく腹を立てゝ暴れ廻わる。何の事はない饗応の主人と客とマダ顔も合わせぬ先きに角突合いになつて居るから可笑しい。十四年の眞面目しんめんもくの事実は、私が詳つきに記して家に藏めてあるけれども、今更ら人の忌いやがる事を公けにするでもなし黙だまつて居ますが、そのとき私は寺島てらしまと極懇意こいんいだから何も蚊かも話して聞かせて、「ドウダイ僕が今、口まめに饒舌しゃべつて廻ると政府の中に随分困る奴が出来るがと云うと、寺島も始めて聞いて驚き、成程そうだ、政治上の魂胆は随分穢きたないものとは云いながら、是れはアンマリ酷ひどい。少し捩ねじくつて遣ても宜いぢやないかと、態わざと

勧めるような風ふうであつたけれども、私は夫れ程に思わぬ、「御同
罷やめにしよう」と云て、笑て分れたことがある。

保安条例コンな訳で、私は十四年の政変のその時から、何も實際
に關係はない、俗界に云う政治上の野心など思も寄らぬ事だから
誠に平氣で、唯他人のドタバタするのを見物して居るけれども、
政府の目を以もつてこの見物人を見れば、又不思議なもので、色々な
姿に写ると見える。明治何年か保安条例の出たとき、私もこの条
例の科人とがにんになつて東京を逐出おいでされると云う風聞。ソレはその時
塾に居た小野友次郎が警視庁に懇意こんいの人があつて、極内々その事
を聞出して、私と同時に後藤象次郎ごとうじょうじろうも共に放逐ほうちくと確たしかに云うか

ら、「ナニ殺されるではなし、イザと云えば川崎辺まで出て行けば宜いと申して居る中、その翌日か翌々日か小野が^{おの}また又来て、前的事は取消しになつたと云うので事は済みました。又その後明治二十年頃かと思う、井上角五郎^{いのうえかくごろう}が朝鮮で何とやらしたと云うので捕えられて、その時の騒動と云うものは大変で、警察の役人が来て私方の家捜しサ。^{それ}夫から井上が何か吟味に逢うて、福澤諭吉に証人になつて出て来いと云て、私を^{わざわざ}裁判所に呼出して、タワイもない事を散々尋て、ドウかしたら福澤も科^{とがにん}人の仲間にしたいと云うような風^{ふう}が見えました。都てコンな事は唯大間違で、私の身には何ともない。却て世の中の人心の動くその運動の方向緩急を観察して面白く思て居るが、又一步を進めて虚心平氣に

考うれば、私が兎角政界とかくの人に疑われると云うのも全く無理はない。第一私は何としても役人になる気がない、是これは世間に例の少ない事で、仕官流行、熱中奔走の世の中に、ひと独りこれが嫌いと云えば、一寸ちよいと見て不審を起さねばならぬ。ソレもいよく官途に気がないとならば田舎にでも引込んで仕舞ひっこしえれば宜いに、都会の真し中に居て然かも多くの人に交際して、口も達者に筆もまめに、洒蛙しゃあしゃあ々々と饒舌しゃべつたり書かいたりするから、世間の目に触れ易やすく、したがつ隨て人に不審を懷いきおいかせるのも自然の勢である。

一片の論説能く天下の人心を動かす之これを第一として、モ一つ本当の事を云うと、私の言論もつを以て政治社会に多少の影響を及ぼしたこともありましょう。例えば是れまで頓とんと人の知らぬ事で面白い

話がある。明治十年、西南の戦争も片付て後、世の中は静になつて、人間が却て無事に苦しむと云うとき、私が不図思付て、是れは国会論を論じたら天下に応ずる者もあろう、隨分面白かろうと思て、ソレからその論説を起草して、マダその時には時事新報と云うものはなかつたから、報知新聞の主筆藤田茂吉、箕浦勝人にその草稿を見せて、「この論説は新聞の社説として出されるなら出して見なさい、屹と世間の人よろこびに違ひない。但しこの草稿のまゝに印刷すると、文章の癖が見えて福澤の筆と云うことが分るから、文章の趣意は無論、字句までも原稿の通りにして、唯意味のない妨げにならぬ処をお前達の思う通りに直して、試みに出して御覧。世間で何と受けるか、面白いではないか」と云い

うと、年の若い元気の宜い藤田、箕浦だから、大に悦んで草稿を持て歸て、早速報知新聞の社説に戴せました。當時、世の中にマダ国会論の勢力のない時ですから、この社説が果して人気に投するやら、又は何でもない事になつて仕舞うやら、頓と見込みが付かぬ。凡そ一週間ばかり毎日のように社説欄内を填めて、又藤田、箕浦が筆を加えて東京の同業者を煽動するように書立てゝ、世間の形勢如何と見て居た所が、不思議なる哉、凡そ二、三ヶ月も経つと、東京市中の諸新聞は無論、田舎の方にも段々議論が喧しくなつて来て、遂には例の地方の有志者が国会開設請願なんて東京に出て来るような騒ぎになつて来たのは、面白くもあれば、又ヒヨイと考直して見れば、仮令い文明進歩の方針とは云い

ながら、^{ただち}直に自分の身に必要がなければ物数寄と云わねばならぬ
 その物数寄な政治論を吐^{はい}て、図^{はか}らずも天下の大騒ぎになつて、サ
 ア留めどころがない、恰^{あたか}も秋の枯野に自分が火を付けて自分で当
 惑するようなものだと、少し怖くなりました。併し国会論の種は
 維新の時から時^{まい}てあつて、明治の初年にも民選議院^{うんぬん}云々の説も
 あり、その後とても毎度同様の主義を唱えた人も多い。ソンな事
 が深い永い原因に違ひはないけれども、不^ふ圖^とした事で私が筆を執^{とつ}
 て、事の必要なる理由を論じて喋々^{ちようちよなんなん} 嘴^{くちび} 千言、噛^か
 でくゝめるように^いって聞かせた跡で、間もなく天下の輿論^{よろん}が一時
 に持^{もちあがつ}上^{じよう}て来たから、如何しても報知新聞の論説が一寸^{ちよい}と導火^{くちび}
 になつて居ましよう、その社説の年月を忘れたから 先達^{せんだつてみのう} 箕^{みのう}

浦らに面会、昔話をして新聞の事を尋ねて見れば、同人もチャンと覚えて居て、その後古い報知新聞を貸して呂れて、中を見ると明治十二年の七月二十九日から八月十日頃まで長々と書並べて、一寸と辻棲が合て居ます。是れが今の帝国議会を開く為めの加勢になつたかと思えば自分でも可笑しい。シテ見ると先きの明治十四年の騒動に、福澤が政治に關係するなんかんと云われて、その後も兎角私の身に目を着ける者が多くて色々に怪しまれたのも、直接に身に覚えのない事とは云いながら、間接には自から因縁のないではない。国会開設、改進々歩が國の為めに利益なればこそ善けれ、是れが實際の不利益ならば、私は現世の罪は免かれても死後閻魔の序で酷い目に逢う筈はずでしよう。報知新聞の一件ばかり

でない、政治上に就て私の言行は都てコンな塩梅式で、自分の身の私に利害はない 所謂診察医の考かんがえで、政府の地位を占めて自から政権を振廻ぶりまして大下の治療をしようと云う了簡はないが、如何どうでもして国民一般を文明開化の門に入れて、この日本国を兵力の強い商売繁昌する大国にして見たいと計り、夫それが大本願で、自分独り自分の身に叶う丈だけの事をして、政界の人々に交際すればとて、誰に逢うても何ともない、別段に頼むこともなければ相談することもない、貧富苦楽、独り分に安んじて平氣で居るから、考かんがえの違う役人達が私の平生を見たり聞たりして変に思うたのも決して無理でない、けれども眞實おりに於て私は政府に對して少しも怨うらみはない、役人達にも悪い人と思う者は一人もない、是れが封建門

閥の時代に私の流儀にして居たらば、ソレコソ如何なる憂き目に
逢て居るか知れない。今日安全に寿命を永くして居るのは明治政
府の法律たまものおもつの賜あづと思って喜んで居ます。

時事新報ソレから明治十五年に時事新報と云う新聞紙を発起しま
した。丁度十四年政府変動の後で、慶應義塾先進の人達が私方
に来て頻りにこの事を勧める。私も亦自分で考えて見るに、世の
中の形勢は次第に変化して、政治の事も商売の事も日々夜々運動
の最中、相互に敵味方が出来て議論は次第に喧かまびすしくなるに違
いない。既に前年の政変も孰れが是か非かソレは差置さしおき、双方主
義の相違で喧嘩はなはをしたことである。政治上に喧嘩はなはが起れば経済商
売上にも同様の事が起らねばならぬ。今後はいよ／＼ます／＼甚

だしい事になるであろう。この時に當て必要なるは所謂不偏不
 党の説であるが、扱^{さて}その不偏不党とは口でこそ言え、口に言いな
 がら心に偏する所があつて一身の利害に引かれては、逆も公平の説
 を立てる事が出来ない。ソコで今全国中に聊^{いさき}ながら独立の生計
 を成^{とな}して多少の文思^{ぶんし}もありながら、その身は政治上にも商売上に
 も野心なくして恰^{あたか}も物外^{ほか}に超然たる者は、※呼^{おこ}がましくも自分の
 外に適當の人物が少なかろうと心の中に自問自答して、遂に決心
 して新事業に着手したものが即ち時事新報です。既に決断した上
 は友人中これを止める者もありしが、一切取合わず、新聞紙の
 発売数が多かろうと少なかろうと他人の世話になろうと思わず、
 この事を起すも自力なれば倒すも自力なり、仮令^{たと}い失敗して廃刊

しても一身一家の生計を變ずるに非^{あら}ず、又自分の不名誉とも思わず、起すと同時に倒すの覺悟を以て、世間の風潮に頓^{とんじやく}着^なしに今日までも首尾能く遣^よ_{やつ}て來たことですが、畢^{ひつきよう}竟^{よう}私の安心決^け定^{つけ}とは申しながら、その実は私の朋友には正直有為の君子が多くて、何事を打任せても間違ひなど云う忌^{いや}な心配は聊^{いさざ}かもない。発行の当分、何年の間は中上川彦次郎^{なかみがわひこじろう}が引受け、その後は伊藤欽亮^{きんすけ}、今は次男の捨次郎^{すてじろう}が之に任じ、会計は本山彦一^{もとやまひこいち}、次で坂田実^{さかたみのる}、今は戸張志智之助等^{とばりしちのすけ}が専ら担任して居ますが、私の性質として金錢出納の細目を聞いたこともなく、見たこともなく、その人々のするがまゝに任かせて置いて、曾^{かつ}一度も変な間違ひの出来たことはない。誠に安心氣樂なものです。コンな事が新聞事

業の永続する訳けでしよう。又編輯の方に就て申せば、私の持論に、執筆者は勇を鼓して自由自在に書くべし、他人の事を論じ他人の身を評するには、自分とその人と両々相対して直接に語られるような事に限りて、それ以外に逸すべからず、如何なる劇論、如何なる大言壯語も苦しからねど、新聞紙に之を記すのみにて、扱その相手の人^に面会したとき自分の良心に愧じて率直に陳べることの叶わぬ事を書いて居ながら、遠方から知らぬ風をして恰も逃げて廻わるようなものは、之を名づけて蔭弁慶の筆と云う、その蔭弁慶こそ無責任の空論と為り、罵言讒謗の毒筆と為る、君子の愧ずべき所なりと常に警しめて居ます。併し私も次第に年をとり、何時までもコンな事に勉強するでもなし、老余は成る丈たは

け閑静に日を送る積りで、新聞紙の事も若い者に譲り渡して段々遠くなつて、紙上の論説なども石河幹明、北川礼彌、堀江帰一などが専ら執筆して、私は時々立案してその出来た文章を見て一寸々々加筆する位にして居ます。

事を為すに極端を想像す扱これまで長々と話を続けて、私の一身の事、又私に關係した世の中の事をも語りましたが、私の生涯中に一番骨を折たのは著書翻訳の事業で、是れには中々話が多いが、その次第は本年再版した福澤全集の緒言に記してあれば之を略し、著訳の事を別にして、元來私が家に居り世に処するの法を一括して手短に申せば、都て事の極端を想像して覺悟を定め、マサカの時に狼狽せぬよう後に悔せぬようにと計り考えて

居ます。生きて居る身はいつ何時死ぬかも知れぬから、その死ぬ時に落付おちついて静にしようと云うのは誰も考えて居ましよう。夫れと同様に、例えは私が自身自家の経済に就つては、何としても他人に對して不義理はせぬと心に決定けつじょうして居るから、危い事を犯すことが出来ない。斯うすれば利益こがある、爾うすれば金そが出来るなど云いつても、危険を犯して失敗したときには必ず狼狽ろうばいすることがあろう、後悔することがあろうと思って、手を出すことが出来ない。金を得て金を使うよりも、金がなければ使わずに居る。按摩あんぶく腹りきみこをしても餓えて死ぬ氣遣きづかいはない、粗衣粗食などに閉口する男でないと力身込んで居るような訳わけで、私が經濟上に不活かっぱ澆ほがなのは失敗の極端を恐れて鈍くして居のですが、その外直

接に一身の不義理にならぬ事に就ては必ずしも不活潑でない。ト
 バの詰り遣傷なつても自身独立の主義に妨げのない限りは颶々と遣ります。例えば慶應義塾を開いて何十年来様々變化は多い。時としては生徒の減ることもあれば増ることもある。唯生徒ばかりでない、会計上からして教員の不足することも度々でしたが、ソンな時にも払は少しも狼狽しない。生徒が散すれば散するまゝにして置け、教員が出て行くなら行くまゝにして留めるな、生徒散じ教員去て塾が空屋になれば、残る者は乃公一人だ、ソコで一人の根気で教えられる丈けの生徒を相手に自分が教授して遣る、ソレも生徒がなければ強いて教授しようとは云わぬ、福澤諭吉は大塾を開いて天下の子弟を教えねばならぬと人に約束したこと

はない、塾の盛衰に氣を揉むような馬鹿はせぬと、腹の底に極端の覺悟を定めて、塾を開た。その時から、何時でもこの塾を潰して仕舞うと始終考へて居るから、少しも怖いものはない。平生は塾務を大切にして一生懸命に勉強もすれば心配もすれども、本当に私の心事の眞面目を申せば、この勉強心配は浮世の戯れ、假りの相ですから、勉めながらも誠に安氣です。近日は又慶應義塾の維持の為めとて、本塾出身の先進輩が頻りに資金を募集して居ます。是れが出来れば斯道の為めに誠に有益な事で、私も大に喜びますが、果して出来るか出来ないか、私は唯静にして見て居ます。又時事新報の事も同様、最初から是非とも永続させねばならぬと誓を立てた訳けでもなし、あるいは倒れることもあるう、その時に後

悔せぬようにと覺悟をして居るから、是れも左までの心配にならぬ。又私の著訳書に他人の序文を求めたことのないのも矢張り同じ趣意であると申すは、人の序文題字などを以て出版書の信用を増すは自から名譽でもあろうが、内実は発売を多くせんとするの計略と云ても宜しい。所が私の考は左様でない。自分の著訳書が世間に流行すれば宜いと固より心の中に願いながらも、又一方から考えて是れが全く売れなくても後悔はしないと、例の極端を覚悟して居るから、實際の役にも立たぬ余計な文字を人に書いて貰たことはない。又他人に交わるの法もこの筆法に従い、私は若い時からドチラかと云えば出しやばる方で、交際の広い癖に、遂ぞ人と喧嘩をしたこともない。親友も甚だ多いが、この交際に就ても

矢張り極端説は忘れない。今日までこの通りに仲好く附合はして居るが、先方の人がいつ何時変心せぬと云う請合は六かしい。若し左様なれば交際は罷めなければならぬ。交際を罷めても此方の身に害を加えぬ限りは相手の人を憎むには及ばぬ、唯近づかぬようにする計りだ。コンな事で朋友が一人なくなり二人なくなり次第に淋しくなつて、自分ひとり孤立するようになつても苦しうない、決して後悔しない、自分の節を屈して好かぬ交際は求めずと、少年の時から今に至るまでチヤンと説は極めてありながら、拵実際には頓とソん必要はない。生来六十余年の間に、知る人の数は何千も何万もあるその中で、誰と喧嘩したことも義絶したこともないのが面白い。都て斯う云う塩梅式で、私の流儀は仕事を

するにも朋友に交わるにも、最初から棄身になつて取て掛り、仮令い失敗しても苦しからずと、浮世の事を軽く視ると同時に一身の独立を重んじ、人間万事、停滞せぬようとに心の養生をして参れば、世を渡るに左までの困難もなく、安氣に今日まで消光して来ました。

身体の養生^{さて}又心の養生法は右の如しとして、身の養生は如何だと申すに、私の身に極めて宜しくない極めて赤面すべき惡癖は、幼少の時から酒を好む一條で、然かも図抜けの大酒、世間には大酒をしても必ずしも酒が旨いとは思わず、飲んでも飲まなくても宜いと云う人があるが、私は左様^{そう}でない。私の口には酒が旨くて多く飲みたいその上に、上等の銘酒を好んで、酒の良否が誠に能^よ

く分る。先年中一樽の価七、八円のとき、上下五十銭も相違すれば、先ず価を聞かずにチヤンとその風味を飲み分けると云うよくな黒人で、その上等の酒をウンと飲んで、肴も良い肴を沢山喰い、満腹飲食した跡で飯もドツサリ給べて残す所なしと云う、誠に意地の穢ない所謂牛飲馬食とも云うべき男である。尚おその上に、この賤しむべき男が酒に酔て醉狂でもすれば自から警めると云うこともあろうが、大酒の癖に酒の上が決して悪くない。酔えば唯大きな声をして饒舌るばかり、遂ぞ人の気になるような忌がるような根性の悪いことを云て喧嘩をしたこともなれば、上戸本性眞面目になつて議論したこともないから、人に邪魔にされない。是れが却て不幸で、本人は宜い気になつて、酒とさえ

云えれば一番先きに罷^さ出で、人の一倍も二倍も三倍も飲んで天下に敵なしなんて得意がつて居たのは、返すくも愧^{はず}かしい事であるが、酒の事を除^{のぞ}てその外になれば、私は少年の時から宜い加減な摂生家と云ても宜しい。何も別段に摂生をしようなんてソンなむずかしい考^{かんがえ}のあろうようもないが、日に三度の食事の外にメツタに物を食わない。或は母^{あるい}が給^たべさせなかつたのか知らぬが、幼少から癖^{いか}になつて間の食物が欲しくない。殊^{こと}に晩食の後、夜になれば如何なる好物があつても口に入れることが出来ない。例えば親類の不幸に通夜するとか、又は近火の騒ぎに夜を更^ふかすとかして、自然に其處^{そこ}に食物が出て来ても食う氣にならぬ。是れは母に仕込まれた習慣が生涯^{のこつ}残^るて居るのでしよう。摂生の為めには最も宜し

い習慣です。又私は随分氣の長い方でない、何事もテキパキ早く遣ると云う風で、時としては人に笑われるような事も多い。所が三度の食事となると丸で別人のように変化して、何としても早く食うことが出来ない。子供の時に早飯と何とやらは武士の嗜なんと云て、人に悪く云われた事もあり、又自分でも早く食いたいと思って居たが、何分にも頬張て生噛にして食うことが出来ない。その後西洋流の書を読んで生噛の宜しくない事を知て、始めて是れは却て自分の悪い癖が宜い事になつたと合点して大きに悦び、爾來憚る所もなくゆるゝ食事をして、凡そ人の一、二倍も時を費します。是れも摂生の為めに甚だ宜しい。

漸く酒を節すソレカラ又酒の話になつて、私が生得酒を好ん

でも、郷里に居るとき少年の身として自由に飲まれるものでもなし、長崎では一年の間、禁酒を守り、大阪に出てから随分自由に飲むことは飲んだが、兎角錢に窮して思うように行かず、年二十歳のとき江戸に来て以来、とかくのうちゅう囊中のうちゅうも少し温かになつて酒を買う位の事は出来るようになつたから、勉強の傍ら飲むことを第一の樂みにして、朋友の家に行けば飲み、知る人が来ればスグに酒を命じて、客に勧めるよりも主人の方が嬉しがつて飲むと云うような訳わけで、朝でも昏こでも晩でも時を嫌わず能くも飲みました。
 夫れから三十二、三歳の頃と思う。獨り大に発明して、斯う飲んでは逆も寿命を全くすることは叶わぬ、左ればとて断然禁酒は、以前に覚えがある、唯一時の事で永続きが出来ぬ、詰り生涯の根

氣でそろく自から節するの外に道なしと決断したのは、支那人が阿片を罷めるようなもので随分苦しいが、先ず第一に朝酒を廃し、暫くして次ぎに昼酒を禁じたが、客のあるときは矢張り客来を名にして飲んで居たのを、漸く我慢して、後にはその客ばかりに進めて自分は一杯も飲まぬことにして、是れ丈けは如何やら斯うやら首尾能く出来て、サア今度は晩酌の一段になつて、その全廃は辯も行われないから、そろく量を減ずることにしようと方針を定め、口では飲みたい、心では許さず、口と心と相反して喧嘩をするように争いながら、次第々々に減量して、稍や穩になるまでには三年も掛りました、と云うのは私が三十七歳のとき酷い熱病に罹りて、万死一生の幸を得たそのとき、友医の説に、是れ

が以前のような大酒では逆も助かる道はないが、幸に今度の全快は近年節酒たまものの賜に相違ないと云いったのを覚えて居るから、私が生涯鯨飲げいいんの全盛は凡そ十年間と思われる。その後酒量は減ずるばかりで増すことはない。初めの間は自から制するようにして居たが、自然に減じて飲みたくも飲めなくなつたのは、道徳上の謹慎と云うよりも年齢老却の所為せいでしよう。兎に角とくにに人間が四十にも五十にもなつて酒量が段々強くなつて、遂には唯ただの清酒は利きが鈍いなんてブランデーだのウヰスキードの飲む者があるが、アレは宣くない。苦しかろうが罷めるが上策だ。私の身に覚えがある。私のような無法な大酒家でも、三十四、五歳のときトウく酒慾を征伐して勝利を得たから、況して今の大酒家と云いっても私より以上

の者は先ず少ない、高の知れた酒客の葉武者だ、そろく遣れば
節酒も禁酒も屹^{きつ}と出来ましよう。

身体運動ソレから私の身体運動は如何だとその話もしましよう。

幼年の時から貧家に生れて身体の運動はイヤでもしなければならぬ。ソレが習慣になつて生涯身体を動かして居ます。少年のとき荒仕事ばかりして、冬になるとあかぎれ^{あかぎれ}が切れて血が出る、スルと木綿糸での切口^{きれくち}を縫て熱油^{にえあぶら}を滴らして手療治^{てりようじ}をして居た事を覚えて居る。江戸に来てから自然ソンナことが無くなつたから、或る時、

鄙事多能年少春

立身自笑却壞身

浴余閑坐肌全淨

曾是綿糸縫 人

と云う詩のようものを記した事がある。又藩中に居て武芸をせねば人でないようふうに風が悪いから、なかむらしそうべえ中村庄兵衛と云う居合の先生に就て少し稽古したから、その後、洋学修業に出ては、国に居るときのように荒い仕事をしないから、始終居合刀を所持して、大阪の藩の倉屋敷に居るとき、又緒方の塾でも、折節はドタバタ遣て居ました。夫れから江戸に来て世間に攘夷論が盛になつてから居合は罷めにして、兼て腕に覚えのある米搗を始めて、折々遺て居た所が、明治三年、大病をわざらうて、病後何分にも旧のようにならぬ。その年か翌年か岩倉大使が欧行に付き、親友の長な

がよせんさい
与専斎も随行を命ぜられ、近々出立とて私方に告別に参り、
キニーネ一オーンスのビンを懷中から出して、「君の大病全快はし
たが、来年その時節に為ると何か故障を生じて薬品の必要がある
に違いない。是れは塩酸キニーネ最上の品で、薬店などにはない。
之を遣るから大事に貯えて置け。僕の留守中に思_{おもいあた}当_{かえつ}ることが
あろうと云うのは實に朋友の親切なれども、私は却て喜ばぬ。
「馬鹿なことを云て呉れるな。病氣全快の僕の身に薬なんぞ要る
ものか。面白くもない。僕は貰わないと云うと、長与_{ながよ}が笑て、
「知らぬ事を云うな。屹_{きつ}と役に立つことがあるから黙て取て置け
と云て、その薬を私に渡して別れた所が、果して然り、長与の外
行留_{くるす}主_そ中、毎度発熱して、夫れキニーネ又キニーネとて、トウノ

\一オансの品を飲み尽したと云うような容体で、何分にも力が回復しない。

病に媚びず横浜の女医ドクトル・シモンズの説に、何でも肌に着くものはフラネルにせよと云うから、シャツも股引(ももひき)もフラネルで揃え、足袋の裏にもフラネルを着けさせて全身を纏(まとい)うて居た所が、頓と効能が見えぬ。ドウかすると風をひいて悪寒(おかん)を催して熱が昇る。毎度の事で、凡そ二年余り三年になつても同様であるから、或日私が大に奮發して、是れは医師の命令に従い、余り病気を大切にして、云わば病に媚るようなものだ。此方(こっち)から媚るから病は段々付揚(つけあが)る。自分の身体には自分の覚えがある。眞実の病中には固(もと)より医命に服することなれども、今日は病後の摂生より外に(ほか)

要はないから、自分で摂生を試みましよう。抑も自分の本は田舎士族で、少年のとき如何なる生活して居たかと云えば、麦飯を喰らう唐茄子の味噌汁を啜り、衣服は手織木綿のツンツルテンを着て、フランセルなんぞ目に見たこともない。この田舎者が開国の風潮に連れ東京に住居して、当世流に摂生も可笑しい。田舎者の身体の方が驚いて仕舞う。即ち今日風を引たり熱が出たりしてグヅくして居るのは摂生法の上等に過る誤であるから、直に前非を改めると申して、その日からフランセルのシャツも股引も脱ぎ棄てゝ仕舞て、唯の木綿の襦袢に取替え、ストーブも余りに焚かぬようにして、洋服は馬に乗る時計り、騎馬の服と定めて、不斷は純粹の日本の着物を着て、寒い風が吹通しても構わず家にも居れば

外にも出る。唯食物ばかりを西洋流に真似て好き品を用い、その
 他は一切むかしの田舎士族に復古して、ソレから運動には例の
 米搗薪割こめつきまきわりに身を入れて、少年時代の貧乏世帯じよたいと同じよう
 して毎日汗を出して働いて居る中に、次第に身体が丈夫になつて、
 風も引かず発熱もせぬようになつて来ました。私の身の丈けは五
 尺七寸三、四分、体量は十八貫目足らず。年の頃十八、九の時か
 ら六十前後まで増減なし、十八貫を出たこともなれば十七貫に
 下くだつたこともない。随分調子の宜しいその身体が、病後は十五貫目
 にまで減じて二、三年悩んだが、この田舎流の摂生法でチャンと
 旧の通りに復して、その後六十五歳の今日に至り今でも十七貫五
 百目より少なくはない。扱さげ私が考えるに右の田舎摂生が果して実

効を奏したのか、又は病の回復期が自然に来た処で偶然にも摂生法を改めたのか、ソレは何とも判断が付かぬ。兎に角に生理上必要な処に少し注意さえすれば、田舎風の生活も悪くないと云うことだけは確かに分る。但し肌に寒風の吹通しが有益であるか、又は外の摂生を以て体力が強くなつて、實際害に為るべき寒風にも能く抵抗して之に堪うるのであるか、即ち寒風その物は薬に非ず、寒風をも犯して無頓着と云うその全般の生活法が有益であるか、凡そこの種の関係は医学の研究すべき問題と思います。ソレは拙置き、私の摂生は明治三年、三十七歳大病の時から一面目を改め、書生時代の乱暴無茶苦茶、殊に十年間鯨飲の惡習を廃して、今日に至るまで前後凡そ四十年になりますが、この四十年の間にも

初期は文事勉強の余暇を偷んで運動摂生したものが、次第に老却するに従い今は摂生を本務にしてその余暇に文を勉めることにしました。

居合、米搗今でも宵は早く寝て朝早く起き、食事前に一里半ばかり芝の三光から麻布古川辺の野外を少年生徒と共に散歩して、午後になれば居合を抜たり米を搗たり、一時間を費して晩の食事も、チャンと規則のようにして、雨が降ても雪が降ても年中一日も欠かしたことはない。去年の晚秋戯れに、

一点寒鐘声遠伝

半輪残月影猶鮮

草鞋竹策侵秋曉

歩自三光渡古川

なんて詩を作りましたが、この運動摂生が何時まで続くことやら、自分で自分の体质の強弱、根気の有無を見て居ます。

行路変化多し回顧すれば六十何年、人生既往を想えば恍として夢の如しとは毎度聞く所であるが、私の夢は至極変化の多い賑かな夢でした。旧小藩の小土族、窮屈な小さい箱の中に詰込まれて、藩政の楊枝を以て重箱の隅をほじくるその楊枝の先きに掛た少年が、ヒヨイと外に飛出して故郷を見捨るのみか、生来教育された漢学流の教おしえをも打遣うちやつて西洋学の門に入り、以前に変かわつた書を読み、以前に変つた人に交わり、自由自在に運動して、二度も三度も外国に往来すれば考かんがえは段々広くなつて、旧藩は扱置さてき日本が挟く見

えるようになつて来たのは、何と賑かな事で大きな変化ではある
 まいか。あるいはその間に艱難辛苦など述立てれば大造のようだ
 が、咽元通れば熱さ忘れると云うその通りで、艱難辛苦も過ぎ
 て仕舞えば何ともない。貧乏は苦しいに違いないが、その貧乏が
 過ぎ去た後で昔の貧苦を思出して何が苦しいか、却て面白いく
 らいだから、私は洋学を修めて、その後ドウやらスうやら人に不
 義理をせず頭を下げぬようにして、衣食さえ出来れば大願成就と
 思て居た処に、又図らずも王政維新、いよいよ日本国を開て本当
 の開国となつたのは難有い。幕府時代に私の著わした西洋事情
 なんぞ、出版の時の考には、天下にコンなものを読む人が有るか
 無いか夫れも分らず、仮令い読んだからとて之を日本の実際に試

みるなんて固もとより思いも寄らぬことで、ひとくちに申せば西洋の小説、夢物語の戯作くらいに自みずから認したためて居たものが、世間に流行して實際の役に立つのみか、新政府の勇氣は西洋事情の類でない、一段も二段も先さきに進んで思切おもいきつた事を断行して、アベコベに著述者を驚かす程のことも折々見えるから、ソコで私も亦以前の大願成就に安やすんじて居られない。コリヤ面白い、この勢いきおいに乗じて更に大に西洋文明の空氣を吹込み、全国の人心を根底から転覆おおいして、絶遠の東洋に一新文明国を開き、東に日本、西に英國と、相あいたい対して後おくれを取らぬようにならないものでもないと、茲ここに第二の誓願を起して、拋身に叶う仕事は三寸の舌、一本の筆より外に何もないから、身体の健康を頼みにして専もっぱら塾務を務め、又筆もてあそを弄

び、種々様々の事を書き散らしたのが西洋事情以後の著訳です。一方には大勢の学生を教育し、又演説などして所思を伝え、又一方には著書翻訳、隨分忙しい事でしたが、是れも所謂万分一を勉める氣でしよう。所で顧みて世の中を見れば堪え難いことも多いようだが、一国全体の大勢は改進々歩の一方で、次第々々に上進して、数年の後その形に顕われたるは、日清戦争など官民一致の勝利、愉快とも難有いとも云いようがない。命あればこそコンな事を見聞するのだ、前に死んだ同志の朋友が不幸だ、アヽ見せて遣りたいと、毎度私は泣きました。実を申せば日清戦争何でもない。唯是れ日本の外交の序開きでこそあれ、ソレほど喜ぶ訳けもないが、その時の情に迫まれば夢中にならずには居ら

れない。凡そコンな訳けで、その原因は何處に在るかと云えば、新日本の文明富強は都度^{ようど}先人遺伝の功德に由來し、吾々共は丁度^{ようど}都合の宜い時代に生れて祖先の賜を唯貰うたようなものに違ひはないが、兎に角に自分の願に掛けて居たその願が、天の恵み、祖先の余徳に由て首尾能く叶うたことなれば、私の為めには第二の大願成就と云わねばならぬ。

人間の慾に際限なし左れば私は自分の既往を顧みれば遺憾なきのみか愉快な事ばかりであるが、扱人間の慾には際限のないもので、不平を云わすればマダ^いく幾らもある。外交又は内国の憲法政治などに就て其れ是れと云う議論は政治家の事として差置き、私の生涯の中に出来て見たいと思う所は、全国男女の気品を次^{でか}

第々々に高尚に導いて眞実文明の名に愧かしくないようにする事と、仏法にても耶蘇^{やそ}教にても孰れにても宜しい、之を引立てゝ多数の民心を和らげるようにする事と、大に金を役じて有形無形、高尚なる学理を研究させるようにする事と、凡そこの三ヶ条です。人は老しても無病なる限りは唯安閑^{ただだ}としては居られず、私も今通りに健全なる間は身に叶う丈け^だの力を尽す積^{つもり}です。

福翁自伝 終

青空文庫情報

底本：「福澤諭吉著作集 第12巻 福翁自伝 福澤全集緒言」慶應義塾大学出版会

2003（平成15）年11月17日初版第1刷発行

底本の親本：「福翁自傳」時事新報社

1899（明治32）年6月15日発行

初出：「時事新報」時事新報社

1898（明治31）年7月1日号～1899（明治32）年2月16日号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、次の箇所では、大振りにつくつてあります。

「長崎遊学中の逸事」の「三ヶ寺」

「兄弟中津に帰る」の「二ヶ年」

「小石川に通う」の「護持院《ごじいん》ケ一原《はら》」

「女尊男卑の風俗に驚」の「安達《あだち》ケ一原《はら》」

「不在中桜田の事変」の「六ヶ年」

「松木、五代、埼玉郡に潜む」の「六ヶ月」

「下ノ関の攘夷」の「英仏蘭米四ヶ国」

「剣術の全盛」の「関ヶ原合戦」

「癡狂病人一条米国より帰来」の「一ヶ条」

※ 「翻」と「讎」、「子供」と「小供」、「煙草」と「烟草」、

「普魯西」と「普魯士」、「華盛頓」と「華聖頓」、「大阪」と

「大坂」、「函館」と「箱館」、「氣※〔#「火十稻のつくり」、
第4水準2-79-87〕」と「氣焰」、「免《まぬか》れ」と「免《ま
ぬ》かれ」、「一寸《ちよい》と」と「一寸《ちよいと》」と
「一寸《ちよつと》」、「積《つも》り」と「積《つもり》」の
混在は、底本通りです。

※底本の編者による語注は省略しました。

※窓見出しへは、自筆草稿にある書き入れに従つて底本編集時に追
加されたもので、文章の途中に挿入されているものもあります。
本テキストでは富田正文校注「福翁自伝」慶應義塾大学出版会、
2003（平成15）年4月1日発行を参考に該当箇所に近い文章の切れ
目に挿入しました。

※底本では正誤訂正を「」に入れてルビのように示しています。
補遺は自筆草稿に従つて「」に入れて示しています。

※誤植を疑つた箇所を、底本の親本の表記にそつて、あらためました。

入力：田中哲郎

校正：りゅうぞう

2017年5月17日作成

2017年7月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつた

のは、ボランティアの皆さんです。

福翁自伝

福翁自伝

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 福澤諭吉

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>